

思いついたことを書いて
てみた

SINSOU

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただ思いついたネタを書いています。

気分で書いていますのでご注意ください。

目次

思いつき	
ある少女への出来事	1
親しき仲にも	10
独善	19
HSDDよ、これが人間界だ！（魔窟日 本）	30
復讐はいけない	42
フアニーゲーム（復讐はいけない）	51
思いつきな話	
吸血姫	62
白獅子	71
赤頭巾さん	88
この世界に加護は無し	101
真つ黒な世界	111
イマジナリーフレンド（没予告）	128
別に相手がリアスじゃなくても良かったよね？	135
部外者たちの愚行	145
墮落者	161
猛犬	
正義の名の下に	168
『猛犬注意』（正義の名の下に）	185

	キャラ原案：『猛犬』	198
妹		
大好きお兄ちゃん		203
大嫌いお姉ちゃん（大好きお兄ちゃん）		218
一誠大好きっ子（邪神）		229
一誠大好きっ子（転生者第一弾）		250
一誠大好きっ子2		265
単発オリ主シリーズ		
私は貴方の剣となろう（転生者第二弾）		292
張りぼてのヒーロー（転生？第三弾）		305
素晴らしき○笑顔（オリ主第二弾）		329
下劣なるリーウイア		340
剣喰い（オリ主第一弾）		345
剣喰い（設定）		362
月の狩人		372
フラウロス		384
フレグ・フラウロス		
ヴァイス・カツエ		
鉄は熱いうちに打てと言うが、水の温		
度で脆くなるのよね		
ハウレンソウは大事って、それよく言		

われるから

392

争いは、(色んな意味で) 似た者同士だ

1 瞬の安らぎ、瞬間の絶望

502 487

から起きる

401

強欲な龍のお供

強欲な龍 (のお供) (オリ主第三弾)

407

強欲な龍 (のお供) 2

420

強欲な龍 (のお供) 3

429

強欲な龍 (のお供) 4

440

強欲な龍 (のお供) 6

451

TRPG 参考

アンシンできない町

458

レアな理不尽の遭遇率

473

思いつき

ある少女への出来事

日常というものは、普段はならばその大切さや有難さを知ることはない。

何故ならば、それが当たり前の世界だからだ。

その世界に生を受け、そしてその世界で死んでいく。

それが当たり前だからだ。

当たり前であることを否定するには、その世界から一度離れなければならぬ。

ある少女も同じだ。

彼女は、とある家庭の長女として生まれた。

彼女には自分を愛してくれる両親と、自分を大切にしてくれる兄がいた。

家族の愛を一身に受け、少女はすくすくと育った。

蝶よ花よと育てられた訳ではないが、少女は家族や周りからの愛を受け、

その姿をより魅力的に変えていった。

彼女自身は、どこにでもいるどこにでも良そうな少女だ。

勉強も運動もそこそこできる、そんな少女だった。

さて、人生には時に大きな転換期を迎えることがある。

それは引つ越しであったり、死別であったりと、人それぞれともいえる。

そして例に洩れず、少女も大きな転換期を迎えた。

彼女は高校生となり、反対する両親なんとか説得し、

地元とは別の高校へと入学することになった。

高校の名は『私立駒王学園』

駒王町になある、名の知れた女子高である。

名の知れている通り、結構なお嬢様高であり、

地元の学校とは比べ物にならない程に、優秀なカリキュラムが組まれている、

とパンフレットを見て思った。

それに、駒王町には先に一人暮らしをさせた兄が住んでおり、

兄と一緒に暮らすという、兄からすれば寝耳に水なことを言ったのだ。

当然、後で兄からはキツイお説教をくらうことになった。

当初、両親は駒王町への入学を反対した。

理由は、娘の一人暮らしに心配なのと、子離れが出来ていなかったから。

そして、娘の学力では厳しいだろう、と思っていたのもあったかもしれない。

もちろん、少女は必死に勉強に励み、入学試験を合格したのだから、

両親からすれば思いも寄らなかつただろう。

やれ、一人暮らしは大変だの、危険だの言つたものの、すべては兄の存在によつて半ば押し切られたので、最後は泣く泣く喜んだ。ちなみに、兄は両親から電話越しでなぜか怒られた。

両親を説得し、これで晴れて高校生生活を送れると少女は喜んだ。

両親と離れることは、自分で決めたものの少し悲しいが、それでも自分の道を進むと決めたのだ。

さよならは言つたはずさ、別れたはずさ。

さて、ここで少女にとつて悲しい出来事がいくつかある。

1つ、お嬢様高であつた『駒王学園』だが、生徒数の減少により、共学制へと変わったこと

1つ、変態トリオという変態男子が入学したこと

1つ、駒王学園並びに駒王町が特殊な場所であつたこと

1つ、少女はただの一般人であつたこと

そういつた悲しい出来事が積み重なれば、悲劇が起こるのは当たり前と言つても良いだろう。

そして決定打になつたのは、

夜遅くにシャーペンの芯を買いに、コンビニへと行ったことだろうか。

何か引き千切られる音と、身体に走る痛みで少女は目を覚ました。

暗く、上から零れ僅かな光を頼りに周りを見渡すと、どうやら倉庫みたいな場所のようだ。

少女は意味が解らなかった。

なにせ、自分と兄が住んでいる家（祖父の家）からコンビニまでに、

こんな大きな倉庫を見たことはない。

それに、こんな処、一度も来たことすらないのだ。

気味が悪くなった少女は、早くここから出ようと立ち上がろうとした。

だが、少女は立てなかった。

詳しく言うならば、少女は立つことが出来なかった。

なにせ、自分にあるはずの両脚の感覚が無かったからだ。

少女は気付く。

自分にあるはずの両脚が、膝を含めてないことを。

まるで、獣に食いちぎられたような跡からは、朱い液体が溢れていることを。

「ええ？」

少女が発した言葉は、まるで夢の中の出来事であるかの様な、そんな呆けた言葉。

「あれ？私の脚、どこ？」

少女は自分にあるはずの脚を探す。

だが、そんなものは少女の周りにはなかった。

そもそもあるはずがないのだ。

なにせ、

「お前が逃げるのが気に入らないから、先に両足を食ってやったよ」

暗がりから現れた怪物の口から、少女の靴が見えていたからだ。

「それ、私の靴。何で貴女の口にあるの？」

少女は怪物に問う。

「言っただろう？お前が逃げるのが気に入らなくて、先に足を食ったんだよ」

怪物は口元を赤く染めて、少女の片方の靴を吐きだした。

「ダメだよ、それ兄さんからのプレゼントなんだから、もう片方も返してよ」

「はっ。」

少女の言葉に怪物はあつげにとられた。

だが、すぐに気が付く。少女の目が既に正気を失っていたことを。

「そうかい、だが心配することはないさ。」

なにせ、そんなことを気にすることも出来なくなるんだからねえ！」

怪物は口を開けて少女を食べようと襲う。

少女は咄嗟に避けようとするが、左の脇腹に激痛が走る。

何か硬い物を砕く音が聞こえ、少女の上から紅い雨が降った。

両脚と脇腹から血を噴き出しながらも、少女は右腕を靴の方へと伸ばす。

這いずりながら、少女は大切な靴を手にし、両腕で抱きしめる。

「そんなに大事なら、もう片方も返してやるよ」

すると、少女の前にもう一方の靴が転がる。

少女は靴を両方を抱きしめ、「良かった」と呟く。

その少女の胴体を槍が貫いた。

ケタケタと笑い声が起こる。怪物が少女を貫いたのだ。

「本当に人間というのは面白いわ！この無様さ！この愚かしさ！本当に笑いが止まらないー！」

そんな笑い声をあげる怪物に、後ろから声がかかった。

「はぐれ悪魔バイサー！あなたを消滅しに来たわ！」

バイサーと呼ばれた怪物は、少女から槍を引き抜くと、

自分の愉しみに水を差した存在へ目を向ける。

そこには、血のように真っ赤な髪を靡かせた少女と、複数の男女が立っていた。

お腹に熱い感触を感じ、靴を抱いたまま転がっていた少女が見たのは、朱い髪の女性と、朱い腕を持った少年、白い髪の小さな子供や、

何故か剣を持った金髪の少年、そしてポニーテールの女性だった。

朱い髪の女性が何か、朱い腕の少年に語っている。

そして、他の人たちが、怪物を襲う。

少しぼうつとしていた少女は、家に帰ろうと、ゆっくりと這いずる。

兄さん、心配してるだろうなあ。帰ったら謝らなきや。

夜遅くに出ることを心配していた兄の姿を思い出し、

少女は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

帰ったら兄さんに謝ろう。それでもだめなら、なんとかご機嫌をとらなきや。

そんな思いで、身体を引き摺りながらも、少女は家へと帰ろうとする。

だが、溢れでた血液と体力の消耗は激しく、少しずつ身体が重くなる。

駄目だよ、私は家に帰るの。帰らなきやダメだの。

ふと、少女の前に影が差す。

見ると、朱い髪の女、いや女の子が自分を見ていた。

霞んでいた少女の目が、偶然か、それとも必然か、朱い髪の女の子の顔を見た。

「これ……手遅……」

可・相だけ・、悪・駒を使……にはいかな・し、せめ・安らか・くことを・うわ」

朱い髪の少女、自分の学校の先輩は、自分に向けて掌を翳す。

すると、手のひらから黒い何かがあふれ出る。

それはただの少女からしても、あまりに禍々しいものだど理解出来た。

薄れ行く意識の中で、少女は現実に戻される。

自分はここで死ぬのだと。

訳の解らない怪物に襲われて、訳の解らない戦いに巻き込まれて、

パパやママ、兄さんに恩返しも出来ずにここで死ぬんだと。

嫌だ

嫌だよ

なんでこうなったの。

「いや……。し……。くくない。た……。す……。てよ……」

「ごめんさい……」

自分の言葉を、先輩は否定した。

少女の中に黒い感情が生まれる。

思いというものは、それがより強く、より洗練され、より輝かしい物であるほど、反転した時の反動は恐ろしいものだ。

それこそ、幸せの絶頂から絶望へと叩き落される時など、憎しみに囚われた復讐鬼を生んでしまうほどなのだから。

どうして私がこんな目にあうの？

どうして助けてくれないの？

どうして私を殺そうとするの？

どうして？

どうして……

「ばば、ママ、にいさん、ごめんね……」

この日、一人の少女が失踪した。

親しき仲にも

親しき仲にも礼儀あり。

これは長年の友人関係などにおいて、耳が痛い言葉である。

気心を解りあつた友人同士だからこそ、礼を忘れてはいけないという意味だ。

関係というものは、些細な擦れ違いや不満の積み重ねによつて、容易く崩れてしまうものだ。

それこそ、納豆が決め手となり、離婚に至るのだから。

さて、私立駒王学園の生徒会室にて、現生徒会長である蒼那支取は頭を抱えていた。

内容に関しては、別に学園に関わる重大な件でもなければ、

それこそ、生徒会長である自分に及ぶようなものでもない。

ただ、『駒王町全体に関わる問題』であり、生徒会長の蒼那支取ではなく、

悪魔のソーナ・シトリーとして、胃に穴が開くような『超』重大内容であつただけである。

内容としてはこうだ。

長年の友人であるリアス・グレモリーが、自身の問題である婚約話を解消するため、

ライザー・フェニックスとレーティング・ゲームをするようになった。ただ、試合は10日後となり、

初のレーティング・ゲームということや、相手が無敗のライザーであるので、自分たちは特訓のために10日間山籠もりの修行をする。

なので、その間の駒王町の管理はよろしくね！byリアス
という内容である。

彼女らが住んでいる駒王町は、前任者のクレーリア・ベリアル死後、リアス・グレモリーが引き継いだ、悪魔が管理する土地である。

勘違いしてほしくないのは、悪魔が管理すると言っても、支配でないことだ。映画やアニメにライトノベルのような、人間を奴隷扱いしてはいない。

もちろん、一方的に搾取している訳でもない。

あくまで、人間と悪魔の共存関係を目指している場所である。そして、駒王学園もグレモリーが管理する学校である。

学園のトップは悪魔関係者で占められ、ぶっちゃけ悪魔が管理する学校だ。まあ、そんなことは一般人の生徒は知らないのだが。

閑話休題

さて、そんな悪魔が管理する駒王町であるが、

先述したとおり、管理者はリアス・グレモリーである。

ソーナにとって、彼女は長年の親友だ。

赤い髪を靡かせ、自分にはない大きな胸部装甲を携え、

母方のバアル家の滅びの魔力を宿すなど、なんといか凄いのだ。

もちろん、ソーナ自身もリアスに負けない才能と力を持っているのだが。

そんなことはどうでもいい、重要なことではない。

ソーナが頭を抱えているのは、

そんな友人のリアスが自分になんら相談なく、

唐突に『超』重要案件を放り投げてきたことだ。

それも、ちよつと手が離せなくなるからよろしくね！な感じでだ。

ソーナは思った、「ふざけないでください」と。

いくら友人のリアスとは言え、流石に思うところはあるのだ。

もちろん、友人であるリアスの頼みなら、できうる限り助きたい。

だが、限度があるというものだ。

「無いです。正直これはないです」

リアスにとって、自身の婚約解消は重要なことだというのは、ソーナも理解できる。

ソーナ自身、婚約相手をチェスで打ち負かし、破談にさせているからだ。

だがそれは、ソーナ自身で決着をつけたことだ。

もちろん、婚約話の破棄で、家族や相手方に迷惑をかけて事は理解している。でも、嫌だったんだからしょうがない。

だが、リアスの行動はなんだ。

仮にも駒王町の統治者であるのに、私情で領地を開けつぱなしにするとは何事か。

ましてや、それを駒王学園で仕事に追われている私に投げるとは何事か。

もちろん、私を頼ってくれるのは嬉しいことだ。

だが、物事には順序というものがある。

例外を作ってしまうば、そこから綻びが出てしまうのだ。

だから、上は下にとって手本でなければならぬというのに。

「どうしますか、会長」

副会長である椿姫が、心配そうに声をかけてくる。

「これが大丈夫に見えますか？」

「いえ」

私の返答に、椿姫は直ぐに首を振るう。

匙や他の生徒会のメンバーを見れば、全員の顔が引きつっている。

「会長、せめて人前ではその顔は止めた方が良いです。」

正直、見ていられません」

「解りました。ありがとうございます、椿姫」

顔を隠す様に、ソーナは書面に目を落とす。

そして書面の内容に震えだす、怒りで。

「さて、急な案件が来ましたが、私たちに拒否権はありません。

これから10日間、みんなには無理を強いるでしょう。

ですが、私たちの頑張りが、町の人々を護ることに繋がります。

ですのでみんなさん、この10日間を生き残りましょう」

ソーナの叫びに、匙が大きな声で返答し、続くように他の子たちも声を上げる。

その姿に、ソーナは「ありがとうございます」と感謝せずにはいらなかった。

ところで、基本的に悪魔は何をしているかという点、使えそうな下僕を増やすことであり、

リアスのような領主の活動は、主に領地の管理である。

まず、新たな悪魔を増やすということだが、

今の悪魔は、戦争によつて数が激減し、子供の出生率が低い故に数が減少傾向にある。

そのため、数を増やすことは、自分たちを生き長らえさせるための命の綱となっている。

だが、だからと言ってやたらめったら増やしても良い訳ではない。重要なのは、力を持った悪魔を増やすことである。

天使や墮天使に対抗できる資質を持つものが好ましいと言える。どこも、弱い存在などいらないというのだから世知辛いものだ。

そして、悪魔を増やすための足掛かりとして、契約が行われている。

悪魔召喚の魔法陣が書かれたチラシを配布し契約を結ぶ、ということだ。

召喚された先々で願いを叶え、代償として代価を貰う。

まあ、命を賭してまで行うような者はいないので、大抵はお金やら物が代価となるのだ。

こうした積み重ねによって、徐々に契約者を増やしていくのだ。

そして領地の管理であるが、これはそのままの意味だ。

領地は基本、領主によって管理されている。

故に、領地で起こった問題等は領主の責任であり、その対応をしなければならない。

まあ、主に領民に害をなす存在の討伐や、地域安全のパトロールと言ったものだ。

こうした活動も立派な領主の役割である。

さて、ざっくりと説明出来たわけだが、こうした活動は夜に行われる。

なぜかって？夜は悪魔の時間だからだ。

こうした活動は、基本的にオカルト研究部として活動しているリアスたちがメインであり、

生徒会として活動しているソーナたちには、こうした活動はあまり関わることはなかった。

そしてこの10日間はリアスたちがいないので、

こうした活動は全てソーナ達にぶん投げられました。

そしてソーナ達にも生徒会という仕事があり、忙しいと言えます。

さてここで問題です。

今まで役割分担でなんとか動いて活動が、一時的だが一方に集中することになりました。

上手くやっていけるでしょうか？

「みんな、大丈夫ですか・・・?」

「まだ・・・何とかいけます」「私も、まだ大丈夫です」
心配するソーナとそれに答える眷属たち。

だが、双方ともに目の下に薄らと隈が出来始めている。

さて、リアスたちが山籠もりをしてから数日が過ぎたわけだが、

生徒会室のソーナ達は半ば疲れ果てていると言える。

なにせ、仕事量が一気に増えたのだからだ。

変態トリオの一角である兵藤一誠がいはいえ、

残りの2人が相変わらず問題行動を起こすせいで、生徒会はいつものように対応に追われる。

そして、行事の取り決め、部活動の書類管理など、生徒会の仕事は変わらない。

そこにリアスの仕事が増えられたのだ。

忙しくなるのは当たり前である。

もちろん、召喚されればお仕事としていくわけだが、これがまた大変と言える。

イケメンの木場を目当ての女性陣や、アジアや小猫を望んでいた客層から小言が来るのだ。

もちろん、仕事はしっかりと行うものの、やはり不満は言われる。

その小言によるストレスが、少しずつだが積み重なるのだ。

悪魔だって、メンタルが強いわけではない。

そして、毎回行う領地内のパトロールにしたって、交代とはいえ常に緊張の中で行うのだ。

不審者や怪しい存在を見逃せば、そのせいで民間人に被害が出るかもしれないのだか

ら。

ちなみにパトロールでない方は、契約のお仕事に向かうので、双方とも忙しい。結果として、この数日間、ソーナ達は休みをあまりとれていないのだ。

一応、数時間の睡眠をとるものの、無茶をしていることに変わりはない。

というわけで、始めてから数日間で、既にソーナ達は死屍累々となっていた。

だが現実是非常であり、リアスたちが帰ってくるまでまだ日数がある。

リアスたちがまだ帰ってこない以上、自分たちがやらなければならない。

ソーナは、後でリアスに文句を言ってもいいのではないかと、

生徒会室のカレンダーを見ながら、親友に対して恨み言を考えるようになっていた。

独善

この世界には多くの物語が溢れている。

それこそ、掃いて捨てるほどに溢れかえっている。

それこそ、名作から迷作、佳作から駄作、果てに傑作と枚挙だ。

さて、その物語に必要なのは何か？

キャラクター、ストーリー、世界観、少なくともこの3つは必要だ。

この3つがあつてこそ、物語が生まれる。

さて、仮に、もしもの話ではあるが、

仮にもしも、自分が物語の世界に行けるとしたらどうするだろうか？

物語に触れた者なら、一度は考えてしまっだろう、この妄想。

主人公たちと一緒に旅をしたい！主人公と一緒に馬鹿騒ぎがしたい！

色々と思うのではないだろうか？

そして、こう思うのもいるのではなからうか。

主人公に成り代わりたい・・・と。

主人公に成り代わって、特別な力を得て、襲い掛かる敵を討ち倒し、ヒロインたちにモテたいと。

それこそ、物語だ。

どんなことが起こるのか、どんな敵が出てくるか、倒し方は、どうすれば好意を抱かれるか、

それこそ物語を知っていれば容易だろう。

しよせんは物語、登場人物は役割を与えられた人形でしかない。

決められた行動（筋書き）しか出来ない存在だ。

むしろ、物語を知っている自分ならばもつと上手く立ち回れる、と思うかもしれない。仮にそんな存在が物語の主人公になった場合、

第三者に役割を奪われた主人公は、一体どうなるのだろうか？

異物（筋書きにはない存在）によって弾き出された（役割がなくなった）存在は、異物（筋書きにはない存在）へと立場を変えるかもしれない。

本来ならば決まっていた物語だが、

そこに一節、一文、いや一文字でも付け加わった場合、それは大きな違和感となるかもしれない。

さて、主人公ではなくなった主人公がいる物語（原作）は、そもそもまともになるだろうか？

『そんな訳ないわよねええええ!』

少女が叫ぶ。

少女は真っ白なワンピースを纏い、黄金の輝きを持った髪を揺らして。その背中には白い大きな翼が生えている。

『はぁーい！皆さんこんにちわ！おはよう！あれ？こんばんは！かしら？』

ごめんなさい、私、時間には少々疎くて・・・』

何もいない空間に向けて少女は喋り出す。

『ねえねえみんな！ちよつと聞いてよ！私ってばすっごい怒ってるの!』

そう言うと、少女は足元に埋まっている本を漁り出した。

しばらくすると、少女は本の床から、一冊の本を取り出した。

『ほら、これを見てよ！』

少女は手に持った本を、何も無い空間へと開いた。

その本には多くの物語が書かれていた。

- ・ 龍の力を持った少年が、大好きな人のために頑張る物語
 - ・ ただ自身の力を示すために、ひたすらに剣を極めんとする少年の物語
 - ・ 何もなかった少年が、巨大な兵器に乗り込み、少女たちのために戦う物語
 - ・ 国のために、そして愛する人のために、魔王を打ち倒そうとする勇者の物語
- 様々な物語が書かれていた。

『えへへ、実はこれ、私の大好きな本なの！』

良いわよね！カッコいい勇者様やヒーローたちの頑張る姿、

主人公とヒロインたちのドタバタなラブコメディ、

カッコいい主人公やヒロイン、私、彼らが織りなす物語が大好きなの！』

だが、笑っていた少女の顔が曇る。

『でもでもお、最近、本を読んでも楽しくないのお……。え？どうしてかって？』

少女は持っていた本を、笑顔で引き千切った。

破かれた本の頁たちが、まるで紙ふぶきのように舞う。

『だあってこれ、みーんな奪われちゃったんだもの！』

少女は地団駄を踏む。

『私の大好きな主人公が！ヒーローが！みーんな別人になっちゃった！』

信じられないわ！私の好きな主人公は、こんなことをするはずがないわ！』

しばらく声を荒げていた少女は、空間に向かって口を尖らせる。

『あ、それってどういう意味って顔してる！良いわ！私があなたたちに教えてあげる！』

どこから出したのか、突然現れた黒板に、少女はチョークで書きだす。

・ 恋人と一生を誓った主人公が、いつの間にかハーレムを築いてた

・ 女の子が好きなスケベだからって、他人の恋人さえも奪いだす

・ 物語にあるはずのない能力に目覚め、物語で大暴れをします

などなど、黒板がいつの間にかホワイトボードへと変わるほどに、少女は書き込んだ。

『ね？信じられないでしょ？でもこれが今の現実なの！』

がたんと音を立て、黒板が裏返る。

『私の好きな物語と主人公たちが、物語に書かれていないこと勝手にやりだしたの！』

さつき書いた黒板の内容なんて、実際に比べれば些末なこと、氷山の一角、まさに泡

沫！

酷いよ！どうして!?!なんで私の好きな物語を壊しちゃうのよ!』

崩れ落ちる少女は、手で顔を覆う。

『私、調べたんだよ？どうして物語がおかしくなっているのかって。

本当に大変だったんだよ？

何冊も何冊も見比べても、いつの間にか別の内容に変わっちゃうんだから。

寝る間も惜しんで頑張ったんだよ？えーっと時間すれば、あれ？一瞬だった』
しくしくと泣く少女。

だが、その口角は三日月のように上がっている。

『でも、私の努力が実ったの！私は頑張った！ついにその原因を見つけたわ！』

まるで少女の頑張りを祝福するかのよう、

パーティークラッカーがなり、上からは色とりどりの紙ふぶきが落ちる。

その中心で、えへん！と胸を張る少女。

『そう！それは転生者！転生者が原因だったの！』

少女は同じように、何も無い空間を見つめ、耳を傾ける。

『え？転生者ってなんなのかって？！しようがないなあ、私が教えてあげるね！』

そういうと、今度はどこから出てきたのか、映写機をとりだしてスクリーンに映像を映す。

『まず転生っていうのはね、一度死んだのに新たな肉体を得る事なの。

詳しい説明は省くけど、根幹はこれ』

映し出された内容に、少女はレーザーポインターでを当てる。

『そして転生者って言うのは、文字通り一度死んだけど新たな肉体を得た者って事ね』
今度は、頭に輪っかが付いた人から、別の人へと矢印が描かれている映像が出る。

『私は別に、転生自体を否定する気はないの。こう見えても私、信心深いもの』
両手を結び、祈る仕草をする少女。

『でもさー、最近の転生事情ってのが酷いって話なの。』

なんでも、神様がうっかりミスで大量虐殺してるんだって！

もう神様ったら、全能じゃないけど万能なのにさ。本当に何してるのよ』
プンプン！と声を出す。

『それでね、その対応に困った神様たちが殺してしまった人たちにこういうの、
他の世界に転生する気はないかい？ってね。』

単に自分のミスを隠すためとか、こいつを転生させたら面白そうだとか、
果てにはどれくらい生き残れるかって、

神様同士で娯楽の賭け事にしちゃう程度のものなんだけどねー』

DEAD OR ALIVEと書かれた板に、大量のチップを乗せる少女。

『転生にしても、現世じゃなくて幻想に放り込んじゃうし。でもそれを望む転生者もいるのよ？』

それでファンタジーやフィクションに転生させちゃうの。

しかもチヨ一強い力なんか与えちゃって!』

少女は腰に手をて、顔を膨らませる。

『でも転生者も転生者なのよねえ。』

やれ、あんなことやこんなことが出来る力が欲しいとか。

拳句の果てが、物語の主人公の座を奪いたい!なんてのもあるの!』

少女はいつの間にか置かれたのか、椅子に座って足をジタバタさせる。

『もう信じらんない!しかも主人公を奪った拳句、』

ひたすらに「元」主人公を虐めちゃうなんてサイテー!

しかも、ヒロインなんかみーんなそいつに一目惚れ!終いには一緒になって虐めちゃう。

そんなことをしたところで、誰も彼もがそいつを好評して高評価。

そりやそうだもんね、なんてったって「主人公」だもの!』

ジタバタするのをやめ、少女は項垂れる。

『でも私は思うの、その作品はお前の物じゃないって。』

その作品はその主人公だからこそ、私は好きになっただって・・・』

少女は椅子にもたれかけながら、小さな声で語る。

『私だって転生を否定する気はないわよ。』

新たな世界で頑張るって、それって主人公じゃないけど主人公だもの！
そういうのだったら、私はなんにも気にしない。むしろ応援しちゃう！』

少女は『ガンバレー！』と書かれた旗を振る。

『逆に自分と言う存在じゃなくて、他人、しかも主人公に成り代わるってなに？』

物語の1キヤラクターとして頑張るならまだしもさ。

すでに筋書きがハッピーエンドで決まっている主人公になるって、それってずるくない？！』

そう、それはまるで、敷かれたレールの上をただ走るだけの列車だ。

決まった選択肢を選んで進むだけのADVだ。

そんなのを生きていると、少女は思わない。

『だから私は考えました！』

少女は椅子から飛び上がった。

『そんなことをする人たちにはあ、私からのプレゼントをあげようって！』

きやはははは！私ってばチョー天才！

そんなに主人公になりたければ、私がもつと盛り上げてあげようって！』

少女は語る。

『みんなもそうでしょ？好きな物語で、赤の他人に好き勝手なんてされたら、もっと盛り上げてあげようって思わない？』

散々愉しんだからさあ、簡単なハッピーエンドが許されるわけないわよねえ？
それこそ、もっと波乱万丈にしたいって思わない？』

何もない空間に少女は尋ねた。

『だよね！皆もそうだよね！やった！私とみんなの心が一つになったわ！』

ぴよんぴよんと飛び跳ねる少女。

『じゃあみんな、出えておおいでえー！』

ぱちんと指を鳴らせば、ポーン！な音や煙と共に幾人もの人影が現れる。

色々な姿の人影が見えるが、はつきりとは映らない。

『彼らは転生者のために、私が用意したキャラクター。』

その考え方は人それぞれだけど、誰もが転生者によつて大切な何かを失った者達。

え？転生者と戦ったら弱いんじゃないのかって？それは問題ナツシング！

だって私が力を貸してあげたんだから！』

少女は背中の翼を広げ、彼女の白い羽根が舞う。

『それでは皆様ご覧あれ。筋書き通りと侮った者達の姿を。』

きやはは！筋書きのない現実に慌てふためく、「自称主人公」たちの姿をお楽しみに

！
』

黄金色の髪を持った、白いワンピースの少女は嗤った。

HSDDよ、これが人間界だ！（魔窟日本）

「ねえ、イツセーくん。私のお願いを聞いてもらってもいいかな？」

夕麻ちゃんの言葉に、俺は胸の鼓動が激しく打った。

ま、ままままさか!?これはえつと・・・そうアレだ！アレだよ！

やばい！心臓の鼓動が激しくなってきた。身体から汗が噴き出してきた。

俺は自分の姿を誤魔化す様に、至って冷静に答えた。

「な、何かな、夕麻ちゃん、お、お願いって・・・？」

冷静じゃない!?しかもよりもよって、最後の言葉が上ずったじゃねえか！

恥ずかしさで顔を真っ赤にする俺だが、夕麻ちゃんは微笑んでくれている。

そして微笑んだ顔でこう言った。

「ねえ、死んでくれる？」

「・・・え？」

俺は夕麻ちゃんの言葉に耳を疑った。

だって、それは俺が想像していた言葉じゃなかったからだ。むしろ、その真逆。

「ごめん夕麻ちゃん、もう一回言ってくれないかな？」

俺の耳、急に変になってた」

俺は夕麻ちゃんに一度聞き返した。

だって、それは冗談にしてもあまりにも笑えなかったから。

「死んでくれないかな？」

でも、俺の想いを裏切るかのように夕麻ちゃんは言った、笑顔で。

そして、夕那ちゃんの姿が変わった。

背中から羽が生えたんだ。まるで魔法か手品ののように、急にバサリと音を立てて。

そして空に浮かぶ夕麻ちゃんの姿に、俺は呆けていた。

あまりにも突拍子もない出来事だから。

そして、かわいらしい笑顔だった夕那ちゃんは、俺を冷めた目で見下していた。

「楽しかったわよ、あなたとの恋人ごっこ。子供のママゴトとしては及第点かしらね」

冷めた目で、冷たい言葉で、俺にそう言った。

ブウオンよ音がした。すると夕麻ちゃんの手が、光る槍を握っていた。

え？槍？なんで？なんで槍が出てきたんだ？

そして、夕麻ちゃんは持っていた槍を振り挙げそのまま・・・

「そこまでにしとけ」

突然、公園内に声が響いた。俺は声のする方へ振り向いた。

そこにいたのは、後光に照らされた誰かだった。

後光のせいで顔が見えないが、声からして男の人だろう。

「なによ、お前」

「唯の通りすがりだ」

「そう、ただの通りすがりね。でも残念ね、私の邪魔をした奴は死ぬことになってるの」

そう言つて、夕麻ちゃんは持つていた槍を男の方へと投げた。

それはまるで風のような速さで、男の方へと飛ぶ。

一誠は、その場を動けず、その光景を見ているしかなかった。

槍が突き刺さる瞬間、男は手から何かを取り出す。

そして声が聞こえた。

「変身」

「行くよブランシユ！」

「任せてノワール！」

フリルの付いたドレスを纏った少女たちが、化け物へ走って行く

「二人とも、私が援護します！」

何やら猫耳を着けた少女が、手元からカードを取り出し、太陽を象った杖を掲げた。すると、カードが光り輝き、屋内だというのに風が吹き荒れた。

「な、何だこの風は!？」

怪物は、突然吹き荒れた風に動揺した。

しかもその風は、まるで怪物を縛り付けるかのように、怪物の手足を押さえる。

「ありがとうセリシエール！」

黒いドレスを纏った少女は、猫耳少女にお礼を言いながら、怪物の顔を殴りつけた。

まるでトラックがぶつかっただかのように、怪物が吹っ飛ぶ。

怪物が吹っ飛ぶ方向には、白いドレスを着た少女が待ち構えていた。

「ナイスよノワール！」

そう言つて、白い少女は飛んできた怪物を蹴り上げる。

怪物はそのまま廃墟の天井を突き破り、空へと舞いあがる。

そしてそこには、装甲を纏った人らしき姿があつた。

装甲に覆われた姿からは男性か女性かは判らず、ただ人の姿だから人であると思える

ただだ。

そして装甲の人は、右手を掲げる。

すると、全身と同じように装甲に覆われた右手が、鈍い音を立てて動き出す。

まるで歯車が軋み合うような音を立てて装甲が展開し、巨大な光の渦を纏う。

そして、

「いつけええええええええー！」

ちょうど飛んできた怪物に、光り輝く右腕を叩き込んだ。

まるで雷が落ちたかのような光と音を立て、怪物は一直線に、元いた地面に叩き付けられた。

巨大なクレーターの中心には、白目をむいてピクピクとけいれんする怪物。

あれだけのことなのに、怪物は死んでいなかった。

「ちよつとやり過ぎよ！私たちまで吹っ飛ばす気ー？」

「ご、ごめんなさいいいい……」

空から降りてきた装甲の人は、黒いドレスの少女に謝る。

見た目は装甲に覆われているせいで高圧な印象なので、

ぺこぺこと頭を下げるその姿は酷く違和感がある。

「まあまあノワール。彼女も悪気があったわけじゃないんだから」

白いドレスの少女が、黒いドレスの少女をなんとか宥める。

「そうですよ。それに、この人も大丈夫そうですし」

杖を持った猫耳少女が、クレーターで痙攣している怪物を見る。

なお、その顔は若干引き攣っているが。

「お小言は後にするとして、セリシエール、見える？」

「はい。この人の中にとても邪悪な何かが見えます。この人も多分……」

そう言うのと、猫耳少女は杖を掲げ、カードをかざす。

すると、怪物の中から何かが出てきた。それは黒い色をしたチエスの駒だ。

その駒からは黒い靄が溢れていて、いかにも禍々しい印象を与えた。

「やっぱりこれか。まったく、いい加減にしてほしいわね」

ノワールと呼ばれていた、黒いドレスの少女は、その駒を見て頭を掻いた。

「ミヨルニル、お願い」

「はいー」

ミヨルニルと呼ばれた装甲の人は、その駒を握りしめそして、砕いた。

その瞬間、怪物から真っ黒な煙が溢れ空に舞い上がっていく。

そして怪物のいたところには、一人の女性が横たわっていた。

ブランシユと呼ばれていた白い少女が、その女性を確認する。

「間違いないわ。この人、1年前から行方不明になっていた人ね。

取りあえず保護しないと」

倒れている女性を抱きかかえるブランシユ。

「それじゃ皆さん、一端本部に戻りますね」

セリシエールがカードを掲げると、空間に人が入れるほどの穴が開く。

その穴の先は、廃墟とは全く異なる空間だった。

なにせ、ソファやテーブルやら、それこそ灯りが燈っていたからだ。

「いつもありがとね、セリシエール。」

今度私も、魔法が使えるか試してみようかなあ」

「それは、流石に聞いてみないと・・・」

「はいはい、ここで喋らないの二人とも！早くしないと誰かが来ちゃうわ」

「やっぱりブランシユさんは纏め上手ですね。私、ブランシユさんに憧れます！」

四人はそんなことを喋りながら穴を通り、全員が通り過ぎると、穴は消えた。

まるで始めから無かったかのように。

そこには、屋根に穴が開き、地面に大きなクレーターがあるだけだった。

「ソーナ」

「なんですかりアス」

眼鏡をかけた少女ソーナ・シトリーは、赤い髪の少女リアス・グレモリーに顔を向けた。

二人がいるのは、駒王学園の旧校舎にあるオカルト研究部の部室だ。

二人は、互いにテーブルを挟んで顔を突き合わせている。

「私、疲れているのかしらね。だって、人がビルに飛ぶんだもの、跳躍で」
「奇遇ですねリアス。私も疲れているようです。」

ええ、人が素手で地面に穴を開けるなんて、そんなはずがないんです」

そう話す二人の目は死んでいた。

少なくとも、彼女たちが人間界に来るまでは、その目には輝きがあった。

素性を言えば、彼女たちは人間ではない、悪魔だ。

二人はさる貴族の娘であり、社会経験ということ、秘密裏に人間界にやって来たのだ。

駒王学園は、実は彼女たち悪魔が運営しており、駒王町も彼女たちの領土である、建前は。

栄えある人間界へとやって来た二人は、憧れの人間界について学ぶことを夢見てい

た。

もちろん、事前に人間界については勉強をした。

礼儀作法も取りあえずはバッチリで、常識についても一応、修得済み。

そして、いざ人間界の日本にやって来た二人は、現実に打ちのめされたのだった。

なにせ日本では、ベルトを付けた人たちが、

パンチやキック、時に剣などで危険な墮天使やはぐれ悪魔、同じような魔物を打ち倒す。

フリルのドレスやレオタードを着た少女たちが、

時に月の力や妖精の力を借りて、時に謳いながらはぐれ悪魔を浄化して人間に戻す。

子供たちは、時にカードを掲げて魔法を使い、時に魔物を召喚し、

時に杖から魔力を放出させるなど、あまりにも異常だったからだ。

その上あまりにも強すぎるせいで、自分達のがプライドも木端微塵に砕けたのだ。

少女たちが4人の力を合わせた瞬間、巨大な女性が出た時などは理解が追いつかなかった。

ましてや、その巨大な女性がメリケンサックで敵を殴り潰すと、誰が想像出来ようか。

今では、ただの人間が巨大な剣を素手で打ち破ったり、水上を走る姿などはいつものこと。

彼らが言うにはOTONAだから出来るらしい。OTONAとは一体……。頑張って自分たちの領土を守ろうと、領主の務めを果たそうとしていたリアスは、人間界にやってきて1年で、その輝かしい目から光が消えた。

なにせ自分の領土内で、そこらじゅうで大事件が起きているのだから。

その結果、立场上領主である彼女は、兄である魔王への報告書に忙殺されていた。

もちろん魔王だけではなく、その他方面への報告書も含めて、

その量は紙の山と言っても差し支えないほどだ。

ソーナはリアスほどではなかったが、毎回起こる事件に、少しずつ心を削られていった。

それも、下手すればこの町が簡単に消し飛んでしまうような事件も含めてだ。

その度に、自分たちが出る間もなく、誰かが現れては簡単に解決されてしまう。

そしてその中には、正体を隠す者もいれば、隠さずに戦っている人もいる。

自分の学園の生徒がこっそり変身する姿を見た時など、ソーナは頭を抱えた。

それも一人だけではなかったのだから、もはや考えることを止めた。

自分たちとは言えば、悪魔であることを隠すために、黙っていることしか出来ない。

はつきり言って、今の自分たちは一体何なんだろうか？

そもそもここは、本当に自分たちの知る人間界なのだろうか？

何処か別の世界に行ってしまったのではないだろうか？

「ねえソーナ、ここは人間界よね？ 私たちがいるのは人間界よね？ 本当に人間界よね？」
「何を言っているのですかりアス。 ええ間違いありませんよ、リアス。」

「ここは人間界の日本で、駒王町ですよ？ ええ、人間界のはずですよ？」

互いに死んだ目で、現実を確認し合う二人。そして紅茶で喉を潤し、互いに笑う。

外では、校庭で暴れているサッカーゴールの怪物と少女たちが戦っている。

「行くにやメロディホワイト！」

「はい！ リリックブラック！」

空では墮天使と、同じく黒い翼を生やした少女が飛び交っている。

「おのれ、裏切り者の墮天使の娘！ なぜ人間の味方をする！」

「私は墮天使であり、人間です！ 私は、大切な人を守る為に戦います！」

「くらいなさい！ ホーリーライトニング！」

そして商店街では、剣を携えた騎士たちが戦っている。

「てめえはこのセルゼン様が相手をしてやるぜえ！ 俺を喰らえ、ホーリーナイトオオオオ！」

「もう、僕のような存在を生み出す訳には行かない！ 変身！ ダークナイトファング！」

「負けないでイザイヤー！」

遙か遠い国では、夜の国を統べる王がいた。そしてその傍らに、必ず従者がいたとも。

「着いてこい、半端者。私が直々に、お前に本当の吸血鬼と言うものを見せてやる」

「ひいひいひいひい!?! やめてください、僕をひっぱらないでくださいあああああい！」

そして、

「俺はモテるために戦う！ 戦えばモテる！ 絶対にな！」

行くぞドライブ！ 煩惱解放！ チチリユーテー！」

『ゴハア!?!』

赤い鎧をまとった少年は、モテるために戦い続けるのであった。

行け、少年！ 大切な人を守るのだ！ モテるために！ 赤き龍を吐血させながら！

復讐はいけない

復讐はいけない

それが、彼らが私に向けて言った言葉だ。

復讐なんて駄目だ！

復讐は復讐を生み続けるだけだ！それって悲しいことだろ!?

茶髪の少年が私に言い放った。

少年の顔はとても悲しい顔をしていた。

まるで、私の悲しみを理解しているというかのように、

その顔には悲しみと憐れみが見て取れた。

俺はお前のことを思っているんだという、正義感に染まっている顔だ。

そうだよ、復讐はいけないんだ。

金髪の少年も、茶髪の少年に続いた。

復讐に囚われるのは、とても悲しいことなんだ。

君が復讐に囚われることを、君の大切な人たちは決して望んでなんかいないんだ。

君の気持ちは痛いほどに解るんだ。

でも、復讐なんかしても、大切な人たちは帰って来ないんだ。

だから君は、大切な人たちのためにも、復讐をやめて生きるべきなんだ。

その顔は、私に向けて同情や憐れみを見せてくれた。

まるで、自分の言葉で私を説得できると思っているかのように。

そうです、復讐はいけないんです！

金髪の少女が私に説法した。

復讐は、決して貴女の救いにはなりません！ただ、悲しみを生み続けるだけです！

誰も救われないんです！そんなの哀しいじゃないですか！

少女の目からは、溢れんばかりの涙が流れている。

少女は声をからして、私に復讐はいけないと訴え続ける。

自分の言葉が、私を救えると信じきっている顔だ。

そうだ、復讐はいけないんだ。

髪の一部が青い少女が私に言う。

殺し続けていけば、いずれお前も、復讐した相手の家族に復讐されて死ぬだけだ。

それはお前のためにならないし、それにアジアも言っているだろう？

そんなのは哀しすぎるだろうと。

だから、復讐は止めるんだ。

その顔は真剣で、私のことを思つての言葉と信じきつてゐる。

黒髪をちよんまげのような髪型にした少女が、

白髪の少女2人が、

髪を二つに止めた金髪の少女が、

銀髪の長身の女性が、

各々の言葉で私に告げる。

『復讐はいけない』と。

だから私はこう答えた。

『そうですね、復讐はいけませんね』

そして私は、復讐はいけないことを彼らに教えることにした。

まず始めに、私は彼らの住んでいる家族を、文字通りの意味で殺した。

どうやら茶髪少年の両親だったらしく、私にとっては好都合だった。

私は彼らに『復讐はいけない』ことを教えようと必死に頑張った。

死者を冒瀆することは許されないので、じっくりとゆっくりと、丁寧に弄った。

それこそ、徹底的に弄り尽くした。頑張った私を、私は褒めてあげたいくらいだ。

弄りつくした後、私は二人の傍に『復讐はいけません』という事付けを置いた。

きっと彼らなら解ってくれるでしょう。

次に、彼らの友人らしい少年二人と一人の少女も、同じように殺した。そして同じように、徹底的に弄くった上で、文字通りの意味で殺した。今度はちちゃんと、彼らに分かりやすいように、矢印もつけておいた。

これなら、迷子にならずに彼らを見つけてくれる。

私は、心遣いも出来る私を褒めてあげたいくらいだ。

彼らの傍の地面に、同じように『復讐はいけません』という文字を、赤い文字ではっきりと大きく書いておいた。

きっと彼らなら解ってくれるでしょう。

次に、彼らの通っている学び舎に赴いた。

もちろん、同じことをするためだ。

その際、生徒会と名乗る少年少女たちが現れた。

お話をすると、なんと彼らの知り合いというではありませんか。

なので、同じように彼らも徹底的に弄って、文字通りの意味で殺した。

ただ、これだけでは物足りなかつたので、学び舎にいた人々も含めて同じことをした。学び舎の白い壁に、赤い文字で『復讐はいけません』と書いておいた。

きっと彼らなら解ってくれるでしょう。

こうして私は、所々で『復讐はいけません』という文字を書き残していく。大丈夫、きつと彼らなら解ってくれるでしょう。

私に『復讐はいけない』と言ってくれた彼らなのですから、

彼らの心には『復讐はいけない』という気持ちでいっぱいには違いありません。

この行動を繰り返すこと十数回、彼らが再び私の前に現れてくれました。

私は彼らに笑顔で挨拶をしたのですが、彼らは何も答えてくれません。

それに不思議なことに、その表情は依然と全く別なのです。

彼らの顔には、私を殺してやるという気持ちでいっぱいな程に、醜く歪んでいるんです。

あの、復讐は哀しいことだと言った茶髪の少年なんか特に顕著です。

まるで鬼のような顔なんですから。

彼らの変容に、私は首を傾げざるを得ませんでした。

私はただ、彼らに『復讐はいけない』という事を身を持って学ばせてあげたというのに。

全ての悪魔、天使、墮天使を皆殺しにしたいだけの私に、

『復讐はいけない』と言ったのは彼らなのに。

私に対して、復讐は悪い、復讐はいけない、復讐は断ち切るべきだ、と言ってきたと

言うのに。

それに、私と同じ立場になっただけじゃないですか。

家族を、友人を、知り合いを、何もかも失った私の体験を味わっただけなのに、
どうして彼らは怒っているのでしょうか？

両親のおかげで生き延び、隠れていた私の目の前で、

悪魔に犯され、凌辱され、精神が壊れるまで犯し尽くされた挙句、
玩具のようにバラバラになったお母様。

最後には嬌声あげて凌辱された姿は、私の頭にこびり付いています。

その姿を見せつけられながら、手足を切り落とされて、何もできずに死んだお父様。

絶望と怒りと悲しみと無力さと憎悪に歪んだ顔は、今でも私の目に焼き付いていま
す。

私の大切な友人たちも同じようにバラバラに解体されて、

積木細工のように置かれた姿を見た時、私は吐瀉物を地面にぶちまけた。

そう言えば、友達の顔ってどんなでしたっけ？あれ？おかしいですね。

ずっと一緒に遊んでいたはずなのですが、どうも思い出せません。

目が空っぽだったことは覚えているのですが、そこからの記憶がありません。

そういえば、どうして目が真っ暗でしたっけ？疑問は尽きませんね。

あとは、供物のように串刺しで掲げられた町の人々を見た時、

私は大声で笑った、喉が枯れるまで笑い転げました。

だっておかしかったんですもの。

まるでモズの早贄のような光景を見れば、おかしくて笑ってしまいますでしょ？

私は、真つ赤な水溜りに転がりながら、ずっと笑い続けました。

僧衣を着た人々がやって来たのは、お日様とお月様が二回昇った頃だったでしょう
か。

急いでやって来た彼らに、私は笑い転げてガラガラになった喉で、

蚊の泣くような声で、力のない手で縋りついて訴えた。

みんなを助けて。お父様やお母様を助けてと。

帰ってきた彼らの言葉は、今も耳に残っています。

『そんなことよりも悪魔の方が先だ』

そう言つて、その人は私の手を払いのけた。

誰も彼もが、泥だらけの私を、雨ざらしのみんなを無視して去っていった。

彼らが帰ってくることは無かったので、私は一人で皆を埋めましたね。

泥だらけで、爪が剥がれた血まみれの手で、私は穴を掘って埋めました。

墓石もない、名前もない、ただのお墓を建てました。

私は彼らの自分の記憶を語りました。

でも彼らの目は、顔は変わららず、ただ私を殺すことしか考えていないのでしょうか。

ああ、なんて理不尽なのでしょうか。

私には復讐は止めろと言ってきたと言うのに、

いざ私と同じ気持ちになったら、私を殺すことしか考えない。

ああ、なんて傲慢なのでしょう。

私の気持ちを理解していると、説得できると自惚れた結果だというのに。

本当の意味で理解してもらえるように、

私の経験をその身で体験してもらっただけなのに、彼らは私を殺そうとする。

ここは『君の気持ちは解った。でも、復讐はいけないから我慢するよ』できるように。

ここはひとつ、私も彼らに倣って説得しようと思います。

大丈夫、彼らなら解ってくれるでしょう。

私に復讐はいけないと言ってくれたのですから。

私は復讐に憑りつかれた哀れな彼らを、彼らに倣って説得しましょう。

誠心誠意、心を込めて、同情を、憐れみを含めて、涙を流しながら。

「復讐はいけません！そんなの哀しいじゃないですか！

あなた方の大切な人たちも、きつと復讐を望んでなんかいません！

そんなことで人生を台無しにするなんて、それこそ亡くなった人たちが可哀想です！
大切な人たちのことを思うなら、復讐なんかやめて、未来に生きてください！」

『復讐はいけません』と

フアニーゲーム（復讐はいけない）

「なんでだ・・・」

茶髪の少年が、唸るように言葉を発する。

なんでだ？えっと、すみません。

私、結構疎い方なので・・・えっと、貴方が何を言いたいのか解らないんです・・・。ごめんなさい、そう言っただけで私は頭を下げる。

目に涙を受かべている私の姿は、端から見れば泣きながら謝っているようで、心が痛むだろう。

だが、茶髪の少年はその目をより鋭くさせる。その目の力だけで、私を殺せそうなほどに。

「なんで殺したんだ！父さんや母さん！松田や元浜や桐生！

生徒会や学校のみんな！なんで殺したんだ！」

少年の言葉に、私はやっと合点がいき、ああそのことなんですわね！と納得した。

その私の姿に、茶髪少年はおろか、後ろにいた紅い髪の少女たちも目を鋭くする。

どうやら彼らは、私の行いに疑問を持っていらっしやるご様子。

なので、私は懇切丁寧に教えてあげることにした。

『復讐は駄目だと言った際に、私の気持ちが解ると仰ってましたでしょ？』

でも、本当の意味で解るわけがありません。なにせ、貴方は私ではありませんから。

なので実際に体験してもらった方が、本当の意味で理解できると思いますて』

「はっ。」

私の言葉に、茶髪少年は間の抜けた声を上げ、他の方も口を開けてしまいました。

何故でしょう、私は至極真つ当だと思おうのですが？

首を傾げる私に、彼らは一端だまり、

次いで先ほどとは比べ物にならないほどの目で、私を睨みつけてきます。

それこそ、彼らからは何やら負のオーラ？というものが流れてきますし。

どうしたのでしょうか？ここは、私の気持ちを理解したことで、復讐は諦めるはずなの

ですが。

「そんなことのために！父さんや母さんを！友達を！みんなを殺したって言うのかよ

！！」

茶髪少年の言葉に、私は抗議をします。

そんなことは何ですか。これはあなた達にとって大切なことなのですよ？

私と（だいたい、軽めで）同じ体験をしたのですから、互いに痛みを分かち合えたわ

けです。

なので、私たちはそう言った意味では同じになれた

「てめえのような殺人鬼と俺たちを一緒にするな！」

罪もない人を平気で殺す、てめえのような奴は絶対にゆるさねえ！

この場で俺たちがぶっ殺してやる！」

その言葉を合図に、少年たちは、各々に武器を取りだす。

失礼ですよ、私は貴方たちの関係者しか殺していません。

それこそ、町中の人間を殺さなかった私の心の広さを感謝するべきですよ。

私の必死の説得も空しく、彼らは私を殺す気満々の御様子。

ああ、彼らも復讐に吞まれてしまったのですね・・・哀しいことです。

私は彼らの姿に、落胆と失望を含ませた溜息を吐いた。

ああ、雨が降ってきましたし、風も吹いてきましたね。なんて今日は酷い日なので

しょう。

私は濡れる心配をしつつ、復讐に吞まれた可哀想な彼らと対峙することにした。

「ギヤスパー！」

茶髪少年の叫びと共に、白髪少年が前に躍り出て、私を見つめる。

その途端、金縛りにあったかのように動けなくなった。

あら動けないですわ。もしかして、ギヤスパーというあの子が原因かしら？

開いたままの目で白髪の少女を見る。

それと同時に、何やら紅い籠手を填めた茶髪少年と、

両刃剣を携えた金髪少年や同じく両刃剣を振りかざす少女が迫る。

それ（剣で）斬られたら流石に死んじやいますよー、と内心では抗議するも、

動けない私は避けることも出来ない。

そのまま拳と剣が迫る瞬間、突如大きな光と音が響き、目の前が真っ白になる。

「うわあああー!?!」

誰かの叫び声と同時に私の身体が自由になるも、

目がちかちかして何も見えず、急なことで対応も出来ず、私はそのまま倒れ込む。

その瞬間、風切の音と共に頭上で何かが通った。

「ギヤスパアアアア!?!」

倒れた私は、なんとか身体を起こし、まだちかちかする目を凝らす。

すると、黒焦げになった何かが倒れていた。

よく見れば、そこに何かコードのようなものが絡まっており、バチバチと音を立てて

いる。

おそらく、先ほどの雷で電線が切れ、ギヤスパーという子に当たってしまったのでしよう。

哀しい事故ですね……。

白い修道服を着た子が、それに触れようとして、青い髪？の子に止められる。

「よくもギヤスパーを！絶対にゆるさねえ！」

なにやら茶髪少年が私がおかしんだと決めつけ、更なる怒りを滾らせます。

はつきり言つて、私に怒るのは筋違いですし、これは不幸な事故ですよ。

そういうも、聞く耳を持ちません。

「……は私が……」

長い髪を結つた、赤白の服を着た少女が空に飛び、私に向かって何かを放とうとする。

その瞬間、風に飛ばされただろう、新聞紙が彼女の顔を覆う。

咄嗟のことで対処が出来なかつたのか、

赤白の少女は顔の新聞紙を外すことに気を取られているので、私はすかさずナイフを投げる。

が、風にあおられて彼女には当たらず、丁度彼女の少し頭上に舞い上がった瞬間、再度雷が落ちる。

結果は、ナイフの傍にいた彼女にも電気は流れ、そのまま地面に落ちていった。

「朱乃!?!」 「朱乃さあああああん!?!」 「いやあああああ!?!」

色々な叫び声が聞こえるが、生憎、風のせいであまりよく聞こえない。

それにしても、こんな時に空を飛ぶなんて自殺行為だというのに、悲しい事故ですわね。

またしても悲しい事故に心を痛める私に対し、彼らはより憎しみに吞まれていく。

「ギヤスパードだけじゃなく、朱乃さんまで!」

茶髪少年が叫ぶと、右手で籠手を押さえ、何やら呟く。

何やら嫌な感じがしたので、茶髪少年に向かって走る。が、雨のせいで足を滑らしてしまう。

その途端、先ほど両刃剣を持った片方が、再度斬りかかってくる。

咄嗟にその子の手首に向かってナイフを投げるが、簡単に躲される。

「みんなの仇だ!」

そう叫び、横切りをしようとする青い子の前に、急に猫が飛び出す。

「な!?!」

先ほど雷に討たれた子のように、咄嗟にことに驚く青い子。

そして雨で滑ったのか、手から剣が外れ、勢いのまま飛んでいく。

その先にいたのは、赤白の子をどうにか助けようとしている修道服の子。

「アーシア、避けてくれええ！」

誰かの叫びも空しく、白い修道服を着た少女の胸に、その剣は突きたてられた。

少女は一瞬で灰となり、彼女の衣服であった修道服が、彼女の灰が、風に舞って飛んでいく。

「あ？ああ？あああああ?!」

青い子は、自分のしてしまった事を理解し、そのまま地面にうずくまり、叫ぶ。

可哀想に、修道服の子は、この青い子にとって大切な人だったのでしよう。

これも哀しい事故ですね。

「ゼノヴィア！貴女、何て事を?!」

赤い髪の少女が、信じられないといった表情で、ゼノヴィアと呼ばれた青い子を見る。

「違う！私は！私はそんなつもりじゃ！でもアーシアを私は、違う！殺してなんかいない！」

私はアーシアを殺してなんか！でもアーシアは私が殺した？あれ？」

可哀想に、半ば壊れかけているご様子なので、がら空きの背中に包丁を突き刺しておきましよう。

そのまま崩れ落ちるゼノヴィアという子に、私は少し同情する。ほんのちよっぴりですけど。

「はああああああー！」

今度は、先ほどの白い髪の毛のことは違う子が私に向かってくる。

よく見ると、頭には猫のような耳が付いている。

あら可愛いですね、そう言おうとした私に向かって、猫耳少女？は拳を振るう。

一直線の拳だったせい、身体を捻って避けるが、その余波で、私は壁に叩き付けられる。

目を凝らせば、猫耳少女の拳の先には、大きな穴が開いた壁がある。

もしも避けていなかったら、半身が千切れていたでしょう。

まるで戦車の砲弾のような拳ですね。内心、私は猫耳少女をそう評する。

と、何やら地面から鎖のような物が伸び、私の身体に蒔きつく。

今度は一体なんでしょうか？そう思い首を回せば、銀髪の女性が魔法陣の中心に立っている。

どうやら、彼女が元凶なのでしょう。

そう考えていると、茶髪少年がこちらに近づいてくる。

彼の左腕の籠手は、まるで血のように赤く光っており、

少年の表情からして、私を殺すためのギロチンに見えた。

「皆の仇だー！」

そう言つて、少年が私に殴りかかろうとして、

「お前達！一体何をしているんだ!？」

声の方を振り向けば、おそらく見回りであろう人たちが、私たちを懐中電灯で照らしていた。

「違う！これは違うんだ！俺たちは殺人犯を捕まえようと・・・！」

光に照らされた茶髪少年が必死に弁明するが、見回りの人たちの顔は険しい。

そうでしょうね、と私は内心では呟く。

なにせ彼らが見ている光景は、鎖で縛った私を、

金属のような籠手で殴ろうとしている少年に見えているのでしょから。

それに他を見れば、包丁が突き刺さっている死体や、剣を持っている少年もいるわけです。

パツと見て、どちらが危険に見えるでしょうか？

「話は警察が来てからだ！お前たちはこの場を動かすな！」

大人たちは、怯えを隠しながらも声を荒げる。

チラリと茶髪少年の紅いことを見れば、不発だった力が燻っているのが見える。

と、私は良いことを思いつく。

私の特性上、こういったことにも役に立つことは充分理解している。

だから私は、そのまま彼の拳に体当たりするようにつつかった。

その瞬間、私はそのまま壁を突き破り、誰かの庭に飛ばされる。

「お前！一体何をした！」

「違う！俺は何もしていない！本当なんだよ！」

意識が薄れゆくなか、大人たちに押さえつけられる少年たちを見て、私は口元を歪めた。

「駄目だ、死んでる……」

その言葉を耳にした少年たちは、一体どういう表情をしたのでしょうか？

ああ、残念です……。

その日、身元不明の遺体が、安置室へと運ばれた。死因は、心臓強打によるショック死。

なお、その身体には一切の傷が無く、まるでマネキンのようだとも言われ、

今にも動き出しそうと気味悪がられていた。

それと、容疑者として疑われている少年たちは、未だ自分たちは違うと、容疑を否定している。

ある日、身元不明の遺体を運び出そうとした際、驚くべくことが起った。

なんと身元不明の遺体が無かったのだ。まるで始めから無かったかのように、空っぽだった。

しかし、書類にはちゃんと遺体があったことが記されており、このことは後の不可思議な噂話として語り継がれている。

さて、次の町へ行きましょう

私は旅行鞆を携え、次の町へと出発する。

私の胸には、針が逆に動いている時計が、四葉のクローバーの首飾りがある。

私は列車の席に腰を下し、先ほど購入した新聞を開く。

すると、連続殺人犯？の少年たちが逮捕、という記事がチラリと見えた。

思いつきな話

吸血姫

エレオノーラ・ノーランド・フォン・ドラク卿は吸血鬼である。

見た目は十数の少女なのだが、実際の年齢は約一世紀にも及ぶのだ。

彼女は、始祖ドラクルが生まれし始まりの地：ルーマニアの奥地にて、

多くの吸血鬼貴族の中の一人として生を得た。

ノーランド家に生まれた彼女は、数えて十と二つの時にその才を示した。

自国の民に迫る魔物や魔獣を、多くの騎士たちを連れ、先陣を切ってこれを討滅した。

それにより、民からの信頼も厚く、彼女を慕う騎士たちも多くいる。

彼女の容姿と振る舞いはまさに優雅を形作り、周りの者たちの目を奪った。

その経緯ゆえか、彼女は周りからは『蠱惑公』と呼ばれた。

しかし彼女の活躍は、周りの貴族からの嫉妬や猜疑心の目を向けられることに繋がった。

彼らは、彼女の優雅な振る舞いと蠱惑的な姿を皮肉り、『毒華公』と陰で囁いた。

他者を魅了し、その姿に吸い寄せられたが最後、その毒を吸って身を滅ぼすという、

まさに魔性の女という意味で恐れたのだ。

もちろん、人の口に戸はたてられるわけもなく、言葉というものは疫病の如く拡散するものだ。

この話を耳にした臣下や民は大いに怒りを燃え上がらせるも、

エレオノーラの一言によってその矛を収めた。

彼女の民を憂う言葉、彼女の優雅への信念、そしてその美しき姿に触れ、

臣下たちは彼女への陰口など気にもしなくなつたのだ。

今日も彼女の民や臣下たちは、彼女の姿に勇気や激励を受け、今日も仕事に励むのだつた。

ちなみに彼女の両親は、

彼女が後を継いだらさつさと隠居し、離れた場所で領民と共に農業をしている。

新しい家族が出来るぞ、との手紙が送られてきた際は、エレオノーラは机に頭をぶつけ、

なにをしているのですか、お父様、お母様!?!と荒れた文を叩き付けに行つた。

さて、エレオノーラの住まうルーマニアであるが、

彼女の他にも多くの吸血鬼貴族などが存在している。

その中で最も大きな勢力となつているのが、『ツエペツシュ派』と『カーミラ派』であ

る。

この両派、ツエペツシユ王家の争いや思想の相違などで、醜悪なまでに仲が悪いのだ。男を真祖と尊ぶツエペシユ派と、女を真祖と尊ぶカーミラ派、

考えの違い故に、互いを理解する気もなく、互いに睨み合っているのだ。

そもそも、吸血鬼における両派は悪魔にも勝る純血主義を掲げており、

純血以外の存在などには、恐ろしいほどの差別意識を示す。

また純血思想に染まらずとも、自身の欲望を優先するほどの貴族足りえない存在もいるのだ。

それ故か、純血ではない者：ハーフヴアンパイアの扱いは、純血とは天地の差が生じる。

それこそ、人か物かの認識にまで及ぶ。

だがエレオノーラは、そんな純血意識もなければ、卑しき欲望の亡者に墮ちる望みもない。

そもそも、ノーランド家は確かに貴族ではあるが、

彼女の意向でツエペシユ派にもカーミラ派にも属していない、中立の立場なのだ。

時折、両派から使いが訪れ、後ろ盾になれという命令が来るも、

彼女は丁重に迎え、丁重にお断りをしている。

まあ、使いがころころと変わるのを見ると、少しいたたまれないが、だからとて自治領をツマラナイ諍いに巻き込みたくもないし、興味もないのだ。ただ彼女の望みは、『民や時代、世界の移りゆく様を見ること』だ。彼女は約一世紀の時を過ごした。

それゆに、多くの儂き命を宿す民の死を、残酷な時の流れに翻弄される様を、意志によつて築かれる世界を、見続けていた。

だがそれと同じく、儂き人の大いなる輝きや、変わり続ける時代の盛衰、そして消えては生まれる新たな世界の姿を見てきたのだ。

ああ、なんて素晴らしいのだろう。

彼女は長命の吸血鬼であるが故に、永き時を過ごしたが故に、その激しくも暖かく、煌びやかで仄かな輝きを持つことが出来ない。

自分たちよりも脆く、儂く、短命でありながらも、

その火を燃やすその姿を、彼女は愛おしくてたまらない。

ああ、なんて素晴らしいのだろう。

ゆえに彼女は世界を見続ける。

変わりゆく流れの中で、それでも生きていく生き物の姿を見るために。

こうして彼女は、公務を行う自室の机に座りながら、

部屋の窓から見える民や臣下の姿を微笑ましく見つめているのだ。

さて、もはや万を超えて数えるのを辞めた日課の公務であったが、今日は少し違うようだ。

エレオノーラが机の上に重ねられている羊皮紙に目を通してしていると、不意に戸が叩かれた。

「なんじゃ？我は今執務じゃが、何か起きたのか？」

彼女の言葉に扉が開かれ、侍女長のクラウディアが姿を現す。

「執務中申し訳ありません。エレオノーラ様にお客様でございます。

なんでも、前に会う約束をしていたとか」

クラウディアの言葉にエレオノーラは問い返す。

「クラウディア、その客人の名は？それと容姿は？」

「はい、エレオノーラ様のご友人と申しておりますが。

それと、容姿はエレオノーラ様に近い子供でした」

その言葉に、エレオノーラは「そうか、では迎えに行かなくてはな」と立ち上がった。

この前、貴族間で行われた晩餐会で、自分は約束をしたのだ。

その晩餐会は、開催者による、他の貴族に向けての力の表明であった。

エレオノーラ本人にとっては、会ったこともない貴族故に気乗りはしないものの、

招かれたならば無下にする訳にもいかず、渋々出席したのだ。

彼女の予想通り、晩餐会の雰囲気は彼女にとつては醜悪極まりなく、ツエペツシュ派とカーミラ派から漂う腐臭に似た空気を漂わせていた。

これでは、せつかくの美食も美酒にも食指が動かないというものだ。

ゆえに、彼女はグラスの中の液体をくゆらせながら、外のペランダに佇んでいたのだ。

晩餐会から漂う、笑えもしない貴族たちの演劇から目を逸らし、

外の綺麗な星空を見上げていると、不意に声をかけられた。

「あの・・・君も、星を見ていたの？」

エレオノーラが顔を向けると、そこには童がいた。

月の光を浴びて輝く金色の髪に、ルビーを溶かしたような赤い目、

そして何か怯える様な、小動物のような姿が、彼女の目に映った。

「そうじゃ。我にはこの晩餐会は些か退屈だな。」

つまらん物を見るよりも、こうして月の映える空を見る方が好きじゃ」

「そ、そう・・・なんだ、ね。ぼ、ぼくも、空を見る方が好き、なんだ」

童の言葉に、エレオノーラはクスリと笑みを零す。

「すまん、名乗るのが遅れた、我はエレオノーラ・ノーランドじゃ」

「ギヤ、ギヤスパーク・ヴラディ・・・です・・・」

ギヤスパーと名乗った童に、エレオノーラは目を細める。

その名をどこかで聞いた覚えがあるからだ。

だがどんな名であろうと、彼女はそれを気にしない。それは彼女の美学に反するからだ。

「してギヤスパーよ、おぬしは何ゆえ震えておる？」

いくら夜とは言え、まだ風はそこまで冷たくはないぞ？」

「え、えつと……」

ギヤスパーが赤い目を逸らすのを見ると、エレオノーラは事情を察した。

ギヤスパーの纏う雰囲気と、自身の勘からして予想はつく。

「まあ、答えたくなければよいぞ。我は気にせん。

それに、同じ夜空を好む相手に巡りあえたのじゃ。無粋なことはこの夜空を汚す」

エレオノーラの言葉にギヤスパーは首を傾げるも、彼女は気にしない。

「そうじゃギヤスパー、ここで会ったことは必然。

故に、私の友となつてはくれぬか？我は繋がりというものを好んでおるのじゃ」

「え、えええええ！？そ、そんな！？ぼ、僕なんかが友達になれるわけ……」

「ばか者、我が友になれと言ったのじゃ。ギヤスパーは素直に頷けばよい。

「これは逃れられぬ宿命じゃ」

「そ、そうなの・・・かな？」

エレオノーラの言葉にギヤスパーは首を傾げるも、結局は強引に頷いてしまう。
「でだギヤスパーよ。我の屋敷に訪れるがよい。」

我は忙しい身ではあるも、友との時間なぞいくらでも作れる」

「う、うん。ありが・・・とう」

「なに、気にすることはないぞ？」

か細い声で感謝するギヤスパーに対し、エレオノーラは笑う。

すると、「ギヤスパー！」と、呼ぶ声が聞こえてきた。

「どうやら、ギヤスパーにはお相手がいたようだ。」

「ほれ、お主のお相手が探しておるぞ？ 迎えに行つてあげよ」

「うん。ありがとうね」

「では、また会おうぞ、我が友よ」

部屋へと戻つていくギヤスパーを見ながら、

エレオノーラはワイングラスの液体を飲み干した。

少しだけ、美酒の味を感じた気がした。

思い出に浸りながらも、エレオノーラはギヤスパーの待つ部屋へと足を速めた。

後には侍女長のクラウディアが続く。

「よくぞ我が屋敷に参られたな、友よ！改めて自己紹介をしよう。

我が名はエレオノーラ・ノーランド・フォン・ドラク！

ノーランドを自治とする領主なり！」

勢いよく扉を開き、愛しき友へと自己紹介するも、

彼女が見た光景は、勢いよく開いた音に氣を失ったギヤスパードだった。

白獅子

柔らかい何かを突き刺す感覚、硬い何かを砕く感覚、
熱い何か、液れる何か、そして鼓動する何か。

その全ての感覚が、私の右手に集まっている。

「ガフ……」

目の前の存在が何かを吐き出し、それが私の顔に掛かる。

私は無意識にそれを拭った。

赤い。それは赤い色をしていた。

そして粘つく様なぬるぬるとし液体だった。

「あれ……?」

私は目の前に視線を移す。それは人の形をしていた。

普段は結っているはずの黒髪はほどけ、長い髪が垂れている。

その顔は苦痛にゆがんでおり、口元からは赤い液体が垂れていた。

どうしてだろうと疑問に思っても、直ぐに答えを見つけた。

私の手が、その人の胸を突き破っていたのだ。

どうやら心の臓を外れていたらしい。

駄目ですね、私はこの人を殺さないといけないうのに。

私は右手を抜こうと引つ張るが、抜けない。

まるで固まったセメントに手をつ突っ込んでしまったかのように、抜けないのだ。

どれだけ押ししても引つ張っても、うんともすんとも動かない。

「かか・・・ったわ・・・ね」

目の前の人の口元が歪む。どうやら私は罠にはまったらしい。

拙いですね、これでは逃げられません。

私はどうにかしようとしてもがくも、やはり動かない。

「ならこうしましょう」

私は空いている左手を振り挙げ、一気に振り下ろす。

「ぐうううああ・・・」

肉を、骨を切り裂く感覚が手に伝わる。

突いて駄目なら斬るまでです。ですが、私の左手も途中で止まってしまいました。

なんと言うことでしょうか、私の両手が動かなくなりました。

目の前のそれは、左胸を貫かれ、右胸を裂かれているというのに、まだ息があります。

なんとという失態。

今から起こるのは、彼女による私への一方的な攻撃。

両手を封じられた私は、逃げることも攻撃を防ぐことも出来ません。

ツブリと音を立て、彼女は貫かれたまま私の方へと歩いてきます。

なんとというタフさですか。私もタフさには自信がりましたが、ここまでの差があつたとは。

ああ、私の人生は今、この瞬間に終わるのでしよう。

「あつけない物です」

私は動けない身体が、一方的に滅茶苦茶にされるのを思いながら、溜息を吐いた。

ふと、私の頭の中に何かが過る。ああ、これが走馬灯というものでしょうか。

家族一緒にいた記憶、私を守ってくれていた家族の背中。

もはや叶わない記憶。私を捨てた、家族の思い出。あの人のせいで、私は心が壊れそうになった。

あの人が悪いと周りには責めた。あの人の家族ということ、私は殺されそうになった。

あの人を恨んだ。何もかもがあの人のせいだと、あの人が原因だと。

でも、それでも、あの人を恨めない私がいる、あの人を憎めない私がいる。

ああそうか、私はやつぱり、あの人のことが好きなのかもしれない。

でもそれも叶わない。今ここで、私は死ぬのだから。

それでも願わずにはいられない。せめて、せめて……

「最後に一目、姉様に会いたかったなあ……」

そう呟き、ゆっくりと止めを閉じる。

すると、私は背中に手を感じた。

「え？」

目を開くと、私は目の前のはぐれ悪魔に抱きしめられていた。

何故でしょう？ 私とこの人は敵同士、私はこのはぐれ悪魔を殺しにきたと言うのに。

どうして私は抱きしめられているのでしょうか？

「久しぶり……ね」

その声に、私はその存在をようやく認識した。

「ねえ……さま……？」

そのはぐれ悪魔は、私の家族だった。

「また、あの夢ですか」

私はゆっくりと目を覚ます。

小鳥の囀る音が聞こえ、暖かい、不快な陽の光が窓から注ぐ、なんとも爽やかな朝だ。私の気分は最悪の不機嫌さに至っているが、だからと言って何かに当たる気も起きない。

私は痛む頭を押さえながら、ゆっくりと身体を起こす。

ああ、気分が悪い。私は無意識に手を拭う。

乾いたタオルのざらざらした感触が、私の手を刺激する。

「それにしても、お腹が空いたなあ」

この前食べたのはいつだったでしょうか？

うんうんと頭を捻っていても思い出せません。

ということは、ずいぶん前ということになりますね。なんということでしょう！

それでは私が空腹なのも領けます。さっそく食事にしないといけませんね。

しかし、困ったことがあります。

「お金がありません」

お金が無い、これだけで生活することが厳しくなります。

かといって、流石に盗みも強盗も駄目ですし、人を傷つけて金品強奪も気が進みません。

しかし、お金が無いと物が買えない、食べれない。困りましたね。

それか・・・

その時、私の耳がピクリとした。

「ん」

噂をすれば陰、というものでしょうか、何とかなるかもしれません。

私はその音の正体を推察する。なんとという、私にとつてのグツドタイミングでしょうか。

鴨が葱を背負ってくるどころか、鍋も具材も持つて来てくれました。

あまり変わらないと言われていた私の口元は、すこし上がった気がします。

ではさっそく、お迎えしなければ。私は準備をするのであった。

地面を叩く音が聞こえる。それも一つばかりではなく、複数の音だ。

しばらくすると、幾人かが部屋に入ってきた。

不思議なことに、その侵入者たちの背中には、黒いコウモリの羽が生えていた。

「目撃証言は確かなのか？」

「ああ、間違いない。逃走中のはぐれ悪魔を見たとき連絡があった。気をつける、必ずどこかに潜んでいるぞ」

「援軍もじきに来るんだろ？ だつたらなんで先に来ているんだ？」

援軍と共にたたんじまったほうがいいだろ。

「ばーか、こういうのは早いもん勝ちなんだよ。」

指名手配のはぐれ悪魔を殺せば、何かしら拍がつくつてもんだ」

「しっかし、こんな廃墟まがいのビルに逃げ込むとは、貴族の眷属さまが落ちぶれたもんだ。」

待てよ・・・そーいや、このはぐれ悪魔の家族もはぐれ悪魔になつたんだっけか？

おいおい、姉妹揃つてはぐれ悪魔になるなんて、どんだけ馬鹿な姉妹なんだろうな」

「まったくだ、悪魔を敵に回して生きられるわけがないのにさ。」

ああそうか、バカだからはぐれ悪魔になつたんだろ」

「ちげえねえや！」

下卑た声が部屋に響く。突然、カランとした音が響く。

侵入者たちが振り向くと、コロコロと空き缶が転がってきた。

「なんだよ驚かせやがって・・・！」

そう言った男が、腹いせに缶を蹴飛ばそうとして、転がる空き缶に近づくと、

「おい、勝手に離れるな！」

仲間の一人が声をかけるが、無視をして近づく。

「このクソ缶があー！」

蹴り飛ばされた缶は、鉄筋がむき出しのコンクリートの壁に跳ねた。

「わりいな、ちと苛々してたわ。さて、はぐれ悪魔をぶ……こ……」

男はその光景に目を疑った。

なにせ、コンクリートで真つ白だった部屋が、真つ赤に染まっていたのだから。

そして、ほんの数秒前に話をしていた仲間たちが、

身体から赤い液体を流していたのだ、噴水のように。

そしてその中心にいたのは、両手を真つ赤に染めた白い髪の少女。

よく見ると、口元が動いている。もぐもぐと何かを咀嚼している。

そして少女の足元には、ビクンビクンと痙攣している同僚。

まるで噛み千切られたような傷から、赤い液体を放出している。

そして少女が、赤く染まった口元を歪め、煙のようにふわっと消える。

「このクソはぐれがああああ!!」

目の前の光景に、恐怖し、仲間の姿に怒りが湧きあがり、

男は手に持っていた槍をブンブンと振り回しだす。

しかし、男の槍は空を切るだけで、何も当たらない。

「くそ、くそが！よくも俺の仲間を！絶対にゆるさねえぞ！絶対に殺してやる！」

喚きながらも槍を振り回すが、何も手ごたえが無く、気が付けば男は息をきらししていた。

疲れか、それとも叫んだからか、男のゆで上がった頭は冷えた。

そうだ、自分がしなければならぬのは、ここで奴を殺すことじゃない！

もうすぐ援軍がやってくる。だったら、自分がしなければならぬのは、生き延びることだ。

仲間の為にも、俺は生き延びなければならない。

そして援軍と共に、自分は仲間の仇を討つんだ！

すると、まるで運命の女神が男に微笑んだのか、何かが走ってくる音が聞こえる。どうやら援軍が到着したようだ。

男は自分の居場所を教えるために、力いっぱい叫ぶ。

しばらくすると、こちらに向かって走る人影が見えた。

先頭に見えるのは赤い髪の少女だ。その隣には茶色の髪をした少年、

その後ろには青髪の少女や金髪の少年少女と、そろそろとやってくる。

ああ、助かった！

男は走ってくる援軍に向けて、力を振り絞るよう走る

前に、何かが男の胸を貫いた。

「は？」「え・・・？」

あつげにとられたのは男だけではない。

目の前の援軍たちも、何が起ったのか理解できない表情をしている。

男が自分の胸を見ると、赤く染まった手が突き抜けていた。

「駄目ですよ、ちゃんと狩られてくださいよ」

声の主は、ズプリと空いていたもう一方の手を、男の胸に突き刺し、そしてゆっくりと開いていく。

メキメキとミチメチャと粘着質な音と、肉を引き裂く音が響く。

「くそ、くそ、くそがああああああ！！」

「えい」

男は力いっぱい引き裂かれた。

「え．．．？」

赤い髪の少女は、目の前の光景に唾然とした。

指名手配のはぐれ悪魔の連絡を受け、自身の眷属と共に駆けつけてきた。

だが到着した際には、既に悪魔たちが中に入っていたという。

まずい、赤い髪の少女は思った。

もしも、はぐれ悪魔が彼女ならば、到底勝てる存在ではない。

それこそ数が増えるほど、彼女にとっては好都合になる。

彼女の眷属たちも理解しているので、すぐに彼女たちの中に入りました。

そしてこちらに助けを求める彼を保護しようとしたが、その彼が真つ二つに引き裂か

れたのだ。

赤い液体と、いくつかの臓物と、恐怖に歪みきった男の顔が、少女たちの目に飛び込む。

白い修道服を着た少女が、口元を押さえようとすくまる。

周りの少年少女たちも、その光景に吐き気を覚える。

見れば、後ろにも倒れている人影が見える。

そして、真つ赤から赤黒く変色した部屋も目に入る。

「あれ、こんなところで出会うなんて珍しいですね」

その声に、赤い髪の少女は声の方へと振り向く。彼女たちの眷属もそれに追隨する。そしてそこにいたのは、白い髪の少女だった。

かつて短かった髪は、腰に掛かるまでに長くなっている。

そしてその長い髪は、まるで風に靡くたてがみのように、揺らめいている。

小柄だった彼女の姿は、彼女の姉とうり二つのように大きい。

だがある一部だけは、あまり変わり映えがしていない。

だが彼女たちは知ってる。もはや別人のような姿なのに、目の前のはぐれ悪魔を知っている。

なぜなら自分の目の前にいるのは、この凄惨な状況を作り出した犯人であり、

指名手配中のはぐれ悪魔であり、そして少女の大切な眷属の一人であった存在、

「白音……」

「その名を呼んでいいのは、黒歌姉様だけですよ、部長」

両手を真つ赤に染めた獅子が、部長と呼んだ少女に笑った。

「どうして……どうしてなの、白音」

その名で私を呼ぶな。

「どうして……私たちの下から去ったの？」

部長が私に尋ねる。その表情は、哀しくて、でも信じられないという顔だ。そして今の質問は、部長の本心なのでしょう。

ああ、どうやら解ってくれなかったみたいです。

「小猫ちゃん、一体どうしちゃったんだよ？」

どうして小猫ちゃんがはぐれ悪魔になっちゃったんだ！

あんなに部長を慕っていたのに！」

変態が私に声をかけてくる。ああ、どうやらこの人も理解していないらしい。

見れば、他の方々も同じみたいです。誰も理解してくれなかった。

本当に反吐が出ます。

「それを私に問いますか、部長」

「え……？」

私の言葉に、部長は呆けた顔をする。

「知っていたんですよね、姉様は悪くないって」

「[[[[[?!]]]]」

ああ、やっぱり。

私は真つ赤な手をペろりと舐める。鉄の味がして、酷く生臭い。

「姉様がはぐれになったのは、姉様の主が契約を破ったこと。

私を守る為に仕方なく殺したこと。私に黙ってましたよね」

「それは違うわ！あなたのお姉さんに黙っていてほしいって頼まれたのよ。

それを知った貴女は、酷く自分を責めてしまうからって」

「そうだぜ小猫ちゃん！リアス部長は悪くない！

「こんなことになるなんて誰も思ってたんだよ！」

「その結果が、今の私ですよ？」

私はバラバラになった肉の塊を掴み、咀嚼する。うん、不味いです。

「私の気持ち、解りますか？」

姉様を憎んでいたのに、実はその姉様に守られていたということ。

実は私のせいで、姉様がはぐれ悪魔になってしまったこと。

そもその原因が、姉様の主が約束を破ったこと。

それを知らず、ずっと姉様を恨んで、全てを知ったのが・・・」

私は真つ赤な手を、部長たちに見せつける。

「私が姉様をこの手で殺した後だったということ」

「・・・・・・・・」

悲痛な顔になる部長さんたち。

でももう遅い、私は全てを知ってしまった。そして大切な家族を手に掛けた。

「どうして、どうして言ってくれなかったんですか！

どうして、ちゃんと調べてくれなかったんですか！

もしかしたら、もしかしたら！どこかで違っていたら！こうならなかったのに！」

「白音……」

「私をその名で呼ぶなあ！呼んでいいのは黒歌姉様だけ！でもその姉様はもういない！

私が殺したんだから！この手で、この手で殺した！」

私は部長さんたちを睨みつける。

憎い！何もかもが憎い！姉様が憎い！部長たちも憎い！姉様をはぐれにした悪魔た

ちが憎い！

そしてなによりも自分が憎い！姉様を知ろうともしなかった自分が、一番許せない！

「だから私、もう何もかもが信用できません。

姉様も、部長たちも、悪魔も、そして私自身さえも」

「待って白音！もう止めて！こんなことをしても、貴女のお姉さんはきつと」

「知った風な口を利かないでください」

私の心が冷える。

「黒歌姉様を知らないのに、姉様のことを語らないでください。」

何より、姉様を知ったように語らないでください、反吐が出ます」

「小猫ちゃん！部長になんてことを言うんだよ！いくら小猫ちゃんだからって」

「許せませんか？」

「!？」

私は変態の横に立ち、耳元に囁く。驚いた変態が、距離を取ろうと後ろに跳ぶ。

「許せませんか？」

次に驚いていた部長の前にたち、私は尋ねる。

「どうして……」

「仙術の応用です。気を纏うことで、私は世界と同調が出来るようになりました」

ですから、私を探すのは不可能に近いですよ？それこそ、目で見えても捉えられませ
ん

まあ、寝ている時は流石に無理ですけど」

あはっ♪みなさん、驚いていますね。私は自分の立ち位置に戻った。

「話を戻しますけど、私は許せません。」

姉様を殺した自分を、姉様をはぐれ悪魔にした悪魔たちも、色んな物、全てが」

だから私は全て壊す。私たちを不幸にした存在全てを。

そう言つて私は、もう一度気を纏う。

部長たちから見れば、私の身体が透けていくように見えるでしょうか。

「待つて白音！お願いだから！」

「今回は、見逃してあげます。もし次に会ったら、覚悟してください」

そうして私は、その場を離れた。

あーあ、部長たちが来てしまったせいで、お肉が食べれませんでした。

そのせいでお腹が減ってます。しかし、隠れるというのも大変ですね。

さて、次はどこに行きましょうか。

私は何を食べるかを考えながら、街中に溶け込んでいった。

赤頭巾さん

『た、助けなさい！ほら、私たちは仲間でしょ！』

『おい待てよ！こんなことをすればただで済むと……！』

『ひい!?な、なんでこんなところにお前が……！』

私の振り下ろした鉦によって、悪魔の頭が弾けた。

主の言葉を刻んだ銀剣で、目の前の悪魔を斬り刻んだ。

潰れる音、突き刺す音、鳴き声、叫び声、そんな音が、私の周りで木霊した。

そして気が付けば、私の周りは、トマト祭りでも行われたような、真つ赤な光景しかない。

「主よ、私は今日も、憐れな悪魔たちを浄化しました。

私は今日も、主のために善行をしました。

ああ、今日はなんて素晴らしい日なんでしょう！」

私は大声で、心の底から主に感謝する。

この罪深き私に、主は悪魔を滅ぼす善行を与えてくださった。

天使様は、私に悪魔を浄化する術を与えてくださった。

だからこそ私は、善行をなすのだ。

それが私なりの、主への感謝だ。

祈りを捧げるだけでは駄目。信奉するだけでも駄目。

そう！主は、自らで行動する人を祝福するんです。

だから私は、今日も今日とて、善行をなす。

ああ、主よ！私は今日も元気です！

私が感極まって、主へ感謝の言葉を、祈りを捧げていると、後ろから音が聞こえた。

振り向けば、怯えた目をした悪魔が。

その姿は、凶暴で、残忍で、狡猾で、人を騙すような姿ではなかった……、

と、普通の人は思うだろう。

でも私には解る。解ってしまう。

この悪魔も、いずれは物の見事に立派な悪魔になる。

人を騙し、傷つけ、殺し、犯し、奪い、

多くの人間を不幸に、絶望に、憎悪の渦へと引き摺りこむ。

だったら、その禍根を断たないといけないよね？

私にはつこりと笑う。

そして悪魔の、全ての希望が断たれた、真っ黒に染まった目を、顔を見て、更に口元

が歪む。

まるで、人を突き殺せるかのような三日月のように、口元を引き彎らせて笑う。

どうやら、私が見つけれない場所に隠れていたようで、

私が去つたら逃げようとしていたのだろう。

でも残念、世の中はそんなに甘くはないの。

常に世界は理不尽だらけ！終わりに向かつて一直線！

世界は残酷、時代は惨く、悪魔の皆さん、皆地獄！

嘆くなら、自分の生まれと、種族と、時代と、祖先と、その他諸々を嘆いてください
ね？

私を恨んでも困りません。だって私には、一切関係ないからね！

だから、貴方がここでどうなるのかも、早くも遅くも、私には関係ないよね？

うん、関係ないの！

「たす・・・」

「サッカーキックウウウウ!!」

想いつきり、それを蹴り飛ばした。

壁に新たな赤ペンキが付け足されたが、私にとっては些細な出来事。

あーあ、脚が汚れちゃったあ・・・。

帰ってシャワー浴びたいなあ……。

うん、さっさと帰ろ。

そう思いながら、直ぐにその場から離れようとする。

「やあやあ！これはこれは！相変わらず惨たらしい場面でございますなあ！

うわあ……流石の俺つちもこれはドン引きレベルですわ、これ。

なんというか、もう18歳未満のお子様見ちやダメ絶対！って感じ」

「……」

突如聞こえてきた声に、私は足を止めた。

人の神経を逆撫でる様な、下卑たる声とその口調。

振り返らずとも、私にはそいつの名前が理解出来た。

「おっそーい！フリードさんてば、遅いですよー？」

振り返れば、白髪で神父の恰好をした子供が、目の前の光景にはしゃいでいた。

フリード、フリード・セルゼン。

エクソシストの癖に、教会から追い出されたはぐれ者。

私と同じ、はぐれエクソシスト。

悪魔を殺すどころか、悪魔に関わる存在は、一般人だろうと容赦ない、

悪魔を滅ぼすためなら、ある意味で、一番理想的なエクソシスト。

何でも、悪魔を殺すのが楽しくなっちゃってしまった結果だとか。

まあ、私にはどうでもいいですけど。

「いや、すみません。道中でクソ悪魔さんたちと出会っちゃいました！

ゼーンぶ、ちよちよいのばっばで終わらせてたら、遅れちゃいましたあ！」

「もう、フリードさんは遊び過ぎでーす！」

お仕事は、楽しみつつも適度な対応が大切なんですよお？

遊んでたらお仕事が出来ませんでした、時間に間に合いませんでした。

それは人として間違ってますーす！」

「姐さんだつて楽しんでるじゃないですかあ!？」

ま、それにしもお疲れ様ですわ。しかし、何度見てもエグイっすねえ。

姐さんが道を通ると、みんな真っ赤に染めてますもん。

まあ、クソ悪魔にはお似合いですけど」

「その通り！悪魔は苦しませないとダメ。ダメなんですよ？」

自分たちの犯した罪を自覚させてから、

煉獄の焼却場へとシュート！超エキサイティンググデース！」

「まあ、姐さんの考えは俺にはどーでもいいんですけどね。

俺は悪魔を殺せばいいんで！ビバ！悪魔狩り！」

声高に叫ぶフリードと私は、その場でハイタッチ。

やっぱりフリードさんと私は、解りあえる部分もあるが、解りあえない部分もある。まあ、そんなの私にはドーでもいいんです。

今の私は、直ぐにでも穢れたこの身を清めたいことだけなんで。

「それじゃ、フリードさあん？ 私は早く帰りたいので、このままサヨナラしましょう！」
そう言うってその場を去ろうとした私に、フリードはまた声をかけてきた。

「そういえば姐さん、アーシア・アルジェントって知ってます？」

何でも、悪魔を治療しちゃったせいで、教会から追放されちゃった聖女ちゃんだとか
「いいえ、全く。ゼーンせん。誰ですかそれ？」

フリードの言葉に、私は関心もなく答えた。

アーシア・アルジェントという名前なんて知らないからだ。

「え、マジ？ マジで知らないの姐さん？」

姐さんって、情弱じゃないの？ めっちゃ盛り上がってる情報ですけど？」
「知らないって言ったらしりません。で、ナンデスカ、その子。

え、悪魔を治療しちゃったの？ 聖女なのに？ 教会の人間なのに？

その上、追放？ あはははははは、バツカみたーい！」

私は頻りに笑う。その面白い聖女様を。

それにしてもその聖女様、いえ『元』聖女様は面白い子ね。

敵対している悪魔を治療しちゃうなんて、本当に『面白い』子。

まるで、「悪魔にもいい人はいるんです！」と言っちゃやうような、

純粹無垢の温室育ちの花のような、

その行為がどれほど悍ましい事か、まったく解っていない『優しい子』なんでしょうね。

その結果、聖女をはく奪されて魔女になるなんてねえ。

同情は一切しないけど！

それにしても、どうして教会はその子を追い出しちゃったの？。

それじゃあ悪魔に、『どうぞ貰ってください』と言ってるようなものじゃない？

はつきり言って馬鹿でしょ？というか、バカだわー。きやはははは！

その子を日の目につかない場所に監禁するか、それが憂いを断てばいいのに。

私ならそうするのになあ。

めんどくさいことを後回しにすると、余分なツケを払わされちゃうんだから。

そういうえば『皆殺しの司教様』の方も、同じように追放して野放しにしたんだっけ。

うん、やっぱ教会は馬鹿だわ。自分で自分の首を締めてる馬鹿だわ。

まあ、私には関係ない事ですしー？教会がどうなろうと知ったことじゃないですしー

?

「質問はそれだけ？なら帰っていい？」

私ね、体中ベとベとでね？もう我慢の限界なの？

これ以上引き留めたら・・・？」

「すみませんでした！ですから殺すのは勘弁してください！死にたくないんで！」

私の手から見えるナイフを見て慌てるフリードに、私は少し呆れた。

彼の『プライドなんて糞喰らえ！俺は生きるんです！』の姿勢は、私も尊敬してしま
う。

最も、それ故に彼を信用なんて出来ないんだけど。

「それじゃあ、さようならフリードさん。さようなら！さようなら！」

もう二度とお会いたくないので、どこかでくたばってくださいねえ！」

私はそう言いながら、フリードに手を振って歩いて行った。

「私に何か用かしらあ、汚い羽の．．．カラス？鳩？あ、九官鳥!？」

それとも、天使から無様に転落人生の、ダ・テ・ン・シ・ちゃんと呼んだ方が良い？
答えは聴いてないし、聞く気もないけどお」

「下等な人間が、私を侮辱するな!」

その後、あてもなく流され、多くの悪魔を処理してきました。

時には、堕天使の方に喧嘩を売られて、十倍+利子をつけてお返したり、
私よりも薄い、ぺらっぺらのオブラートみたいな信仰心のエクソシストを、

私の説法で改心させて、煉獄に叩き込んだりと、愉快的旅ではあったのですが、

気付けばカラスに取り囲まれている、わ・た・し。

私、貴女方に喧嘩を売る気はないんですけどね？

なんでそんなに睨んでくるのー？

え、ガンでもつけてるの？か・わ・い・い・ぞー？きやはははは！

しょうがないからあ、取りあえず、落ち着かせましょうか。

「まあ恐い恐い。」

まるで怯えた子供が『自分は凄いんだぞー！』と、

精一杯の見栄を張っているような、そんな怖さを感じちやう！

可愛くなーい！」

「キサマアー！」

あれ？おかしいですね。心を開いて話したのに、勝手に怒られてしまったわ。

私の考えだと、私の言葉に感動し、その場で五体投地をすと思うたのに。

やつぱり、もう少し柔らかく、子供でも解りやすく言えば良いのかしら？

「そんなに怖い顔をしないでください。」

余計に可哀想に見えちゃいますよ、カワイイ、だ・て・ん・し・ちやん？」

「もういいわ、教会の人間だろうと関係ない！」

エクソシストだろうと、私を侮辱する奴は死ねばいい！」

何やら相手の方は、たいそうご立腹の様子。

あらあら、なにやら光の槍まで出しちゃいましたよ。

もう、何で勝手に怒るんですか！正直、意味が解んなあい！

ところで、あなた、レイナーレ？って言うんですか？

まあ、どうせ刹那で忘れちゃう名前ですからいいですけどー？

あ、他にもお連れさんがいっぱい！わあー、わたしピンチですー。

まあしかし、いたいけな私を殺そうとするなんて、どう見ても貴女が悪いですよ？

うん、悪いのは貴女で、私は被害者。はい、決定！

と、いうわけで！

「これで正当防衛成立ですなぁ？」

私は朱いコートから、銀製の剣を取り出すと、その切っ先をレイナーレ＋その他に向けてる。

主よ、今日も、私は元気です。元気に善行を成しています。

ですので、パパとママ、妹と妹の恋人には、

天国でスイートルームの好待遇をお願いします。

あ、私はNO THANK YOUなので。

「取りあえず滅ぼしちやいますか」

死人に口なし。私は金無し。そして世界に神はなし。
愉しく遊びましょ？

「あら？ 貴女、悪魔ですか？ しかもその朱い髪、私のフードと一緒にですね！

まさか、生き別れの家族？ パパ！ ママ！ リーシャ！ それにクリスマス！ 私、家族を見つけ
たわあ！

どう考えても人違いだけどねー！ きやはははははー！

私はそういつて、一しきり笑う。

そんな私の姿に、朱い髪の美少女や、金色の髪の少年、白髪の少女、黒髪の女の子に、
茶髪の男の子が、呆然とする。なんか白い修道女もいるけど。

あれ？ なに？ 白けるわー。ノリが悪いわ、この子たち。

「この人、何を言ってるの・・・？」

「部長、気をつけてください。滅茶苦茶ですけど、この人、ただ者じゃないですわ」

「この頭の痛くなる喋りは、イカレ神父を思いしちまうぜ・・・」

「ひっどーい！ 私、敬虔たる神の徒ですよー？」

イカレテルなんて言わないでください！ 怒りますよ！？

真面目過ぎて追い出されちゃった程なんですから！」

そう、真面目に悪魔を殺してきた、敬虔なる私をもつて他に、
一体誰が敬虔と言えるのでしょうか？ 言えないですよね！ はい、決定！

「それにしても、あなた達、悪魔？ 悪魔ね？ 悪魔でしょ!？」

じゃあ、正義と微笑女の私が、お仕置きしてあげるね！」

そう言つて、私は、背負っていた鞆から、チェーンソーを取り出し、エンジンをふかせる。

その姿に、悪魔たちは驚くが、そんなの別にどうでもいい。

シスターっぽい子も驚いてるけど、それこそ別にどうでもいい。

朱いフードが風に煽られて外れ、くすんだ灰色の髪が揺れる。

悪魔に傷つけられた、私の醜い顔の傷が見られるけれど、別段どうでもいい。

「さあ、狼さん！一緒に遊びましょう！」

そして満月を背に、私は笑った。

この世界に加護は無し

「この魔女め！」

周りからの罵声と憎悪と石などが投げられる。

投げつけられた石は、そのまま華奢な少女へと当たった。

少女の出で立ちは悲惨の一言で、薄汚い襦袢を纏っているだけだった。

民衆から投げられた石によって、襦袢からのぞいた腕は所々青く、体中は擦り傷だらけ。

その姿を見ても、民衆は誰一人として彼女を憐れむことはない。

寧ろ、まるで化け物を見るかのように、その目は蔑視を孕んでいる。

『神の奇跡を語る魔女め！教会の命により、貴様を公開処刑にする』

少女に下された言葉によって、彼女は全てを失った。

暖かかった家族も、親しかつた友達も、何もかもを失った。

必死に私を守ろとした家族は、魔女に毒された者として殺された。

私の不思議な力を凄いと言ってくれた友人たちは、大人たちによって引き離された。

「どうして・・・」

少女はただ、この世界で生きてかったただけだ。

本来の運命ではなく死んだ少女は、『神』によって力を与えられ、この世界に生まれ変わった。

『貴女の為に、加護を与えましょう』

少女に与えられた力は、『奇跡の魔法』だった。

少女が助けたいと思えば、その人に信じられない奇跡がもたらされた。

目の見えなかった老婆の目は開き、腕が動かなかった男の腕が動くようになった。

そうした奇跡としか言えないことを、彼女はこっそりと使った。

全ては、困っている人を助けたかったからだ。でも、それももう終わり。

不運か、悲劇か、それとも運命か、その力を聞き付けた教会が少女の町にやって来たのだ。

教会の使徒は町の人間に対し、『不思議な力の持つ存在を保護しに来た』と言った。

誰が話したのかは判らない。だが誰かが少女のことを話し、そして少女は魔女とされた。

「どうしてよ……」

少女はただ、この力で人の為になりたいと思った。

新しい世界に生まれ、新しい夢に向かっていった。ただそれだけだった。

しかし、その願いは叶わない。もう叶うことが出来ない。

『神』からもたらされた力は、今や『魔女』の力と烙印を押された。

教会のたつた一言によって、彼女の願いは踏み躪られた。

「魔女め！よくも俺たちを駄目してくれたな！」

「この恐ろしい化け物に死を！」

「死を！」

教会の使徒たちによって、少女は高台に置かれた杭に縛り付けられた。

そしてその下には、多くの薪が敷かれている。

『これより魔女の処刑を行う！』

教会の使徒によって放たれた火は、薪へと移り、ぼうぼうと燃えだした。

「助けて」

少女は叫ぶ！

嫌だ、死にたくない。どうして私がこんな目にあわなきゃいけないの？

私は人の為に力を使ったのに、どうして死ななきゃいけないの？

「助けて！誰か助けてよ！」

必死に叫ぶ少女の声に、誰も何もしない。誰もが少女の死を望んでいるだけだ。

どうして？私は皆を助けたのに、どうして誰も私を助けてくれないの？

少女が抱いた感情は、瞬く間に増殖する。

散々私の力に縋っておいて、誰も助けてくれない町の人間が、友達が憎い。

こんな目にあわせる、私を魔女と言いつ放った教会が憎い。

私を否定したこの世界が、何もかもが憎い。

煙によつて咽びながらも、少女の憎悪は止まらない。

ああ『神様』、私の願いが叶うならどうか聞いてください。

そして魔女は願った。

『この世界に呪いあれ』

よく解らない『神』と言う存在によつて、少女は前世で命を失くした。

それは少女からすれば理不尽であり、不運であり、あまりにも惨い仕打ちだった。

しかし、彼女は『神』を恨むことは無かった。

むしろ『恨んでも何も変わらない、憎んでも何もか返つて来ない』と諦めていたのか
もしれない。

『神』は言った。

『現世に蘇ることは出来ない。だが、別の世界でなら生きることが出来る』と。

少女は望んだ。

『ならば、現世に生きていく、私の家族を幸せにしてください』

『そして別世界へと旅立つ私に、新しい家族と生きることが許して下さい』と。

少女の願いは単純明快だった。

『家族と生きたい』それだけだった。

そして旅立つ少女に、『神』は加護を与えた。

それは、世界に干渉してしまった、命を奪ってしまった『神』なりの善意だった。

新たな世界に生まれた少女は、新たな家族と共に生きていた。

それは少女にとっては望んでいた願いであり、望んでいた夢であった。

一見、何の変哲もない、それこそ普通の願い。それが彼女の望んだことであった。

そんな中で、少女は他と違うところがあった。

1つ、少女は過去の記憶、前世の記憶を持っていた。

それは彼女にとっては幸運なのか、不幸なのかは解らない。

でも、それでも彼女は幸せだった。なぜなら、彼女は家族と共に生きていたからだ。

もう一つ、少女が他の人間と違っていたのは、特別な力を持っていたこと。

それは『傷を癒すこと』。

ちよつとした擦り傷程度なら簡単に治すことが出来た。そう、それだけのことだ。

それでも少女は恐れた。この力を知ってしまったら、家族が拒絶するかもしれないと。

だが少女の思いとは逆に、少女の家族はその力を祝福した。

『その力を恐れてはいけない。それを含めて、お前は私たちの大切な娘だよ』

『ちよつと変わった力があつただけ。それだけの話じゃない』

『私、お姉ちゃんみたいなのが欲しい！』

他愛の無い言葉。でも、少女にとっては救いの言葉だった。

少女は本当の意味で、家族になれたと思うことが出来た。

家族の言葉を受け、少女には夢が出来た。それは、この力を使って人の役に立つこと。

家族が認めてくれたこの力で、家族に誇れることをしたい。

あまりにも曖昧で、不明瞭で、それでいて子供染みた夢。

それでも少女にとっては、大切な、新しい夢であつた。

そう、夢だった

少女は新しいノートを買いに出かけた。

いつも通りの道を行き、学校近くの文房具店でノートを買った。

店のおばちゃんが、笑いながら話しかけてくれた。

帰り道の途中で、犬と散歩をしていたクラスメイトと出会い、明日また会おうねと言った。

夕食のハンバーグを作って待っているであろう、家族の下へとスキップしていた。そして家の門を通った瞬間、少女は違和感を感じた。

まるで、水中へと潜ってしまったかのような息苦しさと身体の動き辛さ。

そんな感覚に襲われ、不安になって家へと走り、家族のいるリビングへと走った。そして少女は見てしまった。

まるで部屋でペンキをぶちまけたように、壁、天井、床が真っ赤に染まっていた。

そしてリビングに置かれているソファに、全く知らない女の人が座っており、

「あら、遅かったわね」

女性の右手は、妹の胸を貫いていた。

「どうしてだよ」

少年は言葉を零した。

「ふざけるな……」

少年は、自分の未来を夢見ていた。

『神』という存在から特別な力を貰い、自分は幸せになれると信じていた。

その力はまるで、ゲームのような、漫画のような、アニメのような力だ。

「これで俺は幸せになれる……！前のようなクソツタレな人生なんかじゃない。

俺は俺のためにこの力を使うんだ！そして、楽しく暮らすんだ！」

それは少年にとつての夢。人から見れば、ただの我が儘で子供染みた夢。

しかし、それは縛られ続けた少年にとっては充分な夢だった。

少年は自分のために力を使った。

「ふざけるなよ……」

少年の言葉に怒りが、憎しみが、呪いが宿る。それは自分の未来を壊した存在への憎悪だ。

少年からすれば、目の前にいる存在は雑魚だった。

レベルの上限まで鍛え上げ、最強の装備を身に纏い、無敵のゲーム主人公に対する、始まりの村の雑魚モンスターのような存在だった。

歯牙にもかけなかつた存在だったからこそ、少年はあえて見逃していた。

それこそ少年が少し本気を出せば、それらは一瞬にして灰へ塵へと変えることが出来た。

面倒くさかった、それだけの理由で見逃していた、それだけだった。

だが、それが少年の慢心であり、驕りであり、情けであり、不幸へのきつかけとなつた。

そいつが俺の幸せを奪い、俺の未来を踏み躪つた。

雑魚の分際で、ゴミの分際で、俺の輝かしい未来を踏み潰しやがった。

許せない、いや許せるわけがない。

見逃されたことにすら気付かず、それを知ることもなく、そいつらは少年の尾を踏んだ。

ならば、それ相応の罪科を、賠償を、全てに支払わせなければならぬ。

これは正統なる報復であり、復讐であり、逆襲である。

少年に新たな夢が出来た、それは気に入らない存在を根こそぎ淘汰すること。

出来るだけ惨く、残酷に、そして真綿で締めるように、ゆっくり復讐すること。

罪科は単純にして明快、『少年を怒らせた』

「殺す、絶対に殺す、全て皆殺しにしてやるぞ糞がああああああああ！」

少年の声が、空に響いた。

そしてこの世界に、新たな脅威が生まれることになる。

彼らは皆、ただの人間でありながらも、不思議な力を持つていた。

奇跡を起こし、死者を引き連れ、あらゆる傷を直し、あらゆるものを粉碎し、

この世界にない魔法を操り、神のごとき力を振るい、あらゆる勢力の脅威と化した。

『まあ、予想できることだよね』

誰かがそう呟いた。

真つ黒な世界

「いや……来ないで……」

涙と鼻水などでくしゃくしゃになった顔を歪め、少女は願う。

目の前の立っている赤頭巾に、少女は掠れた声で訴える。

そしてその返答は残酷で、

「え?」

何かが弾ける音と共に、少女の右足が吹っ飛んだ。

見れば、赤頭巾の右手には、回転式拳銃が握られており、その銃口からは煙が漏れていた。

「あああああああああああ!?!」

少し呆けていた少女は、襲い来る激痛に声を上げて泣き叫んだ。

焼き鏝を当てられたような、焼け付くような痛みに襲われ、

喪った右足という光景を目の当たりにすれば、誰だつて叫ぶだろう。

千切れとんだ断面を必死に抑えながら、少女は悲鳴を上げる。

だが少女の必死の行為も空しく、傷口からは赤い血が流れ出ていく。

傷口を抑えるのに必死だったせいかな、少女は目の前の赤頭巾のことを忘れていた。

なので、赤頭巾の接近を許し、髪の毛を掴まれて地面に叩き付けられても仕方なかった。

叩き付けられて傷ついたのか、額から赤い血が滲みだす。

痛み呻き、地面に押さえつけられて身動きが取れない少女が見たのは、

自分の目の前に向けられた銃口だ。

「どうして……」

少女は呟く

「どうして……!」

何もかもを奪われた少女は叫ぶ。

痛みに呻き、意識も次第に失いながら、目の前に自分を殺す銃口を突き付けられつづも。

「私たちが何をしたって言うのよ……! どうして、みんなを殺したのよ!

なんで私たちに酷いことをするのよ! ねえ、答え」

返答は銀の弾丸だった。

赤頭巾は、もはや物言わぬ少女を見下しながら、指で十字を切る。

それは少女の冥福か、それとも皮肉のつもりなのだろうか。

赤いフードの下から覗く、濁りきった青色の目は、

背中から黒い翼を生やした少女を、ただただ見下していた。

「主よ、私は今日も善行を成しました」

赤頭巾の声は、綺麗な声だった。

「なぜ？なぜ私に逆らう？！私は貴様の創造主だぞ！」

白衣を着た男は、目の前の少年に叫ぶ。

目の前の少年は、雪のように真っ白な髪で、顔は能面のように無表情で立っている。

ただ、その手には闇を形にしたかのような、漆黒の剣を握りしめていた。

その剣は、まるで生きているか、時折赤い線が走っている。

まるで脈を打っているかのように。

少年が一步進む。

「ひいひいひい！」

白衣の男は情けない声を上げながら、逃げようと身体を反転させた。

が、そのまま回転しながら地面に転げ落ちた。

一体なぜ?と思ひ、後ろを見ればそこに答えはあつた。

なぜなら、そこに二本、足があつたからだ。

上等な革靴を履いていて、黒い裾が被さっている足があつたからだ。

つまり、自分の足は……

「があああああつああああ!」

襲い来る痛みと喪失感に、男は叫ぶ。

「なぜだ!なぜこんなことが出来た!」

お前は私に逆らえるはずがないんだ!そのように教育していないのに!」

目に涙を滲ませながら、男は叫び続ける。

その一方で、両手で身体を引き摺らせながら、

少しずつ、ゆっくりと、目の前の少年から距離を取ろうとする。

少年は、剣を握つたまま立ち尽くしている。

「私はお前の!お前たちの創造主だぞ!わざわざお前たちを作つた私に!

お前たちは牙を剥いたのだぞ!解っているのか!」

叫びながら、男は少しずつ距離を取りながら、内心ではほくそ笑んだ。

このまま少し行けば、地下シェルターへの入り口がある。

そこに行けば、たとえ戦車であろうと簡単に入ることは不可能。そして十分な食料は詰め込んである。

そこにさえ逃げ込めば、あとはこの事態を教会に報告し、応援が来るまで待つだけだ。私に逆らった欠陥品どもめ！私に逆らった罪を償わせてやるぞ！

内心、目の前の少年に罵詈雑言を叫びつつ、男はひたすら喚き散らす。

そしてシエルターの入り口に差し掛かり、

シエルターのシャッターを下ろそうとスイッチに手を伸ばそうとして、その手が落ちた。

「は？」

見れば、自分の腕が肘からなくなっており、壁には剣が突き刺さっていた。

何が起こったのか判らなくなった男だが、再度来る痛みを意識を取り戻すと、

さつきまで離れていた少年が目の前に立っていた。

そして、壁から抜いた剣を、自分の目の前に突き付けている。

黒い刀身は、男の醜く歪んだ男の顔を映している。

「なぜだ……」

男は喚く。

「貴様らのような、ただ戦うためだけに作られたクローンごときが！」

創造主の私に逆らうなど、神に背く愚行だというのに！

貴様らのような欠陥品など、真っ先に処ぶ」

言い終わる前に、男の身体は開きになった。

目の前で内臓や脳みそを地面にぶちまけた死体を見下しながら、少年は剣を撫でた。男の血で真っ赤に染まった剣は、まるでその血を吸うかのように、

数度脈を打てば、元の黒い刀身へと元に戻った。

「ありがとう」

誰に言ったのか、少年はそう呟く。

それに呼応するかのように、黒い剣がドクンと脈を打つ。

くるりと少年が振り返ると、目の前には少年と同じような、

白い髪の少年少女たちが大勢立っていた。

各々手には、剣や槍、斧や弓と言った武器が握りしめられ、

その刃先は全て、赤く染まり、液体が滴っていた。

その姿に、少年は剣に視線を向け、苦笑しつつ、再び彼らに目を向ける。

「それじゃあ、行こうか」

少年はにっこりと笑った。

まるで闇に支配されてしまったかのように、光さえない世界。

もはや生物が生きることも不可能な荒地だ。

その再奥に、椅子に腰を掛けている神がいた。

それは司祭のような礼服を纏い、頭には王冠を被った、骨の神様だった。

骸骨の神様は、椅子に深く腰を掛けつつも、

何もない眼窩から人間の世界で起っていることを見通していた。

しばらくして、肉のない肉体を軋ませた。

『カラスやコウモリどもめ、相も変わらず好き勝手しおる。

その行いが世界を歪めていると何故気付かぬ』

握った骨の手から音が鳴る。

『なぜ兄たちは、こやつらに協力しようと考えておるのだ。

生命の循環を弄ぶこやつらと手を組むなど、愚かにもほどがあるというのに』

骸骨の神様から黒いオーラが溢れ、

傍にあった岩がそのオーラに触れ、一瞬にして朽ち果て、砂となって崩れ去った。

「骨じいちゃん」

『むっ？』

突然の声に、骸骨の神様は振り返る。

そこにいたのは、自分の愛しい孫娘だった。

黒い髪を蛇のように揺らめかせ、黄金の瞳を輝かせ、口からは牙を生やし、まるで人狼のような風体をしている。

もはや死者と死神しかいないこの世界で、少女は平然と歩いている。

『おおう？こちらに来るのは珍しいのお。一体何の用か？』

声帯のない骨の身体だというのに、その声は優しく聞こえる。

「親父が心配してたし、私も心配だった。親父は来れないから私が来た」

孫娘の言葉に、骸骨の神様は笑った。

『フアフアフア！そうか、儂を心配できたか。何とも儂思いの孫娘じゃな』

「それで、何かあったの？」

『なに、カラスとコウモリたちが煩くてな』

「骨じいちゃんが言ってた、嫌いな奴等？」

孫娘の言葉に、神様は頷く。

『そうじゃ、己の目的の為に、何食わぬ顔で生命を弄ぶ、唾棄すべき者達。』

だというのに、兄たちはそいつらと手を組もうかと考えておる』

神様の身体から再びオーラが漏れる。

すると神様の右手に孫娘がそつと触れ、そのまま身体を預けてくる。
「大丈夫だよ、骨じいちゃん。」

スケベで屑でロクデナシの雷じいちゃんだつて馬鹿じゃないと思う。

骨じいちゃんの意見が正しいって分かれば、きつと考え直してくれる」
『そう言ってくれるのはお前だけじゃよ』

「ん」

神様は、骨の右手で、孫娘の頭を撫でる。すると、荒れていた心がすつと静まってい
く。

「それに」

『むっ?』

孫娘の言葉に、神様は顔を向けた。

「仮に無視されても、私や親父は骨じいちゃんの味方だよ?」

なんだつたら、私が骨じいちゃんの嫌いな奴らを皆殺しにするからさ」
神様に向ける孫娘の顔は、とても晴々していた。

その瞳はまるで血のように赤黒く、彼女の口は三日月の如く裂けていた。

『フアフアフア、本当に濃思いの良い子じゃ』

神様は優しく孫娘の頭を撫でるのだった。

「チエック」

「おいおい、また俺の負けかよー」

机の上の上に置かれたチエス盤を見ながら、銀髪の男が愚痴る。

しかし、言葉とは裏腹に、その顔は笑みを浮かべており、心底楽しんでいる印象だ。口元をニンマリと歪め、男は目の前の相手を見つめる。

紫色の髪一つに束ねた女が、カップに注がれた紅茶に口に運んでいた。

「相変わらず容赦しないよね、君ってさ。」

「いい加減手加減してくれない？ 一方的なワンサイドゲームで俺を叩きのめして楽しい？。」

「ええ、楽しいわよ。」

「一方的に相手を倒すなんて、ゲームであれ、戦いであれ、当たり前前に行うことではない？。」

勝てる戦いに慢心して勝機を逃すなんて、それこそ愚の骨頂よ。

それにいくら叩きのめされても、性格が振じ切れた貴方にとつては、何の意味もないでしょ？。」

「まあねー！」

相手の言葉に、銀色の男は机を叩きながら笑う。

男が机を叩く度に机が揺れ、チェス盤の駒が倒れた。

しばらくして、男の笑いが収まると、女が自分を見据えていることに気付いた。

「おいおい、そんな怖い顔をしないでくれよー？俺ちゃん、蚤の心なんだよ？死んじやうよ？」

「だつたらすぐに死になさい、その方が世界のためよ」

「うわー、真顔で言つたよ!?君、マジでそう思つてるの? ショックだわー！」

身体を抱きしめ、大げさに叫ぶ男に、女は溜息を吐いた。

さつさと終わらせて帰ろうと考えたついた。

「それで要件はなに?君の孫のことなら、私が言つた通りにすれば問題なかつたはずだが?」

「うんうん、君の言う通り。君の言葉に従つたら、見事に懐いてくれたよ！」

「いやあー、おじちゃん、何故か孫に嫌われてたからね!なんでだろうね!!」

「鏡を見て、胸に手を当てれば解るわよ」

「いけしやあしやあと語る男の言葉に、女は目を細めた。

「まあ、あとは貴方の行動次第よ。依存させるのも良し、突き放してぶつ壊すのも良し。」

私を巻き込まなければどうだっていいわ」

女はそう言つて席を立ち、部屋扉へと足を運ぶ。

「ところでさー」

扉の手をかける寸前に、男が声をかける。

「今の悪魔についてどう思つてるかにやー？おじちゃんは何文句あるんだけどさ！」
「私に手を出さなければどうだっていいわ」

女はそう答えると、扉を開けた。

男は必死に逃げていた。

衣服は乱れ、履いていた靴は既に脱げ、靴下は泥だらけだった。

息は酷く乱れており、時折呼吸が止まるほどだ。

男は荷物を運んでいた。

それはとても大切なもので、男を守る為に何人もの護衛がいた。

彼らは教会の騎士であり、悪魔殲滅者だった。

男が運んでいたのは、かの有名な聖剣の1つだった。

一振りで何百もの悪魔を消滅させる力を持った聖剣だった。

ゆえにその力を恐れた悪魔や、聖剣を奪おうと画作する墮天使どもを警戒し、教会は護衛を派遣したのだった。

だが、彼らはその役を全うできなかった。ようは死んだのだ。

しかも悪魔や墮天使ではなく、たった一人の化け物に。

それは突然現れた。

まるで自分たちが来ることを解っていたかのように、そいつは道のど真ん中に立っていた。

始めは悪魔か墮天使かと警戒したが、それからは何の力も感知できなかった。

だがその出で立ち、山の中にいるのは不自然な恰好でもあった。

護衛の一人が、警戒を取りつつもそれに近づいた。

「貴様、一体なにものだ」

腰に携えた光の剣を握りながら、それに尋ねた。

そしてその返答は、

『それ、おいしそう』

それは飛びかかった。

まるで悪夢のようだった。

それは光の剣に齧りつくくと、バキリと音を立てて噛み砕き、咀嚼し、ゴクンと嚥下したのだ。

『まずい』

そういうと、それは右手を傍にいた護衛に向けて薙いだ。

その瞬間、その護衛はズルリ斜めにズレ、上と下に分かれた。

その光景に、男と護衛は一瞬呆けるも、直ぐに各々武器を取り出し、男は大事な荷物を抱える。

すると、男はそれと目があつてしまった。

まるで全身を滅多刺しにされたような幻覚を見た。

それは自分を見つめていた。

『それ、おいしそう』

男は護衛の一人に手を引かれ、荷物を抱えて走り出した。

それも男を追いかけようと動くが、それを残りの護衛たちが阻む。

なんとしても、荷物を守り抜くという使命に殉じる姿だった。

その後、男と護衛は、必死に化け物から距離を取ろうと走った。

息も絶え絶えになりながら、降ってきた雨にぬれ、寒さに体の熱を奪われ、

泥に足を取られながらも走った。

しばらくして、流石にここまでくればと、少し息を整えようと足を止めた。

互いに息を整えながら、二人は互いに今の出来事を語る。

あれは一体何なんだ？と。

互いに言い合うなか、乱れた息も整い、また走り出そうとした瞬間、

男の目の前で護衛の首が飛んだ。

切り落とされた首からはまるで噴水のように赤い滴が溢れる。

『みいつうけたあ』

そこにいたのは、体中を剣や槍で貫かれながら、こちらを見ている怪物だった。

男は叫び声をあげながら走り、そして今に至る。

もはや呼吸すら困難で、意識も途切れはじめた瞬間、男は地面に叩き付けられた。

見れば、怪物が自分を抑え込んでいたのだ。

殺される！男はそう思い、もはや体裁を省みず、無様に命乞いをした。

自分は荷物を運んでいるだけだ、だから見逃してくれ。

もはや何を言っているのか男自身も分からなかった。

『これ、ちようだい』

怪物は男の持っている荷物に手をかけた。

それは教会から託された大切な聖剣。命に代えても死守しろと言われた聖剣。だが、命の危機に晒されたこの状況で、その命令は意味をなさなかつた。

男は、命が助かるならと、怪物にそれを渡すと、わき目を振らずに走って行つた。

怪物は、お目当ての聖剣を取りだすと、直ぐに齧りついた。

先ほどと同じように、バリボリと音を立てて咀嚼し、嚙下する。

すると、怪物の身体に光が満ちる。

『うん、やっぱり思つた通り。良いものを食べると、私も強くなれる』

そういうと、怪物は残りを同じように噛み砕き、柄さえも喰らい尽くした。

『さて、次はどんなものを食べようかな』

着物を纏つた少女は、まだ見ぬ武具に心を躍らせ、口元を歪めるのだった。

これは様々な世界が、様々な要因で結ばれ、全てが真っ黒になつた世界。

恋をした化け物の少女がその結末に狂い、

鎧に身を固めた少女が、魔に雷霆を振りかざしているかもしれない。

笑顔を貼りつけた聖女が、人々に笑顔を振り撒き、

小さな白猫が、野に放たれた獅子の如く暴れ、

魔を払う斬り姫が、その刃を鬼神の如く振るっているかもしれない。
そんな真つ黒な世界。

イマジナリーフレンド（没予告）

『貴女を歓迎するわ、悪魔としてね！』

『え、ええ!? な、何なんですか一体!?!』

所々に見える、塗装の剥げた壁や、蜘蛛の巣の廊下を通り、文字の書かれたプレートのある部屋に通された私にかけられた言葉だ。

私にとって彼女は、声をかけられることさえ、

嬉しいと思うってしまうほどに憧れの存在の一人だ。

まるでルビーを溶かした様な、炎を纏ったような、朱い髪を流し、

全てを見通してしまうような、そんな綺麗な瞳をしていた。

『あらあら、○○○さんは随分と緊張してますね。』

××、○○○さんは何も知らないのですから、説明しないといけませんわ』

『そうね▲▲、私も急ぎ過ぎたわ。取りあえず、説明するわね』

××と話をしていた▲▲も、私にとって憧れの先輩だ。

長い髪を総髪にし、漆黒よりも煌びやかな黒髪で、

微笑む顔はまるで母性を表したかのように、見る者を穏やかにしたと思う。

『あ、あの！▲先輩も一緒にいますけど、こ、これはどういうことですか!』

私のいるこの場所で、有名な二人の先輩を前に私は混乱した。

一体これはどういうことなの？

『あら■、○○○○さんに説明してないの?』

『詳しい話は、ここでした方が良いと思ひまして』

×先輩に問われ、私を案内してくれた一つ上の■先輩が答える。

×先輩は、黄金と見間違ふほどに、綺麗な金髪で、

その顔は物語に出てくる王子様のように、凛々しく、優しく、そして精鍛な顔立ちだ。彼に恋する友達も多く、頻りにアタックをかけようとするも、

互いにけん制してるみたいで、なかなか動けないみたい。

それに、噂では×先輩の恋人とも言われており、その噂も大きな壁になっているみたい。
い。

■先輩に×先輩は『それもそうね』とため息を吐いて、私に振り向いた。

『そうね、説明させてもらうわね。でももう少し待つてくれないかしら?』

!あと2人ほど来るの。』

『×遅れてすみません!』

『すみません』

× 先輩が言うやいなや、扉が大きな音を立てて開かれ、二人が入ってきた。
 × そしてその2人を見て、私は驚く。

『え、★★★先輩に、??さん!?!』

『○○○サン・・・?!』

私の目に入ったのは、噂に聞くセクハラすることしか能の無い悪名高き先輩と、私のクラスの同級生、??さんだった。

雪のような真つ白の髪で、こじんまりとした姿に愛くるしさを覚える者も多く、そして名の通り、小猫のようにしなやかな動きで、その愛くるしい度は更に倍増！それゆえにマスコットとも呼ばれてもいる。

『あら、??、○○○さんと知り合いなのね。』

思うことはあるかもしれないけど、とりあえず、○○○さんに説明するからね』
 そして説明を受けた私は多くのことを知った。

悪魔のこと、天使のこと、墮天使のこと、皆がこの町を守る為に戦っていること。そして、私の力がそれを助けることが出来ること。

『わ、私、今でも何が何だか分かりません。』

で、でも！皆さんがこの町のために頑張っていることとか、

私のこの力が、皆さんの、町のためになるのなら、協力させてください！』

『そう、その言葉が聞けて嬉しいわ。じゃあ、○○○、一緒に頑張りましょう』
『はい！』

××先輩の言葉に、私は皆に満面の笑みを零した。

「おい！おい！起きろ！」

私の名を呼ぶ声に、私は閉じていた目を開けた。
目の前に入ってきたのは、黒髪に感服を纏った、時代錯誤甚だしい男だ。
はつきり言つて目に悪い。

特に無理やり起こされた私にとっては。

「黙れ。おまえの声は私をいらつかせる」

「だったら会議中に寝るな。何回注意させるつもりだ」

私の言葉に、男が反論する。

私と男がいるのは、先ほど出てきた、古い木材の部屋ではなく、

趣も侘び寂びもない、コンクリートで囲まれた部屋だ。

その中に、円系にしつらえた机と、それを囲むように置かれた椅子があり、

その一席で私は寝ていたようだ。

普通ならば、会議中に寝る私が悪いのだが、生憎私は機嫌が悪い。

「なら眠くならない会議にしろ。はつきり言つて今日の会議は退屈過ぎる」

「お前なあ．．．」

私の自己弁護に、男は諦めを思っただろうが、顔に出ている時点で丸判りだ。

だが、埒が明かないので、私は謝罪する。

「分かったよ、次からは気を付ける。で、会議はどうなった？」

「その言葉、俺は何回も聞かされているんだがな．．．」

とりあえず、俺たちの行動方針は決まった。

俺たちのやることは、勝手に人間たちを搾取しておいて、

世界を守護している気である三勢力を打倒し、人間たちを守ることだ」

男の言葉を、私はただ聴くだけだ。

「旧魔王派が何やら良からぬことを考えているようだが、

団の方針で互いに干渉をしないと決めているから何も言えん。

まあ、ことが成されれば、

あいつらは俺たちの世界に干渉するのを最低限に控えると取り決めたんだ。

そこは自分たちの沽券に係わるだろうから、信用は出来る」

「どうだろうな」

私の言葉に、男はにやりと口元を歪める。

「仮に約束を破ったとしたら、その時は俺たちで奴らを打倒すればいい。

もとより、俺たちと奴らは利益のために集まっているのだからな」

「あらあら、それは怖い」

私も同じように口元を歪めつつ、男を窘める。

ふと私は、話を変えようと他の派閥が起こしたことを問いかけた。

「ところで、あの戦闘狂はどうした？」

あの御坊ちゃんは、先日の殴り込みで随分と楽しそうだったみたいだけど」

「ああ、随分と楽しそうだったみたいだぞ。

なにせ、自分と同じ龍の片割れである赤龍帝と戦えたみたいだったからな。

帰ってきた後、随分といい顔をしていたみたいだ」

「へえ、あいつらとやり合ったんだ。私も雑ざりたかったなあ」

私の言葉に、男は私をじっと見つめる。気持ち悪い。

「良かったのか？赤龍帝のいるグループは、お前の……」

「ああ、いい経験をさせて貰ったよ。ええ、本当に……！」

私の歪む顔に、男はもはや何も言わず、ただ、黙ったままである。

「さて、方針は決まったんでしょ？」

だったら、私たちは私たちのために動くだけ。

そうでしょ、曹操？」

「そうだな。」

俺たちは俺たちの目的の為に動こう。いくぞ、ナコト」

「了解」

目の前を歩く曹操に、私は少し口元を歪め、その後ろを着いて行く。
早くみんなに会いたいなあ……。

別に相手がりアスじやなくても良かったよね？

「いい加減にしてちょうだい！」

俺の目の前で部長が声を荒げ、その声が部室内に響いた。

激昂する部長の視線の先には、ニヤケタ顔のキザったらしいいけ好かねえイケメン悪魔がいる。

赤いスーツを着て胸元を開けた格好の金髪で、

貴族のボンボンよりも、どっこのホストの方が似合っている格好の悪魔。

それが俺の印象だった。

そのホスト悪魔の名前はライザー・フェニックス。

なんでも、部長の婚約者らしく、ここ（人間界）に来たのも、結婚の話をするためだとか。

部長が俺のベッドにやって来た理由ってのは、もしかしてこれに関する事なのか？

今朝の部長の行動と現状を見て、俺は部長の行動を思い出した。

そんな俺を余所に、部長はライザーに声を荒げる。

「何度も言っているはずよ、ライザー！私は貴方と結婚する気なんてないわ！」

「それは知ってるさ、でもなりアス？それは君の理屈でしかない。

解っている筈だろ？この婚約に関しては、両家ともに話がついているはずだ。

君の我が儘のせいで、俺だけじゃなく、どちらの家にも迷惑が掛かっているんだぞ。

それに、君も解っているはずだ。純血の悪魔がいかに大切なのかを」

声を荒げる部長とは違い、ライザーは冷めた目で部長を見ている。

なんだよその目は！部長をそんな目で見るとんじやねえぞ、この焼き鳥野郎！

俺は内心、このライザーって焼き鳥野郎に酷くムカつくが、必死に黙った。

だがこのままだと我慢の限界が来ちまいそうだ。

「それは両親が勝手に決めたことよ。それに私だって次期当主、家を潰すつもりはないわ。」

それこそ、婿養子を迎え入れることも案としてしてる」

部長は一端口を閉じ、はっきりと拒絶の意志をもってライザーに言った。

「でもそれは貴方じゃないわ、ライザー。私は私がいいと思った人と結婚する。

純血も家も大切なのは解っているわ。」

だからと言って、好きでもない人と結婚するのは真つ平よ！」

その言葉を聞いたライザーの表情が、変わった。

それこそ、さつきまでの目が氷だとすれば、まるで北極に込まれたような寒気を感じ

るほどに。

ライザーの変化に俺だけじゃなく、木場や小猫ちゃんに朱乃さん、そして部長さえも驚いていた。

アーシアは俺の背中に隠れ、身体の震えを押さえようと必死に俺の制服を握りしめていた。

俺たちとは別に、グレイファイアさんは黙ったまま、平然とこの場を見つめている。

「そうか、それが君の答えなんだな、リアス。どうしても俺と結婚するつもりはないと」「え、ええ・・・そうよ」

そして暫しの沈黙。

時計の秒針さえも部屋に響く程に、自分の心臓の鼓動さえも激しく感じるほどに、部屋の中が静寂に包まれた。

「なら仕方がない」

その言葉を皮切りに、ライザーは座っていた椅子から立ち上がった。

「どうにか説得しようと思っていたが、これ以上は君の我儘に付き合ってもいられない」
そう言うと、ライザーはグレイファイアさんの方を向き、頭を下げた。

「グレイファイア様、申し訳ありませんがこの話、俺から断つたと魔王様にお伝えください。

リアスの懇意を俺が勝手な都合で無下にしてしまった、そのようにお願いします。仮にもリアスは魔王様の妹君です。下手なスキヤンダルはそちらも困ると思いますから」

「いえ、それではライザー様にご迷惑が掛かります。

それこそ、こちらの勝手な都合に巻き込んでしまった訳ですし」

その言葉をライザーは手で制し、ライザーは皮肉げに笑う。

「お気になさらず。どうにも俺は、世間からは女誑しとして言われているようでした。

既にそんな醜聞を言われている俺ですから、

今更スキヤンダルの一つや二つ、気にすることもありません」

ライザーの足元に転移魔法陣が現れる。

「では、これ以上ここ（人間界）にいる理由もなくなつたから、さっさと帰らせて貰うよ」

そう言うと、ライザーの姿は光の粒となって消えた。

ライザーが消えてしばらくの間、部屋は酷く静かだった。

誰も、それこそ部長さえも黙つたままだった。

「良かったじゃないですか部長！」

そんな空気を変えようと、俺は声を上げた。

「なんだかよく解らないんですけど、部長が結婚しなくても済んだって事でしょ？

だったら、もう心配する必要なんてないじゃないですか！」
「え、ええ！そうね！」

俺の言葉に、部長も事情を呑みこめないままに応える。

他のみんなも同じで、さっきまでのことに頭が追いつかないまま、
各々が「良かったですね！」と部長に声をかける。

「お嬢様」

そんな中、黙っていたグレイフィアさんが口を開いた。

「この件に関しては、私からサーゼクス様やご両親にお話させていただきます。」

その後、サーゼクス様やご両親がどう判断されるかは、私には判りませんが……」

グレイフィアさんの目が、まるで猛禽類の如く鋭くなる。

「私から言えるのは、事と次第においては御覚悟ください、とだけ。」

それでは皆さん、私もこれで失礼をさせていただきます」

そう言うと、グレイフィアさんも光となって消えた。

その場に残された俺たちは、ただ何がどうなのか、よく解らなかつた。

「フンフフン、フフフフン」

冥界のとある領地の一角にある場所で、鼻歌が聞こえる。

まるで鐘の音が響くかのように、その歌声は部屋の中で反響する。

「アイラ〜ヴェ〜フロ〜ムマイハ〜」

その声の主は女性だった。

金色に輝く髪を腰まで伸ばし、その先端を赤いリボンで結んでいる。

女性は灰色のケープを纏い、その右手に如雨露を握り、周りの草花に水を注いでいた。

「アイアムハドゥリ〜マ〜、フフフフフン」

水を注がれた植物たちは、彼女の歌声に答える様に、風もないのに揺れる。

「あらあら、今日もみんな元気ね〜。お姉ちゃん、うれしいわ〜」

植物たちの姿に、女性はまるで子供をみる母親のように、その緑の目で優しくげに見つめる。

ここは彼女の農園にして、彼女の憩いの場。

限られた存在にしか知られておらず、限られた存在にしか入れない秘密の場。

そこは彼女の趣味と実益を兼ねた植物園。

魔界で育つ植物が、所狭しと植えられている。

小さな植物は植木鉢に、大木のようなものは区切られた場所に植えられ、各々が成長している。

香りを楽しむものもあれば、毒にも薬にもなるもの、果てには捕食するものまである。そして彼女が、この植物園を管理している責任者、スアリ・テンパスビオレ・ブエルだ。

一通りの水やりを終えると、スアリは空の如雨露を片付け、植物園に設けられた休憩室へと行く。

休憩室の中には、各々の食器が置かれた棚、一通りの炊事が出来るキッチン、小さな冷蔵庫、

そして丸台のテーブルに椅子が3席置かれていた。

スアリは手慣れたように、棚から3つのカップと皿を取り出し、彼女特製のブレンド茶を淹れる。

そして茶請けに彼女特製のクッキーを用意し、客人の準備を終えた。

壁に掛けられた時計を見れば、丁度彼らが来る時間を指していた。

すると、まるで待っていたかのように来客を知らせる鐘が鳴った。

スアリは無意識に顔を綻ばせ、足を速めて扉の前に行き、少し深呼吸をする。

「いらっしやい、待っていたわ」

「スアリ義姉様！」

扉を開けると、スアリの身体に何かが飛びついた。

それはスアリと同じような金色の髪を少女だ。髪をリボンで二つに結んでいる。

スアリは少女を抱きしめ、その頭を優しく撫でる。

「あらあら、レイヴェルちゃんは相変わらずの甘えんぼさんね、よしよし」

頭を撫でられたレイヴェルと名の少女は、その顔を綻ばせる。

「あとレイヴェルちゃん、私はまだ義姉様ではないわよ？」

「別に構わないですわ。だってお兄様の件は終わったのですから！ですから問題ありませんわ！」

スアリの言葉に、レイヴェルはニカリとほほ笑む。

「あらく、そうなの？ご両親の様子だと、かなり乗り気だったみたいだけど？」

スアリはレイヴェルを微笑ましく見つめ、レイヴェルの後ろにいるだろう陰に尋ねた。

「そう意地悪なことを言わないでくれよ。俺だって困っていたんだからさ」

陰に立っている存在は、本当に困ったような、苦笑交じりで応える。

「悪いな、スアリ。レイヴェルもついて行くと駄々を捏ねてな。連れてかざるを得なかった」

「私は別に構わないわ。私は二人とも大歓迎よ。それに」

スアリはレイヴェルの頭を撫でながら、声の方へと顔を向ける。

「遅かれ早かれ、私たちは家族になるんですから。そうでしょ、ライザーちゃん？」

その先の影にスアリは微笑む。

「ちゃん付けは止めてくれ・・・その、なんだ・・・恥ずかしいだろ」

スアリの目の先には、頬を赤らめつつ、少し不貞腐れた顔をしているライザーが立っていた。

ライザーの姿は、茶色のスーツをしつかりと羽織り、清潔な白いシャツを着こんでいる。

仮にこの姿を誰かさんが見れば、「え、なんで私の時とは違うの・・・？」と言っただろう。

そのライザーの姿に、スアリは口元を押しえてくすくすと笑う。

「仕方がないじゃない。だって私と貴方は・・・」
スアリはニコリと笑う。

「10と2つの年齢差があるのよ？私からすれば、ライザーちゃんはライザーちゃんよ？」

「だからやめてくれって・・・」

スアリの笑みを伴った言葉に、ライザーはバツが悪そうに頭を掻く。そしてそんな二人の姿をレイヴエルは嬉しそうに笑うのだった。

部外者たちの愚行

少年が足元に転がる少年を蹴り続ける。

何度も何度も何度も何度も何度も何度も……、足元の少年を蹴り続ける。

蹴られる度に、足元の少年は呻き、嗚咽を零し、悲鳴を上げ、身体をくの字に曲げる。

その顔はただ痛みにも耐える為にぎゅつと目を閉じ、口からは赤い血が零れている。

一方、少年を蹴り続けるの顔は、少年とは思えない表情をしていた。

まるで欲に塗れた大人のような顔で、自分の行為を愉しんでいるようで、

足元に転がる少年が呻くのを喜んでいるようで、その口元を笑みに歪めている。

そこは人が来ることもない神社の裏で、生い茂る草花や木々が、その光景を覆い隠している。

少年のうめき声も、蹴られる音も、凄惨な光景も、全てが隠されてしまっていた。

正確なことを言えば、蹴り続ける少年は、それを知っていた。

自分の行いを誰も見られることなく、聞かれることなく、あまつさえ知られることもない。

それを知っている上で、今の行為に及んでいるのだ。

そして足元の少年が、もはや苦痛を吐くことも動くこともなく、その目に光すら無くなつた。

すると、動かなくなつた少年の中から光の塊が飛び出す。

その瞬間、蹴り続けていた少年はその光を掴み、自分の胸へと押し当てる。

すう……と光が入つた瞬間、少年は口元を更に歪めた。

少年は感じたのだ、自分の中に力が溢れるのを、強大な力が満ちているのを。

そして足元に転がっている、もはや動かない少年に向けて手を翳すと、

転がっている少年が突如燃え出した。

髪が、皮膚が、服が、周りの枯葉が燃えだし、肉の焦げる不快な臭いが溢れる。

その姿を確認すると、少年はもはや興味を失つたのか、ゆっくりとその場を後にした。

この日、一人の少年が、誰にも看取られることなくその生涯を終えた。

『じゃあ貰っていくわね』誰かがそう呟いた。

少女は自分の姿を鏡で見ていた。

鑑に写る姿は酷く歪で、ルビーと称された髪は安物の赤い絵の具のように色褪せ、人形のように精鍛だった顔は、もはや人らしい表情を無くし、真の意味で人形のようにだった。

かつて輝いていた瞳は、もはやくすんだガラス玉のようだ。

そんな鏡の姿を見るも、少女にとってはもはやどうでも良かった。

そう、どうでもよくなっていた。

彼女は椅子に座りながらも自分の与えられた部屋を見渡す。

少女を簡単に包むベッドもある、服を入れる箆筒もある、姿見も、机も、

それこそ必要な物はこの部屋にはある。

だが少女にとっては最も大切な、本当に欲しかったものが無かった。

少女の頬を、つうつと涙が流れる。

かつて少女には、自分を慕ってくれる大切な人たちがいた。

彼らとの出会いは単なる偶然だった。それでも彼女にとっては大切な家族であり、家族であった。

彼らは、未熟な少女を懸命に支え、時に励まし、時に知ったしてくれた。

そんな彼らに応えようと、少女は自身の出来ることは何でもやった。

知識を深め、身体を鍛え、彼らとの絆を深め、自身の力を鍛えた。

時に投げ出したくなることもあった、諦めかけたこともあった。

でも、その度に皆が少女を支えてくれた。彼らは少女にとって大切な人たちだった。あの日までは。

あの日現れた少年が、少女の大切なものを奪っていった。

心を許せていた友達が少年の傍へ行ってしまった。

彼女はその少年が好きなのね、とその時の彼女は思っていた。

だが時間が経つにつれ、なぜか友達の目が険しくなっていた。

果てには、もはや少女との口を聞きたくないほど、露骨な嫌悪を見せられた。

少女には訳が分からなかった。

次に妹のように可愛がっていた子が、同じように自分に冷たい目を見せるようになった。

あんなに慕ってくれていたのに、もはや赤の他人のように見られていた。

昔のように頭を撫でようとすれば、触ることすら嫌悪するかのようには払い除けられた。

あの時の手の痛みは、今でも時折思い出しています。

貴女を守る剣になります！と誓ってくれた子は、私にその剣を突き付けた。

長い時間をかけ、心を開くようになった子は、まるで化け物を見るかのように怯えら

れた。

少女には何が起っているのか解らなかつた。

その後、いくつかの偶然が新しい家族が、友達が増える度に、誰もが少女を嫌悪した。

逆に、なぜか皆、少年の下へと行くのだ。

それこそ誘蛾灯に誘われる蛾のように、蜜に集まる虫のように。

少女は少年を問いただした。

そして少年から帰ってきた言葉に、少女は我を忘れて殴りかかった。

その手に必殺の力を纏い、それこそ殺すつもりで殴りかかった。

こいつが！目の前の少年が！こいつのせいで皆が！その義憤に駆られての行為だった。

だが、その手が少年を捉える前に、少女が地面に叩き付けられた。

見れば、かつての家族が、友人が、自分を侮蔑するかのような目で見下していた。

そして少女は、この部屋に押し込まれた。

必要最低限が揃えられた部屋で、必要最低限な生活をするため、必要最低限な監視をつけられて。

鉄格子が掛けられた窓から見れば、かつての仲間たちが少年を取り合っていた。

もはや自分に見せてくれなくなつた、昔のような笑顔を少年に向けて、まるで別世界を見せられていた。

びしりと何かに罅が入る音が聞こえた。周りにはそんな音をするものがないのに。だが、その音は徐々に大きくなり、それに伴つて胸が痛くなつてくる。

ビシリビシリと音を立て、ビシリビシリと罅が割れ、そして……。

この日、一人の少女が壊れた。

少女の現状を知り、何もかもを放り投げて駆けつけた少女の兄は、

壊れてしまった少女を抱きしめ、人目をはばからずに泣いた。何もかも遅かつた。

『ねえ、取り返したくない?』誰かの声が聞こえた。

逃げなさい! 貴女だけでも!

目の前で大人たちに組み伏せられている母親の言葉。

お前だけでも逃げるんだ!

体中に刀、剣、槍、矢が突き刺さり、その身を黒く焦がしながらも叫ぶ父親の声。

だが、少女の身体は動かなかつた。いや、動けなかつた。

目の前の光景に、少女は理解が及ばなかった。
なぜ？ どうして？

その疑問が少女の頭を止めていた。

何故なら、目の前で母親と父親を虐めている人たちを少女は知っているからだ。

正確に言えば、その人たちの着ている服を知っている。

それは少女の母親が見せてくれた、大切な装束と似ていたのだ。

彼らはその母親の所属と同じ服を着ていたのだ。時折、少女の母親が話してくれたことがあった。

母親の家は代々が神に仕える家であったこと。少女の母親はその家の巫女であったこと。

偶然とはいえ、『人ではない父親』と出会い、互いに恋に落ちたこと。

様々なことを少女は母親から聞かされた。

お前は私たちの大切な娘だ。父親が少女に言った。

きつと実家の人たちも解ってくる日が来るわ。母親が少女を撫でながら言った。

その時の少女は、いったい二人が何を話しているのか解らなかったが、

それでも両親が大切に思ってくれるは理解出来た。

だから少女は思った。両親の思いを叶えようと。

だが、現実には非情で無情で砂上で机上でしかなかった。
今、少女の目の前で起っているのが現実なのだ。

少女の母親は地面に叩き伏され、少女の父親は身体から血を流しながら叫ぶ。
そしてそれを行っているのが、母親の家の者達。

どうして

少女は言葉を口に出した。

どうしてなんですか

だが少女の言葉に誰も答えない。

どうして私たちを虐めるんですか！ 私たちの一体何が悪いって言うんですか！

少女は叫ぶ。それは少女の心の声。優しい父親と母親が、どうして虐められなきやい
けないのか。

少女はそれを問いたです。だが返答は痛みだった。

痛い

少女は突然の痛みに呼吸が出来ない。

痛い

痛い痛い

痛い痛い痛い痛い

痛い痛い痛い痛い痛い

痛い痛い痛い痛い痛い痛い……！！

父親と母親の叫び声が響く。

見れば、自分のお腹に光り輝くものが突き刺さっていた。

そして何か風を切る音がし、何かが転がる音がした、それも二つ。

目から涙が溢れる少女が目にしたのは、地面に転がる二つの物体だった。

少女の呼吸が止まり、思考が止まり、そして感情すら凍った。

それを少女は知っている、十分すぎるほど知っている、決して見間違うことはない。

だって、それはいつも見ている顔だから。それはいつも少女に笑顔を見てくれたか

ら。

だってそれは……

少女の両親の首だから。

叫び声が響く。それは人が発するには高く、まるで金属を打ちあわせたような金切声。

その声に誰もが耳を塞ぐも、何人かはその声を聞いて床に倒れた。

許さない

腹に剣が突き刺さった少女は眩く。

許さない

身体を真つ赤に染めながら少女は眩く。

許さない許さない許さない……

少女の背中から大きな翼が生えた。それは闇を固めたような、真つ黒な翼。

許さない許さない許さない許さない許さない……！！

絶対に許さない！

目から赤い涙を零し、悪鬼羅刹の少女が叫んだ。

そして、種族（人と墮天使）を繋ぐはずだった少女（希望）は死んだ。

少女の両親の願いは、呆気なく潰えたのであった。

『お手伝い、しまししょうか？』誰かの声が響いた。

どうして？

それは地面に蹲る少年の疑問だった。

どうして僕は虐められるの？

それは少年の思いだった。

どうして僕は違うの？

それは周りからの言葉だった。

詳しく言うならば少年は周りとは違っていた。言ってしまうえば、少年は混ざりものだった。

彼の父親は誇り高き血統の出で、彼の母親は下等な血を持つ存在だった。

結果、その血を半分づつ受け継ぐ少年は、混ざりものになった。

不幸なことは、少年の生きている世界では父親の血が尊ばれ、そうでないものは下等な存在でしかなかった。

ゆえに、高潔な血を下等な血で『穢している』少年が蔑ろにされるのは自明の理だった。

少年の世界は差別の世界だった。

少年は家族から徹底して差別を受けた。それこそ家畜の方がましかもしれないと言えるほどだ。

言つてしまえば家具のような、生き物とすら認識されていなかったかもしれない。そんな世界で、少年は生きざるを得なかった。

一方で、少年には特別な力があつた。

それはあまりにも特別な力ゆえに、母親の生きていた世界から拒絶された。

周りが全て少年を人として見ず、まるで恐ろしい化け物を見るかのように接した。

それこそ、殺されそうになったことは何度も。

結局のところ、少年の世界は差別される世界だった。

だが幸運なことは、少年には大切な幼馴染がいた。

彼女は少年と同じ混ざりものであつた。それ故か、少年の気持ちを理解してくれた。

そうして少年は、傷ついた心を幼馴染との触れあいで癒す生活を送るようになった。

傍から見れば、いつ心が折れてしまいか判らない境遇。

だが少年は耐え続けることが出来た。

そして運命の分岐点が訪れた。

少年はその世界から外へ出る権利を得たのだ。それは幼馴染の決死の行動によるも

の。

だが、少年にとってはまごうこともない奇跡だった。

幼馴染のことを心配しながらも、少年は差別の世界から外へと飛び出し、

そして呆気なく死んだ。

少年にとつての不幸は、外の世界に少年の生きる権利を奪う存在がいたことだった。

彼らは少年のような存在を狩るのを生業にしてきた。

結果、少年は彼らに狩られた、それだけのことだ。

どうして？

少年は遠ざかる意識の中で疑問を呟く。

どうして僕は生きてちやいけけないの？

苦しかった、でもあの子と一緒だったから耐えられた。

あの子と一緒だから、少年は生きることが諦めなかった。

どうして？

少年の心に疑問が生まれる。

どうしてお父様たちは僕を虐めるの？ 雑ざりものと自分を蔑む家族。

どうして皆は僕を虐めるの？ 化け物と自分を拒絶した人々。

どうして僕は死ななきやいけないの？ まるで作業のように銀の矢を突き刺した男たち。

嫌だ

少年は心の中で叫ぶ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ痛い怖い許せない死にたくない生きたいコロスコロスコ

ロス駄目

許さない憎い憎い憎い嫌だ嫌だ怖いごめんなさいごめんなさい……。

まるでミキサーのように、感情が少年の中に渦巻く。

だが悲しいかな。少年の思いを啜うかのように、少年の意識は遠のいていく。

身体の自由が無くなり、視界すら霞みだす。耳も聞こえなくなり、呼吸さえも苦しくない。

そして最後に少年が思い出したのは、幼馴染の笑顔だった。

こうして差別され続けた少年は、結局差別されたまま死んだ。

『この世界から、出たくない？』誰かの声が聞こえた。

そこはどこかの台所だった。

オーブンもある、冷蔵庫もある、食器棚やテーブルだってある、まさに台所だった。そしてそこには、コック帽をかぶり、エプロンをした少女が立っていた。

少女の右手には泡だて器、そしてテーブルには銀のボウル。

これから何かを混ぜるようで、ボウルの中には、何やら黒い物があつた。

『それでは皆様、さあご一緒に！』

少女は誰かに言うように、笑顔で声を張り上げた。

『生きる権利を奪われた少年の思いと、大切なものを奪われた少女の絶望を、レッツらミックス！』

『両親の思いを穢され、否定された少女の憎悪と、何もかもに拒絶された少年の苦しみを、レッツら混ぜ混ぜ！』

そういうと、少女は勢いよく泡だて器を動かし、ボウルの中身を混ぜだす。

中身が混ぜ終わったら、テーブルにある型に流し込み、そのままオーブンに入れてダ

イヤルをセツト。

ふつくらと出来上がる姿に、少女はワクワクと胸を躍らせ、魔法の言葉を呟いた。『あなた達に、私の加護をプレゼント!』

チーンツ!と音がし、オープン扉が開いた。

そして少女はその出来上がりを確認し、満面の笑みで、その仕上がりに満足する。

『さあつて、次の材料はどこかしら?』

そういうと少女は、沢山の本が積まれた山に飛び込み、そのまま材料選びに熱中する。

『よし!次はこれね!』

そう言った少女のしている本は『天使たちの愚行』というタイトルだった。

墮落者

「神は死んだ」

少女の頭は、その言葉を理解出来なかつた。正しく言うならば、理解することを拒んだ。別に少女の知能は低いわけでもない。少女自身はそれなりの教養は持ち合わせているし、覚えが悪いわけではない。それこそ、幼い頃から慣れしたんだ聖書から、各々の一節を上げることが出来る。それなのに、少女はその言葉を理解したくなかつた。

そうだ、理解できるわけがない。少女の思考は働く。そうだ、今の言葉は嘘なのだ。なにせ、その言葉を発したのは女が信仰する教会の怨敵である墮天使だ。しかも、教会から聖剣を奪い去つた悪なのだ。故に、今の言葉は自分を惑わすための嘘だ。少女はそう決めた。そうだ、我らの主が死んだなど、嘘に決まっている。許せるわけがない。

少女の折れかけていた心に火が着いた。それは烈火の如く燃え上がり、彼女の前進を駆け巡る。萎えかけていた四肢に、心に、思考に、彼女を形作る全てに力が籠る。

「私を惑わすかコカビエル！我らの神が死ぬ筈がない！主は永遠にして不滅！主を侮辱したその罪を、今この場で断罪してやる！」

少女は自身の相棒にして聖剣デユランダルに力を込める。歯を剥き出し、目を凝ら

し、目の前の怨敵を斬り殺さんと全身を荒れ狂う衝動に身を委ねる。

「力を！もつと力を！主を侮辱した墮天使を叩き伏せる力を！悪を叩き伏せるその力を寄越せ！もつと寄越せ！デュランダルウウウアアアア!!」

少女は叫ぶ。少女は吼える。その怒りをぶちまける様に、彼女の叫び声は夜空に木霊する。

少女にとつて、主に仕えることは正しいことだ。幼き頃から、少女はそう教えられてきた。姉と慕う存在も、私にそう教えてくれた。周りにいる人々も、私にそう教えてくれた。だからこそ、少女がその『道』に進むことは必然だった。

そう、彼女は魔滅ほす存在、悪魔殲滅者（エクソシスト）になった。

そしてその背を押すかのように、少女には特別な力があつた。かのローランの持つていた聖剣デュランダルを扱うことが出来たのだ。前の使い手であり、悪魔すらも恐れ慄く存在、ヴァスコ・ストラードから渡された際は、少女は自身の運命を理解した。

自身は、人々を魔から守り、魔を滅ぼす剣になる、と。結果、少女はその力を振るつた。

何度も何度も何度も何度も、襲い掛かる悪魔を、危険な魔物を、あらゆる化け物を斬り捨ててきた、何度身体を血に染めようと、何度死地を走り回ろうとも。それを繰り返すうちに、少女は周りから『斬り姫』と呼ばれるようになる。

をまき散らしながら落ちていくコカビエルを見据えた後、ゼノヴィアは意識を失った。そして目が覚めたら、教会のベッドの上だったというわけだ。

そしてゼノヴィアは知ることになる。鏡越しから見える変わり果てた自身を。

青い髪は色素が抜けてくすみ、瞳は色を無くしていた。これが私か？それがゼノヴィアの言葉だった。

その後ゼノヴィアは教会へ事後報告へと趣き、そして禁句を告げた。

『もう主はいないのでですか？』と。

その時のゼノヴィアはただ否定しされてほしかった。憎き墮天使の妄言を切り捨ててほしかっただけ。

だが、結果はゼノヴィアの拘束という、否定させるどころか肯定されることになる。身体を拘束され、教会の一室に放り込まれたゼノヴィアは、ただただ混乱するだけ。なぜ？どうして？

ゼノヴィアの疑問に答えるものではなく、彼女の頭は疑問で塗りつぶされた。

監禁から数日間、決まった時間に差し出される食事を取り、他の時間を主への祈りに捧げるゼノヴィア。

主はもういないと知ってしまった彼女だが、それでもだからとてやめるつもりはなかった。

それは生活の一部となっていたからだ。今更やめられるものでもなかった。

その後も拘束は続き、気付けば週も過ぎていた。その間も、彼女はただただ祈りを捧げつつけた。

そんな中、ゼノヴィアの耳に声が聞こえた。だが部屋には自分一人しかおらず、声が聞こえるわけでもない。

とうとう気でも触れたか、そうゼノヴィアは自嘲した。自身を笑うゼノヴィアだが、そこに不快感はなかった。

いつそ狂ってしまった方が楽だと思ったからだ。ならばその声とでも会話をしよう、一人は寂しいからな。

そう考え、ゼノヴィアは声を聴くことにした。

それからまた数日が経ち、ようやくゼノヴィアは部屋から出された。

彼女を拘束した教会の目的は、デユランダル保持者のゼノヴィアの扱いだった。

聖剣の使い手という滅多に表れることのない特性を持つゼノヴィアの扱いに、教会は難儀していた。

度重なる論議の果てに、ゼノヴィアは監視の下で悪魔を狩るエクソシストとして生を許された。

結局のところ、聖剣の使い手を殺すには惜しかっただけの話だ。

そして部屋から出されたゼノヴィアを見た教会の使いは、ゼノヴィアの顔を見て言葉を失った。

彼女の顔は、幸福に満たされたように笑顔だったのだから。

その顔は、教会へと連行された後も変わらず、ただただ不気味だった。

降りしきる雨の中をゼノヴィアは歩く。今の彼女の出で立ち、一言でいうならボロ屑。

青い髪は灰色にくすみ、輝いていた瞳は濁り輝いている。エクソシストの服はボロ布と化し、服を着ているのではなく纏っているだけ。

仮にゼノヴィアを知る家族や友人が見れば、それがゼノヴィアだと分らないほどに、彼女はかつての面影を無くしていた。

彼女だと判断できるのは、彼女の背負われている布の塊だ。それは彼女の愛剣デュラ
ンダル。

それを革ベルトに括り付け、ゼノヴィアは一人で雨の中を歩く。

「今が最悪」と言える間は、最悪ではない。

聖書に記された言葉をゼノヴィアは呟き続ける。これは試練。主が私に与えられた試練なのだ。

ゼノヴィアはそのことで頭を満たし続けている。

そして彼女の頭に声が響く。

『恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから』

その言葉を受け、ゼノヴィアは歩き続ける。その足もとに多くの屍を築きながら。

猛犬

正義の名の下に

誰も彼もが、あたしを置いていく。

早くから両親を失い、孤児として生きていたあたしは、薄汚い貧民街（スラム）で暮らしていた。

小さかったあたしを雇ってくれる奴等なんているわけもなく、金を稼げなかった私は、

食べるものさえも一人で見つけなきゃならなかった。

あたしは生きる為に必死だった。

金を持っていてそんな頭の緩い大人から金を掏ったこともあれば、

食い物を持っていた餓鬼を殴って、食い物を奪ったことすらある。

逆に、あたしが奪った金や恵んでもらったパンを、力だけが取り柄の奴に奪われたこともあった。

みんな、そうしないと生きていけなかったから。

優しそうな婆さんから貰ったパンを、彼奴らはあたしの目の前で食った。

うまいうまいと、あたしに見せつけるように食っていた。

幼かったあたしは、一方的に殴られるしかなくて、ボロボロになった身体を床に横たえて、

あたしは自分の無力さと糞どもへの憎悪を滾らせ、ただ泣くことしか出来なかった。

だが、それはあたしに力が無かったからだ。

力が無かったからあたしは奪われた、それだけだった。

力が無い奴は、生きていく資格すらない。

それが当たり前の世界だった。

あたしが強くなろうと思ったのはそれからだ。

別に何も考えちゃいなかった。ただ、奪われたくないと思っただけ。

ゴミ山に棄てられていた木の棒を、あたしはただ馬鹿みたいに振り続けたし、

小石を壁に投げつけたこともあれば、何度も壁を殴り続けたこともあった。

それを、なんと太陽と月が回ったかも覚えてないほどに繰り返した。

あたしは只々、がむしやらだった。

糞どもに二度と奪われなくなかったから、二度と惨めな思いをしなくなかったから。

結果として、あたしは強くなった。

それこそ、あの時にパンを食いやがった糞どもを、一方的に痛めつけられるくらいには。

あの時と同じように、パンを持って歩いて、あの糞どもが出てくるのを待ちわびた。あたしの顔を見て、ニタニタ笑いをしていた奴らを、あたしは痛めつけた。

助けてくれと泣き叫んでいたあいつらの顔は、まさに滑稽でしかなかった。

あたしは口元を歪めて、何度も何度も糞どもを殴り続けた。何度も何度もだ。

晴れあがった顔で、ただ助けてくれと懇願するだけ奴等に飽きたあたしは、

止めでも刺してやろうと、転がっていた赤錆びたパイプを手にとった。

ひい!?!と情けない声を上げた糞どもに振り下ろそうとして、あたしの手は掴まれた。

「止めてあげなさい」

振り返れば、山のに大きな人影がそこにいた。

あまりに大きすぎて、あたしは見上げるしか出来なかった。

あたしは手を振りほどこうと必死に足掻いたが、結局はただジタバタしてただけだった。

あたしがもがいていると、ボコボコにした糞どもが、悲鳴をあげながら逃げて行った。その後ろ姿は、ひどく小さく見えた。

気付けば、あたしはもがくのを止めていた。

変な話だが、あたしは諦めていたんだと思う。

あたしはここで死ぬんだなってね。所詮、力がある奴が正しい世界。

彼奴らをボコボコにしたあたしは、あたしより強い奴にボコボコにされるだけなんだってさ。

ならいつそのこと、腐った世界から解放されたかつたんだらう。

だが、あたしが思っていたこととは違う結果になった。

「お前さん、教会に来ないか？」

それがあたしと先生との出会いだったんじゃないかな。

多分、あの時が一つ目の分岐点なんじゃないかなって思う。

「フィル、またやらかしたみたいだな？」

あたしの前で、苦笑いをする先生。ここは教会に置かれた、先生の部屋だ。

先生の山みたいな巨体のせいとか、座っている椅子が小さく見える。

あたしはそんな先生の視線を逸らしながら、必死に言い訳を考えていた。

「だってあの神父の話、すっげえつまんねーだもん。

いつもいつも、長つたらしい神の言葉なんか聞かなきゃなんねーし。

そんなことより、あたしは先生と訓練をしたいんだ！

あたし、先生みたいになりたくて仕方ねーんだよ！」

「私のようにになりたい……か」

先生は少し、寂しそうな顔をした気がした。

「先生……？」

「フィルよ、なぜお前は私のようにになりたいんだ？」

「だって、先生はすっげえ強いからな！あたし知ってるんだ！」

先生はすっごい強くて、どんな悪魔でも倒せるって。あの魔王でさえ、先生を怖がってるって！

それにあたしは聞いたんだ！先生が天使様から御使いにならないか誘われてるんだって！」

「そうか」

先生の顔が変わった。それは、先生が何か考えてる時の顔だと、あたしは知っていた。

「ならば私よりも強い者が現れれば、フィルはその者を目指すのか？」

あたしは首を横に振った。

「そんなことない！あたしは先生に憧れたんだ！」

先生だから、あたしは先生みたいになりたいって思ったんだ。

それに、先生より強い奴なんていない。だって、先生は強いんだから！」

あたしは思いのままを言葉にした。

あの時、あたしは先生によって救われて、先生のおかげで生きてる。

あたしの目標は、先生以外に存在しない。だって、先生はあたしの全てだから。

先生は黙ったまま、あたしの方へ歩いてくると、

その岩のようにごつごつした大きな手を、あたしの頭に置いた。

「ファイルよ、この世には必ずというものはない。私もその流れに逆らうことは出来ん。

いつかは私も、誰かに敗れる。これは必然の理だ」

私が見つめる先生の顔が、少し笑った。

「だからこそ、人は強くなれるのではないかと思うのだ。

私たち人間は、悪魔や天使や墮天使など、

他の人外からすれば蠟燭の火のように乏しい命かもしれない。

だが、その儚い命ゆえに、人は足掻き、研鑽し、己を高めてきた。

人であるからこそ、私はここまで成長できたと思っている」

わしやわしやと、あたしの頭を撫でる先生は穏やかだった。

あたしは、先生の言葉がよく分からなかった。でも、なんとなくその思いは解った気がした。

「なら先生！あたしが先生よりも強くなる！あたしが先生を倒して、

あたしを鍛えてくれた先生はすつげえんだって、みんなに知らしめる！」
「そうか、それは楽しみだ」

これが、あたしの2つ目の分岐点だったと思う。
先生を越える事、あたしはそう決心した。

降りしきる雨の中、あたしは一人、目の前の魔物と対峙していた。

その魔物に名前はあつたんだろうけど、あたしは興味なんて無かった。

あたしはただ、目の前のこいつをぶつ殺しに來ただけだったから。

熊のような大きな巨体を持ち、目に見えて分かるほどに長く鋭い爪が、

あたしを引き裂こうとチラついている。

この魔物は、ここ付近の村々を襲い、多くの死人を出した凶悪な魔物だった。

あるものは首を噛み千切られ、あるものは半分に切り離され、あるものは頭を潰された。
た。

そこに、大人の子供も老人も女も男も関係なかった。

そのため、あたしが派遣されたんだ、こいつをぶつ殺すために。

降りしきる雨のせいで視界は悪く、雨音のせいで耳も頼れない。

そんな状況で、あたしはこいつを追い込んだ。

まあ、相手もなかなかで、身体のいくつかを切られ、血が滲んでいるんだけどな。

お互いに手負いの中、あとは相手に一撃を当てるだけ。

そんな生と死の狭間、雨が目に入ったあたしはその目を一瞬閉じ、その隙について魔物が駆ける。

幾人も手に掛けたその爪が、あたしの胸を貫こうと迫る。

あたしは自分の得物であるハルバードの柄を突出し、その魔物の指の間に入れ、間一髪で止める。

そのまま柄をずらし、魔物の体勢を崩そうとするが、魔物はもう片方の手をあたしに突き出す。

頭を下げて躲すが、そのせいであたしが魔物の下になり、体格と体重の差で、

あたしが魔物に押し倒されてしまった。

ハルバードが盾となるが、逆にあたしを押しやる重しにもなっている。

顔を貫かんと振り下ろされる爪と、かみ殺そうとする牙を、あたしは首をよじって躲し続ける。

だが、それだつて通用しなくなる。だからあたしは賭けをした。

相手の爪を躲し、かみ切ろうと迫った牙を避け、あたしは逆に魔物の首に噛みついた。

それこそ牙を突きたてるように。

まさかあたしに噛みつかれるなど想像してなかったようで、引き離そうと魔物は暴れる。

だが、あたしは必死に噛みつき、魔物の肉を噛み千切った。

援軍として駆けつけた同僚曰く、

首から赤い血が噴出する様の魔物を、あたしは口元を真っ赤に染めて見ていたという。

そのせいであたしは『猛犬』なんて呼ばれるようになった。

それこそ怒った際に、髪の毛が犬の耳のようにピンとたつとか、そんなことも相まつて。

正直、御免こうむりたい名前だ。

「聞いたぞファイル。また悪魔を倒したらしいな」

猛犬と呼ばれてからはや数年、教会の庭で昼寝をしていたあたしは、声をかけた方へと振り向く。

そこいたのは、髪の一部を青く染めた、おかしな髪をしている同僚だった。

彼女の名はセノヴィア・クアルタ。

『斬り姫』と称され、先生からデュランダルを受け継いだ悪魔殲滅者だ。

「ゼノヴィアには関係ないことだろ？」

それにスコア的には、ゼノヴィアの方があたしより多く悪魔を狩ってんじやねえか。

あたしへの嫌味か？」

「素直に褒めているのだがな。」

しかしフィル、なぜお前は私にはそう辛辣なんだ。

やはりデュランダルを受け継いだことが原因か？」

「ゼーったいに教えねえ」

正直な話だが、あたしはゼノヴィアが嫌いだ。

先生からデュランダルを受け継いだこともそうだが、こいつは先生や周りから目をかけられている。

あたしの方が先に先生の弟子になったのに、後から来たこいつの方が強い。

模擬戦を数えれば100戦49勝50敗1引き分けで、あたしが負けてる。

それも嫌いな理由だ。

それに、あたしの方が年上だってのに、こいつはあたしにため口ときたもんだ。

それも気に入らねえ。

結局の所、一方的なあたしの嫉妬でしかないんだけど、あたしはゼノヴィアが嫌いだ。

ただし、その実力は認めてるけどな。

でも、あたしは絶対にゼノヴィアよりも強くなる。強くならなきゃ駄目だ。

先生を越える、それがあたしの目標なんだからな。

ふんと顔を背けるあたしに、

ゼノヴィアはずっと、理由を教えてほしいと聞いてくるが、あたしは絶対に答える気はない。

だって、自分が恥ずかしいんだからな。

そうしていると、私たちの方へ誰かが駆けてきた。

音の方を見れば、あたしの顔を見て、顔を綻ばせながら子供たちが走ってくる。

「フィル姉お帰り！」

「おうーただいま」

彼らは、あたしが世話になった孤児院の子供たちだった。

あたしが先生によって連れられてから、ずっと世話になりっぱなしの、あたしの帰る場所だ。

「どうやら私はお邪魔の様だ。次こそは理由を聴かせて貰うからな」

そういつて去っていくゼノヴィアにアカンベーをしながら、

あたしは子供たちに、自分の冒険譚を聞かせた。

目を輝かせながらあたしの話を聞いてくれる子供たちに、あたしは自然と顔を綻ばせた。

「俺、大きくなったらフィル姉みたい強くなって、みんなを守るんだ！」

そう言ったのは、孤児院の最年長のクランだった。

あたしはクランの頭を撫でた。

「そいつは困難な道だぜ？」

なにせあたしは、あたしの先生を越える存在になるんだからな。

つまり、最強のエクソシストになるってことだ。

あたしのようになるってことは、最強にならなきゃいけないぜ？」

「絶対になる！俺はフィル姉みたいになる！だから俺も最強になる！」

クランの言葉に、あたしは顔を綻ばせた。

「なら待つてるぜ。あたしはずっとその先にいるからな！」

ワイワイ叫ぶ子供たちに囲まれ、あたしは満面の笑みを浮かべた。

あたしは未だ最強じゃないけど、あたしは先生を越える。

先生、待つてくれよ。直ぐにあたしが追いつくからな！

聖者たちが描かれたステンドグラスの光が注ぐ大聖堂。

あたしは目の前の天使様と対峙していた。天使様の名はガブリエル。

天界最強の女性天使と謳われる識天使様。そしてあたしから見ても美しい顔と思うほどに美人だった。

そしてそんな綺麗な顔が、残念そうあたしを見ていた。

「フィル・スーリア、どうしても断るのですか？」

「はい、あたしは天使様の加護を得ようとは思わないです」

あたしはきつぱりと言った。

「理由も聞いても？」

「あたしは先生みたいに、人間として生きたいんです。

人間として、あたしは先生を超えるって約束したんです。

確かに天使様の加護を得れば、すごく強くなるだろうし、名譽なことだと思えます。

でも、それはあたしには駄目なんです。先生との約束を破ることになる。

せつかくで悪いんですけど、受けることは出来ません」

あたしの言葉に、ガブリエル様はすこし残念そうな顔をする。

「それが貴女が決めたことでしたら、私に何かを言う資格はありませんね。

フィル・スーリア、貴女の進む道に、祝福があらんことを」

「感謝します」

消えていくガブリエル様を最後まで見届けると、あたしは大聖堂を後にした。あー、かたつ苦しかったな。いやはや、言葉遣いもあたしらしくなかつたし、やつぱ天使様と話をするのは勘弁だわ。

教会の廊下を歩いていると、クランが駆けてきた。

その顔は、まるで信じられないという顔だった。

「おう、どうしたクラン？ そんなに慌てて」

「フィル姉！ 俺、選ばれたんだ！」

走ってきたクランの顔は、息切れと興奮が入り混じって、トマトの様に真っ赤だ。

「おいおい落ち着けて。で、何に選ばれたんだ？」

「俺、聖剣使いとして訓練が受けられるんだって！ さっき神父様がやって来たんだ」

「よかつたなクラン！ まずは第一歩つてとところか。なににせよ、頑張れよ！」

「うん、俺頑張る！」

頑張つてフィル姉のようなエクソシストになって、絶対にフィル姉のように強くなる

！」

「おう、待ってるからな！」

そういつて走って行くフィルの背を見ながら、あたしは先生の下へと足を運ぶ。

その後はゼノヴィアの所に顔を出して、また模擬戦でもやるかな。

何もかもが最低な所から来たけど、あたしはここまで来れた。

だからあたしは進み続けようと思う。

なあに、あたしは強いからな！

・バルパー・ガリレイの追放処分

聖剣エクスカリバーの実験は、研究者の暴走により被験者は全て死亡。

首謀者であるバルパー・ガリレイの追放処分により、この件は解決とする

なお、聖剣実験は以後も存続し、正当な聖剣の使い手を生み出すことを目標とする

・アーシア・アルジェントの追放処分

悪魔を癒すことが発覚すれば、神の死が公になる可能性がある

よってアーシア・アルジェントを魔女とし、これを隠蔽する

・ 聖剣エクスカリバーの強奪事件

首謀者である墮天使コカビエルにより、エクスカリバーが数本強奪される

この件は公にするのを禁じ、秘密裏に聖剣奪還を検討する。

ゼノヴィア・クアルタと紫藤イリナを使い、エクスカリバーの奪還、または破壊が好ましい

なお、悪魔たちが邪魔をするのであれば、双方ともに殺しても構わないとする

・ ゼノヴィア・クアルタの追放処分

聖剣強奪により、ゼノヴィア・クアルタが神の死を知ったもよう

彼女の口から神の死を流布される懸念がある

よって、ゼノヴィア・クアルタを追放処分とする

・ 和平会談

三勢力の合議により、天使（教会）・悪魔・墮天使との協力体制を築くことにする

なお、これにより他のエクソシストたちから不満が見られるが、

協力体制を崩すのは得策とは言えず、黙殺することにする。

・ 紫藤イリナ、御使いの要請を受ける

・ ヴアスコ・ストラダ、リアス・グレモリーの眷属となる

・フィル・スーリアの殺害処分

『猛犬』フィル・スーリアの存在は危険である。彼女は神の死を知っている可能性があるが、
る。

万が一、彼女の口から秘密が漏れた場合、他勢力を活気づける要因になりかねない。
そのため、彼女の生存は我々にとって好ましくない。

よって『猛犬』をはぐれエクソシストとして、三勢力と協力して処分することを検討
する。

フィル・スーリアはゼノヴィア・クアルタや紫藤イリナと同期である。

そして双方は赤龍帝の仲間という事実を考慮して、

彼女らの正義感を刺激すれば、彼女たちが『猛犬』を処分してくれることを想定する。

『猛犬注意』（正義の名の下に）

降りしきる雨の中、一人の少女が歩く。彼女が歩く道は、寂れた修道院へと続く道。もはや朽ち果て、廃屋とも違わないみすぼらしさが、黒雲と相まって不気味さを示す。雷が鳴り響く中、不思議なことに、少女は一切濡れていない。

むしろ、雨粒が彼女を避けるかのごとく、彼女は身綺麗のまま歩く。

彼女の手を持っている物は傘ではなく、自身の2倍近い長さがありそうなハルバード。

それを少女は、まるで棒切れのように軽々と持ち運ぶ。

そして道から少し外れた墓地へと少女は足を変えた。

規則正しくもなく、雑多に建てられた墓標たちには、もはや枯れきった花が飾られている。

と、ある墓標の前で、少女は足を止める。

それは他と比べて真新しい墓標だ。だが、そこには名が彫られていない。

「みい〜つ〜けたー!」

少女の口元が、三日月の如く歪んだ。

「今、何て言った？」

あたしはその神父に詰め寄った。

その神父の胸ぐらをつかみ、そのまま片手でそのまま持ち上げる。

「今、何て言った？」

犬歯を？きだし、目の前の神父を射殺すほどの目で問いたです。

持ち上げられた神父は、自分の体重で首が絞まっていくのか、

顔がどんとと真っ赤になっていく。

口から泡が漏れ出し、そのまま意識を手放しかける瞬間に、あたしは手を放した。

解放された神父は、ゲホゲホと咳き込み、目に涙を浮かべ、必死に空気を吸おうとする。

あたしは、それを無言で見下すだけ。

「で、ですから、バルパー・ガリレイ神父は、追放処分となりました」

薄らと涙で滲んだ目で、恐怖に慄きながらも、神父はあたしに告げた。

バルパー・ガリレイの追放処分、それが教会の決定だった。

あたしは無言のまま、自分の得物を引つ摺むと部屋から出て行くこうとする。

「こゝこれは、教会の、け、決定です！」

未だ咽る神父の声を無視して、あたしは部屋を出る。

そのまま教会へと足を進める。

その間、まるでモーセの海割れのように、人々があたしを避ける。

仮に足を止める奴が出てきた場合、

あたしはそいつらを殴り飛ばしてでも進む気だったから、面倒な手間が省けて良かった。

と、目的の部屋の扉が見えてくるが、その場に人影があつた。

「何を考えている」

「どいてください、先生」

あたしの言葉を無視するのか、先生は身動きすらしない。

「先生、どいてください」

「断る」

先生の荘厳な声が響く。だが今のあたしにとって、それはただの雑音。

「どけって言つてんだよ！」

あたしは得物を振りかざし、そのまま先生ごと扉をぶち破ろうとして、

「頭を冷やせ、ばか者」

先生に顔を殴られた。

「どうしてだよ」

氣付けばあたしは先生の部屋へと運ばれ、そこでありつただけの言葉を吐いた。

「どうして克蘭が死ななきやいけなかつたんだよ！」

あいつはあたしと共に戦うって言ったんだ！ 聖劍使いになるってあたしに言ったんだ！

あたしを助けたいって、一著前なことを言つて！

なのになんで、なんで糞野郎のせいで死ななきやいけなかつたんだよ！」

先生はただ、あたしの吐露を黙って聞いていた。

あたしだって理解はしている。人間に永遠はない。

死ぬことは誰にだってあるし、それは周りを気にせずに唐突に来る。

あたしはそれを、嫌というほどあそこで（スラム）で知っている。

気紛れでパンを分け合った奴が、次の日に冷たくなつたこともあつたし、

勝手に夢を語ってきた奴が、死んだ目で道に転がっていたのも見た。

それを見ても、あたしは何とも思わなかつた。

『ああ、弱かったんだな』としか思えなかった。

なのに、今のあたしは泣いている。先生の前で泣き喚いている。克蘭が死んだ事に、あたしは泣いている。

冷たくなった克蘭を抱いた時、あたしは必死に揺り起こした。必死に声をかけた。でも克蘭は答えなかった。あたしをフィル姉とも呼んでくれなかった。

克蘭が棺に入れられる時も、あたしはただ実感が湧かなかつた。

そして教会の決定に対し、気付けばあたしは得物を持ちだした。

どうしてだろうか、今のあたしには理解できない。

「今、下手なことをすれば、お前も教会に睨まれる」

先生はあたしに言った。

「今は耐えろ。時機が来れば、主がお前の願いを叶えてくれる」

そう言った先生の言葉に、あたしは何も言えなかった。

「なんで聖女さまが追放されなきゃいけないんだよ！」

アーシア・アルジェントの追放。罪状は悪魔を癒した行為。

魔女の烙印を押された彼女は、多くの者から疎まれ、唾を吐きかけられ、教会を出て行った。

彼女を見送る先生の顔が、哀しそうだったことは、あたしだけが知っている。

アーシア・アルジェントが悪魔を癒した行為。

それに関しては、あたしは何も言えない。

なぜならそれは、あたしらにとつては看過できるモノじゃなかったから。

でも、だからといって、彼女の行いを全て否定し、

一方的に追放する教会に、あたしはとても嫌な感じがした。

クランが死んだ聖剣についても、今でもその実験は続いている。

あの禁忌とされた虐殺は全て、あの糞野郎がやったことだ。

でも、その実験を破棄するのは惜しかったらしく、『正しい研究』をしようと教会は

言っていた。

あたしからすれば、クランが死ぬことになった聖剣も、それを嬉々として関わる奴等

も、

みんな、大嫌いだ。

「ゼノヴィアが追放？何の冗談だよ」

斬り姫と謳われたゼノヴィア・クアルタの追放。

それはあたしにとって信じられないものだった。

あいつのことを知っているあたしからすれば、あいつが何かする訳がないと確信出来た。

任務へと向かうあいつと話した時、また模擬試合をしようぜ！と約束さえしたんだ。

あたしは教会に理由を問い詰めようとしたが、

一介のエクソシストに説明する義理はないと門前払いをくらった。

拒絶した相手の目は、まるであたしを下等な存在でしか見てない印象だった。

聖剣の強奪にしても、あの憎き糞野郎が関わっていたことを知り、あたしも同行を願った。

だが教会は、あたしの願いを拒絶し、こともあろうに長期の任務を押し付けてきた。

一介のエクソシストに拒否権などなく、あたしはそれを受け入れざるを得なかった。

そして帰ってきたあたしが知ったのは、あいつの追放だった。

「和平協定？」

天使・墮天使・悪魔との協力体制によつて、あたし（エクソシスト）らの役割は形骸と化した。

あたしらの役割つてなんだっけ？

あたしらはなんのために戦つてきたんだ？

クランはなんで死んだんだ？

先生が哀しい思いまでして、あたしが爪が手に食い込むまで耐えた結果がこれか？

なあ、教えてくれよ。

あたしらは、なんのために・・・

「なあ先生、神様つて死んだんだろ？」

あたしは先生に尋ねた。

先生は黙つたままだったが、それ故に、あたしには肯定だと確信できた。

「まあいいさ、あたしはそれを知つたところでどうこうする気はないし。」

ただ、確かめたかっただけさ」

あたしは先生に背を向けると、そのまま部屋を出た。多分それが、あたしの最後の分岐だったんだろうな。

「なあ先生、お願いがあるんだ」

「なんだね」

「もう、あたしみたいな奴がこれ以上増えてほしくないんだ。」

だからさ、先生。先生が教会を変えてくれよ。

追放されたあいつらや、死んじまったクランのためにも、そしてあたしのためにもさ」

「ああ、約束しよう」

先生の言葉に、あたしは笑う。でも上手く笑えず、ただ口元が歪んだだけだ。

上手く力が入らない。

「良かった……た。あーあ、先生との約束が……こんな結果になるなんてなあ
あたしは笑う。口からごぼごぼと血を吐き出させて。」

「ごめん……なさい、先生。あたし、先生との約束、守れなかった……」
それだけが、あたしの後悔だ……。

「ねえ、知ってるかしら？」

雨が降りしきる中、少女は名もない墓標に語りかける。

その顔は、まるで面白い話をする子供の様に。

「貴女が気にかけていたお友達だけどね、二人とも悪魔になっちゃたの！」

それで今では立派な悪魔の犬。教会の戦士としての矜持なんて捨てっちゃったみたい。
い。

えーつとそうね、聖剣使いの方なんて、赤龍帝と子作りしたくて堪らない発情脳に

なってるの。

未だ悪魔に苦しんでる人たちがいるのを知ってか知らずか、楽しく暮らしているわ」

少女はケタケタと笑う。

「そうそう！エクソシストの皆も、とうとう堪忍袋の緒が切れたのか、なんと反乱しちゃったの！

しかもその主導者が、なんと貴女の先生！凄かったわよ、もう大暴れって感じ？

でも結局、鎮圧されちゃったわ。それでおしまい。

天使のみんなも、他のみんなも、そうなった理由を知っているのに、

だーれもなーんにもしない。みんなみんな、知らんぷり。

いつも通り、自分たちは幸せな生活をしてるわ。苦しんでる人がいるってのにさ。

教会は結局、今も変わらず、天使様も何もしいわ。

あ、それと貴女に朗報よ」

そして少女はニンマリと笑う。

「貴女の尊敬してた先生、悪魔の犬に成り下がったから」

稲光が走り、少女の傍に植わっていた木が燃える。

「なんでも、戦士の血がーとか、私も戦いたいーとかで、自分の欲望を優先しちゃったみたい。

可哀想にねー！貴女には散々耐えろと言ったのに、貴女の思いを受け継いだのに、貴女の先生は自分の欲に囚われちゃいましたー！

もう貴女のこと、だーれも覚えてないわよ！約束なんてみんな記憶の彼方！

それこそ、貴女が信じた先生も、貴女が大切に思っていた人たちも、みーんな！

貴女の人生、一体なんだったんだらうね？『猛犬』だけに犬死に？」

大声で爆笑する少女。

その声は、その姿からは想像も出来ないほどに、

下劣で品もなく、吐き気すら覚えるほどのだみ声。

「さて」

一しきり笑った少女は、その顔から笑みを消し去り、面のように無表情となる。

「これで負の力は相当溜まった感じかしら。

いやはや、想いもない罵倒をするのも疲れるわね。

まあでも、これで十分な手駒が増えるから寧ろプラスね」

少女は、罫だらけのハルバードを掲げ、声高々に叫ぶ。

「私と契約して、その思いを成就せよ！」

そして彼女は、ニンマリと笑う。

なぜならそこには、

『G R A A A A A a a a a a a a A A a a A A a a a a a a a a a A a a A A A A
A a A!!』

黒き『猛犬』がいるのだから。

キャラ原案：『猛犬』

名前：フィール・スーリア

性別：女性

年齢：22歳（享年）

血液型：B 違ってよく言われるからそうなんじゃねえの？

生年月日：忘れちゃった（8月2日）

星座：知るかよ（獅子座）

身長：182cm

体重：72kg

目の色：灰色

髪の色：こげ茶色

視力：1.5

利き腕：両利き（左手）

声の質：

手術経験：切り傷などにより何度も経験済み

体の傷：体中に切り傷等が多い・顔にも右目のまぶたから頬に至る傷がある

身体的特徴：怒ると何故か、頭上の髪の毛が逆立つ（まるで犬の耳の様から、猛犬に名が付く）

人種：ヨーロッパ系

宗教：キリスト教（キリスト教／狂）

前科：窃盗・暴行・スリ・傷害（スラム街で行われた、立証不可能）
 幼児・少年期の精神的体験・その人物：

幼少期から少年期に至り、師（ストラダ）に見初められるまでは、スラム街が過（こ）してきた。

スラム街で、弱者は死ぬ（奪われる）、強者は生き残る（奪う）という考えが根付く。生き残る為に、奪われない為に、自分に力をつける為にながむしやらに特訓する。

（たまたまゴミ山に棄てられていた本を読み、最低限の知識は持っていた）

その後、気に入らなかつたガキ大将（とその取り巻き）を叩きのめしていた際、ストラダに止められ、教会へと連れられる。

そのため、自分を救ってくれた（？）ストラダを先生と呼び、尊敬する

セックス：危ない目には何度もあつたけど、多分ないぜ

恋人：こんなガサツなあたしを好む奴がいるのかねえ？

結婚：まあ、したいっちゃしたいよ。あたしだつて女だし

尊敬する人：先生（ストラダー）・ゼノヴィア（好敵手）・シスター長（頭が上がらない）

／もう、いない

恨んでいる人：何もかも奪う奴・あたしが気に入らない奴

／あたしを見捨てた、忘れ去った全ての存在

将来の夢：先生を倒すこと、孤児たちを笑顔にすること、

／もう、何も無い（復讐）

恐怖：見捨てられること

性格的特徴：基本、何も考えずに思いのままに動く・さっぱりとした姉御系

悪いことは悪い、良いことは良い、という単純思考

スラムでの生活が長いことで、直感から人の性質を判断する。

口癖：一人称があたし・気のおけない奴にはため口をする（こつちが素）

人間関係：本能のままに相手を見据えるため、露骨な反応をする

態度：気に入った奴は好き・気に入らない奴は嫌い

家族関係：両親共に行方不明

態度：取りあえず、一発ぶん殴らせる。それから抱きしめてほしい

トラブル関係：取りあえず、殴ればいいんじゃないの？

正義感を持ち、単純なため、度々騙されることがある。

職業：悪魔殲滅士（エクソシスト）／猛犬（バーサーカー）

経済状態：お金の大半は孤児院に送っている。世話になった恩返しがしたいんだよ
 ペット・植物：生死にかかわる仕事だから、飼ってない。

性格：正義漢に厚く、良いことはいい、悪いことは悪いという単純思考。

この性格は教会で生活したことで、現在の性格に落ち着いたと言える。
 スラム街での生活故、初対面の人間に対し、良い奴か悪い奴かを決める。
 義には厚く、心を許した人に対しては力になろうとする。

周りに置いていかれる、忘れ去られるという事を極端に恐れている。

特徴（技・能力）

：『直感』

物事に対し、あらゆる面で活躍する。なお、外したことは殆ど無い。

『対悪魔殲滅武装』

対悪魔に特化した武装（聖水・銀剣・祝福済みハルバード・薬草等）

趣味・思考：身体を動かすことが好きで、暇があれば体操等をしている

孤児院の子たちと一緒にご飯を食べる。

娯楽：孤児院の子たちと遊ぶこと、先生と稽古をすること

好き：先生・ゼノヴィア・教会のシスター長や子供たち

肉（特に牛肉）・果物（リンゴ）

嫌い：野菜（特に苦いもの）・長いお説教、聖書

習慣：仕事から帰ると、必ず孤児院で皆と食事をする

朝起きると、必ず大声をあげて激励を上げる

こだわり：食事は大勢と一緒に食べたい・子供たちと一緒に寝る

妹

大好きお兄ちゃん

「お兄ちゃん」

『なんだ？』

お兄ちゃんが答える。

「なんでもない」

『んだよ気味悪いな。言いたいことがあるならさっさと見え』

お兄ちゃんの声が少し上がった。

「なんでもないの。ただ呼びたかっただけ」

『つたく、用もないのに声をかけんなっての。てか、いい加減兄離れしろってんだ』

『そうだ、なぜ私には頼ってくれない。』

私はお姉ちゃんなのだから、私にも頼るべきそうすべき。』

「だってお兄ちゃんはかっこいいし。」

それにお姉ちゃん、お兄ちゃんのことを馬鹿にするもん」

私は間を置かずに答えた。

お兄ちゃんもお姉ちゃんも、呆然としたのか、それとも呆れてしまったのか、しばらくの間、黙ったままだった。

『なあ』

「なに？」

『死ぬなよ』

「うん」

『何が何でも生きなさい』

「うん」

ガコンと音を立て、鋼鉄の扉が開いた。

喧騒に満たされた夜の町を、私は歩く。

街灯によつて街中は光で溢れ、それと同じように、色々な音が、隙間ものあく飛び交っている。

人、車、物、色々なものがこの世界で動き回っている。

様々な物に溢れかえっている町の仲を、私は進んで行く。

ジャラリジャラリと、私から音が響くが、人々はそれに気付くことはない。

私という存在にも気付くことはない。

人々の会話が、客を招く声が、車の騒音が、店から流れる音が、それを消し去っていくから。

そして私は、光り輝く道から逸れ、先ほどとは真逆の真つ暗な、湿った道へと入っていく。

見えてきたのは、この町には不似合いな建物。

とどこころが罅割れ、白であろう塗装も剥げ落ち、コンクリートを覗かせた、薄汚れた建物。

私は一端足を止め、建物の周囲をぐるりと回る。

サラサラと白い粉を落とし、建物をぐるりと囲む。キンツとガラスが震えたような音がした。

私はゆつくりと、建物へと足を進めた。

「しねええええええええー!!」

足を踏み入れた瞬間、私に向かって数多の光が放たれる。

それは全てが魔力の塊であり、触れれば簡単に物を碎けるほどの力も持っている。

もちろん、肉の塊である人間が当たれば、簡単にひき肉にされて、ハンバーグの具材

だ。

私の前方180度を埋め尽くす魔力のを目視し、私はジャラリと音を奏でた。

「やったか！」

一人の男が声を上げた。

彼の頭には大きな山羊の角が生え、背中にはコウモリの翼が生えていた。

それは十中八九、見る人が見れば、悪魔と答えるであろう風体だ。

他にも、狗の顔をした男、頭から別の角を生やした女、合わせて十数人。

彼らは建物の入り口で陣を取っていた。

目的は2つ、自分たちの主を守ること。

そして先ほど、この建物を覆うように結界を張ったであろう侵入者の撃退。

おそらく、自分たちを殺しに来たエクソシストか、魔を払う者の類だろう。

もしも侵入を許せば、確実に自分たちは殺される。

故に、彼らとて生き残る為に、死にももの狂いだった。

そして足を踏み入れた侵入者に対し、彼らはあらん限りの魔力を撃ち込んだ。

その数、数えて数百を超えるだろう。機関銃の一斉掃射も真つ青かもしれない。

そして何かが壊れる激しい音が響き、白い煙が蔓延し、彼らの視界を覆う。

「流石にこれだけの数を撃ち込んだんだ。奴は肉すらも残らず死んだはずだ！」
リーダー格の男が声を上げる。

その声は震えており、恐怖からの安堵か、はたまた生の実感か、顔は喜んでいた。だからこそ、その頭に新しい角が生えたことに気付かずに灰となった。

「え？」

リーダー各の憐れな姿を見て、周囲の彼らは言葉を漏らした。

ジャラリと音を立て、何かが動く。その音を頼りに、他の魔物たちは音の方へと顔を向けた。

そしてそこにあつたのは

「氷の壁？」

先ほど自分たちで集中攻撃を行った入り口に、大きな氷の壁があつた。

まるで城塞のように、壁のように現れた氷の壁は、多少なりと罅が入っているが、その頑強さを示す様に、自分たちの目の前に聳えていた。

と、いうことはまさか・・・！

「て、撤退・・・！」

氷の壁が大きな音を立てて砕かれた。

同時に壁だった氷の飛礫が弾丸の如く放たれ、壁の前にいた者達を襲う。

咄嗟に魔術防壁を作った者はそれを何とか防ぐが、

判断に遅れた者たちはその弾丸を全身浴び、透明な氷を真つ赤に染めた。

「くそ、やられた！奴はまだ生きてるぞ！」

防壁で凌いだ悪魔が叫ぶ。その声に叱咤され、生き残っていた悪魔たちも周囲を見渡す。

だが、怪しい存在は見当たらない。

「どこだ！一体どこに消えやがった！絶対にぶつ殺してやる！」

殺されたリーダー格は、彼らにとつては兄のような存在だった。

多少なりと頭が軽いが、それでも頼りがいのある兄のような存在だった。

それが一瞬にして死んだ、灰となった殺された。

彼らからすれば、親しい仲間を殺されたのだ、許せるはずがない。

タン、と何かが自分達の後ろに落ちた。

「!!」

一時の静寂。そして一瞬の間を置いて、彼らは侵入者を殺そうと各々の手を向ける。

ジャラリと音が響いた。

すると今度は、固まっていたグループの一部が、下半身が立ったまま崩れ落ちた。

その頭には、眉間を貫くように銀のナイフが突き刺さっており、彼らは呆けたまま絶

命した。

ジャラリと音を立て、何かが動く

「くそ!? 一体なんだ!」

すると今度は、屋内だというのに強風が巻き起こり、

部屋の家具諸共、魔物たちが吹き飛び、壁に叩き付けられる。

と同時に、縫い付けるかのように、体中にナイフが突き刺さる。

その姿は、まるで昆虫標本の様だ。

ジャラリと音が響く。

「どうした!? 奴を始末できたのか!」

騒がしい音を聴きつけ、上から誰かが降りてきた。

「あ、主様! 早く逃げてください!」

主の姿を見た配下は声を荒げた。

侵入者を撃退出来たと思ったのに、正体不明の存在に、一瞬にして自分たちは半壊したのだ。

「貴様! それでも俺を守る配下か! さっさと侵入者を殺せ!」

だが悲しいかな、配下の言葉も今の主には届かなかった。

ジャラリと音がした。

「させるかあー！」

主を支えていた部下は、咄嗟に音の方へと手を伸ばし、何かを掴んだ。

それは途端に高熱を発した。まるで熱した鉄を握ってしまったかのように。

だが配下は、音の正体を見極めようと必死に耐えた。そして彼の掴んだもの見た。

「鎖……だと……？」

それは鎖だった。まるで大蛇のようにうねる度に、ジャラリと音がする。

その先端には、何やら光るものが備わっていた。それはまるで、刃物の先つちよのようにな……。

と、その先端が動き、握りしめていた彼の腕を切り落とした。

必死に声を荒げずに堪え、部下は鎖の下を目で追う。

鎖は蛇のようにうねりながらも動き、ジャラリと音を鳴らす。

そこにいたのは、

「まさか子ど」

彼は最後まで言うことが出来ず、

まるで見えない鉄槌を受けたかのように、全身を吹き飛ばされて死んだ。

残ったのは、彼らの主であろう悪魔のみ。

その主も、目の前の惨状に声を上げること出来ず、ただただ震えているだけ。

「き、貴様ああ！一体なにものだあ！こんなことをしてただで済むとおもっているのかあ!？」

主の悪魔には自負があつた。

自分は上位悪魔の一人であり、それなりに地位も築き上げてきた。

人間界においても、彼はこの町でそれなりに契約を行つてきた。

悪魔側からすれば、彼の行いは絶賛されるほどだ。

それが人間側にとっては、決して果たされることのない『悪魔の契約』だとしても。

もはやこの町に用はなく、さっさと冥界に帰るはずだったのに、この現状はなんだ。

帰れば、悠々自適な生活が待っていたというのに、この現実はなんだ。

あと少し、あと少しだと言うのに！このクソな人間に全てをぶち壊されるというのか

！

「このクソがあああつあ！」

怒りに染まつた悪魔は、目の前のクソツタレを殺そうと右手を挙げる。

この至近距離だ、回避も出来ない。

まともにくらえば奴は死ぬ、咄嗟に防御してもその隙に逃げられる。

そして自分は、冥界に逃げ、自分に歯向かったこいつを殺す算段を・・・！！

ジャラリと音がした。

自分の右腕が凍った。

「は?」

自分の右足がずれた。

「ひ?」

自分の左足が振り切れるようにすっ飛んで行った。

「ふ?」

自分の左腕が爆散した。

「へ?」

一瞬にして四肢を失くした悪魔は、そのまま地面に落ちた。

「があああああああああああああああああ!?! いたい痛いいたい!?!」

悪魔は動くことも出来ず、そのまま痛みに泣き叫ぶことしか出来ない。

そして彼の目に見えたのは、

左腕から複数の鎖を放出している、仮面をつけたエクソシストだった。

悪魔を殺せ

魔物を殺せ

教会に逆らおう者を殺せ

生まれた時から私たちはそう教えられた。

私たちに名前はない。そもそも、名前という概念すら無かったのかもしれない。

みんな、数字で呼ばれていた。

ナンバー〇〇、ナンバー〇〇、ナンバー〇〇、みんなそう呼ばれていた。

ナンバーが付くのはまだ良い方で、下手をすれば〇〇と、数字だけ呼ばれたこともある。

最初はそれが自分のことと気付くことは難しかった。

そもそも、自分がそう呼ばれているという事すら知らなかったからだ。

そうなれば、白い服を着た人たちにぶたれた。そして理解させられる。

彼らが上であり、自分たちが下であることを。

彼らの命令は絶対であり、逆らうこと、彼らの怒りを買うことは、自分の首を締める愚行だった。

時折、私たちの中で彼らに逆らう子もいた。翌日にはいなくなつた。

彼らの言いつけを守らなかつた子もいた。翌日にはいなくなつた。

彼らの言葉を無視した子もいた。翌日にはいなくなつた。

それを繰り返し行われれば、嫌でも気付かされるのだ。

きつと、もう帰って来ないことを。

そして私たちは、悪魔を、魔物を、教会に逆らう者達を殺すことを教えられた。

聖水、銀剣、白木の杭、塩、聖歌、聖書、などなど、魔に対抗するための知識を教え込まれた。

繰り返し繰り返し繰り返し、それが無意識にまで刻まれるほどに、私たちは教え込まれた。

次に行われるのが戦闘訓練、文字通り殺すための技術を刷り込まれた。

いかに相手を殺すか、効率よく殺すか、合理的に殺すか、無傷で殺すか、苦しんで殺すか、

様々なことを実戦で学んだ。

私たち同士を戦わせて。

切られた痛みで泣き叫ぶ子もいた、血を見て吐いた子もいた、殺せないと剣を落としたり子もいた、

みんないなくなった。

残った私たちに掛けられた言葉は、「合格」という言葉。

そして番号と呼ばれなくなり、ようやく名前が付けられた。

沢山いた私たちは、気付けば3人になっていた。

髪が白く、眼つきも口も悪い私よりも背の大きい男の子。

髪が白と黒の半分、口は軽かったけど、頼りがいのある女の子。

そして、私。

初めの時は会話すらなかった私たちだけ、

ここまでくれば、不思議と言葉を交わす様になつてた。

私にとって、男の子はお兄さん、女の子はお姉さんのような存在になつてた。

皆と一緒に入れたことが、私にとって救いだったのかもしれない。

でも、彼らはそれを簡単に引き裂いた。私たちはみんなバラバラになつた。

そして私が移された新しい場所で待っていたのは、

複数の神器移植による、新たな悪魔殲滅兵士の運用実験。

複数の魔剣を操れる完成体（ジークフリード）を参考に、

優秀なエクソシストに複数の神器・聖剣・魔剣を移植することで、

新しい戦力としてのエクソシストの創造と、その有用性を実験すること。

そして私に移植されたのは、彼（ジークフリード）の持っていた魔剣の欠片。

彼の有している魔剣の欠片を、特殊技法で生成された鎖に固定し、私に移植したのだ。

疑似的とはいえ、魔剣を操れる私はいわば、ジークフリードモドキ。

ある意味、彼らは第二のジークフリードを生み出せたんじゃないかな・・・。

「化け物！この化け物があ！」

私は、目の前でゴロゴロするしか出来ない悪魔に、溜息を吐いた。

なぜ、今の現状でその言葉が吐けるのだろうか。

まるで自分は化け物ではないと言いたいのか。

それを言うならば、私はまだ人間だ。そして目の前の悪魔は悪魔だ。

私からすれば、お前の方が怪物だ、と言いたくなる。だが、私は討論も会話もする気はない。

私は自分の神器に指示を出す。

私の指示を受け、ジャラリと音を立てて鎖が動きだし、目の前の悪魔に襲い掛かる。

そしてジャラリと音を立ててれば、鎖は私の中に戻った。

私は、灰となった悪魔を見届けると、建物に火を放ち、振り返ることなくその場を後にした。

大丈夫、結界によって周囲に燃え移らないようにしたから、安心だと思う。

『いっくろうさん』

お兄ちゃんが声をかけてくる。

「うん、今日もお仕事頑張ったよ」

『うんうん、怪我もなくてお姉ちゃんも安心』

ごめんねお姉ちゃん、私、お兄ちゃんと話をしてるの。

私の言葉に、お姉ちゃんの態度が一気に不機嫌へと傾いた。

『酷い、リムルがグレた。それもこれもフリードが悪い』

『知るか、そもそもお前の態度も問題があるだろうが。』

ことある毎に俺に責任を擦り付けるのマジでやめろ。終いにや怒るぞ！』

『こんな横暴なお兄ちゃんといると、リムルが影響を受けて悪い子になる。』

だからリムルは私と一緒にいるべき』

お兄ちゃんとお姉ちゃんの口論に、私は溜息を吐く。

でも、それが私にとっての生きがい。お兄ちゃんとお姉ちゃんがいると、私は頑張れる。

でも、そろそろ本物の二人に会いたいなあ。もう我慢の限界だし、一人遊びにも飽きちゃったし。

私は、自分の頭で描いた二人と会話をしながら、一人街中を歩いていく。

その数日後、三勢力による和平が成立することになる。

大嫌いお姉ちゃん（大好きお兄ちゃん）

三勢力の和平会談

堕天使コカビエルによる、教会への襲撃と聖剣強奪に加え、

魔王サーゼクス・ルシファアの妹、リアス・グレモリーの管理する領地、駒王町への襲撃。

堕天使コカビエルの目的は、

赤い龍（ウエルシュ・ドラゴン）ア・ドライグ・コツホと、

白い龍（バニシング・ドラゴン）アルビオン・グワイバーの二天龍によつて中断された、

堕天使・天使・悪魔の戦争の再開であつた。

まずは教会を挑発するために聖剣エクスカリバーを奪うも肩透かしを食らう。

そのため、今度は魔王ルシファアの妹、リアス・グレモリー嬢と、

同じく魔王セラフォル・レヴィアタンの妹君、ソーナ・シトリ嬢が住む町、

駒王町へと標的を変えた。

コカビエルの目的は、現代の赤龍帝「兵藤一誠」とその主、リアス・グレモリーとそ

の眷属、

そして現代の白龍皇「ヴァーリ」によって防がれ、

かの大罪人コカビエルは、地獄の最下層（コキユートス）にて、永久冷凍の刑に処された。

この事件を切っ掛けに、三勢力のトップたちは和平を結ぶことになる。

それは、今までの戦いによって三方共に疲弊しきってしまったのも要因だろう。

これにより、今まで殺し合っていた者達が、互いに手を取り合える未来が訪れたのだった。

「な、なぜ俺たちを襲う!? もう戦う意味はないんだぞ！

俺たちを殺せば、三勢力に反旗を翻えすことに」

「五月蠅いなあ」

私は、よく解らないことを言う悪魔に対し、五月蠅いから頭に銀剣を突き刺した。ビクビクつと身体を震わす悪魔の屍を見つつ、私は一つの欠伸をした。

『おいまだ寝ぼけてんのか?』

お兄ちゃんが私を心配する。

「大丈夫だよ、さつきまでは眠かったけど、こいつ（悪魔）を殺したら目が覚めたから。

心配してくれてありがとう、お兄ちゃん」

『けっ、誰がためえの心配なんかしてるかよ』

『フリード、いい加減しないと私が怒る』

お兄ちゃんの言葉に、すかさずお姉ちゃんが口を挿む。

『いい加減にしろよこのシスコン。一々つつかかってんじやねえぞ』

『だつたらリムルに優しくしろ。お前は口が悪い』

『ああ?だつたら黙らせてみるよこのクソシスコンさまよおおお!』

『いい機会だ、お前の言葉遣いを正し、リムル（妹）愛に目覚めさせる』

「もう、二人ともだめだよ」

なんという事か、脳内のお兄ちゃんとお姉ちゃんなのに、勝手に争いだしてしまった。

まあいつか、別にいつものことだから。

そう思い、私はこの場から離れようとして、ふと何かの気配を感じた。

多分、相手は気配を殺していると思っただろうけど、私には丸分かり。そういう風に弄られたし。

で、私を見ているのはだあれっかな？って、あれ？

その気配を感じとり、私は首を傾げた。

『おい、どうした？』

『うん？どういうことだ？』

脳内の二人も、不思議そうな声を上げた。

「なんで御同類（エクソシスト）が沢山いるんだろう？」

私を取り囲んでいるのは、エクソシストの皆さんだった。

でも、そういった連絡は一切受けていない。だから、これは全くの予想外だ。

なんでだろうと私が首を捻っていると、気付けば周りを囲まれていた。

取りあえず、声をかけてみよう。

「あのさー、うざいから出てきてくれない？私、分かってるよ？」

その声に、がさがさとエクソシストたちが出てくる。

その姿に、私はもう一度首を捻る。やっぱりおかしい。でもどうでもいつか。

「リムル・セルゼンだな？」

その言葉に、私は頭を傾げる。なぜなら、私には彼らと会う連絡を受けてない。

「私に何の用ですかー?」

私は出来るだけ違和感のないように、言葉を発した。

すると、リーダーと思しきエクソシストが私に声をかけた。

「リムル・セルゼン、貴様を拘束する」

その声を合図に、周りのエクソシストたちが、光剣を取り出し、光の刃を顕現させる。

「はい?」

『はあ?』

『なにそれ?』

取りあえず、私は聞き返した。

なぜ拘束されなければいけないのだろうか? 私には解らない。

脳内のお兄ちゃんとお姉ちゃんも同じ反応。

「貴様には、禍の団への内通と、はぐれエクソシストの疑いがある」

私が首を捻っていると、目の前の神父は淡々と述べる。

曰く、私が禍の団（混沌・鯺門）ととかいうテロリストに情報を横流し、

また罪なき人間を殺し、また同胞を手に掛けたらしい。全く身に覚えがない。

そもそも、混沌・鯺門とはなんなの? 美味しそうな名前だね。

「えっと、私、そんなの聞いたことないんです。」

それって何ですか？美味しそうな名前ですけど」

彼らは何か勘違いをしているみたいなので、取りあえず否定してみた。

するとリーダー格の神父は、光剣を下げるどころか、その切っ先を私に向けた。

周りのエクソシストたちも同じように、私へと刃を向ける。

「そうか、あくまで白を切るか。ならば貴様を今ここで断罪する！」

「あの、なんで剣を向けるんですか？ですから私、そんなの知らないって」

「貴様が知っていようと知るまいと、そんなことはどうでもいい、この化け物め。

はぐれエクソシストとなったフリード・セルゼンと同様に、

貴様のような存在が明るみになれば、我ら教会の立場は大いに失墜する。

ならばその前に、我らの手で処分する。我ら教会のために喜んでその命を捧げるのだ

！」

目の前の神父は、まるで熱が燈ったように、陶醉しているのかのように、声を荒げた。

でも、私はそんなのはどうでも良かった。

ただ一つ、私は聞こえてきた内容を聞き返した。

「フリード・セルゼン（お兄ちゃん）が、はぐれエクソシスト？」

『なんじゃそりゃ』

『フリード、お前は一体何をした？』

脳内のお兄ちゃんとお姉ちゃんも、その言葉に戸惑っている。

「そうだ！あの快樂殺人者め、あろうことか我ら同胞を手を掛けたのだ。

それだけに飽き足らず、契約者の人間も殺している。奴の存在は我々にとって恥部だった」

「だった？」

私のオウム返しに、神父は笑う。

「そうだ、奴は死んだよ。最後は悪魔と化して、無様に死んだという報告を受けた。

全く、さつさと死んでいればいいものを・・・」

「え？」

その言葉は私の中に反芻する。

「お兄ちゃんが死んだ？お兄ちゃんが死んだ？Was my old brothe
r killed?」

「だからこそ、貴様もフリードのようになる前に、その存在を抹消させて貰う。

教会が倫理に反することをしていたと明るみに出る前にな」

「そう言葉を合図に、周りのエクソシストたちが、一斉に私へと駆ける。

そして各々の光の剣を振りかざし、悍まじき化け物を断罪しようとして、

「「「「「あえ？」」」」」

首がロケットの如く、血という噴煙をまき散らしながら、胴体から発射された。

『なあ大丈夫か？』

『大丈夫かと聞くお前は馬鹿だ、デリカシーがない。お前はまだ、リムル（妹）愛に目覚めていない』

『だからそのなんちゃら愛って何なんだよ！』

「お願い、二人とも静かにして」

降りしきる雨を避けようと、私は古びた廃屋の中で、一人膝を抱えていた。

襲ってきたエクソシストを塵殺した後、私はずっとこの調子だ。

正直、お兄ちゃんが死んだ事に現実感を持たない。

なぜなら、私の頭の中にいるのだから。

『まあでも、お前の想像した俺だけだな』

そう、そのお兄ちゃんも、結局は痛みを耐える為に生み出した想像でしかない。

でも、それでも私のお兄ちゃんだ。

本当のお兄ちゃんに会いたいと思い、これまでずっと必死だったのに、もう会えない。

もしかしたら、お姉ちゃんも同じように・・・

『待て、私はフリードと違ってそんなことはしないぞ！もちろん、想像でしかないが』
『なにしろっと自分は違うとか言ってるんだよ！』

脳内で語る至りの漫才に、私は少し落ち着いた気がする。

でもこれからどうしよう

殺したあいつ等が言うには、今の私ははぐれエクソシストとして、
いつの間にか出来た三勢力の中で危険人物として載っているらしい。

これは最後に生き残らした、あのリーダーっぽい神父を拷問したことで知れた。
質問の回答以外のことをすれば、全身の骨を一本ずつ折った。

瞬き、呼吸、微動作、命乞い、泣き言、叫び、落涙等々、回答以外の何かをすれば折った。

取りあえず今の目標は、お兄ちゃんの敵討ちってことかな。

まだ眉唾だけど、お兄ちゃんは生きているかもしれないし。

仮に死んでたら、お墓を建てない駄目だし。

『やはりフリードは死ぬべき、というか今すぐ死ぬ。私がここで殺す』

『だから一々俺に突つかかかってくんなくての！』

脳内で繰り広げだした漫才に苦笑しつつ、私は立ち上がった。

やることをやったら、次はお姉ちゃんに会いに行こう。
気付けば、振っていた雨は止み、雨雲の隙間から光が漏れていた。

「その犯人の名前、知りたくないですかあー？」
幼い声が聞こえた。

「私はフリードの犯した罪を償い続けなければならない。

そして凶行を続けるお前を止める！そのためにも、私はお前と戦う。私はお前の姉だから！」

「罪って何？ただ私たちは言われたとおりに悪魔を殺してきただけだよ？」

今更それが間違いつてなに？それに、なんで自分だけ間違っていないって思ってるの

？

そして悪魔に成り下がった癖に、なに自分は綺麗だと思ってるの？
お兄ちゃんを、私を否定して、今更姉面するなああああああああつあああ！！」

一誠大好きっ子（邪神）

一誠大好きっ子（転生者第一弾）

兵藤一誠には、同い年の弟がいる。

名前を兵藤優一、一番優しい子になってほしいという両親の願いからだ。二人は双子であったが、二卵双生児なのでそっくりと言うわけではない。

一誠にとって、優一は大切な家族であり、大切な弟であった。

ゆえに、一誠はなにかと兄らしいことをしようと考え、行動した。

しかし、一誠と優一には大きな差があった。

優一は、とても頭もよく、運動でき、なおかつ人に好かれやすかった。

もちろん、一誠もそれなりに出来る子だ。

もちろん、一誠だって好かれている。

でも、なぜか周りは優一を見るようになっていった。

優一を評価するようになっていった。

何をやっても、優一君の方が、何を頑張っても、優一君の方が、

何をしても何をしても何をしても……、周りは弟の優一を見るようになって

いった。

何をやっても優一よりも低い、劣っている。

それは一誠の自信を少しづつ削り取っていく。

家での両親は、分け隔てなく一誠と優一を愛している。

分け隔てなく一誠と優一のことを考えてくれている。

それが一誠の心に負担となっていく。

それが一誠の心を不安させてくる。

それでも、一誠は兄らしくしようと、優一の兄であろうと努力し続けた。

だというのに、何故か一誠の周りは優一へと流れていく。

家の隣に住んでいた男の子も、かつては一緒に遊んでいた仲だった。

でも、いつの間にか優一と一緒に遊ぶようになっていった。

どうして？

なんで？

僕だって頑張っているんだよ？

僕だって、優一に負けないくらい必死なのに

なんでみんな優一を見るの？

誰も僕を見てくれないの？

助けてよ

僕を見てよ

僕がここにいて、誰か認めてよ

一誠の心は限界だった。

優秀過ぎる弟の存在、頑張っても認められない努力、周りの姿。彼を追い込むには十分すぎるものだった。

ああ、僕は……

一誠は全てを諦め心を閉ざそうとしていた。

それが自分を守るのに一番簡単だったからだ。

一誠が目を、耳を、心を閉じようとしていた時、声が聞こえた。

「あなた、私の友達になって！」

『オキテオニイチャン！ オキテオニイチャン！』

オキナイト、フライングボディープレスヲスルゾー！」

「あと5、6分・・・寝させてくれよお・・・」

今、禁断の果実がこの手に・・・ゴフア!?」

俺は唐突な衝撃に、身体がくの字に曲がる。

肺の空気を一気に掃出し、俺は咽ながらも目を開ける。

「やつほ！起きた？」

俺の目の前には、自分を笑顔で見つめる少女がいた。

「私は宇都、新芝宇都よ（ニイシバ・ウト）。

この町に引越してきたの、よろしくね！」

そう言っつて、自分に手を差し伸べる宇都に、一誠は戸惑った。

なにせ、一誠はこういうことを何度も経験している。

自分と友達になつてほしいと言つてくれた子はいた。

隣に住んでいた男の子もそうだった。でも、気付けば優一の方に行つていた。

誘つても、優一の約束が先だと、断られるようになっていた。

だから、一誠はその手を取ることに躊躇した。また裏切られると思つたから。

「もう、恥ずかしがり屋なんだからー」

そう言うのと、宇都是一誠の手を掴んだ。急に手を掴まれたことに、一誠は吃驚する。なにせ、相手から手を掴まれたことは無かったからだ。

「私が友達になろうって言ったんだから、貴方はもう私の友達なの。

だから、私の手を取らなきゃダメなの！」

「それってオウポウなんじゃないの？」

「良いの！私が決めたんだから！」

「そんなムチャクチャな・・・」

「ほら、私が名乗ったんだから、貴方も名前を言いなさい」

宇都のムチャクチャな言葉に、一誠はしどろもどろに答える。

「一誠・・・」

「そう、一誠ね。じゃあ一誠、私は約束するわ」

宇都是一誠の手を強く握る。

「私は貴方を裏切らない。私が来たからには、もう絶対に傷つかせない。

私はずっと、貴方の傍にいるわ」

気付けば一誠は、宇都に抱きしめられていた。

「一誠のお母さん、一誠を起こしましたよー!」

「いつもありがとうね、宇都ちゃん」

「いえいえ、私の仕事なのですから!」

未だ痛む腹を押さええながら、俺は二人を恨めしく見る。

「そんな目で見ても駄目よ、遅く起きる一誠が悪いんだから。」

少しは優一を見習いなさい。もう学校に行ってるのよ」

母さんのその言葉に、俺は苦い思いがこみ上げる。

「一誠のお母さん、私の仕事を無くさないでくださいよー。」

一誠を起こしに来るために私がいるのですからー。ね、一誠? 私に感謝してるもん

ねー」

宇都がチラリと俺を見ると、こくりと首を縦に振る。

俺は少し気恥ずかしくなった。

「はいはい、解ってるよ。だったらもつと優しく起こしてくれても良いじゃんか」

「え、良いの? 優しく起こしていいの? 本当に?」

俺は宇都の表情と声に寒気を感じ、「やっぱなしだ!」と首を横に振る。

「えー、一誠が言ったんだよー？酷くないー？」

「今の表情を見たら、誰だつてそう思うぞ！女の子の表情じゃなかったわ！」

そう、まるで餌を前にした肉食獣のような顔だった。

絶対にヤバいつて！

「一誠、女の子の顔をそんな風に言うもんじゃないぞ？」

宇都ちゃんの顔は、お父さんからしても綺麗だと思う」

「あらやだ、お義父様。そう言っていただけだと嬉しく思います」

「ちよつと待て、なんか字が違うよな？なんか違う意味で言ったよなその言葉!？」

俺の言葉に、宇都は「な、なんのことかなー？」としらばつくれるが、

目がゆらゆらと揺れているのが丸判りだ。

「わ、私、外で待つてるからねー」

そう言つて、彼女は玄関へとそそくさと走つて行つた。

逃げたな・・・俺は確信した。

「一誠、早くご飯を食べて支度しなさい。宇都ちゃんを待たせちや駄目よ」

母さんの言葉に促されるように、俺は朝食の席に着いた。

「おつす一誠、宇都ちゃんを連れて登校ですか羨ま死ねー！」

「俺らに見せつけんじゃねえぞボンバー！」

学園の校門前で、俺は二人の男子から羽交い絞めをくらう。

羽交い絞めにしたのは、坊主頭と眼鏡男子。前者が松田で、後者が元浜だ。

共に俺の親友なのだが、登校時は毎回絡まれる。

「おのれ一誠、俺と元浜がモテないというのに、お前は美少女とリア充ライフを満喫しやがってー！」

「俺たちは親友だったというのに！一人だけ抜けしおつて！許せん！」

「二人とも、一誠と仲がいいねー！」

宇都の言葉に、二人は顔をにやける。

「そうです宇都さん！俺たちは一誠と、し・ん・ゆ・う・だからな！な、一誠！」

「ええ、そうですよ宇都さん、俺たちはずっと友ですから！」

「だったら現状のこれはなんだってんだ！お前等は俺に何の恨みがあるんだよ！」

「うるせー！幼馴染と登校なんてエロゲ・シチュエーションの体現者が！」

「お前はモテない男子の敵だー！」

「うん、みんな仲良しだねー！」

宇都の言葉とは裏腹に、俺は校門の前で、声にならない声で悲鳴を上げるのであった。

「いやー相変わらずねー。見ていて飽きないわ」

教室に入って席につけば、眼鏡を掛けた女子が話しかけてくる。名前は桐生藍華。俺たちと仲良くしてくれる珍しい女子だ。

「あ、桐生ちゃんおはよう」

「宇都ちゃんオツハー。いや相変わらず可愛いわねー、ちよつと胸触っていい?」

「え? いいよ? 私、桐生ちゃん大好きだし」

「ごめん、今ので自分が許せなくなつたわ」

「?」

桐生が床に崩れ落ちる姿に、宇都は首を傾げている。

こうしたボケなのか本音なのか判らないが、宇都はこういうことを平気で言う。

結果、元浜も松田も、宇都の前でエロネタを言わなくなった。もちろん、俺もだ。

一回、松田がパンツ見せてと言った際、「私ので良ければいいよ?」と返され、

松田は無言のまま、地面に頭を叩き付けながら土下座をしたことがあったのだ。

元浜もスリーサイズを聞いた際は、「触ってたしかめた方が早いよ?」と返され、

ただ一言「すみませんでした」と謝っていたこともある。

「元浜君も松田君も、頑張っている姿とか、普通にかっこいいのになー」と言った際は、俺たち、真つ当に生きようと思う」と、二人に決意させた経緯もある。

結果として、俺たちの駒王学園のモテモテ計画は破たんした。

だが、何故かそれで良かったのかもしれないと思うのだ。理由はよく解らないけど。そんな風に、俺たちがワイワイしていると、外の方でキヤーキヤーという声がする。見ると、赤い髪と黒い髪、そして白い髪の女生徒と、金髪の男子生徒が歩いていた。「おー、学園の二大お姉さまの御登場ね。あらマスコットにイケメン王子もいるわね」教室から外を見ていた桐生が言う。

その声は他の生徒とは違い、至って普通だ。いや、周りが叫び過ぎているのか。

「それにしても凄いわね。あの人たちが通ると、みんな声を上げるんだから。」

ま、人気者の性って奴かしら」

「そうだねー。本当にすごい」

宇都が間延びした声で応える。その声色に俺は何となく違和感を感じた。

「つて、あれ？後ろにいるのつて一誠の弟？」

「・・・」

俺は無意識に手を握りしめる。

「ほんと、彼奴つてすげえよな。成績優秀でスポーツ万能、拳句にイケメンときたもん

だ。

なんか、あそこまで行くと嫉妬すらわかないわ」

「そうそう、なんつーか、別世界の人間？って感じ。」

それに、俺からすればなんか怖いんだよなあ。こう、腹に何か抱えてそうでき」
松田と元浜は、直ぐに「わりい」と俺を見て謝ってくれた。

「いや、いいよ。あいつは俺よりも凄いつてのは事実だし。」

まいったなあ、兄貴の面子丸潰れだわ・・・」

俺は自分で自分を情けなく思う。

彼奴に兄貴らしいことをしようと思っても、彼奴は簡単に俺を越えちまう。

だから俺は・・・。

「一誠」

沈み込もうとした俺はハツとする。

「私は、一誠が今のままで良いと思う。私は今の一誠も大好き。
だから無理しなくていいんだよ？」

「ば、何急に言ってるんだよ!？」

「何って、私の気持ち」

首を傾げる宇都に、俺は気恥ずかしさで顔を背ける。

「見てつけやがってコノヤロー！」

「孫に囲まれて老衰で死ねー！」

「ほんと、面白いわね」

周りの声も、俺には聞こえないほどに、俺は顔が熱かった。

「それじゃあね、一誠。また明日」

「おう、また明日な」

俺は家の前で宇都と別れた。宇都の家は俺の家の近くだ。だから、毎回俺の家に来る。

もうかれこれ、出会ってから長い時間だが、本当に解らない時がある。

毎回俺を起こしに来たり、隙あらば抱きついて来たり、俺は毎回ドキッとする。

今日もそうだ。

あの告白まがいの言葉に、俺は悶々とする。

くそ、やっぱいいように弄ばれているのか？あー、もう！

俺は母さんにたいたいまと言うと、直ぐに部屋に駆け込み、ベッドに飛び込んだ。

俺は、ベッドで横になりながらも、彼奴の言葉の意味を理解しようと、悶々とするのであった。

「ふふん、可愛かったなあ」

私は彼の真つ赤になった顔を思い出し、自然と顔が笑顔に歪む。

まるで完熟トマトか、リンゴのように真つ赤になった彼の顔。

うんうん、思い出すだけでも口から涎が出ちゃう。

って、いけない、本当に垂れてた。

慌ててハンカチを取り出し、口元を拭う。回想は家に帰ってからのしらないとね。

自然と足が速くなる。

それにしても、

「本当にいたんだねえ」

私は一振り返り、一誠の家がある方へと目を向ける。

『本来いるはずのない弟がいる兵藤家』へと。

「ま、それを言ったら私もそうね」

いるはずのない『キャラクター』・いるはずのない『弟』・いるはずのない『私』

『筋書から外れた物語』『役割を失った者・それを奪った者・それを補う者』

これがこの世界。

「ま、私はどーでもいいしー」

私はニンマリと笑う。

そう、どうでもいい。私にはどうでもいい。これは私の本音。

誰がなにをしようと、誰が誰に成り代わろうと、誰が誰を救おうとも、私にはどうでもいい。

だって私には

「ん？」

私の後ろで何か音が聞こえた。

なんだろうと後ろを振り向こうとしたら、背中に衝撃が走り、何かが砕けた音が響く。気が付けば、私は壁に叩き付けられていた。

「グへへへエhhエエエイエエイエ、良い音だあ」

それは毛むくじやらをした塊だった。毛の塊に大きな手足があった。

そして、つぶらな二つの目と、大きな口があった。それは怪物だった。

その怪物の趣味は、綺麗な女を殴り、その身体が砕ける音を聴くことだった。怪物が追放されるまでは、正式な場で多くの女悪魔を砕いてきた。

だが、怪物は満足しなかった。満足しなかった結果、怪物は人間の世界に逃げた。初めは戦々恐々していたが、自分を殺すための追手が来ることもなく、今ではこうして、この町でのんびり趣味に没頭しているというわけだ。

「さあああああて、良い音もきいけえたああしい、ごはんにしちやおうおうおうお」怪物は、壁に叩き付けた手を退かす。その怪物の趣味はもう一つあった。

それは、砕いた相手を食べるということ。

強張った骨も綺麗に砕け、柔らかい肉が食べられるという、趣味と食事が混ざった、まさに一挙兩得な食事法だ。

さて、今晚もおいしい食事にありつけたということだ、

怪物は獲物有様を見ようとして、「あのさあー」声をかけられた。

怪物は、その声に振り返ると、そのつぶらな瞳を震わせた。

「これは酷いんじゃないのー?」

そこには、身体がくの字に曲がった、血まみれの女が立っていたのだから。

「いったあぁあー！」

私は力の入らない足で踏みとどまり、なんとか立つ。

が、どうやら背骨が砕けているらしく、イナバウアーのように逸れるか、くの字の前に歪むかで、身体のバランスが取れない。

視界が後ろに行ったり前にいったりと、気持ち悪くなってきた。

つて、腕も普段の方向とは逆方向に曲がってる！螺子のように捻じれてる！

取りあえず、身体を前向きにして、顔を相手に向ける。

「あーもう！折角思いにふけていたつてのにー！なんでお楽しみタイムを邪魔するのかなー？」

それとも何？私にはお楽しみをお楽しみむことすら許されないうつて訳？

は？ふざけんなよ！こっちは愛しい一誠と、明日どうしようかと考えていたつてのにさー！！」

「

「ちよつと、黙つてないで何か喋りなさいよ！私をこんな体にしやがつてさ。

あんた、酷いって自覚無いの？ないわけ？」

あーもう、頭がふらふらする・・・つて、うわ、私まつ赤じやん。

道理で視界が真っ赤に染まってると思ったら、血を流してるじゃん。

つたく取りあえずどうにかしないとね。

私はフラフラな頭を冷静にして、念じる。

それは本来いない存在が、

この世界で生きるために『渡された・願った・奪い取った・望んだ。押し付けられた』
力。

すると、私の脚元に広がる血だまりと影が盛り上がり、二重らせんのように私を包む
込む。

「あーあ、普通に生きたかったのになー」

そして、私は力を使った。

私は、自分の身体を確認する。うん。腕も身体も出血もなし、うん、元通りね。

私は安堵を感じつつも、今の自分の姿に溜息を吐く。

頭から大きな山羊の角を生やし、黒いドレスを纏う私。

自分の足を見れば、それは人間の足ではなく、山羊のように短く、蹄だ。

その私の足元から、影から、そしてドレスからは、無数黒い手がうごめいている。

これが、『私が神に押し付けられた力』

勝手に殺されて、勝手に選ばれて、勝手にこの世界に放り込まれた私には、ある意味相応しい姿かもしれない。

「あああああああああああああああー!?」

あら、私の姿を見て、目の前の怪物が発狂してる。

まあいつか、私もこの姿は嫌いだし、さっさと済ませちやおつと。

私は、発狂している怪物を捕まえるように、黒い手に指示を出す。

私の身体なので、念じるだけ十分なんだけどね。

「いやだあああああああー！助けでえー！じにだぐないいいいー！」

怪物は黒い手から逃げようと必死に足掻くも、そうは間屋が卸さない。

しっかりとラップリングさせて貰いまーす。

そして、黒い塊となったそれを見ながら、私は右手を掲げ、そして、

「えい♪」

握り潰した。

「おはよう宇都、今日もいい天気だな」

「おはよう一誠！会いたかったわー！」

私は一誠に抱きつく。

はー、一誠の香りが良いのですわー！極楽極楽ですわー！

「ばかつ！急に抱きつくな！臭いをかぐな！」

「えー!?いいじゃない、減るもんじゃないしー！」

「俺の大事な何かが減るんだよ！」

「はーい止めまーす。一誠に嫌われたくないし」

私は一誠から離れる。

おや、一誠の顔があかいねえ？ふふん、照れてるのかしら？

「ところで一誠、訊いて良い？」

「なんだよ、突然・・・」

「私の恋人になってくれませんか？」

「」

私の言葉に、一誠は時間から隔離された様に固まってしまった。

あれ？もしかして間違えたかしら。

「おーい、一誠？もしもーし？起きてるー？」

私は、固まった一誠をつつつき、撫でまわし、クンクンし、撫でる。

「ばっか、おま、急に何言ってるんだよ!？」

「だって昨日、私、言ったじゃん？好きだってき。それでどう？」

私の言葉に、一誠は顔を背けつ、頬を搔き、そして

「取りあえず・・・よろしく」

「はい！」

私は一誠の出して右手を、両手で包み込んだ。

私には一誠がいればそれでいい。

それが、この世界で自分の与えられた役割だとしても。

本来の世界を盗られた彼を守るなら、私はそれでも構わない。

たとえそれが、原作キャラと、私と同じ存在と刃を構えることなっても。

それは同情かもしれないし、憐れみかもしれないし、傷の舐め愛かもしれない。

でも今では、それも構わないと思っっている。

せめて、私は好きに生きようと思う。自分に正直なろうと思う。

一誠が好き、それが今の私の気持ち。この世界の一誠を。私が幸せにするの。

なあと、何があっても世界は回るわ。

既に狂って（原作とかけ離れて）いるんだから。

私は、照れてる一誠を見て、そう思った。

一誠大好きっ子2

「おつそーい！遅いよ一誠！私ずっと待つてんだよー？」

「わ、わりい……。なんか今日のことを考えてたら寝れなくてさ……」

公園の噴水まで、俺は宇都に頭を下げた。

チラリと宇都の方を見ると、案の定、顔を膨らませていた。

やばい、こういう時の宇都は非常に厄介だ。

小さい時、時間を間違えて宇都を待たせたことがあった。

あの時の宇都も、同じように顔を膨らませていた。

そして、それを宥めるのにすっごい苦労した覚えがある。

確か、オママゴトで夫婦役をやらされた気が……。

「ふーん？今日のことを思って眠れなかったのねー？」

「あ、ああそだよ。俺としたら、こういうのは初めてだしさ……」

宇都の視線を受けながら、俺はどぎまぎして答えた。

すると宇都の奴、さっきまで膨れていた顔を、ニンマリとさせた。

「そっかー、そうなんだー、へー」

「なんだよその意味ありげな笑顔……って、ば、いきなりなんだよ！」
宇都の奴、いきなり俺と腕組みしやがった。

突然のことに、俺は何が起ったのか一瞬分からなかった。

「私を待たせた罰ですー。今日は一誠と腕組みしますのでー」

「ば……やめろつて！こんなのを元浜たちに見られたらヤバいつて！」

「どっちみちヤバいでしょ？今日のことを見られたらさー」

宇都の言葉に俺は顔を赤らめるも、言い返せずに黙る。

宇都は、俺の顔を見てニシシと笑うと、絡んでいる腕に力を入れてきた。

「さてさてー、それでは行きましょうか一誠！今日は二人のデートよ！」

叫ぶ宇都の言葉に、俺は顔から火が出そうだった。

「にやははー！楽しいね一誠！」

「お、おう」

ぐいぐいと俺を引っ張る宇都に半ば引き摺られながらも、

俺はどうしてこうなったのかを思い出す。

きっかけは宇都が俺に告白した日のことだ。

宇都の奴、学校帰りに俺の家に上がるとすぐに、俺の母さんに俺と付き合うことを喋ったのだ。

母さんは一瞬呆けてたけど、直ぐに宇都の両肩を掴むと、

「一誠のこと、よろしくね」と泣きながら感謝してた。

その時の俺は、穴があつたら入りたい位に、ものすごく恥ずかしかった。

その日の夜なんか、母さんが父さんにそのことを言っちゃうから、

「そうか！宇都ちゃんなら心配ないな！」って言つて来たんだぜ？

あまり話すことがなかった優一も、

「兄さん、僕にも宇都さんつて子を紹介してよ」って興味ありげだったし。

それにしても優一の奴、オカルト研究部に入ったからって、夜に出かけることが多くなつたなあ。

何かと物騒なんだから、兄ちゃんとしては心配だけどさ。

学校の方も、活動に許可を出しているみたいだし、ただのお節介なのかもな。

それにしても、まさか優一がオカルト研究部に入るなんてな。

彼奴、そういうったものに興味ないと思つていたけどさ。

リアス・グレモリー先輩からって、同学年の木場祐斗、通称イケメン王子から誘われてたっけ。

今じゃ、放課後になると直ぐにオカルト研究部に行つて、相当に可愛がられてるようだし。

やっぱ、リアス・グレモリー先輩たちも女の子なのかねえ。

まあ弟が可愛がられてるなら、俺は何にも問題ないんだけどな。

つと、そんなことも考えてたら、急に宇都が止まった。

もしかして、俺が上の空だったのがばれた・・・のか？

「一誠」

「ん、どうしたんだよ？」

宇都はくるりと俺の方を向く。

「私、なんか唐突にパフェが食べたくなっちゃったなー。」

だからさ、駅前のお茶店に行こー？」

「なんだよ急に。さっきまでクレーンゲームでぬいぐるみをゲットよー！つて言つてたのに」

「ごめんね、なんか突然食べたくなつたのよー。だから予定変更、駅前に行こう！」

そう言つて、俺を腕を引っ張りながら駅前へと行こうとする宇都。

一体どうしたんだ？と思ひ、俺たちが行こうとした方向をちらりと見た。

金髪の美少女と一緒に歩いている優一が見えた。

「はい、一誠アーン！」

俺に向かつて差し出されたスプーンに、俺は宇都の方を見た。

宇都はすっごいいい笑顔で俺にスプーンを出している。

「宇都」

「なにー？」

「何してるんだ？」

「このパフェ美味しいから、一誠にもおすそ分け」

「いやだからさ、なんでスプーンを俺に向けてるの？」

「なんとなく、一誠にアーンがしたくなった」

宇都の言葉に、俺の顔は一気に赤くなった。

毎回宇都のこういつた行動には、どぎまぎしていたけど、

まさかここまで天然だったとは思わなかった。

「いやだからさ、それは恋人がやる奴であって・・・」

「一誠」

俺の言葉を遮るように、宇都は言葉を被せてきた。

「私と一誠はどういう関係？」

「えつと、幼馴染？」

「違う」

「友達？」

「それも違う」

視線を逸らす俺を、宇都は先ほどまでの笑顔じゃなくて、真剣な目で見てくる。

ああ、宇都の聞きたいことはつまりそう言うことか。

「言わなきゃダメか？」

「うん」

俺の心は弾けそうなほどに鼓動し、頭が真っ白になりそうになる。

でも、ここで言わなきゃいけないのは解ってる。宇都の想いを無下にしたくない。

俺は何度も深呼吸をし、顔から汗を流しながらも言う。

「恋人」

「正解」

俺の答えに笑顔を戻した宇都は、既に溶けたパフェをもう一度スプーンで掬い、俺に向けた。

ようは、そういうことだ。

「俺はさっきの言葉のせいで逃げ切れないと悟り、視線を逸らしながらも食べた。その時の味は、俺には全く分からなかった。」

そうした喫茶店の出来事を終え、俺は宇都に腕を組まれつつも振り回されっぱなしだった。

映画館に行こう！と言われて引き摺られ、欲しいものがあるの！と言われて引き摺られた。

あれ？俺ずっと引き摺られっぱなしだった？俺の思っていたデートってこうだったか？

「あー楽しかった！ね、一誠」

「お、おう」

夕暮れになり、俺は家の前にいた。

なんか、散々引き摺られていた記憶しかないけど、宇都の笑顔が見れて良かったよ。

「ねえ、一誠」

「うん？」

夕日を見ながら俺に背を向けている宇都が尋ねてきた。

「私とデートして楽しかった？」

宇都の言葉に、俺は言葉が出なかった。

ああ楽しかったぜ！と言えば良いのかと思ったけど、ちらりと宇都の方を見た。後で組んでいる手が震えているのが見えた。

ああそうか、俺は宇都の想いを察した。

「そうだなあ、確かに楽しかったけどさ。俺からすればまだまだだったな」
「そうなの？」

「だからさ、今度は俺からデートをさせてくれよな」

「いいの？」

「もちろんだ」

俺の言葉に、宇都はくるりと振り向いた。

「だったら楽しみにしてるからねー？絶対に私を楽しませなさいよー？」
「おう！」

宇都の笑顔に、俺は笑って言った。

「それじゃあね一誠。また明日」

「じゃあな宇都。お前も気をつけろよ」

そうして家の前で別れ、家の門をくぐろうとした時、ふと宇都が俺に声をかけた。

「一誠！今日の夜は家から出ない方が良いよー！」

「え、なんでだよ」

「なんか星占いでそう書いてたからー！じゃあねー！」

俺は宇都の言葉に首を傾げながら、宇都に手を振った。

そして俺は、家に帰るやいなや、母さんから今日のことを根掘り葉掘り喋らされた。

ちなみに、その後父さんからも同じことを聞かれ、俺は恥ずかしさでいっぱいだった。

「ああ、今日なのね」

私は家へ帰りながら、今日のことを思い出す。

一誠とのデートで、私なりに計画を立て、一誠に楽しんでもらおうとしていた。

買い物をして、喫茶店に行つて、つそしてゲームセンターに行こうと計画をしていた。しかし、『アーシア・アルジエントと仲良くゲームセンターに行く一誠の弟』を見て、私は急遽、ゲームセンターと公園をデートのルートから除外した。

なぜなら私の予測が確かなら、今日が原作1巻の大詰めだからだ。

アーシア・アルジエントが、本来の一誠とゲームセンターに行く。

これは原作の流れを汲むならなら、最後に公園で1巻のボスであるレイナーレと戦つて負ける。

その後は攫われたアーシア・アルジエントを助けるために、

一誠たちが廃教会へと殴り込みをかけるからだ。

ゆえに、一誠を巻き込まないためにも、私はゲームセンターと公園を取りやめた。

一応帰り際、夜に家から出ないことを一誠に言っておいたから問題ないと思う。

まあ転生者の方も原作に従うなら、あ後はオカルト研究部に駆け込み、

そのまま廃教会に行くだろうし。

「それにしても、解りやすくていい子ね」

私は転生者をそう評価した。

私は、一誠を本来の原作に巻き込ませないために、出来るだけ原作組と距離を置かせ

た。

それこそ、願いを叶える契約チラシすら目に届かないよう徹底的に。

そのせいで、一体今は原作のどの部分なのか？というのが判断し辛くなった弊害もあつたが。

でも、そこは転生者の振る舞いを見ていれば何となくだが理解出来た。

一誠たちは忘れていたようだが、転生者が『天野夕麻』に告られたことや、オカルト研究部に入部したこと、それから見れば大体の状況は察することが出来た。今じゃ、オカルト研究部の方に時間を割いているみたいだしね。

一誠が心配してたけど、そんなことは転生者からすれば、いらぬお節介なだけみたいだし。

そして今日のデートでの光景だ。ようは、今日が原作一巻の終わりと言うことだ。

「でも、せっかくのデートなのに水を差された気分なのよねー」

転生者は出来るだけ原作を壊さないように、原作の一誠と同じ行動をしている。

まあ、元浜君や松田君が私の方に来ちゃったから、原作のような変態行動はしてないけど。

私の考えが当たっているなら、転生者は私と同じように原作知識を持っている。

持っているからこそ、本来の一誠と同じような行動をとっているし、とれるのだ。

傍から眺めているだけでも、オカルト研究部のみなさん、みんな転生者の虜つばいのよねー。

まだちゃんとした手順（結婚騒動・聖剣事件・父親、姉問題など）を踏んでいないから、

単に心を許せる関係って感じだったけどー。

つまり、『原作に実在しない、私という存在』を理解している。

自分も本来ならない存在ってことを棚に上げてねー。

私が心配だったのが、転生者特有の『俺以外の存在は排除する思考』。

自分と同じ存在がいると知った場合、大体の転生者が『排除』する方向に行く。

そうだったら私としても簡単なよねえ。私も全力で殺しに行くだけだから。

まあでも、危惧していた『私』や『邪魔な一誠』を排除する気もないし、

あちらにしてみれば、自分の邪魔をしたら・・・って奴なのかもね。

私も同じだけど。

「さて、これからどうしようっかなー」

私はこれからのことについて考える。

これが原作一巻の終わりならば、次に起こるのはアジア・アルジエントのホームステイだ。

原作2巻の当初から、リアス・グレモリーの機転によって、アーシア・アルジェントが一誠の家に来るのだ。

そこから2巻のメインである、憐れなかませ犬のライザー・フェニックスとの、リアス・グレモリーの結婚をかけてのレーティング・ゲーム。

それによって、新たにリアス・グレモリーが一誠の家に居候する。

確か、そこからヒロインの居候が段々と増えていき、何度か改築するんだっけ？

ただの一軒家だったのが、最終的には地下プール付きのマンションになってたかなー

？

ほんと、周りの人や何もかもが自分たちのために蔑ろって感じよねー。

まあそれはさておき

「可哀想だけど、一誠をどうにか家から引き離さないといけないのかなー」

私はそれを危惧する。

今も言ったが、これから一誠の家には、転生者が行う本来の一誠の行動によって、

これからどんどんと女だけの居候たちが増え、そしてどんどんと家が改築されていく。

肝心の一誠のご両親は、リアス・グレモリーの催眠によって、

そのことに関しては疑問を持たないようになっていく。

というか、もう催眠されてるのよねー。

私の『押し付けられた力』で、そう言うのは丸判り。

全く、私のお義母さんとお義父さんに何してくれてるのよー！

でもだからと言って、催眠を解いちゃったら絶対にややこしくなるから、分かっていても何も出来ないというジレンマ。ごめんなさい。

閑話休題。

と言うわけで、一誠のご両親は問題ないけれど、一誠は違う。

たとえば力も立場も失った、『ただのモブである兵藤一誠』でも、私としては不安の種。先ほども言ったが、下手に『本来の主人公』を『原作ヒロイン』たちと合わせてしまつたら、

一体何が起るか分からないのだ。それこそ、唐突に修正力が働くかもしれない。

奪われたドライグが、急に一誠に戻るかもしれないのだ。

そうなってしまったら、下手すれば転生者が本当の意味で『一誠に成り代わる』可能性すらある。

まあその前に、私が全力で転生者をコロコロしに行つて、その後は姿を晦ませるつもり。だつていずれは、私も修正力に何をされるか判らないからだ。

「だから頼むよ転生者くん。私と一誠のためにね」

君が原作の主人公に成り代わって、原作ヒロインとイチャイチャしようが私には関係ない。

むしろ私にとって、それは願ってもない好都合。

君が主人公として振舞ってくれただけで、私は一誠と仲良く出来る時間が増える。

君が主人公として頑張ってくれるだけで、私は一誠と楽しく日常が過ごせる。

これを言ったら一誠が悲しむから言わないけど、

君が主人公として傷付こうが、モテようが、果てに原作と同じように、

盛りのついた猿の如く「おっぱいおっぱい」と叫んでいようが、私は一誠の方が大切なもの。

君が主人公と言う物語の避雷針になってくれるなら、私はずっと君を見守ってあげる。

私は『良い子の転生者である一誠の弟』のことを思い、そして笑う。

でも、もしも欲に目が眩んで・不安に苛まれて・調子に乗って、

私と一誠を何かしようとした時は、どんなチート能力だろうが特典を持っていても知ったことか。

『その時は覚悟しておいてね』

単発オリ主シリーズ

私は貴方の剣となろう（転生者第二弾）

神様転生と言うのは御存じでしょうか？

クソツタレで頭パツパラパーのぶん殴りたいくらいのおバカ神様が、

これまたクソツタレで頭パツパラパーなアホをやらかして罪もない人間（なぜか限定）を殺し、

その罪滅ぼし（口封じ）に別の異世界に転生させることです。

大抵は、超強いチート能力だの、超凄いスキルだのを渡されて、

好き勝手に大暴れするつてのがお決まりでしょうね。

でも冷静に考えてください。

転生させられるにしても、それが人間だつて決まっていますか？

もしかしたら、人間以外、例えば虫だったり魚だったり、人間以外になるとは思いませんか？

動物になれるならまだマシです。

下手をしたら、木や草花と言った植物になるかもしれません。

いえ、もしかしたら、もつと最悪なものになるかもしれないじゃないですか。意識はあれど動けない、それって拷問じゃないですか？

ですから、転生先はしつかりと決めておいた方がいいと、私は声を高くして言いたい。これ、私からのアドバイスね。

あと、これも言っておきましょうか。

神様のバカヤロー！

「うん、どうしたんだい？急に大きな声を出して」

「気にしないで。少し気が立っていただけだから」

私の言葉に、彼はクスリと笑った。

「何がそんなにおかしいのよ」

「いや、なんだか久しぶりだなあってね。」

君がそんな風になるのは、いつ以来だろうって」

彼は私を撫でる。

その仕草に、私は恥ずかしくなって声を荒げた。

「ちよつと！馴れ馴れしく撫でなでくれる!？」

「こんなナリでも、私はデリケートなんだからね!!」

「はいはい」

口ではそう言っても、彼は私をいっこうに撫で続ける。

初めて彼と出会ってから、彼は私をこんな風に扱う。

これでも私は女の子なんだからね！

私が怒っていると分かると、彼はその手を引つ込めた。

ふん、もう少し撫でてでも良かったけど、私はそんな安い女じゃないんだからね。

「それで、これからどこに向かう気？」

私の言葉に、彼は少し考え事をした後、「これからどこに行こうかなあ」と答えた。

まったく、こういうことが彼の欠点なのよね。

後先考えずに行動するせいで、私がいかに迷惑を被っているか。

「取りあえず、近くの町にでも行けばいいんじゃないかしら。」

そうすれば、自然と次の目的も思いつくと思うわよ」

私に言葉に、彼は満足げに頷く。

「そうだね、そうしよう。いや、君のおかげで本当に助かってばかりだよ」

「ふん、私をおだてても意味ないわよ？というか貴方が考えなしなのよ。」

こうなったのだって、そもそも貴方が……。

それに、少しは貴方も知恵を絞りなさい。一応戦士なんでしょ？」

「まあ一応、戦士ってことなのかなあ。これでも数多く戦ってきたからね。」

それに、そうなるように作られたって方が正しいのかもしれないけど」
彼はそういうと、一瞬だが皮肉に笑う。

「あのね」

私、彼のこういうところが許せないところなのよね。

「いい？何度も言ったけど、生まれとかそんなの関係ないのよ。」

私が貴方に同情したところで、貴方の生まれが変わるわけないんだし。
だったら、もう生まれなんて関係ない。君のしたいことをしなさいよ。

君だって、それをする権利があるんだから」

「良いのかな？」

「良いに決まってるでしょ」

「すまない」

「すまないじゃないでしょ？」

私の言葉に、彼は少し考えてから改めて言葉を紡ぐ。

「ありがとう」

「どういたしまして」

ようやくその嫌な感じの暗い顔が笑ったわね。

本当に彼は、私がいらないとしようがないんだから。

少しだけ良い雰囲気のは、私に向かつて声をかける。

「じゃあさつそく近くの町へ行こうか。」

一応、ここは安全だと思うけど、いつ魔物に襲われるか分からないからね」

「それ、フラグっていうのよ」

キョトンとする彼に、私は溜息を吐く。

そして案の定、私たちの影に重なるように、突然別の影が差した。

「へえー、何やら強い気配を感じて来てみたら、貴方、結構いいわね」

酷く粘つくような、気色の悪い声が聞こえた。

振り返ってみれば、コウモリの翼を生やした女たちが立っていた。

「ほらみなさいよ。貴方が変なことを言うから来ちゃったじゃない」

「これは俺のせいなの?」

首を傾げる彼に、私は「そうよ」と言った。

本当に世話の焼ける人なんだから。

「ちよつと、何ぶつぶつ言ってるのよ。気持ち悪いわね。」

まあいいわ。見たところ顔も私好みだし、見逃す意味はないわね。

あなた、私の下僕になりなさい」

「って言ってるけど、どう思う?」

「却下よ却下！あんな顔と肉体が綺麗なだけの、外面美人の下僕なんかになってみなさい。」

一生モノの首輪を付けられて、永遠の家畜か性欲を満たすための愛玩動物一直線。

最後は飽きられて狩獵ごっここの標的にされて死ぬだけよ。

というか、下僕の時点で胡散臭過ぎ」

「それは嫌だなあ」

彼は頗る嫌な顔をする。一応、私は嘘を言っていない。

というか、この世界はこんな奴等ばつかだと私は思ってる。だってそういう描写ばつかだもの。

この世界の主人公に一言言っただけでやりたいわ。

いくら自分が恵まれてるからって、自分以外に目を向けなさいってえの！

あ、目を向けてもダメだったわね。確か、この手を話題に触れても、何もしなかったし。

「と言うわけで、俺は断らせて貰うよ」

あ、彼の言葉にコウモリ女の顔が酷く歪んだ。

あーあ、こいつ絶対に断られないって思ってたんだー。プププ、バツカみたーい！

「私の下僕になれば、永い命と富、そして快樂を得られるんだけど？」

「そんなのはいらぬ。」

あ、更に歪んだ。綺麗な顔だったのに、青筋浮かべてる。

「私に遣えれば」

「なる気はない」

あ、ブチって音が聞こえた。

あーあ、外面だけは美人だったのに、見る影もなく歪んだ顔になつてゐるわね。

本性が滲み出てるわよお。

「いいわ、転生悪魔にささえできれば問題ないもの。」

この愚かな下等生物に、自分がいかに愚かか教えて差し上げましょう。

地べたに這いつくばらせて、命乞いをさせて、屈辱の中で転生させてあげましょう。

そして転生させた後は、徹底的に搾りつくしてあげるわ！」

妄想の中では、彼とギツコンバツタンしてるのか、

蕩けた笑みを浮かべた上に舌なめずりをするコウモリ女。

その姿に、彼は私を見てくる。

「だつてさ」

「うーわ、きつしよ！だから私は悪魔なんて嫌いなよ！」

こういう奴等ばつかだから、原作に好感がもてないってえの！」

「原作？」

「何でもないわ！それより来るわよ！」

コウモリ女が叫ぶと、彼女の周りにいた者達が前に出る。

あ、コウモリ女は後に下がるんですね。やーいヘタレー！根性なしー！口先だけの臆病者ー！

「そこまで言っちゃ駄目だよ」

彼は私の言葉に受けいたらしく、笑いを堪えようとするも、口から笑い声が漏れる。

「貴方、今笑ったのですか？そうですか、私を笑ったのですか。

私を嗤ったのですね？良いわ、殺しなさい。転生さえできれば問題ないもの」

コウモリ女の顔から表情が消え、感情の無い言葉を告げる。

その言葉を聞き、彼女の部下らしい者達が一斉に私たちに襲い掛かる。

でも私と彼は平然だった。だってこんなのいつも通りだったから。

「いけるかい？」

「心配しないで良いわ。私がついているんだから」

「そうだね、君がいれば問題ない」

そう言葉を交わし、私たちは魔物に突っ込んだ。

がむしやらに突つ込んでくる、顔が犬の獣人っぽい悪魔の攻撃を躲す。避けた爪が岩に触れると、まるで熱したナイフでバターを斬るかのように岩が斬れた。

「凄いね」

爪が触れば、鎧なんて何の意味もないだろう、その爪の力。

でも私たちからすれば、そんなのは大したものじゃない。

なぜなら、

「よしよしよ」

腕ごと斬れば良いだけだもの。

振り返った隙を突き、犬顔悪魔の右腕を肩ごと斬り落とす。

腕を切り落とされながらも、犬顔悪魔も左手を突きだして反撃する。

その突きを伏せて躲し、指の隙間を通して、肩へと一気に斬り伏せる。

途中、剣の刃先が爪に触れて火花が散った。

「いめんね」

そして振り替えながら首を斬り飛ばす。

間欠泉の如く、切断面から血が迸り、周囲を赤く染めた。

「大丈夫かい？」

「別に問題ないわよ。私をなんだと思ってるの」

彼は私を気遣うけど、私はそんなに軟じやない。

「！ 6時方向に前進！」

私^がが叫び、彼^がが飛ぶ。

一瞬の後、今私たちがいた地面から岩の槍が飛び出した。

避けなかつたら、今頃は串刺しだったわね。

「ありがとう」

「お礼は後、来るわよ」

気配の方を見れば、コウモリ女が、地面に魔法陣を顕現させ、何やら呟いている。

どうやら今の槍は、彼女の仕業ね。だから距離を取ったのかしら。

コウモリ女を少しは見直してあげようかしらね。

「どうしよっか？」

「いつも通りにやればいいんじゃないの？」

尋ねてくる彼に私は答える。

そう、こういつた状況は経験してきたのだ。

それこそ実験や訓練と称して、何度も何度もやってきた。

「それにしても厄介ね。一応、あっちも戦いの基準は解っているみたいだし。

流石に遠くに距離を取られると厳しいわ」

コウモリ女の遠距離も厳しいが、それを守るように、他の悪魔たちが彼女の前に立つ。遠距離を主軸として、他がそれを支援する。

彼女の遠距離に気を取られれば配下がその隙を、配下に気を取られれば彼女が隙を突いてくる。

基本的な戦術だけど、だからこそ型に嵌まると対処が厳しい。

「じゃあ、少し無茶をするね」

そう言うと、彼は私を持ち上げる。そして腰に差していたもう一本の剣を抜く。

その行動に、私は嫌な予感がした。

「え、ちよつと！一体何をする．．．って、まさか!? 待つて、それは一言声をか」

「えい」

そして私をぶん投げた。

いいいいいいいやあああああああああああああああああああああ!?

絶叫をあげながら一直線に飛んでいく私。

流石にこれは想定外だったのか、コウモリ女を守っていた悪魔も直ぐに対処できなかつたらしい。

通り過ぎる私を目で追ってしまった。目の前には彼がいるのに。

「隙だらけだよ」

だからこそ、その隙で命を落とす。

後ろで斬り殺されていく悪魔たちの悲鳴を聞きながら、

投げられたせいでパニックに陥っている私。

そして同じように混乱していたコウモリ女は、とつさに魔術防壁を作る。

だが悲しいかな。私を止めるには技術も、厚さも、強度も足りず、防壁は碎け散った。

コウモリ女は勢いを殺しきれず、私ごとそのまま大木に叩き付けられた。

「ナイスコントロール」

「絶対に、後で、後悔させてやる……！」

私を見下す彼に、呪いあれと願いたくなくなった。

よいしよの掛け声と共に、私を大木から抜き出す彼。

ガフツとコウモリ女が血を吐く。あら、まだ生きてたんだ。

でも、流れ出てる血の量からして、長くはないわね。

「お、お前は一体……何者なの……よ……」

「うーん、俺は誰なんだろうね」

コウモリ女の問いに、彼は首を傾げながら答える。

「最後まで……私を……ば、バカにするのね……」

「いや、本当のことなんだけど」

コウモリ女は、口元を歪め、ガクリと頭を垂れた。

それを見つめる彼と私。ああ、やっぱりこの世界は嫌いよ。

嫌な奴でも、死んでしまおうと嫌な気分になる。

血まみれの私は、そのことに何も言えないんだけどね。

「さ、日が暮れない内に町へ行くわよ」

私は、コウモリ女を見つめる彼に声をかける。

コウモリ女たちのせいで時間を食ってしまった。下手するとこのまま野宿コースになる。

「待って」

彼が私の言葉を遮る。

「お墓、作ってもいいかな？」

「君がしたいと思うなら」

「ありがとう」

「早くしなさい。日が暮れちゃうから」

私は彼の言葉を、少し嬉しく思った。

「こんなもので良いかな？」

こもりりと盛られた土の山がいくつか出来た。それは全て、私たちが殺した悪魔たちのお墓。

殺し殺されるのがこの世界の常識だけど、やっぱり供養はした方が良いかもね。

ただ、十字架を刺しておくのはどうなのかしらねえ。

だって十字架つて、悪魔にとっては致命的な殺傷物じゃなかったかしら？

まあ、いいわね。

最後に墓の前で十字架を切る彼。

一見すれば、死者のために祈りを捧げているんだけど、

駄目押しのとどめを刺してる気がするのは何故かしら。

「じゃあ、行こうか」

「そうね。誰かさんがお墓を作って時間を食っちゃたけど、急げばまだ間に合うかしら」
星が見え始めた空を見つつ、私は彼に言う。

「それじゃ、君の機嫌を損ねる前に、急ぐとしようか」

「お願いだから丁寧に走ってよ、君……って、めんどくさいわね。」

いい加減、君は名前を決めなさいよ。毎回、君とか貴方とか言うの大変なんだから」

私の言葉に彼は頬を掻く。

彼と出会ってから少しだけど、いい加減、名前を決めてほしいのよねえ。それによって、私も対応を変えなきゃいけないし。

「でも、俺は施設だと番号で呼ばれてたんだよ？名前を決めるなんて言われても……」
あーもう！苛々する！

私の感情が伝わったのか、彼は慌てて答えた。

「わ、わかったよ！ジーク、ジークって呼んでよ。」

取りあえず、俺の元になった名前の一部だつて、施設の人は言つてたし」

「そう、ジークね。じゃあジーク。さっさと町まで走りなさい。」

そうね、あとはお風呂に入れてくれたら最高かしら。

誰かさんが、私をスコップ代わりに使ったせいで泥だらけよ」

「ときどき思うんだけど、君って結構我儘だよね？」

ジークの皮肉に私は黙る。決して、凶星だからじゃないわよ。

溜息を吐く、ジークは、私を腰ベルトの鞆に戻し、町へと駆けて行く。

あ、そうだ。私が誰か言つてなかったわね。

私の名前は……つて、前の私の名前を言つても意味ないわね。

しいて言うなら、グラムリアつてところかしら。

今までのことと、名前でピン！と来ると思いうけど、『魔剣グラム』に宿ちやった転生

者。
それが私よ。

張りぼてのヒーロー（転生？第三弾）

タスケテ

それは心の中で叫んだ。

モウヤメテ

それは自身の行いに恐怖していた。

自分の身体なのに、自分の身体じゃない。

自分なのに、自分じゃない。それは怪物だった。

怪物の身体は本能のままに暴れた。

見えるもの全てを壊し、喰らい、血を啜り、そして笑う。

怪物を見た者は、怪物に恐怖し、泣き叫び、そして逃げ出す。

だが、怪物はそれを簡単に蹂躪する。

イヤダ

目の前で泣き叫ぶ子供を無造作に蹴り飛ばし、子供が裂けた。

母親だろう女が、その凄惨な光景に叫ぶ。鬱陶しいから同じように蹴り飛ばした。

ヤメテ

自分は何度も叫んでいるのに、自分の身体は勝手に動く。

子供を、大人を、老人を、目に入るすべてを蹂躪する。

ヤメテヨオ

怪物は嗤う。自身が蹂躪した者達の末路を嘲笑って、目から赤い涙を流して。

モウイヤダ

目から赤い滴を零しながら、怪物は嗤う。

ダレカワタシヲ

自分自身を呪いながら。

コロシテ

怪物は願う。

「分かったわ」

突然の声に、怪物は動きを止め、声の方へと振りむく。

そこには人がいた。

紺色のジーンズを履き、上は灰色のダッフルコートを纏い、黒の野球帽をかぶっている。

首元には赤い色をしたペンダントがかかっている。

帽子を目深にかぶっているせい、顔が見えず、性別も分からない。

ただ帽子から見える髪は薄い茶色だった。

そして怪物は気付く。

目の前のこいつはいつの間にも現れたのか？ どうしてこいつに気付けなかったのか？

そして、この場にいるのは自分と目の前の人間だけだと。

さつきまではたくさんのおもちゃがいたのだが、

自分がぶちぶちと壊している間に逃げられてしまったようだ。

ならば、目の前のこいつで今日は最後にしよう、怪物はそう決定し、ニタリと笑う。

その口からはだらだらと赤い唾液が滴る。

ニゲテ

怪物は叫ぶ。もう自分のせいで誰かが死ぬのは見たくない。

でも、自分ではもはや止められない。故に怪物は、聞こえない叫び声を上げるしか出来ない。

「それは無理ね。だって、貴女の声が聞こえたから」

そう言うと、その人間は首元のペンダントを握りしめ、

「だから貴女の願い、私が叶える」

叫ぶ。

「鉄槌を下せ、ミヨルニル」

その瞬間、ペンダントから眩い光が迸り、怪物は咄嗟に目を閉ざした。

そして目を開けると、そこにいたのは黒と金色の甲冑だった。

顔も黒色のマスクで覆われており、目の部分は赤い光を放っている。

口元に当たる部分からは、排気音と共に白い煙が漏れた。

そして甲冑からは、時折バチバチと光が走っている。

その姿に、怪物は一步後ろに下がった。

怪物は感じたのだ。目の前にいる甲冑は恐ろしい存在だと。

今すぐに逃げるべきだと。

そして怪物はその本能に従い、その場から離れようと足に力を込め、

る前に、目の前に甲冑が立っていた。

そして気付けば、甲冑の右腕が自分の身体を掴んでいた。

怪物は振り剥がそうともがくも、いっこうに引きはがせない。

ならばと、怪物は甲冑に向けてその爪を突き刺そうと振るうが、逆に爪が砕けた。

目の前で自分の爪が砕ける様を見た怪物は、一瞬呆けてしまう。

その瞬間、怪物は甲冑に引っ張られて宙を舞い、路上に叩き付けられた。

その後、怪物は何度も何度も何度も何度も何度も何度も、路上に叩き付けられた。

さながらメトロノームのように、右左の地面にギツコンバツタンと叩き付けられた。

その度に、怪物の顔から、身体から、何かが碎ける音が響き渡り、

体中から赤いしぶきが迸り、路上を真っ赤に染めていった。

それは皮肉にも、さつきまで怪物がやっていたことを真似るかのよう。

しばらくして、甲冑は右手を離し、怪物の方を見る。

そこには、四肢は螺子のように捻じれ、鉛細工のように歪み、

赤いペンキを被ったかのように、真っ赤に染まった怪物がいた。

四肢はまだ痙攣しており、怪物は幸運にもまだ生きていた。

怪物が息をしているのを確認すると、甲冑は右手を大きく掲げる。

すると、装甲に覆われていた右腕から、何やら音が響き出す。

歯車が軋み出すような音、エンジンのタービンの回りが回り出すような音。

それらの音と共に、右腕の装甲が全方位に展開される。

まるで開いた傘の骨組みのように展開された装甲。

そしてその装甲内では、バチバチと電気が暴れ駆け巡っている。

甲冑は首を動かし、怪物を見下す。

もはや死ぬのを待っただけの怪物は、辛うじて動けた目を動かし、互いに視線が交わつ

た。

アリガトウ

「ごめんなさい」

甲冑は右腕を怪物に振り下ろした。

その瞬間、晴天だというのに、轟音と共に稲妻が落ちた。

目の前で炭になった怪物が、風に乗って崩れていく。

私は何も言わず、その光景を眺めていた。

掌に残った僅かな灰を握り締め、私は右手を地面に叩き付けた、何度も何度も。

その度に地面が抉れ陥没していくが、私は気にも留めずに殴り続けた。

すると、何かが地面に落ちたのか、コンという音がし、私は音の方へと顔を向けた。

見れば、黒いチェスの駒がそこにあった。形からして『兵士』の駒だろう。

私はその駒を掴み、バイザー機能を働かせ、それを調べる。

そして分かったことは、目の前の駒は、あまりにも悍ましいものだということだった。

名称は判らないが、それは生物の根幹を弄り、別の生物に書き換える術式が組み込まれていた。

それは、私の世界では禁忌に等しい術式だった。

別の種族に変える魔法や技術はあるが、あくまでその機能を一時的に借りているだけだ。

水中で呼吸出来る魔法を使っても、人間は人間、獣人は獣人のままだ。

種族すらも弄ることは、その生命を侮辱する考えがあるからだ。

そして、どうやらこの駒には、一種の先導術式も組み込まれていた。

それは、悪魔として振舞うように意識を誘導する、一種の洗脳だった。

自分達を上位種と考え、それ以外は全て下等と見下す。

自分たち以外を玩具と見做し、自身の欲望を溢れさせ、最後は暴走させる。

おそらく、そのなれの果てが・・・

私は手にしていた駒を握りつぶした。

「許せない」

不思議と声が零れていた。

命をなんだと思っているんだ。命は変えていいものじゃない。

私には怪物の声が聞こえていた。

タスケテと

イヤダと

コロシテクレと

元がなんであつたかは私には解らないし、もう知れない。

本当は怪物の自業自得かもしれない。でも、怪物は後悔していた、自分の行いを。

許されない罪だろう、許されていない罪だろう、周りを見れば、

怪物が行つた凄惨な行為を様々と見せつけられる。

でも、もしかしたら、怪物にもやり直せるチャンスがあつたかもしれない。

苦しんで、苦しんで、永遠に苦しみ続けることになつても、罪を償えたかもしれない。

でもそれは永遠に来ることはない。

なぜなら、その機会を永遠に奪つたのは自分だから。

私は拳を地面に叩きつけ、巨大なクレーターが生まれた。

すると、パチパチと拍手の音がきこえた。

音の方を見れば、なにやら中世の貴族が着るだろう、時代錯誤の服を着た男が立つて

いた。

「いやー、素晴らしいですね！」

男の声は明るく、それが余計に私をいらつかせる。

「逃げ出したペットを処分しようとしたら、人間界に逃げられてしまいました。」

流石にばれたらまずいと思い、わざわざ来てみれば、今まさに倒されたんですからね！」

拍手の音が盛大になる。

「それにしても、君は素晴らしいですね！ペットとは言え、アレは僕の眷属の一人でしたからね。

並大抵の中級悪魔にも負けないのですが、それがまさかの一撃！本当に僕は幸運だなあ！」

そういうと、それは私にこう言った。

「アナタ、僕の眷属になりませんか？」

沈黙の私に、男はべらべらと語り出す。

悪魔になれば、好き勝手生きられる、力さえあれば何をしても構わない。

まさに悪魔の勧誘だった。

私は悪魔に尋ねた

「私が倒した怪物のことを、お前はどう思った？」

悪魔はどうでもいいような顔をして、

「別に何とも思っていないよ。いらなくなつたペットに興味なんて無いからね」

「そう」

その言葉に、私は悪魔に向けて歩き出す。

「僕の提案を受け入れてくれるんだね!？」

そうだね、この提案は君にとっても良い話だ」

私は左腕に力を込める。

「鉄槌を下せ」

それを合図に、左腕の装甲が展開する。

「これで僕もレーティング・ゲームに挑めるといふものだ。

君の力は僕のために使わせてもらおうからね!」

悪魔の言葉を無視して、私は歩く。

「ほら、これが悪魔になるための駒、悪魔の駒さ。

君の強さからして『戦車』が良いだろう。さあ、受け取ってくれ!」

悪魔は、目の前に立った私に、先ほどとは違う形の駒を渡す。

だが、それはさっきの駒と同じ力を宿していた。

私は右手を差し出し、それを受け取る。

そしてその駒を握り潰し、

「ミヨルニル」

雷を纏った左腕で目の前のそれを殴り潰した。

周囲が帯電している中、私は力を解除する。

すると、自分の姿は変身前の恰好に戻り、赤い石のペンダントが首にかかっている。

「いいだろう」

私は目深にかぶった野球帽から、まだ見ぬ悪魔を見据える。

自分達の欲望のために、他者を犠牲にする悪魔。

そのために誰かが犠牲になるというのなら、

「私がお前達を潰す」

私はそう呟いた。

素晴らしき () 笑顔 (オリ主第二弾)

「もしも墮天使総督のことを思うのなら、あの人のためにぜひ行動するべきです」
私の前に立つ彼女は、私に優しく微笑んでした。

「彼の寵愛が欲しいんでしょ？なら、彼のためにも頑張らなくてはいけませんよ」
笑顔のそれに、私は不思議と心を許していた。

彼女は腕を組んでしばらく考えると、ポンと手を叩いた。

「そうだ！ 確か彼、神器の研究に没頭していて数多くの神器を集めていましたっけ。
だったら、彼のために神器を集めれば、あの人も君を認めてくれると思いますよ？」
「神器を集める・・・」

「そうです、神器を集めるんです。アザゼル様に愛されたいなら、
彼が喜ぶことしなくては駄目ですよ！

そうすれば、アザゼル様だって、貴女を認めてくれますわ」
「アザゼル様が私を・・・」

彼女の言葉は、私の心に沁み込んでくる。

そうだ、アザゼル様の寵愛を受けるならば、私がアザゼル様のために何かしなくては

いけない。

アザゼル様のために神器を集めれば、きっと私を愛してください。

私は私の幻想に満たされる。

アザゼル様が私の手を取り、私を愛してくれると囁いてくれる、その願いが私の心を掻きたてる。

「そう、その通りです」

激しくなる胸の鼓動を感じる私の手を、彼女は自身の両手で優しく包み込む。

彼女の顔は、優しい笑顔のままだ。

「私は貴女の想いを尊重します。アザゼル様を慕うその思い、私にはとても見てもらえないのです」

そして彼女は私の耳にそっと囁いた。

「もう我慢しなくてもいいの。貴女は貴女の想いのために行動しなさい。

大丈夫、貴女の願いはきっと叶うわ。私がそう思うのだから」

その言葉に、私は自分の道を決めた。

そう、私はアザゼル様に愛されるために行動するの。私の想いはもう止まらない。

ああ！アザゼル様！私は貴方のために、貴方が欲している神器を集めてきます！

そしてどうか！その時は私を認めてください、そして愛してください！

貴方のその手で私を抱きしめ、そして寵愛をください！

もう我慢しなくてもいい。彼女の言葉が私の背を押してくれた。

私は私の想いのままに！私は自分の口が笑みなるのを抑えることができなかつた。

「良い顔になったわ。やはり笑顔は素敵ね」

彼女は私を見ながら優しく微笑んでいた。

「聖女？」

「ええ、教会で持て囃されている修道女がいるのよ。名前はアーシア・アルジエント。

なんでも人間に限らず動物さえも傷を癒すことができるらしいのです。

今じゃ、周りからは聖女様と慕われていますわ」

「ふくん？それでそうして僕にその話を？」

「きつと、貴方なら興味を持つてくれると思ったから。

だって、とても面白い趣味を持つているみたいですので」

彼女はそう言いながら、チラリと僕の『兵士』たちを見る。

ああ、やっぱり気付いているんだ。

椅子に腰を掛けていた僕は、彼女を少し見直した。

そして目の前の彼女の言葉に、僕は興味をそそられた。

僕は自分の『兵士』たちを見回す。物言わぬ彼女たちは、元は敬虔な修道女たち。

僕が彼女たちを欲しくなったから、僕は彼女たちの居場所を無くさせ、僕が眷属にした。

今では身も心も僕に堕ちた、可愛い可愛い僕の下僕。

あれだけ、主に敬虔出たというのに、今では僕だけを見ている、僕だけを求めてくる。

その姿を見るのは、僕にとってはとても素晴らしいことだ。

やっぱり、心身深い女（子）を穢すのは気分がいい。

僕は視線を彼女に戻すと、彼女は優しい笑顔で僕を見ていた。

「それでどうしますか？ 仮に私の提案を断るなら、他にもちかけますが」

「いや、続けてくれないか？ その話に興味がある」

「そう！ 貴方に話を持ちかけて良かったわ！」

僕の承諾に、彼女は変わらない笑顔だった。

そして彼女は語る。

件の聖女アーシア・アルジエントは、とても信心深く敬虔な修道女だという。

うん、ますます僕好みじゃないか。

そして人を疑うことを知らない、まるで雪のように純白な心の持ち主で、彼女はあらゆるものを癒す力も相まって、まさに聖女の生き写しだとか。

ああ！最高！なんて素晴らしい存在なんだ、アーシア・アルジェント！

彼女はまさに僕の理想の子だ！

僕の心はアーシア・アルジェントでいっぱいになった。

ああ！穢したい！そんな雪のような純白の聖女様を、僕が徹底的に汚したい！

その綺麗な瞳を曇らせ！真っ白な心を真っ黒に染め上げたい！僕の心に染めてしまいたい！

主を思う敬虔な心を完全に堕落させ、その口からは僕への愛だけを言わせたい！

その綺麗な顔を快樂で蕩けさせ、快樂に貪られながら嬌声を上げさせたい！

僕の心を高鳴る！

ああ！アーシア・アルジェント！君は絶対に僕の物にしよう！

そうだ、まずは教会という加護から引き離して絶望させよう。

僕はそのための脚本を考えだす。ああ、待っていてくれアーシア！

「その笑顔はとても素敵です！貴方にこの話を持ちかけて本当に良かったですわ」
彼女は僕を見ながら、優しい笑顔だった。

「何を迷う必要があるのですか？」

彼女は私にそう言った。

私を見つめる彼女の目は、私の迷いを見通す様に鋭い。

「だがそんなことをすれば、子供たちが・・・」

「それがなんですか？」

私の言葉に、彼女は事もなげに言い放った。

「このままでは聖剣使いを生み出せませんよ。そしてその原因は解っているはずですよ。」

もう一度言います。何を迷う必要があるのですか？」

彼女は私の手を取る。

「貴方は憧れた筈です、物語に出てくる聖剣を。その聖剣を振るう自分を夢見た筈です。」

残念ながら、貴方にはその資格がありませんでしたが」

少し悲しい顔をした後、彼女は笑顔になる。

「ですが、それを跳ね除けた貴方は、聖剣使いを生み出すことを目指しました。」

それは教会も、ましてや天使様も認めてくださったではありませんか。

そう、貴方は悪くないのです。これも全て、主へのためですよ」

「主へのため……」

彼女の言葉が、私の心に沁み込んでいく。

「そう、主へのためです。貴方の聖剣実験は、悪魔を滅ぼすためへの大きな一歩です。先ほども言いましたが、それは教会も天使様も許しています。

ですから、貴方は悪くありません」

「私は……悪くない。私は……許されている」

彼女の言葉が、私を心をぐらつかせる。

そんな私に、彼女は笑顔を曇らせ、悲しい顔で語る。

「それとも、今まで積み上げてきた貴方の夢を捨てるのですか？

その躊躇さえ捨てれば、貴方の夢見た聖剣使いは誕生するということのに」

ああ、聖剣。夢に見た聖剣。私の生み出した聖剣使いが、悪魔たちを斬り裂く。

憎き悪魔共が絶望に支配され、恐怖に支配されながら逃げ惑う。

私の心は昂った。

そうだ、何を迷うことがある。

聖剣使いの誕生は、教会、ましてや天使様も認めてくださったではないか！

そうだ、私はすでに許されているのだ！

ならばなぜ迷う、なぜくだらない戸惑いで、私の夢を諦めなければならぬのだ！
私の理論を使えば、聖剣使いは生まれる。

そのためならば、たかが実験体が犠牲になろうがどうでもいいではないのか？
そうだ！実験体たちも、その身で聖剣使いを生み出す礎になるのだ。

それは実験体たちの悲願ではないのか？

その身を持って、聖剣使いの一部となれるのだ！きつと彼らも幸福に違いない！

そして見ているがいい、悪魔たちよ。

私が生み出した聖剣使い達が、貴様らを一匹残らず滅ぼすのだ！

私はその光景を幻視して、大声で笑った。

「良いです、良いです！その笑顔！やっぱり笑顔は素敵ですわ！」

彼女は、笑顔で私を見つめていた。

「汚らしい堕天使の血が混ざった子を生かすのは、

あなた方にとっては看過できるモノなのですか？」

私は困っている人を笑顔にした。

『可哀想に。貴女は父親のせい、貴女は大切なお母さんを失ったんですよ。』

そうです、全ては貴方の中にある堕天使が悪いのです。

堕天使のせいで貴女は失ったのです、大切な家族を。

ですから、貴女には堕天使を憎む権利があります、その思いをぶつける権利があるのです。

さあ、その思いをぶつけるためにも、貴女は生きなくてははいけませんよ。だから、笑って』

私は泣いている女の子を笑顔にした。

「貴方が眷属にしたネコシヨウですが、確か妹がいませんでしたか？」

もしかしたらその妹も姉と同じように、その身に素晴らしい力が宿っているかもしれない。

なら、何を迷うのですか？あなたは主で彼女は下僕。

主の命令は絶対。それが悪魔社会のルールじゃなかったのでは？」

私は悩んでいる悪魔を笑顔にした。

『ああ、可哀想に！君はお姉さんに見捨てられたのですよ！』

自分勝手なお姉さんのせいで、君は悪魔になるしかなかった！

そうです、全ては自分勝手なお姉さんが悪いんです。君を見捨てたお姉さんが悪いんです。

だから、君はお姉さんを恨む権利がある。憎む権利があります。

さあ、君の想いをお姉さんにぶつける為にも、頑張りなさい。ほら、笑って」
私は絶望している小猫を笑顔にした。

『貴女は貴女の信じる道を行ってください。』

大丈夫です。主は貴女をちゃんと見ています。

貴女の中にある、悪魔さえも慈しむ心を持ち続けてください。

たとえ教会に裏切られても、どんなに心を碎かれようとも、

貴女が諦めない限り、その思いは叶うと思います。

そのためにも笑いまししょう』

私は泣いている修道女を笑顔にした。

「ああ！みんなの笑顔は素敵です！」

私は大声で叫ぶ。私は多くの方々を笑顔にしてきた。

私は笑顔が大好き。皆が笑顔になれば、全てはハッピーになるのですから。

私は笑顔になっていった人たちを思い出し、その身を悶えさせる。

笑顔は私の原動力！笑顔は私の生きる希望！そう、笑顔は素晴らしいものなのです！

私はひとしきり笑った後、うーんと伸びをする。

それにしても、私の好きに生きなさいと言った、あの方に感謝をしなければいけませんね。

私は、幼き頃に見た夢を思い出す。

小さい頃、私は不思議な夢を見た。

本がたくさん散らばった部屋に、一人に女の子がいるのだ。

女の子は椅子に座り、色々な本を読んでいた。

ところが、女の子は急に本を地面に叩きつけ、その本を踏みつけたのだ。

何度も何度も、その本の表紙が真っ黒になるまで。

私は酷くおろおろしてその光景を見ていた、夢なのに。

そしてしばらくして満足したのか、女の子は本を踏むのを止めた。

すると不思議なことに、女の子が私を見ているのだ、夢なのに。

まるで私が見えているかのように、女の子は私をじっと見つめてくる。

私はどうしていいのか判らず、ただ黙っていた、夢なのに。

じっと私を見ていた女の子は、その顔に笑みを浮かばせ私の方へと近づいてくる。

もちろん、私は夢だと分かっているけれど、とても気持ちが悪かった。

何度も目が覚めるようにと願うも、私は動けず、女の子は近づいてくる。

そして女の子が目と鼻の先までの距離となった時、女の子は言った。
『私の世界に入れるなんて、貴女はとてもラッキーね！』

『そうだ！貴女に私の加護を与えてあげる！そして好きに生きてね！』

『そうね、貴女には人を笑顔にさせる力をあげるわ！貴女が皆を笑顔にするの！』

『そうすれば、みんなハッピー！私もハッピー！』』

『そういうと、女の子の背中から大きな白い翼が生えた。』

『それはまさに神々しい姿だった。まさか貴女は天使様ですか？』

『うーん？天使じゃないわよ。そうね、私を定義するのなら、天使よりも上の存在よ。』

『そして、来るべき愚か者に天罰を下す存在でもあるかしら』』

『その言葉に、私は目を見開いた、夢なのに。』

『ま、まさか貴女様は……！』

『それじゃあ頑張つてねー！貴女の働き、ずっと見守ってるからー！』』

『私は言葉を発する前に、夢から覚めたのだった。』

『そして私は今日までに至る。彼女からいただいた加護で、人々を笑顔にするために。』

『ああ、貴女様！私は今日も生きています！』

『貴女様の下さった加護で、私は今日も人々に笑顔を届けています！』』

『私は地面に頭を垂れて、貴女様に祈りを捧げる。』

ああ、笑顔はとても素晴らしいです！
悲しんでいる人、辛い思いをしている人がいれば、必ず私が会いに行きます。
さあ、みんなも笑顔になりましょう！

下劣なるリーウイア

「お姉ちゃんありがとう！」

先ほどまで泣いていた少女が、笑顔で私に礼を言った。

少女の母親らしき女性も、「ありがとうございます」と頭を下げた。

「礼を言われるようなものではない。泣き止んだのなら、それでいい」

私はそう言うと、自分の席に座った。

「まったく、手間をかけさせおつて……」

聞こえないように愚痴を零しつつ、私は注文していたコーヒーとケーキに目をおとす。

この店自慢のブレンドコーヒーと、この店自慢らしいチョコレートケーキ。

うむうむ、我ながら良い組み合わせだ。

気紛れに立ち寄った店ではあつたが、なかなかどうして、良い雰囲気ではないか。

煉瓦細工の壁を見渡せば、そこから色々と時代を感じさせる趣きがある。

そして中から零れる香しいコーヒーの香りが良かった。

そう思い、外に置かれたテーブルを見渡し、空いている席へと腰を下した。

メニューに貼られていたお勧めケーキセットを注文し、品が来るまで景色を楽しんでいた。

そしていざ食べようとした際に、隣の席から鳴き声が聞こえてきたのだ。

見れば、空へ指を刺した少女が母親に泣きついている。

指の方を見れば、赤い風船が空へと舞いあがっていた。なるほど、風船が飛んで行ったのか。

儂には関係ないと無視をしようとしたが、あまりに声が喧しかったので、

取りあえず少女を泣き止まそうと、懐から兎のぬいぐるみを渡してやったのだ。

つといかん、コーヒーが少し冷めてしまっているな。

もう一つコーヒーを頼むのも金がかかるし、かといって冷めたコーヒーは味が拙い。仕方ない。

儂は少し考えると、右手の人差し指をコーヒーへと向け、一言呟く。

「Toh」

すると、コーヒーカップ越しに感じる熱が上がった気がする。

そしてそのまま口に運び、コーヒーを一口啜る。

「うむ、良い温度だ」

温まったコーヒーを飲みながら、チョコレートケーキを切りながら口に運んだ。

「うむうむ、このチョコの甘みとコーヒーのほろ苦さが格別じゃな！」

それほど甘くはないチョコレートだというのに、コーヒーの苦さが甘味を引き立たせる。

やはり儂の目に狂いはなかった！

もう一口とフォークで切ったケーキを口に運ぼうとして、キーンと音がした。

その音を耳にして、儂は深い溜息を吐いた。

大方、先ほどのことで何かに引つかかってしまったのだろう。

全く、儂はケーキとコーヒーを楽しむだけなんじゃが……。

「で、儂に何か用か？」

フォークを皿に戻し、少し不機嫌な目を宿し、儂は自分を取り囲んでいる集団に声をかけた。

魔法というものがある。

悪魔の力である「魔力」や神の「奇跡」を独自の理論で式に表し、その力を再現したもの、

それがこの世界における魔法という定義だ。

そしてその力を行使する人間を総じて、魔法使いと呼んでいる。

魔法使いとは名前の通り、魔法使う人間だ。

そしてその力を行使する際には、悪魔と契約することが前提とも言える。彼らの力を行使するためにな。

自らを守るために、人間界では知ることの出来ない、冥界の悪魔の知識・技術等を知る為に、

強力な悪魔を行使し己の力や地位を示すために、悪魔と契約する者が多い。

そして、その魔法使いたちは何かしらの組織に属している。

・灰色の魔術師

通称「魔法使いの協会」と呼ばれ、悪魔であるメフィスト・フェレスが長を務め、

多くの新参魔法使いたちが属する組織となっている。

・黄金の夜明け団

サーゼクスの眷属である、マクレガー・メイザースが創設者の一人として作り上げた組織。

近代魔術を主に扱い、タロット占いやおまじない系統も扱っている。

古き伝統と歴史を持っている魔術組織だ。

・薔薇十字団

クリスチャン・ローゼンクロイツによって生まれた組織であり、

その存在はもはや伝説化している。

実際は殆どが曖昧なものであるが、歴史から言えばこちらも古いものだ。

創設者の意志を継ぎ、錬金術や魔術等を駆使し、人間を救うとすらも言われている組織。

これらが大きな派閥として、魔法使い内では有名である。

その他を上げるとすれば、魔法少女コスプレ撲滅委員会と化しているニルレムがある。

品位ある魔法使いという自負がある彼らからすれば、

可愛いと言うよりもむしろ媚びた格好の少女（限定）が、

キャピロン☆きゆるるくん☆とこれまた媚びた声で魔法を使う姿は、魔法使いへの侮辱とのこと。

それを率先して行っているのが、悪魔の頂点にいる四大魔王の一人、

セラフオルー・レヴィアタンだ。

ニルレムは度々彼女に、その恰好は魔法使いの品位を貶めるのでやめてほしいと言ったものの、

「え〜そんな私の勝手じゃなくい☆そもそも、そう言った考えの方が古いとおもうの

☆

そんな可愛くない恰好よりも、魔法少女の方がすっごい可愛いわよ☆
と、むしろ彼女からあなた達の恰好は古臭いと言われてしまったのだ。

その結果、今まで抑え込んでいた彼らの堪忍袋の緒は切れた。

今では、魔法少女と名が付くものを須らく憎悪しているものだから、
そのコスプレ魔王の罪は大きいものと言える。

『魔法少女に鉄槌を！魔法使いの尊厳を穢す蛮行を許すな！』

『魔法のイメージだってあるのよ！イメージを破壊するのは止めて！』

『BBAが無理してるだけで気持ち悪い！』

『妹さんを思うならやめてあげなさいよ！』

そんなスローガンを掲げ、ニルレムは今日も抗議をしている。

それ以外には、魔女の夜（ヘクセン・ナハト）と呼ばれる組織もあるらしいが、
私からしても一切詳しいことは知らない。

ところで、なんでヴァルプルギスと名乗らなかったのだろうか。

正直、そちらの方が魔女っぽくていいんじゃないか？

魔女の夜（ヴァルプルギス）は、生者と死者の境が曖昧になる時間のこと、

それに対し、彷徨える死者の魂等を払うために火をたくのが決まっている因習だ。

魔女たちがサバトを開くとも言われている。

まさにどの組織にも属せなかったはぐれ魔女たちが名乗るには相応しいだろうに。おっと失礼、脱線してしまったな。

今も言ったように、時にどの組織にも属さない、属せない魔法使いも存在する。

どの世界にもいるだろう？ いわゆるはみ出し者という奴だ。

それらは総じて「はぐれ魔法使い」と称され、その存在は忌み嫌われている。

なんでも、破壊と混乱を招く存在だからとか。

他者に迷惑をかける奴等は置いといて、はぐれ魔法使いⅡ危険存在という図式には、儂としては物を申したいものだ。

正直に言ってしまうと、はぐれ魔法使いだからなんだ？ というものでしかないのだがな。

そもそも魔法使いと言っても、結局はその分野に命すらも捧げる研究者とも言える。

ゆえに、時には協会のしがらみと言った物がその高みを邪魔することも多い。

その結果、はぐれとなる、ならざるを得ない者もいると考えられるが、

そんなことも考えつかず、はぐれ魔法使いは悪！と見做す奴等の多さよ。

どいつもこいつも頭でつかちが多いものだから、魔法界限も困ったものだ。

儂が言っても意味がないんだがなあ。

まあ、何事にも基準や規則というものは必要だ。

基準や規則と言った枠の無い混沌では、何もをつてそれと認めるかなど判らないからだ。

一方、そのしがらみを守り続けることも考えものである。

その一步を踏み出せば、今まで見たことのない世界に足を踏み入れることが出来ると言うのに、

その倫理に縛られるせいで、その一步が、大いなる発展が妨げられることもある。

誰にも当てはまるが、無理やり抑え込もうとすれば、反発はより強くなつていくというのに。

抑え込まれた発条がより高く跳ぶように、缶の飲料が破裂するように。

正直、儂のような者としては、前者よりも後者を選ぶのが必然ではなからうか？

綺麗事を並べて、お行儀よく魔法使いをやっている奴等は理解しているのだろうか。

各々が積み上げてきたものが、総じて主らのように『綺麗なもの』かどうか。

バカバカしい話だが、魔法や魔術系統によっては、

それこそズキーンバコーンのような出し入れをしたり、大人数で絡み合つてハッ
ピー！な、

初心なねんねが顔から火を出しながら卒倒するようなこともしている。

魔術と性は結びつきやすいものだからな。

黒い帽子に黒いローブと、一般的に想起される魔女の格好だからな。

伝統を重んじるという弊害と言えるのか、正体を隠さない気概に溜息を吐く。

雲一つない晴天なのだからと、旅先の町にあったカフェで、

その店おすすめのコーヒーとチョコレートケーキに舌鼓を打っていたのだが。

先ほどまで儂と同じようにコーヒーとカップケーキを頬張る方々がいたというのに、

儂の周囲にいるのはローブと帽子を被った魔法使い達のみ。

隣の席の二人もいつの間にかいなくなっていた。

おおよそ、人払いの結果でも張ったのだろう。

内心で、先ほどまでいた者たちと店の者達に謝罪をしつつ、視線を前に戻す。

「『下劣なるリーウィア』だな？おとなしく我らについて来てもらうぞ」

「すまんな、儂はこの店自慢のケーキと紅茶を楽しんでおる。用なら後にしてくれ」

正直、今はケーキタイムを楽しみたいので放ってほしい。

取りあえずこの集団の長らしき存在に一言いい、儂はケーキとコーヒーに目を向け

る。

少しチョコレートが溶けかかっているが、それもまたいいだろう。

そう思い、食べかけのケーキをフォークで切り分け、そのまま口に運ぼうとして、

ピチャ

突き刺していたチョコケーキが破裂し、顔にチョコレートが飛び散った。頬に溶けたチョコレートが付着する。

「今のは警告だ。次は四肢を撃ち抜く」

顔についたチョココの残骸を舌で舐め、手から取りだしたハンカチで顔を拭う。拭いながら左手の一指し指を集団の一人に向け、

「E c i」

氷像に変えた。

「撃てー！」

仲間の一人が氷像になったことで、魔女隊のリーダーは、対象を捕縛から殺害へと行動目的を変える。

彼女を取り囲んでいた同胞たちは、その言葉を合図に、一斉に魔力弾を放つ。まるで爆撃を受けたかのように、白い砂煙が舞いあがり、リーダーのいた周辺を瓦礫へと変えた。

「まさか、こんなところに出てくるなんて．．．！」

苦虫を噛んだような渋い顔で、リーダーは相手の女を睨みつける。

『下劣なるリーウィア』、未知の魔法を使う異端の（はぐれ）魔女。

彼女の存在は、魔女協会においてタブーに等しい。

曰く、人の形をした人でなし、禁忌に手を出した愚者、魔に溺れきった女等々、彼女を蔑む言葉ならいくらでも出てくる。

一方で、かつての彼女を褒める言葉もいくつかはある。

曰く、魔女協会（当時）の期待の星、歩く魔導書、魔法の開拓者と、

当時の彼女がいかに優秀であつたことか。

だが彼女は突如、協会から姿を消し、そして今ここにいる。

彼女が魔女協会から姿を消して何十年も経っているというのに、その姿は高齢者のものではない。

それこそ、彼女だけが時間から切り離されたかのように当時に近いままだ。

人形のような白い顔、鉾石のように無機質な赤い瞳、白茶色な髪、

かつての面影を残していた彼女の姿は、はつきり言つて異質だつた。

指名手配犯だというのに、呑気に喫茶店でコーヒーとケーキを楽しんでいた。

茶色のコートを羽織り、紺色のズボンに白いセーター姿。

正直言つて、指名手配犯の自覚すらないであろう姿に、最初は毒気を抜かれた。

だが、その認識が誤りだつたと直ぐに気付かされた。

先ほどまでその瞳に見据えられている時、リーダーはすぐさま攻撃をしたい衝動に駆られた。

そうしないと、彼女自身がどうにかなってしまいそうで。

今もリーウエアのいる場所に雨の如く魔力弾が注がれているが、

リーダーの不安は一向に消えない、むしろより不安が高まってくる。

「リーダー」

仲間の一人の言葉に我に返り、攻撃を止めるように指示をした。

リーウエアのいた場所は、まるで嵐にでもあったのか、はたまた爆撃を受けたのか、後の建物は廃屋と化し、煉瓦に敷かれた道は穴だらけ、もはや見る影もない。

だが何故だろう、安心出来なかった。

「各自ゴーレムを召喚し、一斉に叩け！」

「それはやり過ぎなのでは!？」

「良いからさっさとやれ！」

リーダーの怒号に、各々の魔女はゴーレムを呼び出し、攻撃場所へと向かわせる。

そして指示通りに、各ゴーレムは未だ砂煙が舞っている場所へと前進する。

と、砂煙の中から赤い光が見えた気がした。

『Attetzi Ydorap』

その瞬間、一体のゴーレムが破碎し、その後方の魔女が朱い液体をぶちまけて吹き飛んだ。

「え？」

それを合図に、ゴーレムたちが塵へと還り、同じように魔女も四散する。

次々と周りが床を赤く染める中、リーダーの魔女は一瞬、ほんの一瞬だが、

何かが自分に向かってしていると直感し、無我夢中で防護壁を生み出した。

そしてその直後、まるで全身が壁にぶつかったかのような衝撃を受け、

その勢いのままに壁へ叩き付けられた。

「カハッ!？」

肺の中の空気が一瞬で空になり、全身を駆け巡る痛みのでいで、上手く呼吸が出来ない。

ゼエゼエと呼吸する彼女の目の先で、砂煙が風にあおられて散った。

「うそ・・・でしょ・・・?」

そこにいたのは、砲身の長い銃をこちらに向けた、白いドレス姿のリーウィアだった。

「なによ・・・それ・・・」

四肢が螺子曲がり、口から血を流している魔女が儼の姿に怯えている。

先ほど儂に声をかけ、脅した奴だし、おそろくこいつがリーダーだろう。

「知らぬか？魔法じゃよ」

「そんなの知らない、魔導書にも、載ってないじゃない．．．！」

「書物だけが全てではない。お主はもう少し、外に目を向けるべきじゃったな」
パチンと指を鳴らせば、自分の姿が元に戻る。

「なんなのよ、アンタは一体何なのよ！」

「？」

怯えきった姿の魔女の言葉に、儂は首を傾げた。

「お主が言ったではないか、『下劣なるリーウイア』と。」

「しいて言うなら魔法研究者じゃよ、お嬢さん。」

「ふざけないで！仲間を殺しておいて、何が魔法研究者よ！このはぐれ魔女め！」
「何を言うかと思えば、脅し、殺しにきておいて何を言っておる？」

まさか、抵抗されないとでも、自分たちは死なないと思っておったのか？」

儂は支離滅裂な魔女へと足を進め、僅か数センチにまで顔を近づけた。

「甘いわ、小娘」

「貴女がね、忌まわしき魔女め」

その瞬間、足元に魔法陣が現れ、光を放ちだす。

「ほう、これは……」

「塵に帰れ、異端の魔女め」

そして周辺が光に包まれ、リーダーは自分の作戦が成功したことに口元を歪めた。

ざまあみるがいい、このまま私と共に死ね！

そうして最後に、異端の魔女の恐怖におびえる顔を見ようとして、

まるで面白い玩具を見つけた子供のように、口元を歪めた魔女の顔を見た。

『合格だ、君は連れて行くこと決めた』

そんな言葉が聞こえた気がした。

『Arumoh Imeka ydorap』

歯車の軋み、何かがひっくり返る音が聞こえ、世界のすべてが止まった。

光も音も、何もかもが動きを止め、モノクロで臭いの無い静寂が訪れた。

水滴は水玉のまま空に止まり、煙すらその形のまま石のように固まっている。

『久々にこれを使うことになろうとはな。まったく、長年生きすぎて耄碌しちゃったかな』

私は目の前で、ニヤリと口元を歪めた魔法使いを見つめる。

四肢が折れ曲がり、自分の血で汚れきっているのに、その顔は生き生きとしていた。自分のやるべきことを果たせた、そんな満足した顔だった。

『まさかの自爆とは吃驚しちやつたな。それほどの覚悟だつたなんて、正直感心ちやうわ。』

でも、惜しかったわね』

内心、彼女の行動に感服しつつ、その思いを踏み躪るように笑う。

私はパチンと指を鳴らし、足元に描かれた魔方陣を解除する。

伊達に生きる魔導書と呼ばれた私ではない。

『本人は勘違いでも満足してるみたいだけど、このまま消失させるのはもつたいたいわよねえ』

自爆してまで目的を果たそうとするこの子を死なせるのは、正直もつたいたい。

一体どうしようかと考えていると、ふといい考えを思いつく。

この子が使った魔法は、魔法陣内にいる全ての対象を消失させる自爆魔法。そして代償は自分の命。

鉄砲玉の為に作られた、(人材)使い捨ての魔法。ということ、この子は実質死んだことになる。

『どうせこの子は、このまま死人扱いになるだから、私が貰っても良いわよね！
うん、それがいいわ。』

死人に口なし、本人が棄てちゃった命を、拾った私がどう弄っても問題ないわね。

肉体は（書類上）木端微塵扱いになるだろうし、私が有効活用しちやおつと』

思い立ったが吉日、私はすでに虫の息の魔法使いを背負うと、

箒替わりにライフル銃を呼び出し、そのまま空へと駆けて行く。

その瞬間、爆音と目のくらみそうな光が真下で巻き起こった。

「あーあ、気に入りそうだった町だったのになあ。ま、人材が確保できただけで十分ね」
私は煙を上げる町を見下しながら、自分の隠れ家へと飛んで行った。

そして、新たな同士を生み出すことにした。

時折、一人ぼっちが寂しくなるし、数が増えればその分効率も上がる。

『さて、この子を素体にして色々混ぜちやおつと』

物言わぬ躯の少女の周りには、おびただしい瓶詰の何か。

鉱石や液体に浸された動物、植物などが置かれている。

それらは異世界からの流れ物や、先生から譲り受けた物。

当初は貴重なサンプルで数が少なく、様々な実験で使い果たしかけたが、

今では異世界に行けるようになり、材料の問題は改善された。

『マジ狩る奈々葉の多脚モンスター因子に、魔女攻防の粘体スライム因子、プリンセスリボンの変身機能・・・よし、諸々入れちゃえ』

そして少女の肉体を魔法陣の中心のおき、周りを材料で囲む。

『ではハッピーバースデー！新しい同士の誕生よ！』

祝詞と共に魔法陣を起動し、全ての物が溶け合い、混ざり一つになる。

そして、

『おはようございます、マイマスター（我が主）』

『おはよう、私の可愛い眷属ちゃん』

互いにつこりと笑いあった。

この日、魔女協会の記録名簿にあった名前が一つ。誰にも気づかれることなく消えた。

そこ記されていた名前前の存在も、その世界から消えることとなった。

同時に、新たな異端がこの世界に生まれることとなった。

「いやはや、あの時は面白かったのお。まさか自爆の道連れにしようとしたのじゃから

な

儂は背もたれ椅子に深く腰を沈め、儂自身に見出された弟子一号に笑いかける。

「申し訳ございません、我が主（マイマスター）。かつての私がご迷惑をおかけしました」
ペこりと頭を下げる弟子一号。

その気持ちを代弁するかのよう、彼女の背後でうねっている触手もしゆんと垂れる。

「よいよい、あれは儂の愚かさゆえの結果であり、お主の覚悟が勝つたんじゃよ。

まあ、それ故にお主は全てを失い、そして生まれ変わったのじゃがな、キヒヒ」
その元凶の儂が言うのもアレだが、ほんのちよつぴりは同情しておる。

儂に関わらなければ、そうならなかつたらうに。

「滅相もございません！主様のおかげで、私はより高みへと上がったのデスから！

ああ！かつての私の知識なんて単なるゴミだったのですね！

主様の仰る通り、世界は広く深く、そしてどこまでも続いているのを実感できます！」

じゃが、儂の言葉を跳ね除けるようにハイテンションな弟子一号の姿。

それに呼応するかのよう、触手もピタンピタンと暴れておる。

「う、うむ！そうであらう！確かに今までは狭い世界であつた。

だが、それを卑下するのは止めよ。

今までのお主だった存在は、今のお主の礎になったのだ。それを忘れるでない」「はい！忘れません！わたしはかつての私を忘れるつもりはありません！

ええ！主様に褒めていただいた私（昔）捨てられるはずがないのデスから！」「う、うん。えつと・・・、まあ、気をつけなさいよう？」

なんというか、張り切って色々と混ぜ過ぎちやつたかなあ・・・。

先生、やっぱり私はまだまだ未熟者です。

『凄く凄くすごいです！先生！今のは一体何なんですか？』

『魔法だよ』

私の問いに、先生は少し目を伏せて答えた。

『ですが先生、様々な本を読んだ私ですが、今のような魔法をみたことがありません』
私は先生に尋ねた。私の知る限り、先生が使ったのはどこの文献にも載っていないものだ。

勉強のために、色々と本を読み漁った私だからこそ解った。

『いや、確かに魔法さ。正しくはこの世界には記されていない魔法さ』

『この世界にはない魔法……ですか？』

『そうだ、この世界に定義されていない魔法だよ』

先生の言葉がよく解らなかつた。

魔法というのは、この世界だけに存在するものでしかないのでは？

先生から教えて貰った世界では、魔法（物理）な世界や、魔法（プロレス）だったり、魔法ではなく『魔砲』だったりと色々な定義がされているようだった。

指輪をはめてヒーヒーだのと五月蠅い音を鳴らして力を行使する存在もいるとか。

『でも先生、魔法というのは、私たちが使っているものでは……？』

『地域が変われば、考えも文化も言葉も違うように、世界が変われば魔法も違うんだ』

先生の答えは、私の琴線に触れた。

異なる世界には異なる魔法が存在する。それってとても興味深いです！

『先生！私、先生の魔法を知りたいです。異なる世界の魔法のこと、私は知りたいです！』

『その必要はないんじゃないかな？魔法に関して、君は指折りの逸材だ。』

わざわざ私の魔法を知らなくても、君を評価する人たちはたくさんいるはずだ』

『そんなのはどうでもいいんです！先生の魔法を私は知りたい。それだけじゃダメなん

ですか?』

それは私の本心だった。

多くの先生が、私の両親が、私のことを認めてくれた、私の頑張りを褒めてくれた。でも不思議なことに、私はそのことに満足していなかった、正直嬉しくなかった。多少なりとも満足していたのかもしれない。でも、私はそれに満足できなかった。

言ってしまうえば、私の好奇心を満たしてはくれなかった。

でも今、私の目の前には未知なるものが存在している。

私の知らない異世界の魔法が存在している、そしてそれを知ってい先生がいる。琴線に触れないわけがない、興味をそそられないわけがない。

『……』

『先生!』

先生は屈みこむと、私の目を見て尋ねた。

『君に覚悟はあるかい?』

『!』

先生の目からは、普段の優しさを感じられず、ただ冷たい印象だった。

『私の魔法は、いわば異世界の知識だ。この世界の理から外れるものだよ?』

一時の興味に、全てを捨てる事が出来るかい?犠牲に出来るかい?』

『私は………!』

『一時の感情で決めてはいけない。』

そもそも、この世界にとって、私の魔法は知らなくていいものなんだ。

私のせいで君が不幸になるのは、私は悲しいことだからね』

先生は普段通りの優しい目つきになると、私の頭を撫でた。

先生からしたら、これで私は止まってくれと思うていたのかもしれない。

でも答えなんて始めから決まっていた。至極単純明快な答えだった。

そして私は、異端となり果てた。異端となり果てた今（私）へと至る。

「それじゃあ異世界魔法研究のために、

『カードクリエイターぶつろつきむ』と『マジ狩る奈々葉』の観賞しなきや」

私は先生から譲り受けた異世界の映像媒体を動かし、日夜異世界魔法研究に励むので

あった。

劍喰い（オリ主第一弾）

オマエハドウグダ

そう言われて生まれた私は、ただ道具として生きてきた。

ただ、斬る為の劍、それが私だった。

言われるがままに、扱われるがままに、私は道具として生きてきた。きるキル斬る切る伐る K I R U K I L L それだけが私の全てだった。

そして私は棄てられた。

使えなくなつた私は棄てられた。

いらなくなつた私は捨てられた。

新しいそれを愛でるアナタの姿に、私は初めて感情を抱いた。

許せない。私はアナタのために生きてきたのに

許せない。私はアナタのために斬ってきたのに

許せない。道具として役立てない自分が

私が一番素晴らしい

私が一番優れている

私が一番アナタを・・・

気付けば、私は生まれ変わっていた。

雨の降る戦場。

辺り一面に散らばるのは、人の死体、姿態、肢体、屍体。

そしてアナタへの、慕い。

「ありがとう」

私はアナタを見下して呟いた。

「ありがとう」

私は生きる道を見つけました。

「ありがとう」

私は、私のためにいきます。

だから、アナタの慕いをここに置いていきます。

私を捨てたアナタに、私の素晴らしさを知らしめるために。

それを示すために、私はいきます。

「さようなら」

雨は嫌いだ。

滅多に笑うことのない私だが、不思議と笑い声が漏れた。

私の姿に、私が嗤いだしたことに、私と相對していた存在が驚く。

そもそも、私に『笑う』という感情があったことが、私自身も驚いている。

まるで、一生分の笑いを凝縮したような、そんな笑い声だ。

まるで、栓の抜けた桶から水が零れるように、

自分の中に沈殿した感情を零す様に、私は笑い狂った。

肺の中にある空気を、全て吐き出すかのように、私は晒う。

ああ、息が続かなくて苦しくなってきた。

ひとしきり笑った後、私は相手へと目を据える。

私の目に映るのは、剣を携えた男女。

金色の髪の毛の男の手には、聖と邪を内包した剣。

何やら前髪が面妖な色の女の手には、聖なる力を纏った剣。

髪を二つに束ねた女の手には、光り輝く剣

私はそれに歓喜する。

ああ、その剣は素晴らしいモノなのでしょう。

ああ、その剣は素晴らしいモノなのでしょう。

ああ、その剣は素晴らしいものなのでしょう。

私のような、銘さえも刻まれず、ただの道具として生を受けた私とは違い、その名を世界に轟かせ、その力を認められた、まさに名剣なのでしょう。

でも、だからこそ、私は嬉しい、嬉しいの。

だって、業物でもない、聖剣でもない、魔剣でもない、ただの私（刀剣）が、今、この瞬間、あなた達（魔剣と聖剣）に相對しているのだから。

だったら今の私は、あなた達に匹敵するものだと、

あなた達（名剣）に相對できるモノ（業物）と、私は至ることが出来たということだ。

ゆえに、今この瞬間、私の心を満たした。

ゆえに、今この瞬間、私の思いを満たされた。

ゆえに私は、更なる私を渴望する。

ゆえに私は、更なる高みと合いまみえたいと切望する。

私の心は、先ほどの激情とは違ってかわり、まるで水のように静まっていく。でも私の身体は、まるで煉獄の炎が駆け巡るかのように、歓喜に滾っている。

矛盾を孕んだ心と体。

でも、それが私なのだ。

ただの道具だった私が、ただの刀剣だった私が、

肉を得て、意志を持ち、そして道具であることを止めてなお、道具であることを示そうとしている。

それでもいい、と思う。

私は身体を屈め、私（剣）に手を伸ばし、構える。

小細工もない、私の全力全身を、この一振りに込める。

そもそも私のような存在が、いつぱしの剣技を知るはずがない。

そのような機会さえ、私には無かったのだから。

ゆえに、私はただ振るだけだ。それだけしか私には無いのだ。

目の前の剣たちも、同じように構える。

もう言葉はいらない。必要もないの。

ただ、斬ればいいだけなのだから。

「参ります」

そして私は駆ける。

私の速さは人でしかない。故に遅速。

私の身体は人でしかない。故に脆弱。

あまりにも遅く、あまりにも弱い。

だが私は思う。

だからどうした

そんなものは周知の事実。そんなものは自覚している。

だから言う。

だからどうした

私が目指すのは、私が成したいのは、私と言う存在を刻むため。

私と言う剣が、世界にいたという証を立てるため。

それだけのために私はいる。それだけのために私は生きてきた。

左肩に鋭い痛みが走る。

腹部に焼け付くような痛みが走る。

左手の感覚がなくなる。

私の口から何かが溢れた。見下せば、胸元が赤く染まっている。

三つの剣先が私を貫いていた。

ああ、やはりこうなったのか。私は私を振ることすら出来ず、攻撃を受けたのか。

まっ赤に染まる自分の身体を見つめ、視界を前に戻す。

私を貫いた三人の男女は、私の視線を受け、顔を強張らせた。

「ありがとう」

私を刺してくれて

「ありがとう」

私に近づいてくれて

「ありがとう」

君たちの甘さに

「ありがとう」

感謝を込めて、私は剣を振った。

「うん、やっぱり一味違う」

私は口の中のものを咀嚼する。

バリバリと音を当ててそれを噛み砕き、ゴクンと嚥下。

私は、手に持ったそれを地面に放り棄てた。

カランと音を立て、刃の無い剣の柄が地面に落ちる。

それは、さつきまで私を貫いていたものだ。私を貫き、肉を焼き、血を啜った剣だ。そして私の食べカスだ。

私は、私を見ている男女に目を配る。

私の一振りに、彼らは直ぐに飛び退いた。飛び退こうとした。

でも今の彼らの身体には、一本の赤い線が刻まれている。

単純な話、彼らは避けられず、私の一閃を受けただけだ。

多分、このままだと彼らは危険かもしれない。

でも、私には問題ない。

なぜなら始めから、私は彼らに興味はなかったのだから。

私の興味は、彼らの持っていた剣だ。

聖と魔を内包した聖魔剣、切れ味だけは素晴らしいらしい聖剣、光の力をもった剣。どれもが、私はまだ『食べていけない』ものだった。

ゆえに、私は彼らに戦いを挑んだ。

その剣が食べたかったから

そして私は、彼らの剣を砕いた。

その剣が食べたかったから
後は、私は砕けた剣を食べた。
その剣が食べたかったから

「(一)馳走様でした」

私は彼らに手を合わせ、頭を下げる。

ありがとう、私の血肉になつてくれて。

ありがとう、私を更なる高みに至らせてくれて。

感謝の思いを込めて、私は彼ら（刀剣）に礼を言う。

ちらりと持ち手の方を見れば、彼らは私が剣を食べたことに驚いていた。

私はそれを、冷ややかな目で見た。

強い相手を喰らい、自分の血肉にする。

それは戦いにおいて当たり前のことだ。

なのに、彼らは私を異常者だというような目で見てくる。

本当に失礼だと思う。

まあ、もう彼らには興味は無いから、私はこのまま去ることにする。

取りあえず、私は自分の姿を確認する、

うん、刺されたところや斬られたところは、剣を食べたことで見事に塞がっている。改めて私は、食べた剣の素晴らしさを実感する。

自分の身体に満ちる、聖と魔、聖なる力を実感する。

うん、やっぱり君たちに会いに来てよかった。

私はその場を立ち去った。

今日で、噂に聞く聖魔剣とデユランダルというものを食べることができた。

そうだ、次はグラムと言う剣を食べてみよう。

私は新たな目標に向けて、新たな一歩を踏みしめる。

私の名前は無銘。私の目的は一つ、世界で一番の業物になること。

剣喰い（設定）

名前：無銘（数打ち）

性別：なし

年齢：

血液型：なし

生年月日：江戸後期

星座：なし

身長：約105cm（刀身：約74.2cm，柄：約26cm）

体重：約1072g

目の色：なし

視力：なし

利き腕：なし

声の質：なし

手術経験：なし

体の傷：なし

身体的特徴：なし

人種：兵装

宗教：弱肉強食

前科：大量殺人

幼児・少年期の精神的体験・その人物

：数打ちとして生まれ、主（二元）に買われた。

（二元）主が、戦において優れていたため、

多くの兵を斬り続けた結果、妖刀のごとき意志を持つ。

主の傍に居続けることを自身の誉れとするも、ある戦場で破損する。

そのため、使い物にならなかつたことで主に棄てられた。

自分の力不足を嘆く一方で、主の傍にいる独占欲を抱きつつ意識を失

う。

へ行くと、

その後妖の類いによるものか、気付けば肉の器を持ち、その姿で主の所

自分を捨てて新しい女（刀）という主の姿を見てしまう。

セックス：なし

恋人：主

結婚：なし

尊敬する人：（二元）主

恨んでいる人：（二元）主

将来の夢：己が最高の業物であること

恐怖：捨てられること

性格的特徴：弱肉強食主義

口癖：端的

人間関係：興味なし

態度：興味なし

家族関係：（二元）主

態度：殺したいほどに憎悪し、独占したいほどに愛している

トラブル関係：価値観が弱肉強食で、時代錯誤

職業：業物

経済状態：宵越しの銭は持たない主義

ペット・植物：なし

性格：弱肉強食を素で良く業物。

強ければ生き、弱ければ死ぬという修羅。

武装にしか興味を持たず、武装のみにしか目がいかない。
 一方で、業物の使い手が未熟だと、(業物に) 同情し、(使い手を) 侮蔑する。

振り払う火の粉を払う一方、無関係であれば無関心を貫く。
 特徴(技・能力)

：『一刀』：寄らば斬る、寄らなくても寄つて斬る

『剣喰い』：敗者は勝者の物、ならば食べても問題ない

趣味・思考：剣を食べること、相手(業物)のことに探すこと

娯楽：旅・剣の味、斬り捨て

好き嫌い：好き：(元) 主、業物、戦場(いくさば)、優れた使い手

嫌い：(元) 主、業物、雨、未熟な使い手

習慣：一日一回、感謝の抜刀

こだわり：剣は生のまま食べるのが一番おいしい

設定：とあるゲームの音楽を聴いていた際に思いついたキャラ。

HSDDにおいて、ちよつとズレたキャラクターっていないんじゃないかなと思
 い、

家に積んである参考本などを見ながら、思いつきで作ったキャラクターです。

本体のネタに関しては、ある物を参考にさせて貰いました。

肉体に関して不明なのは、面倒くさいと言う理由もありますが、

結局は肉体はあくまで器でしかないのです、好きに弄れるようにしようと未設定にしました。

月の狩人

桜が舞い散る季節、『春』。何かが終わる季節であり、そして新しい何かが始まる節目。会社なら新社員を迎える季節であり、そして先人たちは去っていく。そして学生ならば卒業式を迎え、そして入学式を迎える。そう、季節は巡る。終わりと始まりを繰り返して。

私は舞い散る桜を見上げながら、新たに始まる高校生活に胸を躍らせる。右手に感じる靴の重さ。鏡に映る学生服の自分。うん、絶好調！私は嬉しさのあまり、好きなアイドルのポーズをする。ちよつと恥ずかしくなったので慌てて止めた。うん、やつぱり私には似合わないな。そんなことを考えると、後ろから視線を感じ、油の切れた機械のようにギチギチと首を後ろへと向ける。

「ふ〜ん？」

大学生の兄さんが口元をニヤつかせながら私を見ていた。普段はあまり表情を見せない顔が、気味が悪いほどの穏やかな笑顔。スウ・・・と血の気が引く。私は何か言おうとするも、口元がおぼつか無くしゃべれない。そんな私を見ていた兄は、イケてる肉体じゃない、むしろポツチャリな中肉体型で、その場でくるっと一回転。見た目はあれ

犬のようにペロペロしたい。愛でたい！いや、愛でさせるお！．．．．．つて衝動に駆られそうだけどやったら犯罪だからしないけどね？

私は傷口に塩を塗りたいくらいられる前に、すぐに話を変えすることにした。話題は私たちが駒王学園について。

「そういえば、学園つてももとは女子高なんだっけ？」

高校を決める際に学園のHPをみたら、数年前から共学になったみたいですね。やっぱり女子だけだと人数が少ないのかな？世知辛い世の中のおー。そうは思わんか？

「いえいえ、貴女様のお財布よりは世知辛くありませんことよ？ホホホ．．．」

しばしの沈黙が訪れる。うん、なし、なしなしなし！今のナーシー！はい終わり！互いに苦笑いをしてまた話を変える。

「そういえば、学園の噂って知ってる？しかもいい方と悪い方があるの」

うん？駒王学園の噂？ナニソレナニソレ、私、トツテモキニナリマス！

「あはは．．．ここだと結構有名な話．．．みたいなんだけどね。良い方と悪い方、どっちが先？」

では良い方をお願いしますと言えば、幼馴染曰く、駒王学園の2大お姉さまと言うのが存在するらしいとのこと。なんでも美人で有名らしく、見れば誰もが尊敬する姿とか。私の中では『あら、リボンが曲がっててよ．．．』

『お姉さま……』と、背景になぜか花が出てくる光景が浮かんだ。

ちなみに胸はいかほどで？と聞いてみたら、幼馴染は胸の前に手で山を描き「結構あるって……」の言葉が返ってきた。私の敵と認識した。

一方は、去年入学した男子生徒3名のことと、とてつもない問題児だとか。なんでも、覗き、盗撮、エロ本の持ち込みなどをやらかしてるようで、エロガキトリオと言えばこいつら！と言われるほどに有名だとか。

いやいやいやいや……。私は苦笑する。昨今、その手の問題は結構ブラックなはずなのに、なんでそうなってるの？と。元女子高としても問題の認識が酷くないかい？なんか心配になってきたよ。

そんなことを二人で話しながらちらりと、携帯電話の時計を見た。うーん、まだ時間はあるけど、ちよつと早く行ってみようかな。よし、今すぐ走って行こうではないか！

「え、ええ!?ちよ、ちよつと待ってよー!というか、走るってそれってつまり……」
ビターン!

地面が私にぶつかってきた。痛い。

「こうなるよねー……」

幼馴染が私を見下しながら手を差し伸べてくれた。

うん、やつぱり歩いていこうね。事故は怖いもんね。

「あはは・・・」

幼馴染の顔がとて暖かかくて、身体よりも心が痛かった。

私の目の前に広がるのは広大な森。沢山の色鮮やかな鳥たちが空を飛びかい、木々には色とりどりの実がなっている。不思議だ。私はこんなところに来たことも、ううん、一度も見たこともないのに、私にはとても懐かしく思えてしまう。

「■■■■■■■■」

誰かが私の名を呼んだ。振り返り、そこいたのは私の愛しき・・・

目を覚ますとしても、白い壁が目に入った。いや、あれは天井かな。周りを見ると、そこには広大な森も真つ青な空も鳥たちも飛んでなくて、白い壁に囲まれていた。ふと視線を受けような気がして、そちらを向けば、そこにいたのは幼馴染。丸椅子の上にもちよこんと座つてこちらを覗きこんでいた。

あれ？森は？鳥は？それにここは学校？

「大丈夫？頭とかボーっとしてない？」

心配する幼馴染の顔が私を覗きこんでくる。周り見渡せば、白い壁と思っていたのはカーテンで、どうやらここは保健室の様だ。「ん？気が付いたか？」と声が聞こえ、カーテンが開く。入ってきたのは保健の先生だった。私は何故か保健室のベッドに寝ていた。よく分からないまま、私はのそりと起き上がる。

「んー？心配するような熱は無いし、身体はどこにも怪我もなし。打ち所は・・・別に悪いところはないようだな。ま、心配なら病院に行きなさいな」

私を色々と確認するように触ると、先生は机に戻って何やら紙に書き始めた。

「もう心配したよー。急に倒れちゃんだから吃驚もしたし」

え、私倒れたの？いつ？というか急につてどういうこと？

「帰りのSTが始まったら、急に首をカクンと倒してそのまま床に寝転ぶようにバターンって。本当にびっくりしたんだよ？後ろから見たら、まるで急に気を失ったみたいだったから」

幼馴染の言葉に私は思い出そうとする。しかし、そんなことがあったのかも分からない。そこだけ記憶がない。まるで編集された様に、そのコマだけバツサリカットされたみたいなの・・・。

「無理に思い出さなくていいよ？それよりも怪我が無くて本当に良かったよー」

頭を撫でる幼馴染み。痛い痛い飛んでけー！まで言う姿に私はくすりと笑う。

「担任には私からも連絡をするが、取り敢えず君からも連絡しなさい。あ、そうそう。家族に連絡をしたから、君のお兄さんが迎えに来てくれるよ。多分、職員室にいると思うぞ」
 私はため息を吐く。兄さんのことだ、大慌てで来たに違いない。普段は格好悪い兄さんだが、こういう時は本当に……。

「良かったねー!」

幼馴染みの言葉で我にかえり、私は朱い顔で職員室へと足を運んだ。

「■■■■■■よ。ならばあそこで泳いでいる者を射られるか?」

■■■■■■の試すような言動に我は不愉快を感じ、牙を剥き出して忌々しげな表情になった。

我を愚弄するのか■■■■■■。あの者を射よ、と言ったな? ふん、我ならば造作もない。

我は示された標的を見据え、弓を構えた。目に映るのは、遙か先の海を泳ぐ男。その姿を確認し、私はゆっくりと弦を引つ張る。ゆっくりと弦が張っていくのを感じ、我は矢を放った。放たれた矢は真つ直ぐに標的へと突き進み、見事射ぬいた。

どうだ■■■■■■よ! 我への侮辱を撤回してもらおうぞ!

私は■■■■へと顔を向け、自慢げに胸を張った。

「見事だ■■■■よ。いやはや、見事な技であった。先の侮辱はすまなかつた」

■■■■は口元笑みに歪め、先の言葉を撤回した。ふん、我に弓の技を愚弄することの愚かしさを理解したか。

だが、■■■■の口は未だ笑みに歪んだままだ。そのことに我は違和感を感じたが、さして気にするほどのことでもないと考えを捨てた。さて、我は愛しき■■■■の下へと向かわねば。我は高鳴る気持ちを抑えつつ、足を速めて彼の下へと向かった。

翌日、我は先の標的が大切な■■■■だと知った。我は、大切な■■■■をこの手で、笑いながら射殺したのだ。

眠い。最近やたらと変な夢を見るせいで、寝不足気味だ。特に酷かったのが、私が誰かを射抜いてしまった夢だ。夢の筈なのに、私に両手にはその時の感覚が残っている。そして海辺に横たわる誰かを抱きしめ、泣き叫ぶ時の気持ち。悲しさと怒り、そして後悔。一体どうして、私はそんな夢を見てしまったのか解らない。そんなテレビや映画なんて見たこともないし、兄さんの部屋にあるマンガやゲーム、数々の資料にしたって、そんな類いの物はなかつた・・・と思う。それに私は弓なんて触れたこともないし、そも

そも誰かを射ようなんて考えたこともない。

正直、気持ちが悪い。それも相まって、私は寝ることが怖くなっていた。もしもまたあの夢を見たら・・・なんて考えてしまう。

でももう限界かもしれない。私の顔に隈が出来始めたし、幼馴染から心配され始めた。兄さんからも「夜更かしなんてするなよ」なんて言われる始末だ。それにしても頭がボーっとする。身体も怠い上に重い。まるで海の中にいるみたいな感じだ。あ、これは拙いかもしれない。ちよつと兄さんに頼んで、今日は学校を休ませて貰おう。

そう思い、私は兄さんに体調のことを説明した。兄さんからは「なら今日は寝てればいいさ。勉強も大事だが、身体の方が大切だからな。俺から学校には連絡しとくから今日は休んでけ」

ちよつとカッコいいと思った腹いせに、ぽつちやりの兄さんは健康なんですかねー？と、そんな皮肉を返す。

「俺はデブじゃねえよ！これでも健康なんだよ！」

あいつも変わらず、ノリの良い兄さんの返し。

「昼に一回帰ってくるぞ」

そんな兄の言葉を聞きながら、私はクスリを飲んでベッドに横になった。

良いなあお主。私の■と違い、仲が良いではないか

うーん・・・よくねたあ・・・。私は身体を伸ばすと、ゆっくりと起き上がった。

お、お？おおお！

私の身体は、今朝の怠さなど嘘のように力が溢れるのを感じた。なんというか、正月にシャワーを浴びて身体を洗い、新しい下着に着替えたような清々しさ。まるで重い鎧を捨ててような、変な話、生まれ変わった様な気分だ。

うん、やっぱり睡眠不足が原因だったんだのね！やっぱり睡眠は大事というのは本当だったんだ！

私はなぜかうきうきした気分で時計をみると、針はすでに正午を越えて夜の時間を指していた。うん、流石に寝過ぎだよなあ・・・。そんな罪悪感を抱きながらも、私は取りあえずキッチンの方へと向かう。キッチンのテーブルには、市販品のうどんと惣菜、栄養ゼリーのパックが置かれていた。『取りあえず食べれたら食べる。食べたら寝てろ』なんてメモも一緒だ。

餛飩にしよ！

私は電子レンジに餛飩を入れた。あと喉が渴いたから、私は棚からコップを取りだそ

うとして、急に立ち眩みに襲われた。

あ、やばっ

そんなことを考えながら、私は迫ってくる床を見つめ、痛みを堪えようと目を閉じた。

ん~~~~~!!

ん~~~~~!

ん~~~~~?

うん?

だがいつまでたつても来ない痛みにも、私は不思議に思いゆつくりと目を開けると、なぜか私は右手で倒立をし、左手には倒れた際に離れた筈のコップが握られていた。

.....

.....

.....!?

私は何が起こったのか頭が追いつかなかつた。え、なにこれ？私ってこんなに運動出来たわけ？そんなことを思ったのが拙かつたのか、私はバランスを崩して床に激突した。

あいたた.....。やつぱり今のは偶然かあ.....。ま、私にはそんな力なんてないしねえ。

チーンと温め終わった音が聞こえ、私は身体を起こし、アツアツの饅頭を啜るのだった。うーん、美味しい！

ズルズルと饅頭を啜っていると、ガチャリと玄関から音が聞こえた。ふむ、これは兄さんの臭いか。床が軋む音が聞こえ、現れたのはやっぱり兄さんだった。

「……………アレ？なんで私、兄さんだつて判つたんだろ？まいつか。

「もう熱は良いのか？」

オツケーマルマル問題なし！

「そうか、馬鹿は風邪ひかないとは聞いたが、アレは嘘だつたんだな」

な、なにをー！そつちだつて、デブは冬に強いはずなのにエアコンつけやがつて！

互いに交わされる悪口の後、部屋には笑い声で賑わつた。

「治り始めが肝心だ。早めに寝ろよ」

はーい。

さあつてと、明日の準備をしましうかね！

真つ暗な空に浮かぶ満月。その光の下で、何か動いた。まるで影から生まれたように、全身を真つ黒に包んだそれは人の形をしていた。ただし、その背中には翼が生えていた。天使のように純白ではなく、鴉のように黒くもない。そもそも鳥類の翼ではなく、生えていたのは皮膜に包まれた翼だった。バサリバサリと羽ばたく音が夜に響くが、誰もその音に気付くことはなかった。

しばらく空を飛びかっていると、それが電柱の上にスツと降り立った。その立ち姿は人の形と酷似していた。だが、その目に当たる部分からは人が持つはずのない赤い瞳を光らせている。それが見下すのは、道をトコトコと歩く女学生。部活の帰りだろうか、その肩に黒い布袋を掛けている。

それが嗤った。

ああ、何という愚かな人間なのだろうか。昨今、謎の失踪事件が起こっているというのに、たった一人で歩いているとは。いや、そもそも人間とは愚かな存在なのだ。自分たちに搾取されるだけに存在する下等生物。それが人間なのだ。ならば上位者たる、悪魔である自分のために食われることは、正しい節理なのだ。強者である自分が弱者をどうしようと問題ないのだ。それに、いくら好き勝手やろうとも、何故か無かったことになっている、失踪事件となっているのだ。もしかしたら、私のような存在が、私の協力

者となつてゐるのかも知れない。

それは顔も知らぬ協力者に感謝した。一体誰かは知らないがありがとう。アナタのおかげで、私は今日も狩りが出来るのだから。

さあ、逃げ惑つてくれ。恐怖に顔を歪めてくれ。息を吐き散らし、泣き叫びながら命乞いをしてくれ。そしてほんのちよつぱり見出した希望が、裏切りの絶望に染まる姿を見せてくれ。

連続失踪事件の犯人である悪魔が、獲物に襲い掛かろうとして・・・何が貫いた。

あえ？

なんとも奇怪な声だ。ちくりと痛みを感じ、悪魔は痛みを感じたところを見ると、胸から何かが生えていた。それは鋭く、細い先端から赤い滴が垂れていた。そしてそれは光の粒となり跡形もなく消えた。

なんだこれは？

悪魔は起こつてゐることに頭が追いつかなかつた。なんだこれは？一体どこか・・・？
トスツ

今度は首に痛みが走る。カッハツア!! い、息が出来ない!!

首を貫かれたことで、ヒューヒューと空気が漏れていく。こ、攻撃されている！誰かが知らないが自分を攻撃している！な、ならば早く隠れな・・・！！

トストスツつと音が聞こえ、急に目の前が真つ暗になった。な、なんだ？なぜ急に真つ暗になったんだ？これでは何も見えない！・・・あ？

細い電柱にいたことを忘れていたのか、それとも混乱したせいかわ、悪魔はバランスを崩して地面に落ちた。グシャと音をたてて叩き付けられたが、幸運にも悪魔は生きていた。目も見えず、息もか細く、四肢はおかしな方向に向いているも、幸運に恵まれた悪魔は生きていた。

ズリズリと四肢を引き釣りながら、悪魔はこの場を脱しようと足掻く。ふと、悪魔は残った耳で音を拾った。

「イツセー先輩、あそこに誰か倒れてます。それにこれは・・・血の臭いがあります」

「なんだって小猫ちゃん!?もしかしたら、怪我してるかもしれないな！頼むぞアーシア」

「解りましたイツセーさん！」

ドタドタとこつち向かってくる足音。そして声からして若い男が一人と女が二人。悪魔は舞い降りた幸運に口元を歪める。馬鹿な奴等だ。餌が自ら飛び込んでくるとは。もはや好き好みを言っている場合ではない。こうなったら今すぐに食い尽くしてしまおう。なに、そのまま直ぐに雲隠れしてしまえば、あとは協力者が無かったことにしてくれる。さあ、早く来い。自ら食われるために！既に勝利を確信した悪魔が絶頂に顔ま

でも歪めそして、

トスッ

その音が聞こえると、悪魔は何もわからずに塵となった。

「あれ？誰もいないぞ？」

「でも確かにここらへんに人が倒れていて、それに、血のお……臭いがしない？あれ？」

「い、一体どういうことなんですか？」

混乱する少年と少女。先ほどいた筈の存在がいなくなったことに彼らは戸惑っている。

そしてそんな彼らを見据える少女。その手には弓と矢を構え、彼らを射抜かんとし
て……構えを解いた。少女の握っていた弓矢が光となって消え去っていく。

やはりまだ万全ではないか。しかし、起きて早々なんだアレは？一体いつから、人の世
に魔物が蔓延っている？一体、父上は何をしておいでか！

高層ビルの屋上から少年ら見ていた少女は、スケベで浮気癖が酷く頑固な上にどうしようもない屑野郎の父親に憤りを感じた。性格がどうしようもなく、力だけは強いのは確かだが、あれでも自分の父親であり、最高の力を携えた存在だ。こうして下々の人間を見守るのが我らの仕事だと言うのに！まあ、ダメ人間の父親もそうではあるが、今はそれよりも重要なことがある。

なぜ、我は人の子の身体を借りているのだ？

幾ら考えようとも、いつこうに答えが出てこない。そもそもここは一体どこだ？魔の物もそうだがあまりにも異質だ。そもそも魔の物が人の世に存在すること自体もそうだが、あまりに■の力を感じない。大和は信仰に篤い国と聞いていた。なのに、なぜここまで力を感じないのだ？溢れ出る疑念に頭を抱えるが、誰も答えをくれることはなかった。

少女は溜息を零すと、自分を照らす月を見上げた。

なあ我が半身よ。我はどうすればいいのだろうか？

少女の零した呟きが風に消えた。

フラウロス

ファレグ・フラウロス

人の本質を見極める、そのための方法は一切なんであろうか？

その問いに私、ファレグ・フラウロスは事もなげに言った。

「追い込めばいい」

その対象の正体を知るための最も簡単な方法は、危機的状況に放り込むことだ。
『危機的な状況』というものであれば何でもいい。

戦場に、借金地獄に、男女の修羅場等々、それこそ枚挙に及ぶ。

だが一番手っ取り早いのは、命の危機に晒してやることだと私は考えている。
何故ならば、命は大切だからだ。それこそ地球の未来とでも謳われるほどだ。

人は自分の命を助けるためならばなんだってするだろう。

それこそ共存を謳っていた者も、自身の手を真つ赤に染める事すら厭わなくなる。

(自分の命を) 奪われたくないから (相手の命を) 奪う。

大切なものを失いたくないから、危険な存在を排除する。

それがエゴであろうと、ナルシズムであろうと、一方的な敵視であろうと、どうでも

いいのだ。

それこそ、『お前が気に入らないから』でさえも理由足りえるものだ。

結局のところ、生物は自分勝手なものでしかない。

そんなことを考えながら、私は与えられた仕事を糞真面目に実行していた。

仕事の内容は以下の通り、『敵が潜伏している町の占拠、または殲滅』

そして今の現状に、ただただ口を歪めていた。

「つまらんげ」

轟々と燃える炎を見下しながら、私はただただ溜息を吐く。

眼下に見えるのは赤一色。まるで津波の如く、うねった赤い炎に吞まれていく町。

何もかもを焼き尽くす赤い炎、そこから溢れ出る黒煙、肉が焼け焦げる匂い、叫び声

等々。

その光景を見下しつつも、何度目かの溜息を吐いた。

ああ、つまらない、本当につまらない、クソつまらない。

今日も今日とて、私の願いは叶わなかった。むしろ、今の私はその願いを穢している。

ゆえに、私の気分は最悪に近い。

晴れた日に散歩へ出かけたら、突然の土砂降りですぶぬれになったように気分が悪

い。

そんな時は鬱憤晴らしをするのだが、現状、そんなことも出来ない。

落胆と空虚と侮蔑と苦痛と徒勞に心を預けようとしたが、ここは未だ戰場。

作戦が完了していないのに慢心するのは、ただの馬鹿のすることだ。

そのことで自分を叱責し、戦果を見る為に町へと降りることにした。

「ふむ、思ったよりも残っているな」

地へと足を下した私は、黒焦げの建物や家屋、そして炭となった物を見ながら戦果の確認をする。

「思いのほか大惨事になってしまったが、どうやら被害は少なかったようだ。

いやはや、炙ってやるだけのつもりだったのだがな」

そう、私は単純にこの町を炙るつもりで『燃やした』だけだ。

だというのに、この町、そしてこの町に住んでいた奴等の体たらくはなんだ？

襲い掛かった炎に逃げ惑い、守るべきものを踏みつけ、罵詈雑言を放ちながら逃げた。

蛮勇をはき違えた馬鹿どもが、私に剣を突き付けたいたというのに。

私の姿を見て、大した相手でもない調子に乗っていたというのに。

その全てが灰すら残らずに燃え散った。無様な醜態を私に見せつけてだ。

私は足元に転がっている頭蓋骨を踏み碎いた。

ああ、気分が悪い。

これが先ほどまで、自分に剣を向けた者達の姿か。

これが先ほどまで、自分を舐め腐っていた姿を見せた者達の末路か。

「不愉快だ」

私は再び湧き上がる失望感に顔を歪めた。

私を見下し、剣を向けた者達が、私の一端を除いた瞬間、蜘蛛の子を散らす様に逃げた。

それこそ、我先にと逃げ出す姿は、あまりにも醜態極まった。

私を殺すつもりで来れば良かった。私を排除する気で向かって来れば良かった。

そうすれば、私はその姿を目に焼き付け、礼としてその魂ごと灰にしてやったというのに。

その姿に恋い焦がれ、そしてその姿を賞して殺してやったと言うのに。

だというのに、こいつらは剣を向けておいて逃げたのだ。

もはや戦士ですらなく、ただのナマモノだったのだ。

だから私は、逃げ惑うただの動物を一方的に殺しただけの畜生になった、なってしまった。

「胸糞が悪い」

そんなことをした自分に腹が立つし、こんな命令を下した上にも腹が立った。

上からの命令ゆえに従わざるを得ないのだが、

何度も焼却作業をやらされれば、色々と思うところがあるというものだ。

だが、今は我慢しておいてやる。

いずれはお前等をローストビーフにしてやるつもりだ。

そんなことを思いながら、私は燃え盛る道を歩む。

すると何かが崩れる音と共に、何かが私に向かってきた。

そして、その何かが私にぶつかり、身体に何かがねじ込まれる感覚がした。

その何かに目を向ければ、それは年端もいかない子供だった。

体中が火傷に塗れ、煤汚れた顔を悪鬼の形相に歪め、私を睨みつけていた。

「この化け物め！町の皆の仇だ！」

その手には大きなナイフが握られており、その刃先が私の身体に食い込んでいる。

どうやら町の生き残りらしく、仇である私を討ちに來たのだろう。

その小さな身に溢れんばかりの憎悪を溜めこみ、私を殺す為息を潜めていたのだら

う。

その姿に、私は一抹の賞賛を送る。

目の前の子どもは、他のゴミとは違い、私に立ち向かった戦士だ。

恐怖を憎しみで押し潰し、私を殺そうとした。殺す意思を持って私に挑んだ。

ああ、お前だ。私はお前のような存在を探していたんだ。

私の口元は、三日月のように歓喜で裂けた。

お前のような戦士に出会えたことに、私は自分の運に感謝した。

目の前の子共の懸命な姿に感謝を表すため、私もそれに応えよう。

私はナイフを握っている手を右手で包み込むように、そして万力の如く握む。

「よくぞ私の元に来た。その姿に敬意を表し、お前のことを焼き付けよう」

そして左手でそっと触れる様に、その子供の頭に手を置き、

『燃え散れ』

素晴らしい物を見つけた子供のような笑顔で、私はその戦士を灰にした。

「随分と気分が良いようですけど、どうしたんですか？」

「ほう、解るか？」

自身の配下の言葉に、私は聞き返した。

作戦終了後、私は歓喜を身に宿しながら、自分の屋敷へと帰っていた。

久々の戦士との出会いに、私はとても気分が良かったのだ。

それまでは、いかに上司に皮肉交じりに報告をしてやろうかと思っていたというの

に、

あまりにも気分が良すぎて、鼻歌を交じえながら上司へ報告しに行ったほどだ。

「フラウロス卿、一体・・・どうしたのですか？

貴女のようなお人が、まさか鼻歌を歌いながらここへやってくるのは珍しいのですが」

「ああ、自身の幸運に大変気分が良いのです。まさに宝石を見つけた気分だ」

「あ、ああそうですか。」

いえ、いつも私を冷めた目で見つめてくるので、随分と気分がいいと思いましたが。

そうですか、何か良いことでもあったみたいですわね」

なぜか上司は、怯えの混じった姿を見せるのだが、私は気にしないほどに気分が良かった。

「それで、報告書の方はどうですか？ 私からすれば不備が無いと思うのだが？」

「あ、ああ、何も問題はないですよ。作戦完了、ご苦労でした」

「それは良かった。では私は帰らせて貰うとしよう。ああ、実に気分がいい！」

そんなやり取りをしたのだが、なぜか周りは顔面蒼白だったのが不思議だ。

「それで何か収穫はあったのですか？」

「お前の求める物は無かったよ、ヴァイス・カツエ。

いやはや、お前の探し人は随分と鬼ごっこが得意の様だ。いや、隠れ鬼か？
ダンタリオン卿からの情報では、

あちこちに出没しているようだが、その度に追手を退けて逃げているようだ」
「そうですか。なら問題はありません」

私の言葉に、ヴァイスの口元は歪んだ。

「ええ、問題はありません。アレは私の手で捕まえないと意味がないんです。

他の誰にも譲りませんし、譲るつもりもありません。

それに……」

ヴァイスの黄金に輝く目が細まる。

「いずれ、アレは私の前に来てくれると思います」

「それは貴様の勘か？」

「いいえ、絆です。辛うじて繋がっている程度ですが」

ヴァイスの言葉に、私は彼女と同じように口を歪める。

「それにしてもヴァイス、貴様は随分と変わったな？あの頃とはまるで別人だぞ」
「色々と貴女に手ほどきを受けましたから。」

『得た権利を投げ出して死ぬか、権利の為に生きるか選べ』でしたか」

「クハハハハハハハハ！」

そうだ、あの時の貴様は、その身に得た権利を捨てて、死を受け入れようとしていた。それが私には我慢できなくてな。

磨けば光る逸材を、そのまま失うのはどうにも看過できなかった。

そして私はお前を鍛え上げた。まだまだ至らないところはあがあるがな」

私は更に笑みを深める。

「そしてお前の探し人に会ってみたくもなつた。

私が育てたお前を彼女の見せ、そして言いたいのだ。『貴様のおかげだ、ありがとう』
とな」

「それは貴女なりの趣味ですか？」

「少なからず趣味はあるが、そこまで傾倒もしておらんよ。

女の尻を追っかけて堕ちた元天使でもあるまいに」

私は、あのクソ墮天使を思い出しながら、揶揄をした。

存在自体が黒歴史の塊である墮天使。

組織の長であろうに、自身の趣味に傾倒した結果、

管理下の目を逃れた者達が、時折喧嘩を吹っ掛けに来るのだ。

そしてそれに対応するのも、私らの仕事だ。

もちろん、そんな奴等は燃やしてやったがな。

「ではどうしてですか？」

「純粹に感謝したいのだ。貴様と出会えたことに、私は彼女に少なからず感謝している。

きっかけは彼女の仕出かしたことだからな。故に、礼を言いたいのだよ」

「最低ですね。でも私も楽しみです。

あの人がどんな顔をしてくれるのか、本当に楽しみで仕方がありません」

その言葉をきりに、私はヴァイスと共に笑い出した。

アレは今、窮地に追い込まれている。

それはアレ自身の行いによる自業自得でもあり、私という存在の影響であり、世界の意志だ。

ゆえに私は彼女と出会えることを愉しみにしている。

自身の身を捨てて守ろうとした存在に憎まれ、その存在から命を脅かされた時、

彼女はどんな姿を見せてくれるのだろうか？

悲しいかな、それは自己満足でしかなかったわけだが。

そう思うと、私の心は歓喜に打ち震えた。

「ああ、愉しみだ」

ヴァイス・カツエ

「じゃあね」

その言葉が、今も楔のように私の心に突き刺さっている。

あの人は私を置いて去っていった。あの真つ赤に染まった世界に、私だけを残して。真つ赤に染まった世界に私だけを残して、あの人は目の前から消えた。

そしてあの人の行った業が、私の身に降りかかったのは変えられない事実だ。

あの人は何の理由か、自分が仕えていた主を殺した。

周囲からは、力を振るう快楽に溺れ暴走した、なんて言っていた。

だがそんなことは、私には関係なかった。

私にとっての事実は、私はあの人に置いていかれ、あの人の業を背負わされたことだ。あの人の行いによって、私の人生は変わった。

周りからの罵倒、敵意、憎悪、恐怖、殺意、嘲り、嘲笑、罵声、エトセトラエトセトラ。

まるで巨大な波に吞まれたように、私は悪意の波に打ちつけられ、その海に沈んだ。『殺せ、死ね、化け物め、処分すべきだ、死ね、首を斬ろう、処刑だ、死ね、

ああ、やっと終わる。

そんなことを思っていた私は、汚泥と異臭に満ちた部屋で意識を捨てようとし、『勝手に死なれては困るんだが？』

そんな声が聞こえ、轟音と共に光が差し込んだ。

『上の奴等は揃って馬鹿しかいないのか？いや、魔王様は別か』

扉から漏れた光を背に、それは私を見下していた。

『危険だから処分しろ？はぐれを生み出さない為に見せしめにするだど？阿呆共が』

言葉は微かにしか聞こえないが、とても不機嫌なのだとは分かった。

『こんな素敵な、素晴らしい原石を処分するだど？』

磨けば光るだろう、こいつを処刑するだど？全く持つて理解出来んなあ！』

ガアアン！と音共に、その人は扉を殴りつけた。

鋼鉄製であろう扉が凹み、拳の形がくつきりと刻まれる。

『上がなんと言おうと知ったことか。私は私の好きにさせて貰う』

その言葉と共に、その人は異臭に塗れた部屋に踏み込み、私の傍へと寄る。

そして、黒く汚れ、異臭に塗れた私の顔を見据える。

その瞳が私を見据え、次に口歪めて笑い出した。

『クアハハハハハハハハハハ！貴様は良い目をしているなあ！』

貴様は良い！貴様は良いぞ！気に入った！お前は私が貰い受ける！』

そう言うと、その人は私を抱きかかえた。

汚れきった私を両手で抱きかかえ、まるで面白い物を見つけた子供のような笑みで私を見つめる。

『それは邪魔だな』

そういうとその人は、私を縛っていた鎖に触れた。

その瞬間、私を繋ぎとめていた鎖は赤く溶け、ジャラリと鎖の落ちた音が部屋に響いた。

『では帰るとするか』

その人は、私を闇の中から出してくれた。それが出会いだった。

『ええい、服を脱がすのも面倒だな。ああくそ、垢やら汚れ塗れのせいでべたつく。

悪いが、手っ取り早いからその服を燃やす』

私の返答を聞かず、その人は服の繋ぎを燃やし、私を裸にした。

『まずはその汚れた身体を洗う』

そう言うやいなや、私を泡だらけにし、そしてお湯の中に放り込んだ。

『私のお古で悪いが、取りあえずはこれを着ろ』

着たこともない服を渡され、まるで人形のように着せ替えられた。

『まずは寝ろ、そして休め。』

憔悴しきつたままで飯は食えんだろうから、しばらくはスープか下手すれば点滴になるか』

着せ替えられた私は、そのまま大きなベッドに放り込まれた。

石のように冷たく、硬くもない、暖かくて、柔らかいベッド。

『ん？眠れんのなら子守唄でも聞くか？なに？いらないだろ？』

ならさっさと寝ろ。安心するがいい、貴様が寝た後も傍にいる』

その言葉を聞いたせいなのか、それとも心身ともに疲れ切っていたからなのか、

私の意識はプツリと途切れた。

助けて

真つ暗な闇の中で、私は叫び続けた。

嫌だ、助けて、寒い、怖い、暗い、もう一人は嫌、もう何も無い、死にたくない、

痛い、辛い、怖い、助けて、いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ……!!

もう怖いのは嫌、暗いのは嫌、一人になりたくない、見捨てられたくない、

助けて！誰か！誰か私を助けて！叫ぶ私の声は、暗い闇に吞まれていく。

お願い、もう一人にしないで・・・

ぼつりと呟いた私の言葉。

すると、何かが私の頭に触れた。それは冷たい世界において、ただ温かかった。

それは手だった。その手は、私の頭を撫でるように動く。

その手から感じる温かさに、私は次第に落ち着いていく。

『目が覚めたか？』

黒い髪の女性が、その朱い瞳で私を見つめていた。

『フラウロス卿、勝手なことをされては困る！』

『ほう？それは一体何のことを言っているんだ？私にはさっぱり解らんのだが』

私があの人の下にきてしばらく、ようやく胃が固形物が消化できるまでに落ち着き、

多少なりと歩き回れるようになったある日。

私はあの人と誰かが話しているのが聞こえた。

声の方へ歩いていくと、締まっている扉から声が聞こえてきた。

どうやら、あの人と誰かが話をしているみたいだ。私はそのまま息を殺し、扉に耳を

寄せた。

『なら言わせて貰おう、なぜあのような危険物を処分しない！』

あれは主を殺したはぐれ悪魔の身内だ！ならば同じようにはぐれ悪魔になるに決まっている！

我々の意向としては、すぐさま処分するように言った筈だ。

だが貴様はその意向に逆らっている！これは立派な叛逆行為だぞ！』

その言葉に、私は心が凍るような感覚に陥った。

『処分』、その言葉が、あの時の私を思い出させる。胸が苦しくなり、呼吸が荒くなる。だがあの人は、声をあげて笑った。

『ほう、反逆行為とききたか。いやはや、意向に逆らうだけで反逆とは、恐い恐い。

これでは呼吸の仕方さえも反逆行為にされそうだな』

『誤魔化すのも大概にしろ！このまま貴様を牢屋にぶち込んで良いのだぞ！』

その言葉に、私は心臓を鷲掴みされた様に呼吸が止まる。

私のせいで、この人が酷い目にあう。そう思った瞬間、私はその場から逃げ出した。

やっぱり、私はいない方がいい

夜の帳が降り、真つ暗な道を私は歩く。

あの人と一緒にいる中で、少なからず私は安心していた。

もう大丈夫だと、私は生きていても良いんだと。でも、それは許されなかった。

私のせいで、あの人が不幸な目にあう。

そう思ったら、私はあの人の家を飛び出し、気付けば森の中を歩いていた。

不意に何かに躓き、私は道の上に倒れ込んだ。倒れ込んだまま、私は目に涙を浮かべた。

どうして

その言葉が心の中に反芻する。

どうして

その言葉が胸の中に溢れだす。

どうして? どうして私は……。

そう思っていると、目の前の草むらから何かのそりと出てきた。大きな獣だった。

体中が茶色の毛に覆われ、私よりも2、3倍も大きな巨体。

血のように真っ赤な瞳が暗い中でもらんらんと輝く。

目があった。

その瞬間、獣は私へ目がけて口を大きく開いて飛びかかってきた。

このままじっとしていれば、私は簡単に死ねる。そしてあの人も助かる。

そう思い、私はそのまま目を閉じようとした。その瞬間、あの人の顔が浮かんだ。
嫌

私は身を動かして獣を避ける。

嫌、嫌だ

私は何とか身体を起こすと、拙い足取りで駆けた。

嫌、嫌、嫌！

もう嫌だ、一人は嫌だ、見捨てられるのは嫌だ、あの場所に行けないのは嫌だ。

それは私の中に宿った感情。あの人といられなくなることに対する恐怖。

自分から逃げ出しておいて、私はあの人と一緒にいられないことに恐くなった。

他人から見れば、酷く自分勝手なことだろう。でも、それが私の心の声だった。

必死に走る私に獣は追いつく。何とか獣の爪を躲すが、その背中に何かがぶつかった。
た。

見れば、大木が私を遮るように立っていた。そして目を戻せば、獣が私に飛びかかっていた。

死。それが私を感じた感覚。ゆっくりと獣の牙が迫ってくる。

でも不思議なことに、私に迫ってくる死を、私は冷静な目で見ていた。

仮に牙が刺さっても、その前にその顔を殴ってやる。そんなことを思っていた。

そしてその牙が迫る瞬間、

『それは誰の許可を得ての行為だ？』

あの人の声が聞こえた。

目を開くと、私の目の前にあの人が立っていた。腰まで長い黒髪が風に舞っている。

あの人の左手が、獣の首を締め上げていた。

『独りで出歩くのはあまりお勧めせんぞ。特に今のお前ではな』

『どうして』

『貴様が話を聞いていたことぐらい、気配で丸分かりだ。』

大方、話を聞いて自責の念にでも駆られたんだろうが、はっきり言つて貴様は馬鹿だ』

目の前の彼女の声が高くなる。

『貴様を貰い受けた時点で、その程度のリスクは先刻承知だ。それでも貴様が欲しく

なった。

故に貴様は私に対し、何も気負う必要もない。それは私への侮辱だ』

『でも、私なんて、私なんていなくても・・・！』

『ならばなぜ生きようと足掻いた』

その言葉に私は言葉を失った。

『死にたかつたなら、さっさとこいつに食われれば簡単に死ねたぞ。』

いや、それこそ舌でも噛めば死ねるだろうに、貴様はそれをしなかった。

結局は、貴様は生きたいんだよ。それに気付かず、死にたいなど言いおつて』

『私は……まだ生きたい……?』

『ああそうだ。貴様はまだ諦めていない。生きたいとどこかで望んでいるのだ。』

さあ選べ、心を殺して死ぬか、心に従って生きるか』

『私は……』

私の中の心が震えだす。

何も知らず、何もせず、私はこのまま死にたくない。

温かい世界を知った今、私はこのまま死にたくない。

『私は生きたい! 生きたいです!』

『やはり私の目に狂いは無かった!』

その瞬間、天まで上る火柱が上がった。

『では貴様に新しい名をくれてやる』

『名前……ですか?』

周辺を荒れ地にした後、私はあの人の家に帰ってきた、お姫様抱っこをされて。

『そうだ、貴様は私の物だからな。だったら、新しい名も必要だろ?』
『はあ……』

目の前で、革張りの椅子に座り、軍服を着た黒髪の女性は、ニタニタと笑う。
私は話の内容が追いつかず、ただ返事をするだけ。

『ヴァイス・カツエ』

そんな私を気にもせず、女性は私に向かってこう言った。

『ヴァイス……かつえ?』

『そうだ、貴様に流れる血とその見た目、まさにヴァイス・カツエじゃないか。』

うむ、今から貴様はヴァイス・カツエだ! 私が決めたぞ! 貴様に拒否権はない!』
まるで独裁者のように言いだす目の前の女性に、私は言葉を失った。

でも、なんだろう、この強引き、嫌いじゃない気がする。

『ではヴァイス、私の元で懸命に励み、その命の素晴らしきを見せてくれ。』

私の名はファレグ、ファレグ・フラウロスだ』

『はい!』

ファレグさんから差し出された手を握り、私はその瞬間、ヴァイス・カツエとなった。

鉄は熱いうちに打てと言うが、水の温度で脆くなるのよね

「ヴァイス、お前は学校に行け」

「はい？」

ファレグさんの言葉に、私は首を傾げた。

今のファレグさんは、黒い革の椅子に腰を下し、新聞の方に目を向けている。

彼女の出で立ちは、出会った時のような軍服ではなくアンダーウェアだけである。

はつきり言つて痴女だ。そして酷いのが、この人は大抵がこういう姿だ。

だがファレグさんにあまりの堂々とした姿に、毒気を抜かれてしまうのだ。

その姿に妖しきや艶めかしきなどはない。

「なぜ恥ずかしがる必要がある？。この屋敷の持ち主は私だ。ならば私が自由にしても問題はないだろう。そもそも住んでいるのは私とお前だけだぞ？私の物であるお前の前で気取る必要もその意味もない。客人に対してはちゃんとした服装で対応している。もう一度聞こう、どこに問題がある？それにだ」

ファレグさんはこちらを見てニヤついた顔をする。まるで私の反応を楽しむように。

「大抵の悪魔など、私よりも下品で、色欲に溺れた者ばかりだ。

それこそ私の知っている奴等は、何人もの愛人や奴隸やペットがいるぞ？

種族の繁栄の為に必死にその義務を果たしているなあ。それこそ『精を出してな』

何が面白いのか、ファレグさんは堪えていた口元を三日月のように歪める。

「これだけならば、貴族の役目をちゃんと行っている素晴らしい領主だがな。

彼奴らの大半は、そのたまりにたまつた欲望を、弱者にぶちまけるのが好きな奴等だ。

年端もいかぬお前からすれば、見れば卒倒する様な事をする奴等だっている。サディ

ストやマゾヒストなぞ優しいものだ。年上、年下にしか欲情しない奴もいてな、丁度お

前くらいのがストレートだった奴もいたぞ。まさに万魔殿も真つ青で逃げるほどの阿

鼻叫喚だ」

そして私を上から下を見ながらこう言ったのだ。

「良かったなヴァイス、私にその手の趣味は一切ないぞ」

一度、どうして普段もその姿ですか？ 恥ずかしくくないんですか？ と聞いた時の返答がこれだ。

私に対し、ファレグさんは遠慮はしない。それこそ平気な顔で直球な発言をする。

色々と真つ黒な情報を聞かされたのは置いときまして、その返答に私は諦めることにしました。

多分ですが、この人はこう人なんだろう、と思つた切つ掛けでもありますが。

そんなことは置いといて、私はファレグさんに学校へ行かせる意図を聞いてみた。

「なぜ、急にそんなことを？」

「魔王様の妹君が、人間界で一領主になるようだな。そのために色々と補佐が欲しいんだらうさ」

私の問いに、ファレグさんは新聞を見ながら事もなげに言った。

「それに魔王様には借りがあつてな。お前には言つてはいなかつたが、お前を保護する際になにかと便宜をはかつて貰つた。ここらで借りを清算するいい機会だからな、私には断る理由がない。それにだ、これはお前にもいい機会だと私は思つた」

新聞を畳むと、ファレグさんの朱い瞳が私を見つめる。

「私以外と手合せするのも、なかなか乙なものだぞ？それこそ、私では知ることのない知識を得ることも出来る。私は私の知つていふことしか出来ん。様々な経験を積むことは大切だぞ？今の自分を知るためにもな。ようは、貴様を武者修行の旅に出すという話だ」

テーブルに置かれてゐる珈琲を一口啜る。

「それにだ、人間界で言うには貴様は学生に当たるらしくてな。そう言つた子を学ばせるのは、保護者の義務だとさ。私とて馬鹿を臣下にするつもりもない。それに人間界の

知識に私は大變興味がある。出来ればそう言った物を持って来てほしい」

何を思ったのか、フアレグさんの顔が苦々しいような、拗ねたような顔をする。

珈琲が苦かった訳じゃないだろう。

「私が直々に教えても良いのだが、こう見えて私は忙しい。それに両親や姉に兄から止められたよ。家族の一員である貴様には、せめてまともに育つてほしいとな。全くもつて失礼な話だ、皆して私をどう思っているのだ」

ヴァイスさんの持っている珈琲がボコボコと沸騰した。

多分、皆さんの思いは一致してると思いますが、私も含めて。

「私の意見は……無理でしたね。貴女は言い出したら聞かない人でした」

「分かればよろしい」

そう言うと、フアレグさんはアンダーウェアの姿からいつもの軍服を纏う。

「では、今日はいつもの倍で挑ませてやる。頼まれごととは言え、貴様を送る相手は魔王様の妹君。何かあつたら大問題に発展するだろう。それに私の名で貴様を送るのだ、生半可な実力で送つては失礼にあたる。

安心しろ、手加減はしないが加減はしてやる」

「全然安心できません」

フアレグさんの『安心』は、私にとっては『不安』でしかない。

溜息を吐きながらも、私は一呼吸して気を引き締める。

彼女が軍服を纏うという事、それは彼女なりの敬意の表れ。

この人に新しい名前を与えられ、臣下になった日から私は、何度も組み手をしている。

曰く、「金剛石だろうと宝石だと、磨かなければただの石ころだからな」らしい。

組みと手と言いつつも、実際には一方的な蹂躪。

私の拳は受け止められ、彼女の拳が私にめり込む。

酷い時は普段着のまま片手間で、それこそアンダーウェアで打ち負かされた。

私はこの人に打ち負かされっぱなしだ。折れてない骨などそれこそ頭くらいだろう。

どれほど身体中の骨を折られただろうか。

そしてはこれから始まるのは、それを越えた彼女の本気的一端。

怖い。

正直、出来る事ならこのまま逃げ出したい。身体が、心が震えるのを自覚する。打ちのめされ続けた記憶が、身体中を駆け巡る。私はこの人に勝てない。そんな想いが身体を重くする。

でも私は逃げない。この人の前で、そんな無様な姿は見せられない。

私がこの人に見せるのは、逃げる醜態ではなく、無様に足掻く姿だから。

「お願いします」

私の言葉に、ファレグさんは宝物を見つけた子供のような笑みを零す。

「今の貴女はとても素敵よ。大好き」

その屈託のない女の子の笑みに、私は綺麗だと思つてしまった。

そして私は後悔した。この人は本当に容赦がなかった。

熱で炙られ、打撃を避け、走り回り、転がり、蹴り飛ばされ、叩き付けられ、引き摺られ、水分が、酸素が減つていく。それでも私は足掻き続けた。目潰しに砂をかけ、死角からの急所突き、不意打ち、出来ることを全てをやつた。嫌つていた力さえも、心が擦り切れる思いで使い潰した。そうしないと、目の前の彼女は納得しなかったから。

「やつぱり素敵よね、命つて」

渾身の拳を受け止められ、真っ赤に染まった視界に映るのはファレグさんの顔。その顔は、手に入らない物を羨ましがるように、慈しむように微笑んでいた。そしてその笑みのまま、彼女は私を地面に叩きつけ、腹部へと拳を思いつき振り下ろした。

身体がくの字に曲がり、肺に中の空気を一気に吐かされる。もはや身体は動かず、脱水と疲労と失血で意識さえも朦朧とする。

「終わりだ」

フアレグさんは容赦なく、その拳を私に振り下ろす。それでも私は心だけは、心だけは折らない様に足掻く。

これで終わりでも、それでも最後まで目だけは逸らしたくない。そして振り下ろされた拳は、私の顔に向かいそして、

「合格」

目と鼻の先で止まった。

「戦いに関しては合格は言わんが、お前は最後まで私から目を逸らさなかった。それだけでもお前は充分強くなったよ」

そう言ながらフアレグさんは、胸元から液体の入った小瓶を取りだす。私の傍に寄り添い、私の身体をゆっくりと起き上がらせ、その中身を私に飲ませる。するとボロボロだった私の身体は、何事もなかったかのように元通りになる。体中の傷も、折れ曲がった腕も、まるで何事もなかったかのように。

「流石フェニックスの涙だな、よく効く」

空の小瓶を服のポケットにしまうと、フアレグさんは私の身体を抱える。

「毎回言いますけど、お姫様抱っこは止めてください」

「阿呆。傷は涙で塞いだが、失血や脱水や疲労で動けんだろが。やり過ぎたとは思っ

ているが、仮に戦場ならばお前は死んでる。負けたお前は、素直に抱えられていろ」
そのまま私を抱っこしたまま、私たちは屋敷へと戻る。抱えられている間、私はこの人の圧倒する強さを羨ましく思う。何もかもをねじ伏せる強さに、私は心を惹かれていく。もしも私に力があつたなら、この人のように力があつたなら、そう思うようになっていく。

あれ、なぜでしょうか。視界が滲んでしまいます。なんで、なんで、どうして私は……
「心を殺すなど言つたはずだ。泣きたければ泣け。そして強くなれ。そんな涙を流さないように」

私は彼女の胸元に顔を埋め、屋敷に着くまでずっと、その胸元を濡らし続けた。

ホウレンソウは大事って、それよく言われるから

「はい、そうです」

塔城小猫は一人、何かに話しかけていた。ここは彼女が住んでいるマンションであり、彼女の寝室だ。小猫は現在、リアス・グレモリーの眷属となっているが、周りにはその主はいない。当たり前と言えば当たり前だが、彼女はリアス・グレモリーと住んではいないからだ。リアス・グレモリーからは、眷属なのだから一緒に住めばいいのに、と誘われたが、ならばなぜ他を誘わないのだろうか？そう言いたくなつたが、持ち前の自制心でそれを口にする事はなかった。そして今、小猫は目の前に置かれた紙に向かいあつていた。紙には何やら豹の横顔がらしき絵が描かれている。

「解りました。ではそうします」

小猫はぶつぶつと何かを呟いている。仮にこの光景を第三者が見れば、直ぐに駆け寄つて彼女の精神を心配するだろう。

そして要件が済んだのか、絵が描かれた紙は一瞬で燃え上がり、灰すらも残さずに燃え散つた。

「では行きますか」

それを確認すると、塔城小猫は立ち上がり、今から赴くであろう場所へと意識を移した。何故か、自分の口元が歪んでしまった。

駒王学園校庭で、一人の男が退屈な声を上げた。男の顔は堀が深く、イケメンというよりは渋顔と言ったところだろう。ウエーブのかかった黒髪と相まって、その容貌はただならぬ印象を抱かせる。ただし、男の異質さを語るならば、その男の背にある物ある。それは12枚の翼だ。男は背から黒い12枚の翼を生やし、空に浮いていたのだ。これを異常と思わないものはいないだろう。

もつとも、男は人間ではない。己が戦いたいという欲望に吞まれた墮天使なのだから。男の名はコカビエル。そう、墮天使なのだから空に浮いても問題はない。

「なんだこれは。これがサーゼクスの妹なのか？」

その言葉には、退屈を含み、失望の念が宿っていた。例えるなら、おいしそうな料理と思つたら期待よりもまずかった、楽しいと思つた遊戯が実際にはつまらなかった。そのようなものだろう。

目の前に転がるのは、学生服を着ている少年少女たち。一人を除いて、彼らの姿はボ

口唇というか泥まみれというか、満身創痍だった。体中が擦り傷だらけで、傷跡から血が滲んでもいる。息すらも絶え絶えで、まるで呼吸すらも水の中で息を吸うかの如く苦しみの表情だ。

男の目的は、自身の戦いたいという欲を満たしたいだけ。始めは天使に喧嘩を吹っ掛けるため、教会を襲い、彼らが保管している聖剣を強奪した。だが天使たちが行ったのは、話にもならない雑魚を送ってきただけ。次に魔王たちの妹たちが治めるこの場所のことを起こした。だが肝心の魔王たちは来ず、あろうことか彼らを呼びよせる為の餌が、自分を倒すと言ってきたのだ。結果、前菜にもならなず、彼らは男に敗北した。

これにはコカビエルも失望というものだ。大口を叩いた結果がこれなのだから。

教会から派遣されたエクソシストは、コカビエルによる神の死を伝えられ戦意を喪失。嘘だ嘘だとうわごとを繰り返し、まるで壊れたラジオのように痛ましい。同じように、修道服を着た悪魔もまた、その事実^にに氣を失った。

聖と魔を重ねた聖魔剣の使い手は、その力を完全には使いこなせず力尽きた。聖魔剣を杖代わりしにして、それによりかかかっている。同僚の娘である女は、勝手に自分を縛り付け、墮天使の力を使わずに負けた。この町の領主であり、魔王の妹である女も、その破滅の力でコカビエルを倒すにはあまりに力不足だった。そして、彼らの切り札だつ

ただろう、今代赤龍帝の宿主も、無様に立ち上がろうとしている。

そんな中、たった一人、白い髪の小柄な少女だけは、その両足を地面に踏みしめていた。傷塗れの身体だというのに、所々が血で染まっているというのに、額の流血で顔が真っ赤だと言うのに、少女はしっかりと立っていた。

その顔は諦めの色は無く、むしろ嬉々とした表情を抱いている。まるで楽しいおもちゃを見つけた子供のように、その顔は笑っている。その異常な姿に、周りは戸惑いを抱いていた。

彼女の今の主であるリアス・グレモリーは、白い髪の少女、塔城小猫の姿に冷や汗を流した。

塔城小猫は、自分の兄である魔王様が、彼の友人からサポートとして紹介された子だ。小柄で背が小さく、そのせいで可愛らしいという印象を抱いたものだ。彼女と初めて会った際、新しい名をつけてほしいと言われた。

小猫曰く、「この名は私の主から貰った名前です。なので、その名で呼んでいいのは本来の主だけです」とのこと。故に、塔城小猫という名を与えたのだ。その後は自分の家族として共に過ごした。無表情ではあったが、決して無感情ではなかった。お菓子に興味があり、身体を動かすことも好きだった。

そして小猫が自身の治める領地の学校へと入学した後、それは起こった。リアス・グ

レモリーの婚約破談のために、彼女の婚約者ライザー・フェニックスとの決闘が行われた。結果はリアス・グレモリーの敗北だった。彼女の眷属である赤龍帝の宿主、兵藤一誠の姿を見ての投了だった。その際、ほぼ無傷だった小猫の姿に、リアスは少し怖くなくなった。確か、相手の女王に体育館ごと爆破されたはずなのに。

そして今、満身創痍であるにもかかわらず、嬉々とした小猫の姿。はつきり言つて異常だ。一体どうしてその表情でいられるのだろうか？リアスだけでなく、他の者達も同じ思いだった。

「それにしても貴様、どうやら他とは違うな」

「本来の主に鍛え上げられましたから」

コカビエルの言葉に小猫は答える。

「貴様の本来の主とやらは相当な者なのだろうな。満身創痍だというのに、力の差を理解しているというのに、それでも貴様の目は死んでいない。今でも俺を殺そうと狙っている目だ」

「戦いにおいて、先に心が折れた者が死ぬ。あの人の言葉です、ですから、たとえ四肢を挽がれようと、私は心だけは折れるつもりはありません。時間稼ぎをさせて貰います。もちろん、死ぬまで徹底的に足掻きますが」

「ははははははは！面白い、死ぬまで足掻き続けるか！だが残念だ、貴様等はここで死

ぬ。俺はこの場で貴様らを殺し、止まっていた戦争の針を動かす！」

コカビエルは、その右手天に掲げる。すると、彼の上空に巨大な光の槍が現れた。その威力に関して、先ほど体育館を吹っ飛ばした光景を見せられたせいで、嫌でも恐ろしいと理解した。

「ではな」

そしてその槍を、地面に蹲る小猫たちに向けて放つ。

目の前に迫る巨大な槍を前にしても、塔城小猫の心は至って冷静だった。仮にこれが戦いの経験がない新米であったなら、死にたくない泣き喚いるだろう。近くに転がっている学校内で有名な変態は、くそくそと自己嫌悪に陥っているし、『今の主』であるリアス・グレモリーも、何やら呆けている表情だった。もつとも、先ほどから糸の切れた人形のように蹲り、ぶつぶつと「嘘だ嘘だ」と言っているエクソシストを見れば、彼の方がまだ良い方なのかもしれない。

そして光の槍が彼らを呑みこみ、巨大な火柱が上がった。

「火柱だど?」

その光景にコカビエルは違和感を感じた。自分の放った光の槍は確かに強力だ。だが、天にまで昇る火柱が上がるほどであっただろうか? いや待て、そもそもあの白髪の小娘は、どうして最後まで笑っていた?

それにあの小娘は何か言っていないかったか? そうだ確か・・・

コカビエルが違和感に思い至ろうとした瞬間、目の前の火柱から自身を呑みこまんとする巨大な火の玉が放出された。それは先ほど、リアス・グレモリーの放った滅びの魔弾とは比べようもないものだった。

咄嗟の出来事ではあったが、コカビエルはそれを止めるようと結界を展開。その結界に向かって火の玉は迫り、結界の目前で砕けた。

「なんだと!」

まるで散弾銃のように砕けた炎の欠片が結界に触れる。その瞬間、触れた部分の結界が瞬時に焼け尽いた。まるでそこだけ虫に食われるかのように、炙られたように。また、辛うじて避けきれなかった炎の欠片がコカビエルの一枚の翼に触れる。そう、触れただけだ。それこそ火傷にすらならない程度の熱さ。だがその瞬間、まるで油をまいたかのように、その翼が一気に燃える。

「なんだと!」

コカビエルは燃え盛る翼の火を消そうとするも、いつこうに火は消えない。むしろ、更に勢いを増している。その上、その日は翼を伝い、コカビエルにまで及ぼうと動く。「うおおおおおおおおおおおおお!」

自身を焼き尽くさんと迫る炎を目に、コカビエルが取った行動は単純。そう燃えている翼の切除だ。ブチリと音を立て、彼の翼の一枚が天に舞い、そのまま灰となった。

「まさか、この炎は・・・!!」

コカビエルは呻く。彼は知っているのだ、この触れた物を焼き尽くさんとする炎を。そしてその炎を纏った存在を。あの大戦時に、一部の戦場を灼熱地獄へと変えた悪魔を。その戦場で、朱い目を輝かせ、子供のように歌を口遊んでいたあいつを。

コカビエルは目の前の火柱に目を移す。火柱は相もかららず天へと昇るかの如く燃え上がっている。

「おやおや、昔の貴様だったなら避けれたはずだぞ?」

その声を聞いた途端、コカビエルに走ったのは歓喜。そう、あの時あの戦場にいた悪魔。二天龍によって、最後まで決着が尽かなかった好敵手の一人。

「そうか、貴様か! 小娘の言っていた主とは貴様のことだったのか!」

その言葉に呼応するかのように、火柱は一瞬にして霧散した。そしてその場にいたの

は、黒い髪を熱風に揺らしながら、軍服を纏った女。彼女の左手は、コカビエルが放った槍を貫通させながらも受け止めていた。墮天使とは言え、元は天使の力。故にその槍は悪魔にとつては猛毒に等しい。だが女の顔は笑っている。口を裂けるかのように歪め、炎に照らされた瞳をより朱く輝かせて。

「ファレグ・フラウロス……！」

「なあコカビエル、貴様は今、私の物に何をする気だった？」

争いは、（色んな意味で）似た者同士だから起きる

「おや、貴様もこの砦に用があるのか？」

目の前の悪魔は俺にそう言った。石造りの砦の上で、腕を組んで立っていた。黒い髪を風になびかせ、朱い瞳で俺を見据えている。口元は裂けるように歪んでいた。

「いやはや、こども攻め込まれると防衛する私も疲れてくる。ここを私一人で守れとは、上の酷な命令をするものだよ。しかし、私はどれほどの数を焼いたんだろうな？」

その悪魔の立っている砦の周りには、肉の焦げた臭いが蔓延し、未だ煙を燻らせている黒い塊たちが散乱していた。どれもが背に、辛うじて判る翼らしきものを生やしているのだが、一体どれが天使で、どれが墮天使なのか判らない。

「貴様、一体何者だ？」

俺は目の前の悪魔に問う。この惨状を見るに、目の前の悪魔が行ったのだろう。

「まずは貴様から名乗るのが礼儀ではないのか？」

「生憎と俺はそう言うのに疎くてな。俺の名はコカビエル。そして貴様がここを死守している悪魔と見ていいのか？」

「ああ、その通りだ。私がここを守っている。それが命令だからな。おっとすまない、私

の名はファレグ、ファレグ・フラウロスだ」

俺とファレグと名乗った悪魔は目を合わせる。すると、俺は目の前のファレグに対して思い至った。こいつは俺と同類だと。いわゆる戦闘狂なのだ。

「なるほど、貴様も俺と同じか」

「ああそうだな、貴様は私とある一点においては同じだろう。まさか私と同じ、どうしようもない奴に出会えるとはな」

ファレグは口元を開けて笑い、俺もつられて笑う。そして俺とファレグの笑い声だけが、戦場に木霊した。

「つまらん任務だと思ってみれば、まさか貴様のような奴に出会えるとはな！」

「ああ、私も貴様のような御同類に会えるとは思わなかったよ。先ほどまではつまらん弱い者虐めをしていたが、お前のような者に出会えるから闘いは面白い。貴様なら、私に見せてくれるかもしれんな」

俺は全身に力をめぐらせ、ファレグはその四肢から炎を噴出させる。

「簡単に死んでくれるなよ？俺を楽しませろ、ファレグ・フラウロス！」

「貴様も、私にその命を見せてくれ。私は失望させるなよ、コカビエル！」

そして俺は、ファレグと互いに殺し合った。

腕を焼かれ、翼を挽ぎ、殴られ、槍を突き刺し、周りを省みずに殺し合った。落とし

てこいと言われた、死守しろと言われた砦を吹き飛ばしたことも些細なことと片づけ、互いに血まみれになりながら、響くように笑いながら、俺たちは殺し合った。だが結果は二天龍の乱入によって、三勢力の戦い自体が停戦に終わった。俺とファレグの決着が尽かないまま。

「そーだ！あの時に二天龍の横槍が無ければ、俺とお前の戦いは決着が尽いてたー！」

俺はあの時の悔しさを思い出し、身体が震える。握った拳すらも震え、皮膚に食い込んだ爪によって、拳から血が流れる。

「俺は誓った！もう一度戦争を起こすと！二天龍さえいなければ、あの戦いは俺たち墮天使の勝利だった！死んでいった同胞のためにも、俺たちは勝たねばならんだ！そしてあの時の決着を尽け、俺は貴様を踏み越えていく！」

俺は声高に叫ぶ。そして目下のファレグは、俺の言葉を聞くやいなや、大声で笑い出した。

「そうか、そうなのか！貴様は私との決着を尽けるために、こんな大掛かりなお膳立てをしてくれたのか！これは一本取られたよ。まさかこうまでして、私との戦いを望んでい

たとは！全く持つて予想外だよコカビエル！」

「ファレグ・・・さん？」

ファレグの後ろにいた白髪の小娘が、主の姿に戸惑いを隠せていない。そしてファレグは、自身の左手に刺さっている光の槍を握り砕いた。光の槍によつて焼けた彼女の左手から、肉の焼ける匂いと煙が上る。

「良いだろう」

俺を見据えるファレグの目が、あの時とは違う鋭さで俺を見据える。そして結界内の温度が一気に上がる。まるで砂漠に放り込まれたような暑さだ。

「ならばこれは必然だ。私がここに来たのは紛れもない運命。だが戦う前にコカビエル、私は貴様に一つ問う。塔城小娘は、いや『私の家族であるヴァイス・カツエ』は最後まで貴様を見据えていたか？最後まで足掻いていたか？」

突然名前を呼ばれたことに、後ろの小娘はびくりとする。

「ああ。貴様の後ろにいる小娘は、最後まで俺を見据えていたよ。どうやら貴様に似たようだ」

「そうか」

俺の言葉を聞くと、ファレグの顔が笑みに染まる。まるで自分の子が褒められたことを喜ぶ親のように。

「そうか、そうかあ。私のヴァイスは私の最後まで足掻いたか！いい！いいぞ！全く持つて最高じゃあないか！可愛いなあ、可愛いなあ！私のヴァイスは全くもつて可愛いなあ！」

「えつと、その、あまり褒めないでください。恥ずかしいです！」

「何をいう。家族の頑張りを褒めて何が悪い？それとも頭を撫でてほしいか？遠慮はするな」

恥ずかしげに顔を赤らめる小娘を無視して、ヴァイスは小娘の頭を撫でる。

小娘の方も、言葉とは逆に気持ちよさそうに顔を綻ばせる。

「では、今からは私たちの時間だ」

一しきり撫でた後、ファレグは小娘を下がらせた。無様に転がっているリアス・グレモリー等を見ながら溜息を吐くと、彼らを結界で覆う。

「これで心置きなく戦える」

その言葉を合図に、ファレグ（目の前の戦闘狂）の四肢から炎が噴出する。そしてその顔には、あの時よりも更に獰猛な笑顔に形作られていた。

「私の部下が全力を尽くした。ならば主である私が全力を尽くさないわけにはいかないな。悪いがコカビエル、今の私は負ける気がせんよ。貴様はこの場で無様に負けろ」

「なら始めようかファレグ・フラウロス！あの時の決着をつけるために！」

そして俺は、
歓喜に打ち震える身体を、
昂り続ける気持ちを、
衝動のままに任せた。

強欲な龍のお供

強欲な龍（のお供）（オリ主第三弾）

ほう、今週は4等か。これで5000円も得をしたな。

私は銀行に掲載されている抽選結果と、自分のくじを見比べる。

さて、今回は3000円を貯蓄に回そうと、私は販売所に足を運ぶことにした。

販売所に着けば、私を見つけた店員が、「またですか」と苦笑いをする。

まあ、毎週くじの「当たり」を持ってくれば、流石にこんな対応になるのだろうか。

だが待つてほしい、これは私の責任ではないのでは？

私とて、当たってしまった物を、貰える物を受け取らないといった、

ある意味で拗れた人間ではないのだ。

だから、貰って当たり前の物を貰って何が悪いと言うのだ。私は悪くないぞ。

そういう思いを抱き、私は店員からお金を受け取ると、次いで銀行へと向かう。

なぜか店員にも同じ顔をされた。

ところで、いきなり自分のことを語ることを許してほしい。

唐突だが、私は友人から運がいいとよく言われる。

私自身はそんなことはないと思っただが、友人に首を横に振られて否定された。

他の友人に訊いても、同じような反応をされた時は、本当に驚いた。

曰く、私は運がいいらしい。

そう言われ、本当にそうなのか？と思いに耽ったことがあった。

確かに私は、友人たちの言うように運がいいのかもしれない。

ただし、クジといった類いのもの限定だが。

普段、私は宝くじなどの類いを買うことはない。私自身、当たることはないと思っ
ているからだ。

それこそ、この日本において何億人もいる人々が何十枚も買っていくのだ。

当たる可能性は、100キロの米俵の中の米一粒の確立と言われれば、想像出来るだ
ろうか？

他には、交通事故で450回死ぬ確率といえれば分かってくれるのだろうか？

いや、私は不死身でもなんでもないので、1回で死ぬのだね。

ようは、それほどまでに当たる可能性が低いと言いたいだけだ。

だが何を思ったのか、ふと買うことがある。

まるで誘蛾灯に集う虫のように、樹液に集まる昆虫のように、フラフラと宝くじ売り場の方へと向かい、気付けば買っているのだ。

その時は何故か、当たる。

一等という莫大な金額ではないにしろ、クジを買った金額を優に超える額が返ってくる。

初めて当たった時は、あまりのことに目を点にし、

私は幸運だー！と思ったのか、それでまた宝くじを買ったこともあった。

結果は全て、ただの紙切れになった。そのため、私は宝くじを買うことを止めた。

もちろん、今はムダ金を使う気はないので、必要な経費を引いた後は貯金に回している。

それを差っ引いても、十分なお金を貯金している。

付け加えるならば、クジに当たると言ったが、宝クジに限った話でもない。

箱に手を入れて中身を取り出すようなクジ、

お祭りに出店している、紐を引っ張るようなクジ、

商店街などで行われる、取っ手を回して中の玉を取り出すようなクジ、

その他諸々のクジに関しても、ふと立ち寄った時に限って、当たる。

それも私が欲しいと思った物が。

私からすれば、単に運がいいとしか説明できなかつたのだが、周りからは羨ましがられていた。

一方で、とある方面からはクジ荒らしとして恐れられている。

私が現れると、まるで怪物にでも、台風にでもあつたかのように顔を青ざめる店員の姿は、

色んな意味で風物詩となつた。

店員たちよ、私に向かつて祈るんじゃない、と言いたくなるのを堪える私に身にもなつてほしい。

私が幼かつた頃は、そんなことはなかつた。

ただ、アイスのアタリ棒が出て来たり、お金チヨコでそこその小銭を当てていた程度だ。

だがここ最近はおかしいほどに、何かしら当たる。

クジを引けば欲しいものが当たり、偶然にも落ちている財布を届けてお礼を貰つたり、

気紛れに送つた懸賞が当たつたりと、何かしら物やら何かが私にやってくる。

友人たちはそれすらも、いいなーと羨ましがっている。

私としては、寧ろ恐ろしき思えてきているのだがな。

だが友人たちよ、喜べ。

私はついに、こうなった理由を見つけることが出来たぞ。

『ほう、ようやく我を認識できたか、宿主（我の所有物）よ』

どうやら私の中に、大きなドラゴンがいたらしい。

それも真つ黒なドラゴンが。

そりやもう、真つ黒過ぎて、まさに炭の塊みたいなドラゴンが、私の目の前にいた。取りあえず、自分の頬つぺたを指で抓ってみる。

うむ、痛い。

そして目の前のドラゴンを見る。

もう一度頬つぺたをつねり、痛みを感じつつも目の前のドラゴンを見る。

やはりドラゴンはいる。

ということは、これは現実『愚か者、これは貴様の夢の中だ』

では炭ドラゴンよ、これは私の夢の中として、なぜ炭ドラゴンがいるのだ？

『もしや炭ドラゴンとは我のことか？』

私は首を縦に振る。

『無知蒙昧もここまで来ると笑いも出ぬ。いや、これは人間という種の病かもしれぬな。

良く聞かがいい、我の宿主よ、我の名はファフニール。

北欧神話に描かれし、財を守護するドラゴン、それが我だ』

ほほう、炭ドラゴンの名前はファフニールとな？

ということは、君はファアーちゃんと呼べいいのだろうか？

『・・・ファアーちゃん？』

若干戸惑い気味のファアーちゃんに、私は肯定の意味で頷く。

ファニールと呼ぶのはメンドイし、可愛げがない。

そもそも、ファアーヴニルにファープニルにファーフニルにファフナーと、

微妙に違うだけで殆ど一緒ではなからうか？

ゆえに、共通であるファアーの名前だけを使って何らおかしくはない！

という事で、愛称のファアーちゃんの名を進呈しよう！

有難く受け取るがいい！

『・・・・・・・・』

私の素晴らしい命名に、ファアーちゃんは感動のあまり黙ったままだ。

やはり私のネーミングセンスは素晴らしいに尽きる！

友達の猫にケット・スフィンクスと、別の友人の犬にはケルビスと名付けた私の凄さ

！

『ククク・・・』

ファーちゃんが震えだす。

『クククククク……』

そりやもう、トコロテンや豆腐やプリンのように震えだす。

『我を馬鹿にするの大概だぞ、人間！』

ゴバアとファーちゃんの口から洩れる紫の煙を、私は浴びる。

くさ!?!なにこれくつき!くつきいぞこの息!?

『我の毒の息を浴び、苦しむがいい!本来ならば死ぬがここは貴様の夢の中。

死にはせぬが、死ぬほどの苦しみをうけ……あいたあ!?!』

口臭は犯罪なんだぞ!人に臭い息を吹きかけるなど、マナー違反デス!

ということ、その口を綺麗にしてやる!ついでに身体もだ!覚悟するがいい!

私は口の臭いファーちゃんを睨みつけると、デカイ歯ブラシと歯磨き粉を取りだす。

ここが私の夢の中ならば、私の想い通りになるのデス!

『貴様、それだけで気付いたというのか!?!』

こちらら成績は上位に入ります。馬鹿を馬鹿にした報い、受けるのデス!

『ヤ、ヤメロオー!』

私は嫌がるファーちゃんを押しさえつけ、丁寧に歯磨きをするのでした。

ついでに身体も洗ってあげた私は、なんて気が利く良い子なのだろうか。

『く、殺せー！』

ピカピカのパワーちゃんの照れ隠しに、私は微笑ましく感じるのだった。

しばらくして、パワーちゃんが何とか威厳を戻した後、私は再びパワーちゃんと対峙する。

神話世界の存在のドラゴンであるパワーちゃんが、どうして私の中にいるのか？

確か、シグルートだのジークフリードなのに、心臓をあぶり焼きにされたのでは？

『宿主よ、解つてふざけておるだろ？シグルズとジークフリードだ。』

貴様と話と疲れる……。まあよい、確かに我は死に、その財も何もかもを奪われた。

その後何千年とたった後、我は再び蘇ったのだ。

失った財の代わりに、再び財を集める為にな』

ふむふむと、私は首を頷く

『だが、二天龍という、戦いしか頭の無い龍がおつてな。』

そ奴らが別の勢力に喧嘩を売ったせいで、我らを含む龍も危険視された。

はつきり言つて迷惑以外の何ものでもない。そして結果、我も封印されたのだ』

一呼吸置き、パワーちゃんは笑う。

『だが、我とておとなしく封印される気はなかったのだな。』

私の持っていた道具で、魂を別の器に移動させたのだ。

だが咄嗟のことだったのだから、気付けば貴様に宿っていたというわけだ……って、

寝るでない！』

ファーちゃんの長そうな自分語りを、半ば夢うつつで聞いていた私は、

ファーちゃんの怒鳴り声で眠気を飛ばされた。

ようは、私の身体にファーちゃんが憑りついたという事なのだな？

『その通りだ。なんだ、ちゃんと聞いていたのではないか』

何故か私を感心するファーちゃん。

ところで、私に憑りついたことで何かしらの影響は何のだろうか？

よくあるマンガやアニメやゲームやらのサブカルチャーでは、

魔を払う力だの、超能力だのに目覚め、何かしらの事件に巻き込まれるというのがお

約束だ。

また、能力に支配されて人間辞めてました、

『私、こんなになっちゃった……』というのもお約束なのだが。

『安心するがいい、既に影響は出ておるぞ』

そうですか、既に影響は……って、おい、待ってくれ。既に影響が出ているだと？

少し訝しげになる私を、ファーちゃんはニタニタ笑い（のような表情）をする。

『気付いておるのだらう？ここ最近、宿主は金や何かをやってくることを』

『そう言われた私は、ここ最近のおかしなほどに、クジやら何かに当たる現状を思い出す。』

『我はファープニル。強欲にして蒐集家のドラゴンだ。』

『私の影響によつて、宿主に物や何かが集まってくるのだ』

『ほほう？つまり、私の取り巻く元凶はファーチヤんだつたと？』

『そう睨むな宿主よ。別に悪いことではなからう？むしろ、得をしているではないか。』

『欲しいものが手に入るといふ欲望を満たせているであらう？』

『ぐうの音もでない。』

確かに、たまたま当たった温泉旅行で、両親への親孝行が出来たこともあった。

出発する際の、喜んでいた両親の姿を思えば、私は得をしている。

『ククク、ぐうの音も出ぬであらう？』

宿主と共にいるという事は、宿主のことを見ていると同義。

故に、宿主のことは全て解っておるぞ？』

それつて実質、プライバシーの侵害ではなからうか？いや、侵害ではないか！

エッチ！スケベ！ロリコン！この盗撮ドラゴン！

『ならば我と別れるか？言っておくが、引き離せばいいという問題ではないぞ？』

それこそ、我と宿主は魂の段階で融合しておる。下手に分ければ、どうあつても死ぬぞ』

なんという理不尽！私はこの変態ドラゴンに一生監視されて生きていくのか！

あ、でもそれもそれでありかも・・・！

『妙にくねるな気持ち悪い！』

宿主よ、その面白ければ何でも良いという感情、欲深き我からしても一線を越えておるぞ』

ああん！伝説のドラゴンからお墨付きとは！感無量なり！

『だからやめろと言っているであらう！終いには我が泣くぞー！』

ふむ、ドラゴンという割にはメンタルが低い。人生、楽しまなければ損なのだ。

自由と責任は表裏一体。ならば私は、自分に出来る範囲で全力で楽しむだけである。

『やはり宿主の考えは、我としても未だ理解出来ん。考えても無駄であらうな。まあよい。』

最初に言ったことだが、我のことを認識できたという事は、

宿主と我は、それほどまでに馴染んでいるということ。

今は金や物、人材が集まるだけだが、このままいけばそれ以上の力も目覚めるであらう』

ということとは、動物の声も理解できるのだろうか？

かのジークフリードは、血を舐めただけで動物の言葉を理解出来、心臓を食べて英知を得たのだ。

そういった力に目覚めるのかもしれない。

『察しがよいな、宿主よ。たが知っているであろう？我や憎きジークフリードの末路を』
フアーちゃんの言葉に、私は首肯する。双方ともに、腕輪の持つ破滅の呪いによつて滅んだ。

つまり、このままいけば、私にもたらされるのはデッドオアデスである。

『そう言うことだ。我とて二度も死ぬ気はない。

ということでは宿主よ、少なくとも力の制御は学んでもらうぞ？』

バッチコーイ！特訓とか私は好物です！

『やはり、宿主のことは解らぬ．．．』

こうして私は目を覚ました。

身体を起こせば、私は制服のままの姿でベッドの上にいた。

ふむ、疲れて眠ってしまったのだろう。ということは、あれの私の妄想なのか？

そう思った私だが、私の腕に巻きついている、黄金の腕輪がそれを否定する。

そして頭に響く声。やはり夢ではなかった。

まあ、こうなったことは宿命と諦めつつ、私は今後のことを考える。

取りあえずファーちゃんの言うように、まずは力の制御が課題だろう。

先ほどの会話の際、ファーちゃんはこの世界の裏について教えてくれた。

この世界には、人間やドラゴンの他に、実は天使や堕天使や悪魔、終いには神様もいるとか。

八百万の神を持つ日本ってどうなんだろう？とか、世界の宗教は拙くないか？と思つたが、

それはそれ、これはこれと考えるのは止めた。

どうやら悪魔や堕天使や天使の皆様は、自分たちが危険視する存在を片っ端から滅しているとか。

つまり、ファーちゃんを宿す私は、どう考えても超危険存在である。おのれ三勢力！という事で、早くしないと私が死んでしまう未来が来るので、早急に対処しよう。

ふと時計を見れば、時計の針は6時過ぎ。取りあえず夕食の準備をするか。

私は自室を出て階段を降り、台所に行こうとすると、丁度よく玄関の鐘が鳴る。

はて？この時間に誰だろう？そう思い、私は玄関の戸を開けた。

「失礼だが、英雄派に入らないか？」

宗教の勧誘だったので、私は直ぐに扉を閉めた。

強欲な龍（のお供） 2

私は今、猛烈に自分の運について疑っている。

私の中に宿るドラゴン、ファーちゃん曰く、今の私にはお金や物や人と言った、言わゆる『財』と呼ばれるものが集まりやすくなっている。

それこそ、くじを引けば何かしら当たるし、行動を起こせば何かと好転していく。

だが、世の中は上手に出来ているらしく、幸運が訪れれば、それを補うように不運も訪れる。

一時期だが、顔も見ただこともない、親戚だのと自称する人たちがやってきたことがある。

彼らは頻りに、私は両親のどちらかの家族でーとか、家族を助けるためにーと、

結局はお金を求めてきたのだ。

生憎だが、私の家族関係はそれなりに連絡をしているので、直ぐに彼らが不審者だと判った。

私としては無視するのが一番なのだが、私のせいで友人や周囲の近隣の方々、それこそ家族を巻き込んでくる可能性があった。

昔、たまたま見ていたドラマで、宝くじを当てた主人公が、周囲の変貌に人間不信になっていく話を思い出した。

その中で、お金を欲した赤の他人に、主人公が襲われるというシーンがあったのだ。はつきり言つて、今の私はそれに近いと言つていい。

という事で、顔も知らない、それこそ家族と自称する方々にはお帰り願つた。

もちろん、暴力という野蛮な物を用いたわけではないので安心してほしい。

それ以降、私はお金を未来への資産として貯蓄をしてはいるが、

一方で海外支援だの、あしなが募金だのと、何かしら援助するようにした。

やはり、何かしら貯めると、悪いものがやってくるのだろう。

ファーちゃんからすれば、

『何故、赤の他人に施しをせねばならん。それは宿主の益にならぬではないか』と、大層呆れる行為だったようだ。

次に、ファーちゃんという強大なドラゴンの力を宿したことで、

人外の方々から危険分子扱いを受けかねないという事だ。

私としては、いささか勘違いも甚だしいし、それこそ言いがかりだ。

だが、ファーちゃん曰く、

『二天龍という、戦いが三度の飯よりも大好きな脳筋共のせいで、

彼奴らと同類の我らも危険視されてな。

奴等からすれば、我らドラゴンは二天龍と同様、世界を滅ぼしかねない存在なのだ』とのこと。

おのれ二天龍！お前たちのせいで、私の生活は平和から遠ざかったではないか！

おのれ人外たちよ！誰も彼もが戦いが好きだと思うな！

だが残念なことに、いくら私が叫んだところで、ファーちゃんを宿す私は、彼らからすれば危険な存在でしかないらしい。

まあ、世界を破壊できるミサイルの発射ボタンを持った存在が、

『私は何もしたくないんだ！ただ平和に生きていたいだけなんだ！』といくら叫んだところで、

周りからすれば誰が信用できるか、なのだろう。

下手をすれば、『やられる前にやれ』という方向になりかねないし、

正義感を持った頭の螺子が取れた存在が、自身の懲罰覚悟で『正義執行！』をしかねない。

というわけで、私は今、ファーちゃんと共に力の制御を行っている。

それもこれも、私が目立たないようにするためだ。おのれ人外！

私の目立ちたい精神を抑え込むなど、卑劣なことを！

そのおかげか、私の幸運も最近では落ち着いてきており、そこその幸運になった。周りの友人からは、大層不思議がられたが、一時的だったのだよ、と誤魔化しておいた。

一応これらは、既に解決済み、または解決しつつある問題だ。だがその一方で、解決しにくい問題も出てきている。

「という事で、君の力は俺たち英雄派にとって大いに役立てると思うんだ。

俺たちのようなちっちゃい人間が、人外たちに力を示すことが出来る。

そのためにも、英雄派にないってくれないか」

今、私の目の前では、中国が舞台の映画やドラマで着られている漢服、

いわゆる昔の中国衣装をまとった男が、私に熱弁を振るっている。

ちなみに私たちがいるのは家ではなく、近くの公園だ。

宗教の勧誘だと思い、門前払いしたのだが、それからなにかと接触をしてくるのだ。

その比は、前述した自称家族や親族とは比べ物にならないほどに。

我慢比べは好きなので、徹底して対抗してやろうと思ったが、流石に周囲からも心配され出した。

なので末期の酒ではないが、警察に突き出す前にその思いを聞こうと至った。

彼の名は『曹操』と言うらしく、自分を『曹操』の魂を受け継いだ子孫だと言っている。

彼が言うには、俺たち人間は、人外からすれば矮小な存在だ。

だが英雄と呼ばれた祖先は、各々の力を振るい、国を、世界を動かしてきた。

俺たち人間は決して弱くはない。

ゆえに自分たちが異形に対し、

どれだけ偉業を為せるか、どれほどの力を示せるか、挑戦したいとのこと。

それが、俺たち『英雄』の魂を受け継ぐ子孫たちの役目だ、とのこと。

熱弁を振るう彼は、まるで自分を『曹操』と思っているような振る舞いだった。

彼の話聞いていた私は、今日の夕飯はハンバーグにしよっかなーと考えていたが、

そして冒頭の言葉に戻る。

彼は自分がいかに素晴らしいことを言っているかと自信あるらしく、

彼の視線からは、はい or YES or JA（ヤー） or OUI（ウイ）という、

肯定の言葉を望んでいるようだ。

ということ、私は返答した。

それは当方において利益があるもののですか？と。

これには『曹操』も驚いたらしく、面食らった顔で、目を瞬いていた。

私は続ける。

人外たちに挑戦し人間の力を示すにしても、それで何か良いところがあるのか。

そのところを『正確』に、『詳細』に、それこそ『文面』や『書類』にして、私に示してくれないと、私も判断できない。

解つてはいないかもしれないが、これはいわば『契約』

それこそ口約束程度で済まして良いものではない。

ちゃんと契約しましたという『証拠』になる物が無いと、こちらは貴方を信用できない。
い。

なので、信用できない貴方と『正式な契約』をするのは、こちらからすれば愚かしい行為だ。

口約束で済ましてしまうと、下手すれば勝手に契約内容の改竄や無効、

『騙して悪いが』と詐欺まがいなことをされる危険が、こちらにはある。

なので、もしも英雄派に入つてほしいならば、ちゃんとした文面を持つて来てくださ
い。

私の捲し立てる言葉に、曹操は理解が追いついていないらしく、ただ黙っていた。

という事で、私は懐から一枚の紙を取りだす。

なので、これを使って契約しませんか？

私は曹操（自称）にそう告げると、にっこりと笑う。

取りあえず、これに契約内容を書き込んだうえで、後日私の所に持って来てください。もしも私が面白いと思ったら、その時に契約しましょう。

私は曹操（自称）にこれを渡すと、公園から去っていった。

『宿主よ、随分とえげつないことをしたな』

何がおかしいのか、ファーちゃんの声は愉快そうに笑っている。

いやいやファーちゃん、これは私の生活を守るためのものだ。

さつき言ったことを掻い摘めば、

『文面も書類もなしに、ただ夢だけを語るだけで、こつちには得が無い。』

それに、あなたのことは一切信用できないので、このことは無かったことに『だ。

それに彼のことだ、きっと渡した紙のことを理解し、もう私の所には来ないだろう。

因みに彼に渡したものが、ファーちゃんの宝物庫にある物の一つで、

絶対に契約を遵守させる呪いが込められた紙らしい。

『契約内容を破った場合、相手の体中の穴という穴から血が噴き出す』という、

ファーちゃん曰く、『平等という名を騙った一方的な契約』とのこと。

ちなみに紙の所有者は私（ファーちゃん）なので、相手とは曹操（自称）のことにな

る。

ぶっちゃけ、こんな危険な物を渡されれば、誰だって「あ、こいつやべえ」と思うだろう。

ということ、彼はもう来ることもないだろうし、これで私もストーカーから解放される。

『宿主よ、あれは我からしても思うところがある。そう簡単に事が運ぶかの？』

フアーちゃんは、何か詰まった物の言い方をするが、私は別に気にしない。

さて、フアーちゃん。

私の破滅の未来を回避するためにも、頑張っていこうではないか！

『声を上げるなやかましい！』

叫ぶフアーちゃんもなんのその、私は未来に向かって、全力で楽しむのであった。

「取りあえず、こちらの要望は渡してくれた紙に纏めた。

それに俺だけでは何かと信用ならんと思つて、必要な者達の署名もさせたぞ」

後日、文面にしたものを持つてきた彼に対し、私は涙を流した。

『やはり愚か者じゃな』

フアーちゃんの呆れた言葉は、どっちに向かったのことだろうか。

強欲な龍（のお供） 3

「さあ、着いて来てくれ！俺たち『英雄』が集う秘密基地だ」

目の前で意気揚々に、

声すらも嬉しきで高くなっている男の後ろを、私は半ば死んだような目で着いて行く。

頭の中では、どうしてこうなったのだ？という思考が駆け巡り、現実逃避を繰り返していた。

『曹操』を自称する変人（目の前の男）に付きまとわれ、

彼を遠ざける為に練った策が失敗した。

まさか『契約するなよ？絶対にするなよ!?!したら死ぬぞ!?!』と丸判りな物に、

疑問も抱かず、素直に署名するとは思ってもよらなかった。

私の未来予想図では、『こいつやばい、関わらない方がいい』となり、

晴れて私はストーカーから解放されるというハッピーエンドだったはずだ。

だが現実是非情である。

策に溺れるとはこの事か、そのせいで自分は逃げ場を失いつつある。

『だから言ったであろうに』

まるでこの展開を知っていたかのように語るファーちゃん。

いや、まさかこんなことになるとは思ってもよらなかったのですよ？

『宿主（我が所有物）よ、彼奴は頭は良いが、頭が切れておらん。

ある意味、彼奴は宿主の天敵であろうよ』

何やら苦笑が入り混じっているファーちゃんのお言葉。

いや、駄目でしょ。ここで諦めたら私のハッピーエブリデイが崩壊デス。

それにこう言っちゃあなんだけど、ファーちゃんのせいでもあるんじゃないだろうか？

『なんだと？』

だってファーちゃん、不幸というか破滅をもたらす呪いがあるではないか。

これもその呪いのせいなのでは？

『そう言われると、うぬ．．．反論できん』

そうです、これもファーちゃんの呪いのせいなのです。

そう言う訳で、私と一緒に悩んで、苦しんでもらおうではないか。

というか、私とファーちゃんは魂レベルで融合しているのだから、一蓮托生のはず。

『我は宿主を間違えたではないだろうか．．．』

いや、これは咄嗟だったのだから仕方がない訳だが、むむむ・・・」
考え事を始めてしまったファーちゃんを余所に、私は曹操に連れられて大きな場所へと出た。

と言いますか、私の家だったのだが、突然屋内なのに霧が出てきて、
気付いたら通路を歩いていたのですよ。そして気付けば大広間へと出たわけで。

おかしいな、私の家はこんなに広くなかったはずだ。

まあ、改築しようなら改築できるんだけどさ。

「やあ、待っていたよ」

首を傾げていた私に、誰かが声をかけてきた。

「私の名前はゲオルク、ゲオルク・ファウストの子孫さ」

声の方を見れば、漢服を来た自称『曹操』と同じように、変なローブを着た青年が御登場。

しかも自分を『ゲオルク・ファウストの子孫』と言うではないか。

ゲーテ著の方だと、恋人のグレートヒエンは亡くなるし、

ファウスト本人は天国に行った気がするんだけど。

まあ、子孫なんだろうね。

そんなことを考えている私に、ゲオルクは歩み寄り、私の手を握った。

「うん、君はまともそうだから本当に安心したよ。うん、『本当』に安心したよ」
彼の握る力が強くなる。

「取りあえず、所構わず吐血したり、教会を焼き討ちに行こうとしたり、

子供は大切なのは解るけどこっちの了承もなしに保護してきたり、

英雄だからって戦わなくてもいい怪物に喧嘩を売ろうとしたりと、

無茶なことはしないでくれよ？『本当』に、『本当』にお願いだからね？」

最後辺りの言葉からは、私は『ああ、彼は苦勞人なんだな』という印象を受けた。

よく見れば、彼の眼の下には隈が出来ている。

取りあえず彼には、実家に積んである、栄養ドリンク12本入りを上げようと思う。

懸賞で当たったものの、どうしようかと悩んでいたところだ。

「おお、ゲオルク。君はいつもそう疲れた様子だな。もう少し身体を労わるべきだぞ」

ゲオルクの姿に、曹操が勞いの言葉をかけた。ああ、いつものことなんだ。

「ああ、本当はそうしたいんだけどね。残念だけど、それも言ってもらえないんだ。

どいつもこいつも私の胃を痛めてくるからね」

「それは酷い話だ。後で俺からも注意をしておこう」

変な話だが、私は彼とは良い関係を築けるんじゃないかな？と思えた。

ゲオルクは「自室に帰って仮眠をとるよ」と言い残すと、ふらつきながらも広間を後

にした。

願わくば、彼に安らぎのあらんことを。

「ああ……君が、新しい仲間、なのかな……？」

そんなことを思っていると、またもや声をかけられる。

ただ、なにやらこう、か細いというか今にも倒れそうな声だった。

同じように振り返れば、口から血を流しながら立っている青年がいた。

『宿主よ、気をつけろ。こいつは何か知らんが、我の生存本能が警告しておる』

ファーちゃんの声が、私の頭に響く。

「おお、ジークよ。あいも変わらず大変だな。その、なんだ、未だにグラムを御せないのか？」

同じように、曹操は気遣いの言葉を投げる。

いや、これはどう見ても駄目だろ。輸血しなきゃヤバいのではないだろうか？

というか、グラムとジークという名前……!?

私は自分の考えから、あ、これはファーちゃんの天敵だわ、という結論に至る。

そう、その二つの名前から導き出されるのは……!

「うん、僕はジークフリート。多分、そうなんだと……思う……ゴフツ」

そう、ファーちゃんことファープニルを殺し、その財を奪い、

そして黄金の呪いで破滅した英雄ジークフリートと、その愛剣グラム。

ファーちゃんにとって、まさに会いたくない存在だった。

『ぐわあああつあああああああああ!』

ああ!? ファーちゃんが声を上げて倒れた!

心の中で、どうにかしなきゃと思考していると、ジークフリートが言葉が続ける。

「ところでさ、君、もしかして龍の加護を持っていないかい? それか、龍の力を宿しているとか?」

うん、実は僕の愛剣が、君を斬りたくて仕方がない、って訴えてくるんだ: :グフツ。

そう、魔剣グラムのことなんだけど、他にも色々とあるんだけどね。

取りあえず、必死に抑え込んではいるんだけど、僕の傍にいる時は気をつけてね?

僕は龍の籠手を持つてるんだけど、

そのせいで『愛しているから斬らせて!』って、訴えてくるんだ: :ハハハハハ: :」

そう話す彼の声は、まるで何もかもを諦めてしまったような印象を受けた。

それに、彼の目は半ば光がない。

笑っている彼は、そのまま地面に倒れ、駆け付けた医療班に連れられて行った。

曹操も彼を心配してか、私に謝罪をして、そのまま着いて行った。

うん、重傷だな。

『ヤンデレな魔剣に愛されて、夜も眠れない』需要が一切ない。

「貴女、どこの教えに従っていますか？」

取りあえず宗教はどこですか？どこの神を祀っていますか？」

自分としても阿呆なことを考えていると、今度は女性らしき人から声をかけられた。

その女性の、いや、少女の出で立ちは、言うならば修道女。

教会の修道女が来ている僧衣（カソック）を纏っている。

頭はヴェールを被っておらず、金色の長い髪を一つに束ね、彼女の腰辺りにまで伸びていた。

質問の内容に困っている私を察したのか、少女は顔を赤らめ、あたふたしながら話す。

「あ、ごめんなさい、自己紹介がまだでしたね。

私の名前は、ジャンヌ、ジャンヌ・ダルクです。

あ、私の本名は違うのですが、どうも私にはジャンヌ・ダルクの魂が宿っているらしくて、

そう名乗らせて貰っています」

ほう、今度はフランスの英雄ジャンヌ・ダルクですか。

ここまで来ると、もはや何も言えなくなりつつある。

「ところで、先ほどの質問なんですが、答えていただけないでしょうか？」

どこの神を祀っていますか？どこの教えに従っていますか？

あ、仏教？なのですね、ああ良かったです、貴女が教会に所属していなくて」

私の答えに、自称ジャンヌ・ダルクは安堵の溜息を吐く。

「私、ジャンヌ・ダルクの魂を受け継いでいるじゃないですか

まあ、私も彼女も教え自体には寛容なんです、どうも教会を見ると焼きたくなるんです。

それはもう、真つ赤な炎が上がるほどに、キャンプファイヤーのように。

私に中に宿る彼女は、あの結末を納得はしてある一方で、

それを全て容認できるかという、どうも難しかったようです。

おかげで、教会を見ると、一目散に発火してやろうと、

気付けば燃やしちやっっているんですよ」

そっかー、さつき教会焼き討ち云々言ってたのって、この人だったのかー。

まあ、そうなっても仕方がないような経歴だけどき。

なんというか、負の面まで受け継いでないかな、この聖女様は。

「これも私のうっかりが原因なんでしょうね。

なので、もしも教会に属していたら、大変迷惑をかけると思ひまして。

ああ、主よ、私はあなたに感謝します」

多分、うっかりとかそう言う問題じゃないと思う。

というか、教会焼き討ちは止めないのね？ 迷惑をかける前提なのね？

今更神に祈りを捧げているが、ちよつと歪な進行してらっしゃいますよ？

うん、これ駄目な人だ。私はそう結論した。

私が聖女様の言動に目が濁りかかっていると、背の高い男が歩んできた。

その姿は、まるで壁のようで、がっしりとした肉体は、

鍛え上げられていることを如実に示している。

「女子供が戦いの場に出てくるな。戦いは男の役目だ。

お前たちはただ、その生を全うすることだけを考えればいい」

おつとお、開口でこの言葉ですかあ。

うん、戦場に出てたくはないと思っているけど、こう直球で言われるとキツイ。

「もう、ヘラクレス！ そんなことを言うものではありません！」

声を荒げるジャンヌ・ダルクを余所に、ヘラクレスと呼ばれた男は無愛想に答える。

「事実であろう。戦いはそれに見合う者が行えばいい。

か弱い者を戦場で戦わせるなど、それは俺の信念に反するだけだ」

そう言うのと、ヘラクレスはそのまま広間を出て行く。

「すみません、彼、戦いに関してはどう、色々どこだわってしまして。

いえ、決して酷い人ではないんです。ただ、言葉足らずと言いますか・・・」

必死にフォローをしているジャンヌ・ダルクの姿は、凄く違和感があるんですが。

私は彼女に気にしていないことを告げると、彼女はただただ「すみません」と謝るだけだった。

「ヘラクレスのお兄ちゃん！今日は何して遊ぶの？」

ヘラクレスが出て行った先から、何やら子供の声聞こえる。

「彼、子供が好きなんです。ヘラクレスとしても何やら思うところがあるようですね・・・」

確かヘラクレスは、ゼウスの鬼嫁ヘラに一方的に憎悪され、

彼女によって、その手で子供を殺してしまったはずだ。

そう思うと、彼の魂を受け継いでいるらしい、彼の言動も、なにやら思うところがある。

「そうだな、俺が高い高いをしてやろう」

聞こえてきたヘラクレスの声は、私に向けて話した時よりも明るかった。

「そうか、これが彼の本当の声なのか。そう思っていると、子供の言葉が続く。」

「わーい！ヘラクレスのお兄ちゃん大好き！」

「そうか、ならば俺の子供を産んでくれないか？」

「うん！」

その言葉を聞いた瞬間、私はジャンヌと共に、ヘラクレスのいるだろう部屋へと走った。

ああ、こいつもヤバい奴だったと、私は先ほどの思いをぶん投げた。

そういえば、ヘラクレスはあのギリシア神話の主神にして、

下半身に頭が付いているんじゃないかと言うほどに、女性と寝るゼウスだった。

多分、ヘラクレスに悪意はないんだろうが、言動が既に酷かった。

いや、他意が無い分、余計に酷いとも言える。

『こやつらは本当に英雄なのか？』

いつの間にか復活していたファーちゃんの言葉に、私は全力で頷いていた。

強欲な龍（のお供） 4

「これあげる」

目の前の少年から渡されたそれに、私は言葉を失った。

場面が一気に飛んだと思うので、ここで一つ回想をさせて貰おう。

教会絶対燃やすホーリーガールなジャンヌ・ダルク共に、

子供の求婚（子供特有の『私、大きくなったらパパのお嫁さんになる！』）に、

「なら俺の子を産んでくれるか？」とマジレスしやがったヘラクレスの部屋に突撃した所まで遡る。

扉を壊さないように、器用に両扉を押ししてお開けつつ、その勢いを殺さずに中へと突入。

そのままの勢いで、突然のことに呆気にとられたヘラクレスの下へと向かう。

私とジャンヌが顔を合わせて頷き合い、私は幼女の方を、ジャンヌがヘラクレスへと走る。

そして私が不思議な顔をしている幼女を抱きかかえて危険人物から引き離すのと同

時に、

ジャンヌがその危険人物に飛び蹴りを食らわたのだった。

その後、器用にくの字に曲がったヘラクレスが尻から壁に突っ込み、壁に嵌ったわけだ。

なんとも奇妙なオブジェの完成である。

なお残念なのは、鹿や鰐の剥製の頭ではなく、

むさくるしい筋肉男なので、その光景は正直酷いです。とても子供にお見せできません。

なので、私は幼女の目を右の掌で覆い、その光景をシャットアウト。

「お姉ちゃん、どうして私の目を覆うの？」

と言ってくる幼女の言葉を受けつつも、一緒にゆっくりと後ろに下がる。

こっから先はアール18指定だ！

「おい、ジャンヌ！一体何のつもりだ！」

奇妙なオブジェクトになったヘラクレスは、壁に嵌りつつも割と平気だったようだ。

あ、何とか無理やり出てきたけど、そのせいで壁に罅が入ってるよ。

お前の尻は鋼鉄なのか、鉄の尻か、鉄尻（てつけつ）なのか？

鉄尻のヘラクレスと呼ぶべきだろうか？

「どうもこうも有りません！一体何を言っていたのですか！あんな、破廉恥なことを！」
顔を赤らめつつも叱責するジャンヌに対し、ヘラクレスは首を傾げる。

「一体なにが破廉恥だと言うのだ？女の願いを聴くのは男の務めだろ。」

それとも女からの告白なのだから、それを無下にするなど俺には出来ん」

その言葉に私が感じたのはただ一つ、『世界観が違う』

「相手の歳を考えると言っているのです！何を子供の一時の思いに本気になっているのですか！」

「愛に年齢など関係ないだろう！それに、子供の思いを受け入れるのも男の役目だ！」

「私の教えでは厳罰ものです！なんて破廉恥で！はしたないのですか！」

「はしたないだど!?貴様はあの子の思いをその言葉に貶める気か!?!」

やいのやいのと言いつつお二人を、私は野次馬の立場で盛り上げるべきなのか、

それとも健全な一般人として諫めるべきなのか、距離を取りつつ熟考する。

『いや、止めるべきではないのか?』

一心同体ゆえに、私の考えを理解しているファーちゃんのお言葉。

おかしい、こういう諍いは龍の好物ではないのか？

金！女！戦い！が竜にとっての酒の肴にして娯楽なのではないのか？

某龍探求のボスはお姫様を攫ったし、ラスボスは世界を手にしたドラゴンで

はないか。

お姫様の方は勇者に『昨日はお楽しみでしたね』されたらしいがな。

『宿主よ、お主は龍について一から学ぶべきだ。というか、我が一から教える。』

このままでは龍の尊厳がいらぬ方向へと螺子曲がりそうだからな』

あれれー？ファーチちゃんが真剣に言っているぞ。

まあ、勉強ならばバツチこいですけどね！

そんな漫才をしていると、お二人の様子が変わった。

「いい機会です。貴方とは一度色々とおHANA S H Iがしたかったです。」

貴方の言動に関しては、私も思うところがありましたからね」

「ほう、面白い。一度お前とは本気でやりあってみたかったんだ」

何やら双方ともに口論があらぬ方向へと過熱してきたようだ。

挙句の果てに、「表に出ろ（出なさい）」と言いだしたぞ。

するとジャンヌは、私の方に顔を向けてきた。なおその顔は、出会った際のような笑

顔だ。

「すみません、急な予定が出来てしまったようです。」

申し訳ないのですが、今から席を外させて貰います。

ええ、この男に説法をしなければなりませんので」

「ぶん、女の願いを聞き届けることも出来ないとはな。良いだろう、俺の覚悟を見せてやる」

そう言いながら、二人は部屋を出て行った。

何故か、そう方の手には話し合いには不向きな、寧ろ真逆な獲物が握られていた気がした。

「お姉ちゃん、ジャンヌ様とヘラクレスはどうしちゃったの？」

私に抱きかかえられていた幼女が、首を傾げながらも私に尋ねてきた。

取りあえず、二人とも絶対に負けられない戦いに行くんだよ、と諭すことにした。

二人が出ていくと、部屋に残されたのは幼女を含む子供たちだけ。

取りあえず、子供たちを安全だろう場所へと移動させねばならないな。

しかし、ここで問題が発生。私はこの場所について全く知らないのだ。

なにぶん、半ば拉致の如く来てしまったため、私はこの場所については素人。

下手に動けば、逆に私が迷子になることは確実だ。

うむうむと悩んでいると、先ほどゲオルクと名乗った少年が目の前を通った。

これは救いの手だと直感した私は、有無を言わず彼を拘束すると、

早口で捲し立てる様に事情を説明して子供たちを預け、その場を華麗に去った。

その後、何やら叫び声が聞こえたが、多分気のせいだっただろう。

「ゲオルク様が倒れたぞー！誰か担架をー！」

と聞こえてきたが、多分気のせいだろう。

『鬼め』

失礼な、私は人間です。

ファーちゃんの言葉に異議を唱えながら一人で歩き回っていると、不意に視線を感じた。

きよろきよろと周りを見回すが誰もいない。

あ、また視線を感じた。だがその視線は不思議なものだった。

それは舐める様な視線でもなければ、痛々しい視線でもない。

しいて言うなら、私を観察するかのような視線だ。

もう一度周りを見るが、やはり誰もいない。

ならばここはひとつ、私の隠された第六感を使うべきだろう。

『お主にそんなものはないだろ』

何を言うかファーちゃんよ。ファーちゃんの力を身に着けた私だ。

ならば、スーパーウルトラハイパーミラクルロマンチックな力が目覚めているかもしれない。

流石に人を武器にするとかは無理だろうがな。

という事で、私は目を閉じて心を落ち着かせる。

あ、そう言えば部屋の電気って切ったっけ？あれ？卵とか冷蔵庫に残ってたかな。

そんなことを思いながらも、私は精神を集中し、視線を感じた方向へと指を向ける。

そこにいるのは解っている！素直に出てくれば何もしないぞ！

素直に出てこない、一生オレンジジュースが飲めなくなる呪いをかける！

『そんな呪いは無い』

ファーちゃんのマジレスを聞きつつも、私は相手の出方を窺う。

すると、角から少年が顔を出した。あ、目があった。

目と目が合う瞬間ヤバいと思ったのか、少年はふいつと隠れた。

しばらくすると、同じ場所から顔を覗かせ、じつと私を観てくる。

そして始まった私と少年の見つめ合い。じつと動かず、ただ互いが互いを見つめてる。

そんな異様な光景。

そして降参したのか、それとも無害と思ったのか、少年が私に駆け寄ってくる。

『気をつけよ、どうやらただ者ではないようだぞ？』

ファーちゃんの言葉に耳を傾けながら、私は駆けよってくる少年に目を向ける。

うむ、何も感じない。私からすれば、ただの少年でしかないぞ。

なんというか、どこからどう見ても少年だ。十中八九、少年と言える少年だ。それこそ私のような、普通の一般人だ。

『お主は論外じゃ』

そんなことを思っていると、少年が私の目の前に来た。

何やら息が切れているのか、少し顔を赤らめている。

ふむ、息切れか、取りあえず落ち着かせようようと、ヒツヒツフーの呼吸を教えた。

そして今に至るのである。

『宿主よ、一体どうした?』

私の様子に、ファーちゃんも声をかけてくる。

だが、今の私にはファーちゃんの言葉を返せるほどの余裕がない。

何故ならば、何故ならば!

ナニコレめつちやかかわいいじゃないですかヤダー!!

私は渡された物を見て、テンションが爆アゲ状態。

可愛い可愛い!を連呼して兎のように飛び跳ねだす。

「気に入ってくれてありがとう。そんなに喜ぶなんて思わなかった」

何故か少年が若干ひいているが、そんなことは関係ないのだ。

これは可愛いものだ。これは良いものだ。

この頬ずりしたくなるような形、思わず見とれてしまいそうなたつぷらな瞳、

そしてクツションのように柔らかく、毛布のようなモフモフ感。

なんて可愛いのだろうか、このヴォーパールちゃん！

ああ、この兎なのに兎じゃない感じ！

丸い兎のフォルムなんだけど、何故か不釣り合いに角ばった剣を携えている。

そのつづらな瞳とは真逆の、仰々しい鈍色の鋼鉄の帽子。

そしてモフモフな白い毛に、所々見える赤。

ゲーム『沈黙の丘陵』のマスコットのヴォーパールちゃん。

正式にはヴォーパール・トリコーン・ラビットちゃんである。

可愛いさと無骨さを兼ね備えたこのキャラクターは、

『沈黙』シリーズになくてはならないほどの人気者な存在になっている。

2 作目からは、隠しコマンドでヴォーパールちゃん装備が出てくるといふほどだ。

しかし、そもそも商品化されていないはずだが……。

「僕が、作った」

私の疑問を察したのか、少年が答える。

確かに私はヴォーパルちゃんが好きだが、なぜ解つたのだろうか？

「僕のお友達が教えてくれた」

何やら申し訳なさそうな少年。

なるほど、つまり人の気持ち解る存在がいるという事だな。

そう思つた私は、すぐさま頭の中で色々と考えてみた。

取りあえず、色々とな。

そして数秒後、少年は顔をトマトの如く真っ赤にして倒れた。

いかん、やり過ぎたようだ。

真っ赤な顔の少年を俵のように抱え、道行く人に治療できる場所を尋ね、案内して

貰つた。

治療室では、運ばれていたジークがベッドで横になり、

その隣では「負けていません！私はまだ負けていません！」「俺だつてまだ負けてはい

ない！」と、

カーテン越しから聞こえる口論が煩かつた。

または「なぜ俺がこんな目に合わなければいけないんだ・・・」と、

呪詛のごとき言葉が漏れていたのも追加しておこうか。

その後、曹操と出くわし、色々と話を一方的に聞かされた。

なんでも私が出会った少年はレオナルドというらしく、境遇からして人見知りなのか。

それ故か、彼からプレゼントを貰った私にいたく驚いたらしく、

「そうか、レオナルドが心を許したのなら、やはり俺の目に狂いは無かった」とか言っていた。

いかんせん、私の頭はもはやハンバーグのことや家のことでいっぱいなりつつあったので、

取りあえず適当に聞き流して終わった。

そして、頭を押さえているゲオルクが現れ、気付けば家に戻っていたというわけだ。

いやはや、一体なんだったのだろうか？

『なにやら厄介な連中に目をつけられたな』

同情を含んでいるファーちゃんの言葉。だが、それは私に宿ったファーちゃんも同じ。

私一人だけが苦勞をするのではない。ファーちゃんも一緒に苦勞して貰うぞえ。

『宿主の方が、彼奴らよりも数段厄介者じやの』

溜息を吐いたファーちゃんの言葉を、褒め言葉として受け取っておくことにした。

強欲な龍（のお供） 6

『それでどうするのだ、私の宿主よ？』

私の目の前に立っている黒い龍、ファーちゃんは私に問う。

威厳に満ちた顔にちよつと渋めの声。どつかのまるで駄目なおっさんのような声ではなく、なんか優雅優雅と魔法のステッキを振りそうだったり、『私が天に立つ』と眼鏡をかけてそうだし、巨大な十字架の武装兵器を振り回しそうな牧師さんな声でもある。うーん、ダンディ。

だがその威厳も、夢の中で出会った大きさではなく、ぬいぐるみサイズの姿で言われると、色々と残念になっております。言い忘れていたが、ここは夢の中ではなく、現実世界で私の部屋である。

説明するならば、夢の中での特訓を経て、私はファーちゃんの実体化に成功したのだ。これで私は自分の中にいるファーちゃんと現実世界で話せるようになったのである。わざわざ会うために寝るのも疲れるんですよ。

まあしかし、こんなことが出来る私は、やはり優れているのですよ。ふふん、褒めての良いのだよ？おっと失礼、素が出てしまった。

『貴様のそのよく解らぬ実力は、一体どうなっておるのだ……』

何故かファーちゃん、喜びよりも呆れが強かったんだですけどね。酷いよね。

え、ファーちゃんを実体化してまずくないかって？ふふん、心配ご無用。私の家の四方には、魔よけの物を置いているのだ。たまたま神社の修繕工事の張り紙を見て、お布施としてそれなりに援助をしたのだ。神様は敬うべき、そうすべき。

そうしてお礼として貰ったのが、何やら走り書きがされたお札。なぜか太陽のような温かさを感じた、紙なのに。それをファーちゃんに見て貰ったら、『貴様あ！それをどこで手に入れたあ!』と叫び声を上げました。どうやら、神気を纏ったお札らしく、魔よけどころかファーちゃんを浄化しかけたみたいだ。なので、これを家の四方に貼って、見事な結界が出来ちゃったらしい。これで悪魔等にばれることもない。なので、こうして特訓が出来るのだ。

だが実体化が出来るようになったのが、全て良いことに繋がるわけではない。

この実体化、ファーちゃんを出してただけでも体力が減るのである。そりやもうゴリゴリと削られていく。まるで常時ランニングをしているような感じで。

そして何より燃費が悪いのだ。ぬいぐるみサイズでこれなのだから、実物大は更に消費量が増える。一度、景気よく実物大で実体化させようとしたらそのまま意識を失ったのだ。

『いきなり何をしておるのだ貴様は』

と目を覚ました私にファーちゃんは言ったのである。酷いのである。

ということ、今は燃費の改善と実体化時間を延ばそうとこうして毎日特訓をしているのです。

まあ、これはそれほど問題じゃないのだ。

大きな問題なのは、前にも言ったのだが、私とファーちゃんは一心同体、それこそ魂レベルの繋がりが。私がファーちゃんであり、ファーちゃんが私である。説明している私ですら何を言っているの分からなくなってきた。

つまり、ファーちゃんを実体化⇨私自身の魂を現実世界に出すということだ。それがどういうことか？

ファーちゃんが傷つくくと私も傷つくらしい。それを聞いた際は、それはどこの週刊漫画の幽霊波紋でしょうか？と聞き返してしまいました。すまない、話が逸れた。

言ってしまうえば、ファーちゃんが死ぬば私も死ぬ。うん、理不尽！

もつとも、腐ってもファーちゃんだ。元々が伝説となっている邪龍なのだからそう簡単に傷つかないしやられもしない。伊達にドラゴンをやつてないから！長い間、宝物庫の番人をやつてないから！でもドラゴン殺しはかんべんな！とは、ファーちゃんの言葉である。

さて話を戻そう。

『どうするのだ？』というファーちゃんの問いを聞きながら、私は煎餅をバリボリと齧っている。

うーん、このお煎餅、ネット評価だとそれなりなんだけど、私にはちよつとしょっぱいかな？いや待て、煎餅単品だから駄目なのではないか？ということ、私は口の中にしょっぱさが残るうちに温かい緑茶を啜る。

なんとということだ、緑茶の渋みが煎餅のしょっぱさを中和している！そうか、これはお茶と一緒に食べるのが正解なのか。確かに、この食べ方なら美味しいな。うんうん、これにはあの評価にも納得。

それで、どうするって何を？

『……なぜ、我はこやつに宿ってしまったのだろうか……？』

伝説の邪龍であるファーちゃんなんか黄昏ている。威厳のある龍の姿で黄昏ているのは酷く……シニールです。えっと、その、頑張れ！あ、この煎餅食べる？

『……いただく』

私がつつと差し出した煎餅をバリボリと食べるドラゴン。これは向日葵の種を齧るハムスターに似た光景である。ヤバイ、シニール差が加速している。

それで、どうするって何を？

しばらくして、私はファーちゃんに再度尋ねた。煎餅を食べてお腹が満たされたのか、ファーちゃんの威厳が戻りました。

『我と同化したことで、宿主には様々な縁が舞い込んでいます。それこそ財となるモノは特に集まりやすい。そしてその力は更に大きくなっていく。本来ならば限度はあるが、同化したことによりそれがなくなっている。まさに財の収集機だ』

一度言葉を止めるとファーちゃんは茶を啜った。実体化出来たことを考え、ファーちゃん用の小物を揃えている。

『だが同時に、その力によって我らに厄となるモノも来る。縁とは良縁もあれば悪縁もあるからな。そして多くの財を持てば、それに群がる輩もおるということ。このままで、いずれは貴様も財によって殺される。我やジークフリードのようにな。嫌であろう？』

ファーちゃんの言葉に、私は首をブンブンと縦に振る。今までに訪れた私の出来事を考えれば、否定しようもないことなので。そのために私は、あの手この手でシツチャカメツチャカに楽しみつつも、厄を払い除けてきたのだから。

『うむ、何かおかしいと言わざるを得ないがまあいい。宿主の出鱈目さは今に始まったことではないからな。じゃが、今度はなかなか苦勞するぞ？なにせ今度は底なしの馬鹿と見た。おまけに力もある。さてどうする？』

うん、楽しんでやえばいいと思うの。私はファーちゃんに事もなげに言った。

相手は馬鹿？ならば私も馬鹿になればいい。その言葉に、ファーちゃんは固まった。固まった後、笑い出した。

『そうだ、そうだったな。私の宿主は常識と非常識の狭間にいる。常識を語るも狂気に走り、狂人を装って物事を引つ掻き回す。貴様も馬鹿だったな』

酷いのです、私は狂人ではないのです。ちよつと楽しんでやおー！という欲に走るだけの常識のある人間なのです。私の抗議に、『え、それは本気で言っているのか？』と割と真面目に言われてされにショックです。

さてさて、取りあえず今後の方針は決まった。馬鹿を盾にしつつ私も馬鹿をやる。

『踊る阿呆に見る阿呆、同じアホなら踊らにや損損』というじゃないですか。だったら、物事を引つ掻き回しても罰は当たらないでしょう。

ということ、私は全力全壊で楽しむことにした。悪魔？天使？墮天使？なんぼのもんじゃない！誰であろうともはや私は止まらない。全てを巻き込んで引つ掻き回し、最高のタイミングで後戻りできないように梯子を外す。ああ！これぞ最高のエンターテインメント！

絶頂でビクンビクンしている私に、ファーちゃんはドン引いておられます。でもそんなの関係ねえ！見ているがいい！私は自重を止めるぞー！最高にハイって奴だー！

『ああ、なぜに私の胃は痛むのだ．．．』

フアーちゃんの言葉を右から左へ聞き流し、私は自室で叫び声を上げる。そんな中、コンコンと窓を叩く音がした。おかしい、ここは2階なのである。しかも、聞こえた方にはバルコニーなど無い。チラリと窓の方を見ると、何故か人がいたのである。それもほぼ全裸の幼女が、窓ガラスに顔をくつつけてこちらを覗いていた。

『フアーブニル、見つけた』

TRPG参考

アンシンできない町

私、調和花（シラベ・ノドカ）にとって、この世界は玩具箱のような世界だ。

特殊な生まれの私にとっては、普通の学園生活は憧れであり、生徒との交流も大きな発見だった。

私の家庭は少し分け有りで、お父さんが家にいることは少なく、多くの時間をお母さんの2人で過ごしてきた。

もともと、私はお父さんといつでも会えるので、別に寂しい思いをすることなかったけど。

というか、心配症のお父さんから四六時中監視されているような感じがする。

そのせいで、お父さんに対しては若干鬱陶しいという気持ちの方が強い。

でも、私はお父さんもお母さんも大好き。

駒王町にある駒王学園。それが私の通っている高校だ。

元は女子高だったけど、近年になり入学生の数が減っているせいか、男女校に変わったらしい。

とはいっても、結構な学力を求められるため、入学するための偏差値は高く、テストが大の苦手な私には結構な難易度だった。

それでも駒王学園に憧れていた私は、死にもの狂いで頑張り、無事に入学を果たした。うん、私、頑張った！

ちよつと気恥ずかしかったけど、入学式の際にはお母さんに無理を言つて来てもらった。

写真を撮る時、お父さんが走ってきたのはびっくりしたけどね。

お父さん曰く、「だって娘の晴れ舞台を見に来ない親はいないぞ？」とのことで、どうやら無理を言つて仕事を切り上げてきたみたい。

来てくれるとは思っていなかったの、私はお父さんに力いっぱい抱きついた。力いっぱい抱きつきすぎて、お父さんの腰をへし折りがけたけど。

私はお母さんもお父さんも大好き。クラスの皆も大好き。

出会った人たちも大好きだし、学校に行けるこの世界も好きだ。今日も今日とて、私は笑顔で学校へと、砂埃を巻き上げながら走るのだった。

「待ちなさいそのエロトリオ！今日こそは許さないわよ！」

「絶対に捕まえてしばき倒す！」

「あんたたちを薄い本にしてばら撒いてやるわ！」

「なんでバレたんだ松田!?あの場所は巧妙に隠しておいたはずだぞ!」

「知るかよ一誠!そんなことよりも今は逃げるのが重要だろうが!」

「待ってくれ!俺を見捨てて逃げるんじゃない!」

先頭を走るのは三人の男子で、追うのは竹刀やバットなどを持った大勢の女子生徒。

これはいつもの光景だ。もう1年も経つのだが、毎度のこととなっている。

先頭を走る男子生徒は、ツンツン頭が兵藤、丸刈りが松田、眼鏡が元浜という名前で、ここ駒王学園においては、セクハラトリオという名の悪名を轟かせている。

盗撮、覗き、セクハラ、パンツめくり、わいせつなDVDや漫画を持ち込むなど、

もはや性犯罪レベルの行為をしているわけだが、なぜか警察沙汰にならないというの
が、

学園七不思議の一つとして有名である。

そして、このエロ餓鬼トリオは、何度も捕まってはシバかれるのだが、

もはや意地なのか、それともそうしないと死ぬ性質なのか、

懲りずに何度も何度も犯罪を起こしている。

そして今回も、どうやら女子更衣室に忍び込んだのがばれたらしい。

「このまま逃げ切るぞ元浜!あと少しで出口だ!」

「ああ、そこを抜ければバラバラに逃げる事が出来るぜ！」

「あとは捕まっても恨むなよ！」

そう言つて脱出しようとした瞬間、前から何か三人に向かつて突進し、

気付けば三人は床に沈められていた。

「犯罪、駄目。女子を泣かす行為、禁止」

そこには、三人を抑え込んでいる和花がいた。

「ありがとね、調さん。毎回こいつらの捕縛に協力してもらつて、本当に感謝するわ」

「別に、見えたから、捕まえただけ」

「別に謙遜しなくていいわよ。本当に助かるわ。」

オラ、エロ餓鬼トリオ！今日という今日は許さないんだから！」

「その身体を剥いて薄い本してやるから覚悟しなさい！」

「いやー！犯されるー！女子に逆レイプされるー！」

「待て元浜、これはこれでアリなんじゃないか!？」

「おお！さすが兵藤、お前の発想には毎回脱帽するぜ！」

「お仕置き、頑張れ。応援する」

「それじゃあね、調さん。いくぞ被害者たちよ！こいつらを血祭りにあげるのだー！」

簀巻きにしたエロトリオを、ワツシヨイしながら運ぶクラスメイト達に手を振り、私は教室へと向かった。

私は勉強に関しては、本人も優秀ではないことは自覚してる。

だから、授業中はしつかりとノートを取るし、必死に教科書や板書とにらめっこをする。

その成果もあって、テストは中の中という程度で済んでるのが、私には救い。

毎回のテストの返却時には、私は身が縮む思いで受け取っているけどね。

身体を動かすことは好きだから、保健体育が私の好きな教科だ。

特に運動の時間だったら、私はいつも頑張ってしまう。

でも、何故か皆は驚いてるんだよね。私はまだ本気じゃないのにさ。

お父さんから、「本気でやるなよ?」と言われてるから、私としては不完全燃焼。

でも不思議と各部活から勧誘されたり、補助として頼まれたりしているのよね。

忙しいお母さんのお手伝いがしたいから、私は悉く断ってるけど。

それにお父さんの言いつけは守らないとね。

頭がこんがりそうな授業を終え、楽しい運動の授業で頑張り、

こうして私はの学校生活は終わり、一目散に家へと帰るのだ。

「お母さん、ただいま」

「お帰り、和花。今日も学校楽しかった？」

「うん！」

お母さんにただいまを言つて、すぐに着替えをしようと自室に行く。

鞆を机に置き、制服から私服へ着替えようとしたが、私は視線を感じてその手を止める。

いつものことなのだが、やっぱり勘弁してほしい。

「お父さん、何してるの？」

「いや、ノドカが来るのを待っていたんだが・・・駄目だったか？」

「勝手に、娘の部屋にいる、父親。許されない」

自室の隅にいた父親を部屋から追い出し、私はさつさと着替える。

お父さんは、律儀にも扉の前で待っており、着替え終わったので部屋にいられた。

「それで、話つて、何？」

私の鋭い視線を受け、しどろもどろするお父さん。

だが観念したのか、すまなさそうに話す。

「いやな、娘のことが心配で仕方ないんだよ。

色つぼくなつたピチピチの孫娘に合わせる！会わせないなら俺が迎えに行く！

って糞オヤジが言うから毎回凹つてきたんだが、どうもやりすぎて入院させちまつて

よ。

お袋と姉貴等にやり過ぎ！って怒られて、仕事を増やされて帰れそうにないんだ。だから、母さんによろしくって伝えておいてくれ」

「解った。お母さん、悲しむけど、私のために、してくれたから。ありがとう」

「おおー！俺の娘は天使だ！いや女神だ！

あ、今ここに姉貴はいないよな？いたらお前がヤバいことになる！特に髪が蛇に変わる！」

「もう、大げさなんだからー」

おろおろする父親に対して、私は笑う。

お父さんのお姉さんは、お父さんと違って規律を重んじる人の印象だったけどなあ。ただお父さん曰く、プライドが高く、怒らせた相手を容赦なく叩き潰すらしい。

うん、やっぱりお父さんのお姉さんでした。

「それで、学校の方は順調か？何か困ったことはないか？」

「問題ないよ。ちよつと不思議な先輩たちがいるけど、別に気にすることじゃないし」

「そうか。何かあったら俺にも相談しろよ。俺や家族が総出でお前を助けるからな」

「ありがとね、お父さん」

「おう」

私の言葉に、お父さんは笑顔になる。どうやら元気になったようだ。

「つと、言い忘れてた」

お父さんが私に向き合う。

「ノドカ、お前は俺の娘だ。お前はもう分かっていると思うが、お前は他の子とは違う。そのせいで、色々と苦労すると思う。だがこれだけは解ってほしい。

俺は母さんとお前を愛してる。家族の為なら俺はなんだってする。

それだけは忘れないで欲しい」

「解ってるよ、お父さん」

私は笑顔で答えた。

消えていく父親を見送った後、私はお母さんに、お父さんが帰れそうにないことを伝えた。

少し悲しそうな顔をするお母さんに、私は少し複雑だった。

お母さんは私と違うって、普通の人だから。

でも、お母さんもお父さんを愛していることは分かってる。

だから帰ってきた際に、奥歯が溶け出すほど、

口から砂糖を吐きだしたくなるほどに、蜜月になるのは止めてください。

私、耳も良いから余計に辛いの！

確かに、幼い時に妹が欲しい！といったのは私だけじゃあ。

私はあの時を思い出して、顔が真っ赤になるのを感じた。

ある日、私は登校途中で、友人の桐生ちゃんから奇妙な話を聞かされた。

なんと、あの性犯罪者トリオの一人である兵藤一誠に彼女が出来たという。

なんでも結構可愛い女の子のようで、嫉妬に駆られた残りの二人から殴られていたとか。

私からしてみれば、お父さんの父親、つまり私の御爺ちゃんが昔、

奥さんがいるのに、自分の姉や他の人に片っ端から手を出してたことを聞かされていたので、

別に普通なんじゃないの？と思うんだけどな。

ちなみに昔、御爺ちゃんから、

「大きくなったら食べ頃じゃな」と言われことを、親戚一同の前で話した時は、

その場でお父さんやお爺ちゃんの奥さん、私のお婆ちゃんやお兄さんやお姉さんらが、

総出で御爺ちゃんをフルボッコしてたけど、一体どういう意味だったんだろ？

変態一誠の恋人騒動のほかに、桐生ちゃんはもう一つの話をしてくれた。なんでも最近、駒王町では変な噂が流れているみたい。

- ・車を運転していたら、大きな獣が道を横切った
 - ・勉強中、気晴らしに窓の外を見たら、人らしき存在が空を飛んでいた
 - ・夜遅くに外へ出ると、黒い人影に襲われる
 - ・願いの叶う広告が撒かれている
 - ・自分の番号に電話をかけ、殺したい相手の名を言うと、謎の怪人が相手を殺してくれる
- れる

・異次元へ行けるテレビがある

・赤い頭巾を被った人影や、首のなし生徒が徘徊しているなど

不思議なものや物騒な噂もあれば、

・二大お姉さまは、実は異世界の王女さままで人間じゃない

・変態三人組はエロがなくなると死ぬ

・生徒会長は眼鏡からビームを出せる

・木場祐斗は、どこかの国の王子様か貴族の隠し子

・小猫ちゃんは猫属性など

もはや個人を名指ししたいちゃもんの噂まである。

まあ、どれもこれも眉唾物でしかないみたいだけど

でも、そういうった噂が流れているというだけで、

学校からは夜遅くの外出は厳禁と言われたのを私は思い出した。

本当に物騒になったなあ。

私は桐生ちゃんの話聞きながら、お父さんに貰った物を握る。

一見、液体の入ったガラスの瓶だけど、なんでも霊薬？みたいで、

傷口に掛けると治してくれるんだとか。

なんか怪しいけどなあ。

「ん？どうしたの？」

「ううん、なんでもない」

まあ、危険なことに気をつけないとね！

私は桐生ちゃんとの会話を楽しみながら、駒王学園へと登校するのだった。

さて、今日も大変な学校生活だった。

変態を取り押さえ、苦手な数学に頭を悩ませ、大好きな保健体育でハツチャケちゃった。

みんな口を開けてたなあ・・・どうしよう・・・。

「調さん」

学校から下校する際に、私は呼び止められた。

振り返ると、眼鏡を掛けたきりつとした雰囲気のを女子生徒が私に向かってきた。

駒王学園三年生で現生徒会長の支取蒼那先輩だ。

支取先輩と関わりを持ったのは、一年当初、変態トリオが覗きで逃走していた際に、私が3人を取り押さえ、そのまま生徒会室に引き摺ったことが切っ掛け。

その時の支取先輩は、目を点にして和花を見つめ、戸惑いながら感謝してくれたと記憶している。

まあ、結局三人の悪行は止まることなく、それ以降は定例行事になってしまったけど。「支取先輩、何か用、ですか？」

「いえ、偶々見かけたものですから、挨拶をと思いましてね。」

また彼らの捕縛に協力してくれたのですね、生徒会を代表してお礼を言わせてください」

「いえ、お礼を言われること、じゃないです」

わざわざお礼を言ってくれる支取先輩に、私はしどろもどろになる。

こういって好意を言われるのは、私は少し苦手だ。

「会長ー！探しましたよー！」

支取先輩を呼ぶ声があると、生徒会書記の匙君がこちらに向かつてくる。

どうやら支取先輩を探していたようだ。

「それではまた学校で。さようなら、調さん」

「さようなら、支取先輩」

ちよūdō間が良かったのでここで御開きにし、

互いに言葉を交わした後、私は家へと急ぐ。

支取先輩や匙君もそうだけど、なぜか私は生徒会の人たちが怖い。

実際、話してみるとそうじゃないと解っているけど、なぜかその印象が抜けきらない。

生徒会の人たちもそうだけど、

この駒王学園の二大お姉さまのグレモリー先輩や姫島先輩、同学年の木場君や後輩の

塔城さん、

通称オカルト研究部の人たちも同じ印象だ。

でも、なんでだろ？

ずっと消えない違和感だけど、別に気にすることでもないよね。

「あ、そうだ。お母さんから面白い物頼まれてたっけ！」

私は近くのスーパーへと足を向けるのだった。

「会長、探しましたよ！つて、あれつて和花ですか？」

「ええ、偶然にも見かけて、問題児等のお礼を言おうと思ひましてね」

「まったく、あのバカ達には毎度困つたものですよ。」

今日のことでもそうですけど、和花がいなかつたらと思うと頭が痛くなります」

今日のエロ餓鬼トリオのことで、匙は額に手を当てる。

和花がいなかつたら、全てを自分たち（生徒会）で対処しなければならぬからだ。

「ところで匙、私を探していたようですが、何か問題でも？」

「そうだった！書類を見てほしいと副会長が探してました。」

それと、駒王町におけるはぐれ悪魔に関して、すこし話があるとか」

匙の話の聞いて蒼那は頭が痛くなるも、直ぐに気を取り直す。

「解りました。直ぐに行きますと椿姫に言つておいてください」

「了解しました！」

先に生徒会室へと走つて行く匙を見送つた後、蒼那は調和花が帰つていつた方を見つめていた。

駒王学園2年生、調・和花

腰にまでかかる黒髪で、鋭い目と整つた顔立ちで人形を思わせる出で立ち。

一見すると恐い印象を持たれるが、実際は少し口下手な少女。成績に関しては、どの教科も平均点とあまり目立つ要素はない。

だが、彼女の身体能力はあまりに異質だった。

まるでオリンピック選手のような、一般生徒とはかけ離れた運動能力も持っていた。興味本位で彼女の体育を見たことがあったが、

下手をすると、リアスの騎士と戦車すらも越えているような印象さえ感じる。

また彼女から感じる不可思議な印象。ピリピリと感じる、自分たちとは異なる気配。

「調和花さん、興味深いですね」

支取蒼那、ソーナ・シトリーの眩きを聞く者はいない。

レアな理不尽の遭遇率

日曜日の午後、私は自室の椅子に座り、机とにらめっこして悩んでいた。

机の上には、教科書とノート類が置かれ、先日の数学で習っていたページが開いていた。

授業の時は、先生の解説を聞きながらやっていたのでなんとか解けていたものの、いざ復習として、また出された課題を解くために開いてみると、途中でつまづいたのだ。

「これ、何の公式、使ったっけ……」

いかんせん、文学脳？の私にとって、数学はまさに聳え立つ数字の壁だ。

途中までは登れるものの、あと一歩が足りない。

教科書に書かれている公式を見ながら解こうとするも、

やはり数字を当てはめようとして躓いてしまう。

悩んで数分が経っただろうか、私は椅子から立ち上がり、

服を脱いで学校指定ではない、私用のジャージに着替える。

どう考えても分からない。ここはいったん、頭を切り替えてみよう！

悩んだ時は、身体を動かして頭をスッキリさせる。

これが私のリフレッシュ方法だ。

「お母さん、少し、走ってくるね」

「はいはい、夕飯までには帰ってきなさいね」

お母さんに返事をし、私は外へと駆けていった。

私のランニングコースは、駒王町を一周し、公園を横切って家に帰るというもの。

時間にして約1時間。全力疾走で30分程度の距離だ。

一度クラスの子に話してみたら、思いのほか吃驚してた。

私にとっては普通の、寧ろ軽いといえるものなんだけどなあ。

取りあえず、何も考えずに走り回ろうと考え、私は全速力で駆け出した。

そうして駅、学園などを通り過ぎ、時間も遅くなってきた頃、

私はいつも通りに公園を横切ろうとする。

ここを抜ければ、後は自分の家まで一直線。帰ればお母さんの夕食が待っている。

さて、今日の夕食はなにかなあ……。

そんなことを考えていたら、私はあるものを見かけた。

兵藤一誠と、美人の女の女である。二人は噴水の前で何やら話していた。

確か前に、一誠が恋人が出来たと言っていたけど、あれが彼女さんなのかもしれない。

黒くて長い髪をしていて、少しきつめの顔だけど、美人な印象だ。確かに、兵藤が自慢するのも解る気がする。

でもなんだろう、私は恐い気がした。

なんというか、リアス先輩やソーナ会長たちから感じたものと同じだ。

何かよく解らないけど、何か私が私に警戒させている。

取りあえず二人の邪魔をしないようにと、大回りをしようとしたら、何やら音がした。

音の方を見れば、女の人が兵藤を何かで突き刺し、

兵藤がお腹から紅い液体を溢れさせながら倒れる瞬間だった。

「兵藤、一誠、君？」

私は無我夢中で兵藤一誠に駆け寄り、彼の状態を見て口を押えた。

彼のお腹は何かに貫かれた様にぼっかりと空洞が出来ており、その穴から地面が見えた。

「きゅ、救急車、呼ばなきゃ」

半ば混乱しながらも、私は携帯電話を取り出して119番を押す。だがなぜか繋がらない。

「無理よ。ここは結界を貼ったから、携帯なんて通じないわ」

私は、一誠を突き刺した、恋人のはずの女の人を見た。

女性は、背中から黒い翼を生やしていた。

御爺ちゃんのお友達という人と一緒にいた人と同じだが、彼女の場合は白かったと思う。

「は、はやくしないと、一誠くんが、死んじゃうよ!」

「私からすれば、寧ろ死んでくれた方が良いんだけど?」

「え?」

翼を生やした女性の言葉に、私は言葉を失った。

「なんで? どうして? 死んじゃうんだよ? 兵藤君が死んじゃうんだよ!」

黒い翼の女性は、嘲笑うように酷薄な笑みを浮かべる

「私たちにとって、危険な神器を持つていたから当然よ。

まあ、身を護るためってこと? それに下等な人間を殺したところで、何が悪いの?

私たちのような至高の存在に殺されることに、寧ろ感謝されるべきよ

ああ、アザゼル様! 私はあなた様のために、また一つ災いを排除しました!

恍惚とする女性を見ながら、私は信じられない者を見ている気がした。

なんでこの人、殺したことを誇れるの?

私の中で黒い何かが溢れだす。

確かに兵藤一誠は、変態で、女性の敵で、お爺ちゃんみたいな人間で、骨おじいちゃんの所でシバかれるだろう人間だけど、だからと言って殺すなんておかしいよ。

なんで殺したの？なんで殺したんだ？なんで笑ってるんだよ？

てめえ勝手の都合で、俺の大切な日常を壊してんじやねえよ。

許せない！許さない！ああ！許せるわけがねえよなあ！！

ふつふつとわき上がる黒い何かに、私の心を染められていく。

目の前の存在を、徹底的に壊したくなってきた。

「それにしても変ね、人払いの結界も張っておいたのに、

なんであんたみたいな人間が来るのよ。

まあいいわ、ここで殺せばいいだけの話だし。

まったく、下等な存在の癖に私の手を煩わせるんじゃないわよ」

そう言うのと翼の女は先ほど兵藤一誠を殺したように、手から光の槍を出現させた。

どうやら私を、兵藤と同じように殺すつもりらしい。

「じゃあね」

そして翼女は、光る槍を振りかざし、突き刺そうと俺に向けた。

こいつは今、自分が上だと思っていやがる。人間を殺すことを何とも思ってもい

ねえ。

ああ、気に入わねえ。その傲慢さ、マジで気に入わねえわ。

「な!？」

私は、私を突き殺そうと迫る槍を引つ掴み、翼女の横つ面を思いつきり殴り飛ばした。

翼女、レイナーレは今の出来事に混乱した。

ただの人間を殺すだけだと思っていた。

神器に目覚めていない、間抜けな餓鬼を始末したところを、何故か別の人間に見られた。

確かに人払いの結界を敷いていたというのにだ。

だが問題はない、目撃者を殺せばいいのだから。

そう思ったレイナーレは、先ほどと同じように、今度は蹲ったジャージ女を殺そうとした。

だが結果は、槍がジャージ女の腹を突き破ることはなく、

自分の顔に謎の衝撃が走り、一瞬意識が遠のく。

気が付けば、目の前にいた筈の二人は遠く離れ、自分は木々の中にいた。

「な、何が起きたの……!?!」

頭が混乱しながらも、レイナーレは状況を確認しようとして頭を働かせる。

なんだ、今何が起った？自分に一体何が起ったというのだ？

分からない判らない解らない……。

そんな中、レイナーレは目の前の光景を見据える。

なにやらジャージを着た侵入者が、懐から取り出した瓶の中身を、兵藤一誠にかけているようだ。

すると、死に体だった兵藤一誠の身体が光に包まれ、カハツと息を吹き返したのだ。

「な、なんで……!?!」

目の前の光景に冷静になろうとした頭が更に混乱する。

レイナーレは、この奇妙なジャージ女を見据えた。

お前は一体なんだと言うように。

「ひいつ?!」

振り返ったそのジャージ女を見た途端、レイナーレは思った。

『殺される』

レイナーレが見たのは、一匹の狼だった。

口からは鋭い犬歯を生やし、目は金色に輝き、射抜く視線を自分に向けてくる。

周りに黒い靄を纏い、黒い髪がまるで蛇のように揺らめいている。

レイナーレは言葉を失う。いや、声を出すことすら出来ない。

それは恐怖だ。今、自分の目の前には人の形をした『恐怖』が立っていたのだった。

「ただいま」

「おかえり、今日は遅かったわね。何かあったの？」

「なんでも、ないよ」

家に帰った私は、お母さんに挨拶をした後、

直ぐにシャワーを浴びて着替えをし、お母さんと二人で食事をした。

お母さんの夕食を食べた後、私は自室に戻った。

「どうしよう……」

私は先ほどのことを思い出して悶々とする。

明らかにやり過ぎた。

感情的になってしまったとはいえ、私の全力があそこまでとは思っても寄らなかつた。

公園が滅茶苦茶になってたよ……。

それにサイレンが聞こえて、あわてて逃げてしまったけど、

あの場所に兵藤一誠を置いてきてしまった。

まあ、霊薬のおかげで無事みたいだし、なんとかなってるかも・・・と思いたい。それにしても、まさかお父さんたちが話していた存在と出会うなんて。

人間界は平和じゃなかったの？

「これからどうしよう・・・」

私は深い溜息を吐くのであった。

「一体どういうことなの・・・？」

契約の紙の反応があり、こうして召喚されたリアスは、目の前の光景に困惑した。

そこは公園だった。

近所の子供たちや、人間たちの憩いの場であるはずの公園だが、そこらじゅうに大きな穴やクレーターが出来ていたのだ。

まるで爆撃でもされたのか、それとも隕石でも落ちたのかと言いたくなるほどに。

それに公園の木々が何本も引き抜かれ、それらが地面に突き刺さつてもいる。

所々に黒い羽が散っているが、鳥でもいたのだろうか。

だが、それよりも気になるのが、この有様だ。

こんなことになっているといって、周りには誰一人としていない。まるで人為的に人祓いが行われたかのように。

そして公園の惨状からして、リアスの中ではいくつかの存在がチラついた。

「まさか、私の気付かない内に、はぐれ悪魔が侵入したというの?」

リアスは自分のふがいなさに叱咤したくなるも、それは後回し。

問題は、これほどの力を持った存在が、自分の町に潜んでいるということだ。

これでは町の人々に危険が及んでしまう。

そう考えたリアスは、直ぐに対策を取ろうと、自分の眷属に集まるよう指示を出した。すると、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。誰かが警察に通報したのだろう。

リアスは、倒れている一誠を抱きかかえると、直ぐに転移の魔法でその場から離れた。

翌日、公園の惨状がテレビで放映されていた。

ニュースキャスターやコメンテーターが色々と仮説を立て、

噂の掲示板では、様々な考察が立てられていた。

「本当に不思議ねえ。どうやったたらこうなるのかしら?」

「そ、そうだね。不思議だよね」

「ごめんなさい、その元凶は私です。」

「最近、この町って物騒だよねえ。何かあるんじゃないの、この町」

「どう、だろうね。でも、桐生ちゃんも、気をつけて、ね」

放課後、桐生ちゃんとそんな話をしていると、女子の叫び声が上がった。

教室の窓から下を見ると、兵藤、元浜、松田の三人が、

いつものように女子に追いかけられていた。

「あー、まーたあの三馬鹿がやらかしてゐるわねー。」

ほんと、毎度毎度飽きない連中ね。

というか、いい加減警察へ突き出すべきじゃない？

ほんと、不思議だわー」

「良かった、気付いてない、みたいだね」

「なにが？」

「な、なんでも、ないよ。」

「ふーん？」

取りあえず、訝しがる桐生ちゃんを誤魔化しておく。

流石に、昨日の出来事を話す訳にはいかないから。

「ちよつと行って、くるね」

不審な目で向けてくる桐生ちゃんから、私は逃げのように教室を走って出て行く。

「手加減しときなさいよー」

走って行く私に、桐生ちゃんは面白そうなニタニタ顔で手を振っていた。

「ひ……ヒイ!……来るな!来るな来るなあああああ!」

ヒイ……ヒヒひ……ヒイ!」

とある場所のとある部屋。

レイナーレは、部屋の隅で薄汚れた毛布を頭からかぶって震えていた。

そこは薄汚れてはいるものの、しっかりとした建物であり、

どこか厳かな雰囲気も醸しだしていた。

だがそんな雰囲気もレイナーレには解らない。

なぜなら彼女は今、恐怖に震えているからだ。

一発の拳で、地面にクレーターを作った

両手で引っこ抜いた木を、私に向かって投げてきた

飛んでいる私の目の前に跳んできて、私を地面に叩き付けた

筆られる自分の羽

「知らないシラナイ知らない知らナイ! あんな奴がいたなんてシラナイ! 私の計画は完璧だった! なのに何で!? あんな化け物、私はシラない!」
突如として現れた存在。

自分の結界に入ってきた挙句、私をこんな目に合わせた存在。

綺麗だった黒髪は所々白く染まり、艶やかだった肌は傷だらけ、

そして何より、至高の翼の羽根を引き抜かれた。

しかも汚らわしい、土に汚れた人間の手で。

それは彼女にとって、なぶり殺してやりたいほどの屈辱だ。

だがそいつを思い出そうとすると、途端に体が震えだす。

至高の存在であるはず自分が、小娘の如く恐怖に震えるのだ。

部屋の扉が開く。

その音に、レイナーレは「ヒィ・・・!?!」と情けない声を上げた。

「ちいーす!ズタボロ雑巾の墮天使さーん!

あれえ!?! そんな部屋の隅で震えてるなんて、アンタ本当に一昨日のアンタ?

これまた毛布なんて被って、随分な雑巾つぶりございますデスねー。

一昨日はあんなに威張ってたのに、これまたどういう天変地異?

大丈夫ですかボロ駄天使 summer!」

入ってきたのは神父だ。その姿は少年と言ってもいい。

ただ、その姿から醸し出されるのは、神父とは全く逆の下劣さ。

中身と役職がかみ合っていないのだ。綺麗なおべべを纏っても、その下品さは隠せないようだ。

そんな神父の声に、レイナーレは光の槍を向ける。

その姿に少年神父は、

「タンマー！ちよつとマンター！言い過ぎたから許してクダチャイ！」と媚を売る。

「ふん、あなたは私の言うことを聞けばいいのよ。」

私の邪魔をしなければ好きにしても構わない、そういう契約のはずよ」

「アイアーイキャプテン！今思い出しました！

だったら、俺は好きに糞どもを煉獄に叩き落す善行を行ってきマアース！

ついでに、迷子も捕まえてゲツチュしてクラァー！」

部屋から出て行つた神父を冷めた目で見つめ、

レイナーレは震える身体を抱きしめる。

「神器さえ、聖母の微笑さえ手に入れたら、あいつを殺す！絶対に殺してやる！」

レイナーレは部屋の片隅で、

自分をこんな姿にした存在への真つ黒な殺意を、その両目に宿していたのだった。

1 瞬の安らぎ、瞬間の絶望

身体を動かすのが好きな私は、ちよくちよく休みは出かけている。

時間があれば、ちよくちよくと何処かへ足を運ぶ。

お母さんのお手伝いが必要なかったり、友人の桐生ちゃん等と遊びに誘われたりしなければ、

基本は一人で興味があるものを見に行くことが多いかな。

最近だと、博物館で『黄金伝説―古代から輝く宝物―』を見に行ったり、

『神話を描く』といった絵画展を見るために遠出をしたり、

『ベルベツトルーム―表裏の自分』なんてちよつと気になる映画を見に行つたこともあつた。

『黄金伝説』は名前の通り、金の装飾品がガラスケース内で飾られていたし、

『神話を描く』は、数多くの神話にちなんだ絵が展覧されていた。

『ベルベツトルーム』は、アニメ映画なのにジャズの音楽がたくさん使われている、

その曲もCDが出たら買おうかな? と思っているほどに好きなものばかりだ。

因みに、『ハートフル・スマイル』という曲がお気に入り。

私のお気に入り映画をもう一つ上げるなら、『ムーンセル・エクストラ』を挙げるかな。これも名前に惹かれて、一目で大好きになった作品だ。

私のお気に入りシーンは、ボロボロの主人公がただ前へと足を進めるだけのシーン。

地味と言われてしまえばそうだけど、私は大好き。

そんなこんなで、いつものように外へ出かけた私だけど、今日は頭を悩ませている。どうしよう、どこに行こうか決まらないのだ。

博物館は先週行ったから、催し物は変わらないのでパス。

最新映画は、公開されてまだ日が浅いので、大勢のお客さんがいるよね。

いい席で見れなさそうだからで止めとこう。かといって、他の映画はいまいちピンとこない。

博物館も映画館もダメ、かといって美術館まで遠出をする気が起きない。

ということでは、

「おいしいもの、探そう！」

私はデザートを求めて歩き始めた。

「喫茶店生資堂の、チョコパフェは、チョコの苦みとアイスの甘みが、抜群。

盛られたフルーツも、新鮮だし、果物の酸味も、相性ばっちり」

偶然見つけたチェーン喫茶である、生資堂のチョコパフェに満足し、私は店を出た。生資堂は、長い歴史を持つ喫茶店で、老舗の青果店でもある。

ゆえに、新鮮なフルーツが評判だ。

そのため、お客の足は途切れることはないのだが、偶然空いていたのだ。

念願の生資堂限定のチョコパフェに舌鼓を打った私は、まさに至福の時を過ごしていた。

私の方は気付いたけど、店内では塔城小猫ちゃんが、ケーキを食べていた。

なお、彼女のテーブルの上には、多くのケーキが置かれていたのだが。

塔城ちゃん、絶対に血液が砂糖ジュースに変わりそうな量だったけど大丈夫かな…。

あまりに美味しそうに食べていたので、声をかけることはしなかったけど、

私は塔城ちゃんの健康を酷く心配してしまった。

でも、

「塔城ちゃんも、甘い物、好きなんだ」

無表情であまり喋らないと言われている塔城ちゃんは、

学園ではミスティアスロリ系少女として、その容姿も含めてマスコットな愛され方をしている。

でも私から見れば、良く解らない謎の後輩という感じだった。

塔城ちゃんを含めて、オカルト研究部の変な感じを含めて、むしろ怖い印象だ。

もちろん、交流自体が無いのだから、実際はどうなのか解るはずもないけどね。

しかし、偶然にも塔城ちゃんの珍しい姿を目撃したことで、

私は少し、塔城ちゃんのことを好きになれたと思った。

塔城ちゃんも、あんな風な顔をするんだあと身近に感じられたから。

やっぱりお出かけは、偶然という出会いに満ちているとえた。

「さて、次は……」

今度は和菓子店の涼口屋にでも行こうかな？

確か、あそこはどら焼きが早く完売するほどの人気商品だ。

今の時間だと、まだ買えるかな？

そんなことを考えていると、目の前を通り過ぎた存在に私は目を奪われた。

「え、あれって……」

一人は、もはや言うまでもないエロトリオ筆頭の兵藤一誠である。

そしてもう一人は、真っ白な服を着た金髪の女の子だ。

二人は楽しそうに歩いていた。私は目の前の光景が信じられなかった。

「げへへへえ、女の子のおっぱいは最高だぜえええー！」の一誠（あくまで和花の妄想）が、

基本的に女の子に好かれる筈がない。

それこそ、あんな風に女の子から笑顔が向けられるはずがない。

ということとは、あの子は一誠を知らないことになる。

「まさか一誠は……」

まさか一誠は、自分を知らない女の子に優しくして、そして悪辣なことをする気では
？

私の頭の中では、変態一誠が金髪少女にあんなことやこんなことをしている絵が浮
かんだ。

なお、この知識は酔っぱらった私のお爺さんが、小さかった私に教えてくれたことだ。

男は狼だから気をつけるのじゃよう？捕まったらにやんにやんな目にあわされるぞ？
と。

そう、お爺さんが笑いながら語ってくれた。

あの時は全く分からなかったが、保健を勉強していた際に思いだし、
火が出そうな位に顔を真っ赤にいたことを覚えている。

「と、止めない」とー」

私は変態一誠の蛮行（妄想）を阻止するべく、一目散に二人を追いかけた。

電柱やら郵便ポストなどに身を隠して、二人から見えないように追跡をした。

まあ、二人はゲームセンターに入り浸り、クレイゲームなどをやっていた。

「あれ？」

変態一誠の犯罪を阻止するべく、もしもいかがわしいところに連れ込んだら、

直ぐに取り押さえようと待っていたのだが、どう見てもそんな場所へは行かない。

それこそ健全なデートにしか見えない。

始めは、騙されるものか！きつと途中で本性を出すに決まっている！と疑心をしていった。

しかし、いつまでたつても二人とも仲良く遊んでいるばかり。

その姿を見ている内に、私はこう思うようになってきた。

「もしかして、私の勘違い？」

私はそれこそ、今までの二人の行動を見て、そう結論付ける。

なあんだ、私の勘違いかあ・・・あははははは・・・。

「私って心が汚れているのかなあ・・・」

結局、一誠と少女は仲良く遊んでいるだけだった。

最後まで見ていた私は一体何をしていったんだろうか・・・。

私は、公園に入った二人を見て、自分が汚れてしまった気がして、酷く落ち込んだ。

よし、問題はなかったんだから気を取り直そう！

と言うわけで、次はどうしようか。

といつても、空は赤から黒へと移り変わっているのも、もう家に帰るしかないのだが。まあでも、途中で何かお土産でも買ってこよう。

そうだ、大熊猫屋の小豆ういろうでも買っていいのかな。

「お母さん、喜んでくれるといいなあ」

気を取り直した私は、大熊猫屋に足を向けようと方向を変えた。

突如、公園から叫び声が聞こえた。

私は振り返り、一目散に公園へと駆けこむ。

まさか、まさか私が気を許した隙にあの変態が……！！

取りあえず、一誠をフルボッコにするつもりで公園に入ると、変態と少女がいた。

だがその光景は、私が思っていた悲劇のシーンとは違っていた。

あれ？変態が少女を背にしている。まるで何かから守るように。

その光景に私は疑問を覚え、二人が見ている方向へ顔を動かす。

そこには第3者がいた。

黒い髪と白髪が混ざった長髪を靡かせ、片方がボロボロの黒い翼を生やした女がいた。

その顔、その姿、その言動を見た時、私の心が切り替わった。

「アーシア！その下級悪魔を助けたかったら、私たちと一緒に来なさい！

じゃないと、今すぐこの悪魔を殺すわよ！」

目の前のレイナーレが、俺に光の槍を向けながらアーシアに言う。

クソ！さつき一撃をくらったせいで、身体がまともにも動かねえ。

だからと言って、アーシアをあんな奴の所に行かせるわけにはいかない！

「行っちゃ駄目だアーシア！俺は大丈夫だから！」

クソ！動けよ俺の身体！ここで頑張らないとアーシアが！

「ごめんなさい、一誠さん。私……」

だがアーシアは俺のことを解っているかのように、レイナーレの方へと行く。

「良い子ねアーシア。あなたが私に素直に従ってくれるなら、こいつは助かるの。」

あなたがおとなしくすれば、この悪魔を助けられるの。だから解るでしょ？」

「……はい」

「アーシアあああ!!」

必死に叫ぶ俺の思いも空しく、アーシアはレイナーレの方へと向かう。

そしてアーシアがレイナーレへとたどり着くその瞬間、激しい音と衝撃、砂煙が舞っ

た。

「な、何なんだよ!？」

突然のことによく見えなかったが、空から何か落ちてきたように見えた。

突如舞い上がった砂煙に咽ながら、俺はアジアを見る。

アジアも、何が起きているのか解っていないようで、突然のことでおろおろしているみたいだ。

よし、今のうちにアジアを！俺は無理やり体を動かしながら、アジアの方へと動く。

そんな中、舞っていた砂煙が晴れ、それは姿を現した。

それは人の形をしているが、周りを黒い霧で覆われていて、辛うじて人だと解るくらいだった。

頭らしいところから細長い何か、まるで蛇のようにならねている。

そしてそこから見えるのは、金色に輝く目のようなもの。

それを見た俺は、全身を何かに掴まれた感覚に陥った。

『怖い』

そう、怖いんだ。まるで絶対的な何か、自分では到底太刀打ちできない何かが目の前

にいた。

前に部長が、俺に駒の能力とオカルト研究部のみんなの力を見せてくれるために、俺を連れてはぐれ悪魔を討伐したことを思い出した。

あの時は初めての实战で自分は少し怖かったが、共に戦うみんながいてくれたから平気だった。

だが、目の前にいる存在は、そんなはぐれ悪魔とは違う。

『怖い』『逃げたい』『壊される』

一瞬で俺の心を恐怖に染め上げた。

あれは『恐怖』だ。『恐怖』が形を成したものだ。

ちらりとアーシアを見たが、彼女は意識を失って地面に倒れていた。

「あ、あAああAあああああ、AああああああA Aああ!？」

誰かが声を張り上げた。

俺は突然のことに混乱しつつも、声の方を見て驚いた。

レイナーレが叫んでいたんだから。

さつきまで俺を見下していたレイナーレの顔は恐怖に歪んでいて、

その目は信じられないものを見たかのように見開いている。

「なんで．．!? ナン、で、こんな時．．二!?

いや、嫌だ! 私は．．壊される? ヒイ! く、来るなあああ!!」

レイナーレが、まるで少女のように取り乱していた。

一体なんであいつが現れたのかは良くわかんねえけど、

あいつは今、アーシアから目を逸らしている。

今がチャンス!

俺は震える身体を必死に動かして、気絶したアーシアへと駆け寄る。

「アーシア、しっかりしろ!」

俺はアーシアに手を伸ばす。だが、あと少しで手が届く寸前、アーシアの姿が消えた。

「な、なんなんすかアレ!!」

レイナーレ様が遅いから来てみたら、あ、あいつなんなんっすよお!」

上を見ると、気絶したアーシアをツインテールの少女が抱えていた。

その背中中には、レイナーレと同じ黒い翼が生えている。あいつも堕天使か!

「レイナーレ様! レイナーレ様!! 落ち着いてください!」

目的の物は手に入れましたから、早く逃げるっす!」

「助けてタスケテ助けてたすけてタスケて．．!」

震えるレイナーレを、アーシアを抱えた金髪堕天使が引つ張り、三人は消えていった。

黒い靄の人影は、3人が飛んで行った方へと顔を向ける。

そして、3人が飛んで行った方へと身体を向けた。どうやら追いかけるみたいだ。

「ま、待て！」

俺は黒い靄を呼び止めた。

震える足を必死にこらえ、それでもなんとか睨みつける。

黒い靄は、俺を一瞥すると、首？を横に振った。

そして俺が声をかける間もなく、一瞬で姿を消した。

上を見れば、黒い影がビルの向こうへと消えて行った。

今の出来事に、俺は頭が追いつかなかった。一体なんだってんだ！

だがこれだけははっきりしている。

俺は守ると言っておいて、アーシアを守れなかった。

「クソ、何が守ってやるだよ！俺は、アーシアを助けられなかったじゃねえか」

あの黒い人影が、俺に向かって首を振ったのも『お前じゃ無理だ』と言っているように思えた。

確かにあいつが来なくても、俺はアーシアが連れて行かれるのを見ていただけかもしれない。

あいつはこう言いたかったのかもしれない、『お前は弱い』って。

ああそうだ、俺は弱い。レイナーレにやられた俺が、アーシアを守るなんて馬鹿かも
しれない。

「でも、俺はアーシアの友達だ。アーシアを守るって約束したんだ！

だったら俺のやることは一つだ！」

俺は自分の非力を嘆くも、だからと言って泣いてるわけにはいかない。

アーシアを助けるってを誓ったんだ。だったら俺のやることは！俺は一目散に学校
へと駆けた。

待ってろアーシア！俺が絶対に助けるから！

月明かりが淡い夜。古ぼけた教会を見張るように、3人の男女がいた。

彼らはレイナーレの甘言を聞き、レイナーレに協力している墮天使たちだ。

私に協力してくれれば、お前たちに地位を約束しようと言われて。

肝心のレイナーレは、儀式の準備で忙しく、3人は見張りを頼まれていた。

「本当にやばかったっすよ！もう激ヤバだったっす！」

ツインテールのゴスロリ少女が、顔を真っ青にして喋る。

「ミッテルト、お前の言いたいことは分かったが、それは真なのか？」

いや、お前を疑うわけではない。

しかし、もしもそのような者がいるなら、なぜ私たちが気付かないのだ？」
黒いコートを着た、シルクハットの男が、ゴスロリ少女に尋ねる。

「ドーナシークの言う通りだ。

そのような存在がいるならば、このカワラーナがそのような者を見逃すわけがない」
黒紫色のボディコンスーツを着た女が続く。

「あーもう！だから嘘をついてるわけでも、混乱してたわけでもないっす！

二人は見えないからそう言えるだけで、本当にいたっすよお！」
何度も説明しても堂々巡りの会話に、ミッテルトはいらいらし始める。

「もういいっす！どうしても信用してくれないなら、どうなつたつて知らないっす！」

「カワラーナよ、どうやらミッテルトを怒らせてしまったようだ」

「しかしだドーナシーク、実際に二人ともそいつを見ていない。

ゆえに、ミッテルトの発言は信用性に欠ける」

二人のあまりの物言いに、ミッテルトと呼ばれた墮天使は叫んだ。

「だったら二人とも、そいつに会えばいいっすよ！」

そう言つてプイッと顔を背けるミッテルト。

だが、少ししい過ぎたと思ひ、二人に謝ろうと顔を戻すと、

金色の瞳と目があつた。

スロースタートの弊害

俺は仲間の木場や小猫ちゃんと共に、急いで教会へと走っていた。

絶対にアーシアを助ける！気持ちだが、俺を急がせる。

待つてろよアーシア！絶対に俺が助け出すから！

そして、アーシアが囚われている教会が見えてきた。

木場が手から魔剣を精製し、小猫ちゃんが手にグローブを嵌める。

確か、聖堂と宿舎があつて、聖堂の方が怪しかったんだっけ？

そんなことを思いながら、俺たちは走る。

でも、なんだか様子がおかしい気がする。

なんかよく解らないけど、尋常じやない気配を感じた。

それこそ、首筋に寒気を感じるくらい。

木場も小猫ちゃんも同じで、二人も顔を引き締めていた。

教会の門が見えてきた！

俺は腕に龍の籠手を出現させ、そのまま聖堂へと突入しようとし……俺たちは目を

疑った。

「なんだよ、これ……」

人がいなくなつて久しい教会とはいえ、あまりにも変わつていたからだ。まるで怪獣か何かを通つたような、そんな惨状。

硬く閉じていただろう聖堂の両開きの扉は吹き飛び、

雨風を凌いだ壁の所々には、人が通れるくらいの大穴が開いていた。

一体全体どうなつてるんだよ。

「一誠君、これは一体……？」

木場が俺に尋ねてくるけど、俺だつてどうしてこうなつたのか判らな……！

「まさか……！」

俺は公園であつた黒い影を思い出した。

恐怖を体現したような存在。あのレイナーレが突然怯えだしたあの黒い影。

どういう理由か分からないけど、彼奴はレイナーレ達を追つていたような感じだつた。

アーシアを連れ去つていったレイナーレ達を見ていたし。

まさかあいつがこれ?!

俺に様子に二人は何かを察したみたいで、小猫ちゃんが俺に訊いてきた。

「一誠先輩、何か知っているんですか？」

小猫ちゃんの言葉に、俺は首を縦に振る。俺は公園であった化け物のこと二人に話した。

「なるほど。この惨状もその怪物のせいだとしたら、急いがないとね」

木場の言葉に急かされ、俺たちは教会に入ると更に目を疑った。

レイナーレの仲間だろう神父たちが、そこらじゅうに散らばっていたんだから。

床に、壁に、そして開いた穴から外へ飛び出している奴もいる。

そしてその聖堂の中央には、レイナーレの仲間らしい堕天使たちがいた。

だがその有様に、俺は無意識に「ひでえ・・・」と呟いていた。

確か、ドーナシックだったか？

俺が悪魔になってしまったのを知らなかった時に、はぐれ悪魔として殺そうとした堕

天使がいた。

こいつもレイナーレの仲間だったのか。

他にも、なんか赤紫の服を着た女の堕天使や、

公園でアシアとレイナーレを連れて行ったツインテールのゴスロリ堕天使もいた。

そしてその堕天使たち全員、

四肢はあらゆる方向へと螺子曲がり、堕天使の特有の黒い翼の片方が引き千切られてい

た。

口からは吐いただろう血がついていて、微かに動いている辺り、まだ生きていた。まだ生きていた。

いや、ギリギリ生かされていると言った方が良いかもしれない。

「惨いね」

木場の言葉に、俺は心の中で同意した。

つて、早くアーシアを助けなさい！俺は我に返って周囲を見渡す。

確か儀式をやるとか言ってたけど、そんなものはここには見当たらない。

ふと聖堂の奥を見れば、祭壇がずれて階段が見えた。

そうか地下か！

クソ、何が何だか分からねえけど、早くしないとアーシアが危ない！

俺は木場と小猫ちゃんに顔を向けると、二人は何も言わずに頷く。

よし、行くぞ！

そう思つて走り出そうとした途端、隠し階段から砂埃と轟音が聞こえた。

そして、何かが階段を上ってくる音がする。

カツン、カツンと、一歩ずつ響いてくる音。

俺たちは昇ってくる存在に警戒を強める。龍の籠手を纏った左手を強く握る。

そして俺たちは、身体が固まってしまった。

入り口から黒いあいつが出てきたからだ。

「一誠君」

木場の声に、俺は我に返った。彼奴を見た瞬間、俺はあいつに吞まれていたらしい。木場の方を見れば、木場は魔剣を握りしめている。

その顔は、俺の嫌いなイケメンのすまし顔だが、その顔には汗が見えた。

小猫ちゃんの方も、強張った顔で、グローブをはめた両手を力いっぱい握りしめている。

はぐれ悪魔を簡単に蹴散らした二人なのに、目の前の存在に汗を流している。

つまり、こいつはあの時の奴よりも上だってこと。

くそ！アーシアを助けに來たつてのに！俺は萎えかける心を叱咤する。

そうだ、俺はアーシアを守ると誓ったんだ！だったら、こんなところで止まってる場合じゃねえ！

俺は目の前の黒い影を睨みつける。

さつきから黒い影は、動かない。俺たちの動向を見ているのか？

そう思っていると、黒い影が俺たちに向かって何かを投げた。

べちやりと音を立て、俺たちの目の前に落ちた物を見て、俺たちは目を見張った。

それは、先ほどの墮天使とは比べ物にならないほどに、まるで、癩癩を起した子供が八つ当たりをしたかのように、

壊れたおもちゃのような姿のレイナーレだった。

四肢は螺子曲がり、羽根は両翼とも引き千切られ、顔はもはや別人と言っているほどだ。

辛うじて、それが着ている服装から、レイナーレと判るくらいだ。

そして不思議なことに、そんな状態になっても、

後ろにいる墮天使と同じように、辛うじて生きてる。

これを、彼奴がやったっていうのか・・・？

その瞬間、俺の身体が石のように固まった。

今さっき、アーシアを助けると奮起したというのに、俺の心が恐怖に染まっていく。

黒い影が動く。俺の身体はびくりと震え、目を閉じてしまった。

俺は死ぬのか？ そう思い、死を覚悟したというのに、一向に何も起きない。

不思議に思い、ゆっくりと目を開けると、黒い影は、隠し階段の入り口を指さしていた。

どうやら、奥に行け、と言ってるみたいだった。

もしかしたら、アーシアがいるかもしれない。

黒い影を見ると、俺の考えが分かったのか、顔を縦に振った気がした。

「木場、小猫ちゃん、俺、行ってくる」

俺は震える声で二人に言う。

何かしらないけど、彼奴は俺たちに危害を加える気はないみたいらしい。

二人ともそれを何となく解ったのか、顔を縦に振った。

「気をつけてね、一誠君。この場は僕たちが何とかするから」

「早く帰ってきてください」

「わかった！」

俺は階段へと走る。途中、黒い影とすれ違うが、影は俺をちらりと見ただけだった。

待ってろよアーシア！

一誠君が階段を下りて行くのを見届けると、僕たちは再び黒い影を見据える。

一誠君が言っていた、危険な存在っていうのが、多分、目の前の影で間違いないだろう。

参ったな、これでも部長のために戦ってきたのに、一向に身体の震えが止まらない。

「確かに、一誠君の言う通りだね」

恐い。今まであつたのとは比べ物にならないくらいに、目の前の影に恐怖している。塔城さんも同じみたく、いつも通りの無表情なのに、顔からは汗が見える。

教会と墮天使や神父たちの惨状からして、目の前の黒い影は強いとみて間違いない。それこそ教会の壁を穴だらけにし、墮天使たちを無残な姿に変えたんだ。

一瞬でも気を抜いたら、自分も同じ姿になつてしまふだろう。

だから僕は、黒い影の一挙手まで神経を集中させる。

すると、一誠を見送つた黒い影が動き出した。

ゆつくりと、教会の入り口の方へと歩く。どうやら帰るらしい。

僕は塔城さんと顔を見合わせ、互いに頷くと、影の前へと移動する。

「悪いけど、このまま君を帰らせるわけにはいかないんだ」

もし、このまま君を行かせて大暴れでもされたら、駒王町が危険だ。

「取りあえず、部長さんが来るまでここにいてください」

塔城さんも、進路を塞ぐように黒い影の前へ立つ。

すると、黒い影の雰囲気が変わつた、

先ほどまで凜いでいた気配が、一気に膨れ上がった。

まるで暴風雨の中にいるかのように、僕たちはその気配に晒される。

そして一瞬、その気配が消え、虚を突かれた瞬間、

「G H A A A A a a a a ああ a a a a a a あ A A あああ A H h ああああ!!!」
黒い影の叫びと共に、まるで津波の如く押し寄せた殺意に、僕は意識を呑みこまれた。

俺が気を失っているアーシアを背負って階段を上がると、

俺は木場と小猫ちゃんが倒れているのを見た。

あの黒い影が何かしたのかと思ひ、俺は急いで二人に掛けた。

二人はただ気を失っていると分かると、俺は安心の溜息を吐いた。

その後、部長と朱乃さんがやって来た。

どうやら、レイナーレたちの活動について、上と連絡をしていたらしい。

なんとか話がついて、急いで駆け付けたということだ。

その後、目を覚ました木場と小猫ちゃんの話聞いて、

部長はその黒い影を危険な存在として、対応することを決めた。

ズタボロになっているレイナーレ達については、墮天使側に引き渡すみたいだ。

ズタボロの姿で連れられていくレイナーレの姿は、

俺の中に何も言えない感情を残し、気付けば涙が流れていた。

翌日、俺は眠そうな目を擦りながら、オカルト研究部の扉を叩いた。

昨日のことについて、部長と話をしなきゃいけないと思ったから。

そして俺は、レイナーレ達が墮天使側に処分を受けたことや、アーシアのことについてなど、色々と教えられた。

俺たちが遭遇した危険な黒い影についても、俺たちで捕まえることになった。

俺は複雑な思いを抱きながらも、俺は部長のために頑張ることを決意するのだった。

「和花、なーに見てるの?」

「ひゃい!」

突然話しかけられた声に、私は素っ頓狂な声を上げた。

振り返れば、桐生ちゃんがニヤニヤ顔で私を見ていた。

「酷いよ桐生ちゃん!急に声をかけられたせいで、変な声を出しちゃったじゃない!」

「ごめんごめん。和花がぼーっしてるのが珍しくてさ。」

それで和花、さつきから何見てたのよ?」

桐生ちゃんが、教室の窓から外を見る。

その視線の先には、学校の有名人がいた。

「ははーん?やっぱり和花も気になるんだ。」

変態の一誠が、どうしてリアス先輩等と登校するのがさ」

「まあ・・・ね」

私の言葉に、桐生ちゃんはうんうんと肯く。

「ほんと不思議よね。それこそ、なにか催眠術でも使ったんじゃないの？つて言われているわよ」

「そうなんだ」

「あ、そうだ！そう言えば噂に新しいのが追加されたんだけど、知ってる？」

そう言うと、桐生ちゃんは私にそれを見せてくれた。

曰く、黒い人影が、大きな獣と戦っているのを見たとか。

詳細は判っていないけど、

急に寒気を感じてふと外を見ると、なにやら獣らしき影が戦っていたとか。

それで、恐怖に苛まれて、その場から逃げ出したんだって。

「でも、それはただの噂なんだよね？」

「まあね、でもこの駒王町って、なにやら色々あるじゃない？」

もしかしたら、本当かもしれないわよ」

意味ありげな顔をする桐生ちゃんに、私は「そんなことないよ」と言っておく。

「そう言えば和花、その包帯どうしたの？昨日はそんなのしてなかったじゃん」

「ちよつと、猫を撫でようとしたら、引っ搔かれちゃつて」

「ちやんと病院に行つた？ 気をつけなよ。野良ネコに引つかかかれると大変だから」

「うん、大した怪我じゃかつたから」

心配してくれる桐生ちゃんに、安心させようと、私は何でもないと言う。

「なら良いけどね。つと、もうすぐ授業の時間ね、それじゃまたね」

私は桐生ちゃんに手を振つた。そして包帯を撫でつつ、リアス先輩たちを見る。

私は私なりにこの町を守っているのに、私を危険な存在と言ひ、私を捕まえようとした。

包帯の傷は、その時に出来た物だ。それは酷く、俺をムカつかせた。

次に会つた時は、本気でやってもいいのかな？と、

私（俺）は金色の瞳で彼らを見据え、犬歯を覗かせるほどに、口元を歪めるのだった。